

岩橋千塚古墳群―大谷山4・5・6・39号墳 発掘調査報告書―

二〇一七年三月 和歌山県教育委員会

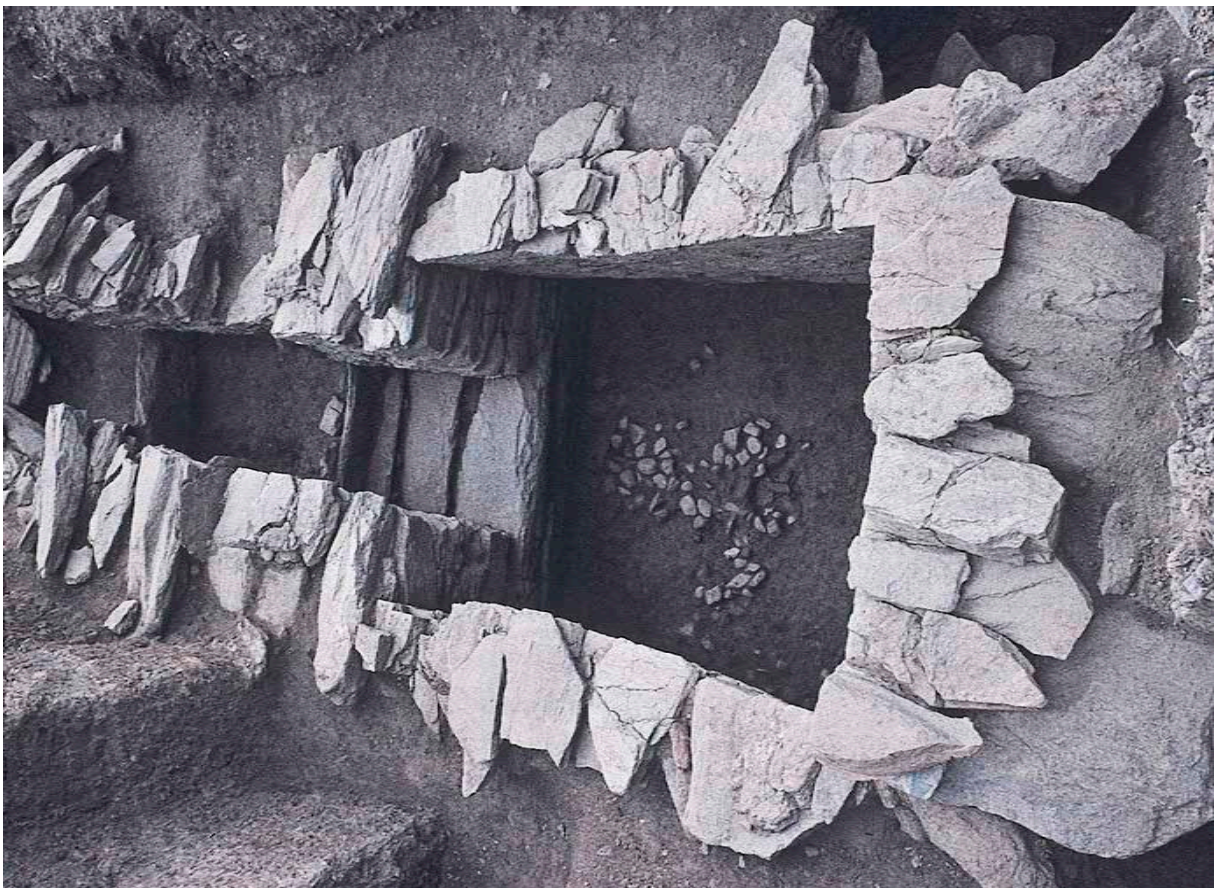
岩橋千塚古墳群

―大谷山4・5・6・39号墳 発掘調査報告書―

2017年3月
和歌山県教育委員会



1. 大谷山4号墳 横穴式石室



2. 大谷山5号墳 横穴式石室



1. 大谷山6号墳 横穴式石室



2. 大谷山6号墳 横穴式石室内 赤色顔料付着状況



3. 大谷山6号墳 箱式石棺



4. 大谷山6号墳 竖穴式石室



1. 大谷山6号墳 墳丘西側くびれ部円筒埴輪列検出状況



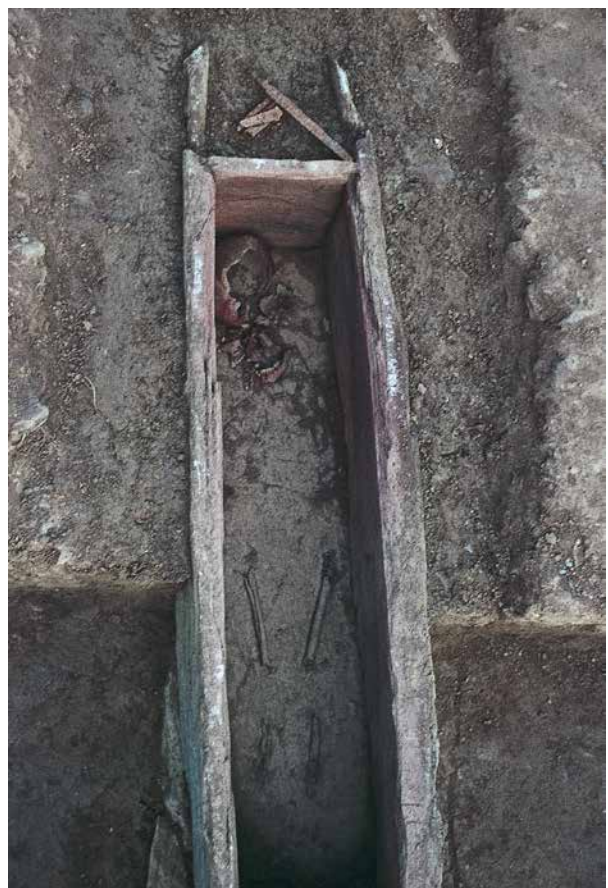
2. 大谷山6号墳 後円部西側円筒埴輪列検出状況



1. 大谷山39号墳 埋葬施設（粘土塚・箱式石棺）全景



2. 大谷山39号墳 箱式石棺蓋石内側
赤色顔料塗布状況



3. 大谷山39号墳 箱式石棺内部

序 文

和歌山県の北部を西流する紀ノ川の下流域には、肥沃な和歌山平野が形成され、平野部やその周辺には、古くから人々が生活を営んできたことを示す数多くの遺跡が残されています。このうち、岩橋千塚古墳群は当地域の古墳時代を代表する遺跡であり、紀ノ川下流域南岸の岩橋山塊に位置し、5世紀初頭頃から7世紀に至るまで、総数約850基の古墳が築造された全国有数の群集墳として知られています。

岩橋千塚古墳群は、その一部が昭和6年に史跡、昭和27年に特別史跡に指定され、昭和63年、平成12年及び平成28年の追加指定を経て、現在は約62万㎡の指定地の中に430基を超す古墳が保存されています。昭和46年に古墳群の保存と活用を目的として開園した和歌山県立紀伊風土記の丘には、現在、年間約20万人の人々が訪れています。

岩橋千塚古墳群の調査の歴史は古く、明治時代に東京帝国大学の犬野雲外によって行われた調査は、明治41年のN. G. マンローの著書“PREHISTORIC JAPAN”で広く海外に紹介され、さらに大正時代には「岩橋千塚第一期調査」が行われました。また、昭和30年代に入り、市街地拡大に伴う周辺部の開発で指定地外の古墳の保存問題が生じたことを契機に、昭和37年から和歌山市教育委員会が大学、地元研究者等の協力を得て分布調査や発掘調査を行い、重要な成果が蓄積されました。

そして、和歌山県立紀伊風土記の丘開園後は、特別史跡の追加指定や、保存・活用を目的とした整備に伴う発掘調査が現在まで続けられています。

本報告書は、平成27・28年度に実施した大谷山4号墳・5号墳・6号墳・39号墳出土品の再整理事業の成果をまとめたものです。昭和47年度に開発計画に伴い発掘調査が実施されたこれら4基の古墳のうち大谷山39号墳が調査後に失われたものの、残る3基の古墳は特別史跡地内に保存されています。本報告書は、岩橋千塚古墳群の価値付けにとって欠かすことのできないこれらの古墳の発掘調査成果を、再整理事業によって得られた新たな知見を加え、まとめたものです。

本書が研究資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、史跡や埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

結びに、報告書の刊行に至るまで御指導並びに御協力をいただきました関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成29年3月31日

和歌山県教育委員会
教育長 宮 下 和 己

例 言

- 1 本書は和歌山県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）が実施した和歌山市岩橋に所在する大谷山4・5・6・39号墳の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は昭和47年4月～10月に県教育委員会が社団法人和歌山県文化財研究会に委託して実施した。発掘調査の成果の一部は、『大谷山4・5・6・39号古墳発掘調査概報』（和歌山県教育委員会1972.10）において報告されている。
- 3 本書は『大谷山4・5・6・39号古墳発掘調査概報』の内容に、平成27・28年度に実施した再整理事業によって得られた新たな知見を加えてまとめたものである。
- 4 再整理事業は、平成27・28年度に県立紀伊風土記の丘が実施した。
- 5 本書の執筆は、紀伊風土記の丘学芸課員がおこなった。執筆分担は、目次に（ ）で示した。
- 6 遺物の実測・トレースについては整理補助員が行い、遺物写真撮影は富加見、山本が行った。
- 7 本書の編集は瀬谷が行った。
- 8 発掘調査及び再整理事業で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料及び出土遺物は県立紀伊風土記の丘が保管している。
- 9 報告書刊行にあたり、下記の方々と機関からご指導・ご協力を賜った。

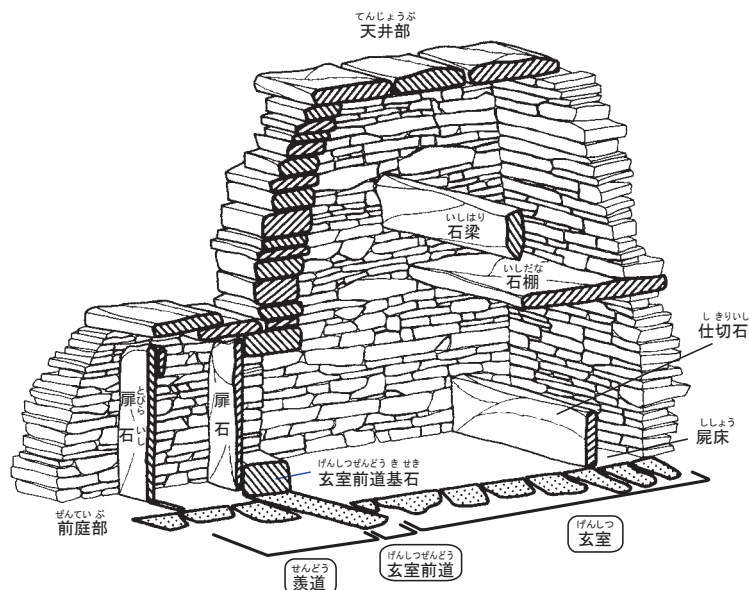
文化庁、公益財団法人和歌山県文化財センター、和歌山県工業技術センター、和歌山市教育委員会、大阪市立大学医学部、公益財団法人元興寺文化財研究所

安部みき子・魚津知克・太田宏明・河内一浩・河野正訓・古賀直樹・島田武男・辻川哲朗・仲原知之・花坂寿章・藤井幸司・藤井保夫・藤藪勝則・藤原知・松田度

（個人名敬称略・五十音順）

凡 例

- 1 本報告の図中の北方位は磁北（M.N.）を示す。
- 2 標高は東京湾平均海面（T.P.）による日本水準原点の数値を基準としている。
- 3 発掘調査時の土層の色調は、調査担当者などが任意の判断で行っている。
土器などの色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』（平成26年版）に拠る。
- 4 本文中の遺物番号は、遺物写真図版の遺物番号と一致する。
- 5 遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。
- 6 再整理事業で使用した調査コードは、
72-01・185-86（1972年度 - 和歌山市・岩橋千塚古墳群 - 大谷山4号墳）
72-01・185-87（1972年度 - 和歌山市・岩橋千塚古墳群 - 大谷山5号墳）
72-01・185-88（1972年度 - 和歌山市・岩橋千塚古墳群 - 大谷山6号墳）
72-01・185-105（1972年度 - 和歌山市・岩橋千塚古墳群 - 大谷山39号墳）
で、記録資料はこのコードを用いて管理している。
- 7 本書掲載地図は、和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』（平成26年9月15日現在）及び、和歌山県海草振興局提供の都市計画図（1：2,500）に加筆して使用した。
- 8 本書で用いる岩橋型横穴式石室各部の名称は下図の通りである。
なお、本文中の横穴式石室に係る右・左の表現は、玄室奥壁から入口に向かって右・左を示す。



和歌山県立紀伊風土記の丘 2016『岩橋千塚とその時代—紀ノ川流域の古墳文化』（平成28年度秋期特別展展示図録）掲載図面を転載

岩橋型横穴式石室模式図

調査組織

発掘調査（昭和 47 年度）

調査委員 羯磨正信（県文化財専門審議委員・県文化財課専門員）
巽 三郎（県文化財専門審議委員・社団法人和歌山県文化財研究会理事）
坪井清足（県文化財専門審議委員・奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部長）
藤沢一夫（県文化財専門審議委員・帝塚山大学講師）

事務局

事務局長 前田敏郎（県文化財課課長）
事務局次長 海野正幸（県文化財課主幹）
幹事 伊達恵一（県文化財課第 2 係長）
調査担当者 笠井保夫（県文化財課学芸員）
調査員 松田正昭（県文化財課調査員）
調査協力者 龍谷大学 鴨口正紀 / 國學院大學 青木理
關西大学考古学研究室 直宮憲一 前田義人 小沢正和 岩田武志 橋高和明
村井政一 松坂幸一 宇野楨敏 宮本博

再整理事業（平成 27・28 年度）

和歌山県教育委員会 教育長 宮下和己
生涯学習局長 楠義隆
文化遺産課 文化遺産課長 水上勇人
副課長 坂口真史
主幹 黒石哲夫（平成 28 年度）（課長補佐兼調査班長：平成 27 年度）
主査 丹野拓 高橋智也
副主査 田中元浩
技師 上地舞（平成 27 年度） 仲辻慧大（平成 28 年度）

紀伊風土記の丘

館長 水田義一
副館長 市川浩之（平成 27 年度） 米田良博（平成 28 年度）
総務課長 山本康博（平成 27 年度） 嶋田功伺（平成 28 年度）
主任 井上佳典（平成 28 年度）
主査 川崎康弘（平成 28 年度）
副主査 小裕有利子 額田誠規 望月光一（平成 27 年度）
学芸課長 佐々木宏治
主査学芸員 萩野谷正宏（平成 28 年度）（主査兼学芸員：平成 27 年度）
学芸員 瀬谷今日子（平成 28 年度）（副主査兼学芸員：平成 27 年度）
藤森寛志（平成 28 年度）（副主査兼学芸員：平成 27 年度）
山本光俊（平成 28 年度）
副主査 富加見泰彦
技師兼学芸員 仲辻慧大（平成 27 年度）

本文目次

巻頭カラー写真

第1章 経緯と経過 (佐々木宏治)

第1節 発掘調査事業 1

第2節 出土遺物等整理事業 1

第2章 地理的・歴史的環境 (富加見泰彦)

..... 4

第3章 大谷山4号墳 (山本光俊)

第1節 発掘調査

(1) 調査の概要 9

(2) 墳丘 9

(3) 埋葬施設 9

第2節 出土遺物

(1) 埴輪 14

(2) 土器類 15

第3節 まとめ 15

大谷山4号墳出土遺物観察表 17

第4章 大谷山5号墳 (山本光俊)

第1節 発掘調査

(1) 調査の概要 18

(2) 墳丘 18

(3) 埋葬施設 19

第2節 出土遺物

(1) 埴輪 27

(2) 土器類 27

第3節 まとめ 29

大谷山5号墳出土遺物観察表 30

第5章 大谷山6号墳 (萩野谷正宏)

第1節 発掘調査

(1) 調査の概要 31

(2) 墳丘 33

(3) 埋葬施設 40

第2節 出土遺物

(1) 埴輪 42

(2) 土器類 52

(3) 鉄製品 (瀬谷今日子) 53

(4) 装身具 (瀬谷今日子) 54

第3節 まとめ 77

大谷山6号墳出土遺物観察表	79
第6章 大谷山39号墳	(瀬谷今日子)
第1節 発掘調査の成果	
(1) 調査の概要	88
(2) 墳丘	88
(3) 埋葬施設	91
第2節 出土遺物	
(1) 粘土槨出土の遺物	96
(2) 箱式石棺出土の遺物	97
第3節 まとめ	99
大谷山39号墳出土遺物観察表	100
付論 和歌山県岩橋千塚「大谷山39号墳」出土小児人骨体について	… (藤原知・島田武男) 101
第7章 統括	
第1節 大谷山6号墳の横穴式石室	… (萩野谷正宏) 105
第2節 大谷山地区における古墳の展開	… (萩野谷正宏) 106
第3節 岩橋千塚古墳群における箱式石室	… (瀬谷今日子) 108
写真図版	

挿 図 目 次

図1 大谷山4・5・6号墳墳丘測量図 (S=1/400)	図18 大谷山6号墳 調査区土層断面図(1) (S=1/80)
図2 対象古墳と岩橋千塚古墳群及び周辺遺跡	図19 大谷山6号墳 調査区土層断面図(2) (S=1/80)
図3 大谷山4号墳 墳丘と調査区 (S=1/200)	図20 大谷山6号墳 横穴式石室実測図(1) (S=1/40)
図4 大谷山4号墳 横穴式石室実測図 (S=1/40)	図21 大谷山6号墳 横穴式石室実測図(2) (S=1/40)
図5 大谷山4号墳 横穴式石室排水溝 平面図・断面図 (S=1/40)	図22 大谷山6号墳 横穴式石室赤色顔料付着範囲図 (S=1/50)
図6 大谷山4号墳 出土遺物実測図 (S=1/4)	図23 大谷山6号墳 竪穴式石室実測図 (S=1/40)
図7 大谷山5号墳 トレンチ配置図 (S=1/200)	図24 大谷山6号墳 箱式石棺平面図 (S=1/20)
図8 大谷山5号墳 西トレンチ北壁・ 北トレンチ西壁土層断面図 (S=1/80)	図25 大谷山6号墳 西側くびれ部遺物 出土状況図(1) (S=1/60)
図9 大谷山5号墳 西トレンチ南壁・南トレンチ東壁・ 東トレンチ北壁土層断面図 (S=1/80)	図26 大谷山6号墳 西側くびれ部遺物 出土状況図(2) (S=1/60)
図10 大谷山5号墳 横穴式石室実測図 (S=1/40)	図27 大谷山6号墳 出土動物埴輪(1) (S=1/4)
図11 大谷山5号墳 横穴式石室排水溝実測図 (S=1/40)	図28 大谷山6号墳 出土動物埴輪(2) (S=1/4)
図12 大谷山5号墳 出土遺物実測図 (S=1/80)	図29 大谷山6号墳 出土動物埴輪(3) (S=1/4)
図13 大谷山6号墳 トレンチ配置図 (S=1/200)	図30 大谷山6号墳 出土動物埴輪(4) (S=1/4)
図14 大谷山6号墳 後円部西側円筒埴輪列平面図 (S=1/30)	図31 大谷山6号墳 出土人物埴輪(1) (S=1/4)
図15 大谷山6号墳 後円部北東側円筒埴輪平面図 (S=1/30)	図32 大谷山6号墳 出土人物埴輪(2) (S=1/4)
図16 大谷山6号墳 西側くびれ部平面図(S=1/30)	図33 大谷山6号墳 出土家形埴輪 (S=1/4)
図17 大谷山6号墳 前方部前端円筒埴輪列平面図 (S=1/30)	図34 大谷山6号墳 出土器財埴輪 (S=1/4)
	図35 大谷山6号墳 出土不明形象埴輪 (S=1/4)
	図36 大谷山6号墳 出土円筒埴輪(1) (S=1/4)
	図37 大谷山6号墳 出土円筒埴輪(2) (S=1/4)
	図38 大谷山6号墳 出土円筒埴輪(3) (S=1/4)

図 39	大谷山 6 号墳	出土円筒埴輪 (4) (S=1/4)	図 48	大谷山 39 号墳	墳丘と調査区 (S=1/200)
図 40	大谷山 6 号墳	出土円筒埴輪 (5) (S=1/4)	図 49	大谷山 39号墳	墳丘調査区土層断面図(S=1/100)
図 41	大谷山 6 号墳	出土円筒埴輪 (6) (S=1/4)	図 50	大谷山 39 号墳	埋葬施設(粘土槨) (S=1/40)
図 42	大谷山 6 号墳	出土土器類 (1) (S=1/4)	図 51	大谷山 39 号墳	埋葬施設(箱式石棺) (S=1/20)
図 43	大谷山 6 号墳	出土土器類 (2) (S=1/4)	図 52	大谷山 39 号墳	箱式石棺 (S=1/20)
図 44	大谷山 6 号墳	出土土器類 (3) (S=1/4)	図 53	大谷山 39号墳	粘土槨出土鉄製品実測図 (S=1/2)
図 45	大谷山 6 号墳	横穴式石室出土遺物 鉄製品 (S=1/2)	図 54	大谷山 39 号墳	箱式石棺出土 鉄製品・土器実測図 (S=1/2、1/4)
図 46	大谷山 6 号墳	横穴式石室出土遺物 鉄製品・玉類 (S=1/2、1/1)	図 55	大谷山 39 号墳	墳丘復元図 (S=1/400)
図 47	大谷山 6 号墳	墳丘復元図 (S=1/200)	図 56	大谷山地区の古墳分布図	(S=1/8000)

表 目 次

表 1	大谷山 4・5・6・39 号墳発掘調査工程表	表 4	大谷山 6 号墳出土遺物観察表
表 2	大谷山 4 号墳出土遺物観察表	表 5	大谷山 39 号墳出土遺物観察表
表 3	大谷山 5 号墳出土遺物観察表	表 6	岩橋千塚古墳群における箱式石棺集成

巻頭図版目次

巻頭写真 1	1. 大谷山 4 号墳 横穴式石室 2. 大谷山 5 号墳 横穴式石室
巻頭写真 2	1. 大谷山 6 号墳 横穴式石室 2. 大谷山 6 号墳 横穴式石室内 赤色顔料付着状況 3. 大谷山 6 号墳 箱式石棺 4. 大谷山 6 号墳 竪穴式石室
巻頭写真 3	1. 大谷山 6 号墳 墳丘西側くびれ部円筒埴輪列検出状況 2. 大谷山 6 号墳 後円部西側円筒埴輪列検出状況
巻頭写真 4	1. 大谷山 39 号墳 埋葬施設(粘土槨・箱式石棺) 全景 2. 大谷山 39 号墳 箱式石棺蓋石内側 赤色顔料塗布状況 3. 大谷山 39 号墳 箱式石棺内部

図 版 目 次

写真図版 1	1. 岩橋千塚古墳群 遠景 2. 大谷山 4・5・6 号墳 遠景	3. 玄室左側壁 (北から) 4. 玄室右側壁 (南から) 5. 玄室前壁 (東から)
写真図版 2	1. 大谷山 4・5・6 号墳 全景 2. 大谷山 4 号墳 墳丘	写真図版 5
写真図版 3	1. 大谷山 4 号墳 横穴式石室 (東から) 2. 羨道部～玄室 (西から)	1. 玄室床面及び仕切石 (西から) 2. 仕切石① (東から) 3. 仕切石① (西から) 4. 仕切石② (南から) 5. 仕切石② (東から)
写真図版 4	1. 玄室及び羨道 (北から) 2. 玄室奥壁 (西から)	写真図版 6
		1. 玄室前道及び扉石 (玄室から) 2. 玄室前壁 (東から)

3. 扉石による玄門閉塞状況（西から）
4. 羨道部閉塞石（西から）
5. 羨道部閉塞石（上から）

写真図版 7

1. 玄室排水溝検出状況（西から）
2. 玄室排水溝検出状況（北から）
3. 玄室前壁付近排水溝検出状況（奥壁から）
4. 玄室前壁付近排水溝検出状況（東から）
5. 玄室前壁付近排水溝検出状況（東から）
6. 羨道排水溝検出状況①（西から）
7. 羨道排水溝検出状況②（西から）

写真図版 8

1. 大谷山4号墳 埴輪

写真図版 9

1. 大谷山4号墳 埴輪・須恵器・土師器

写真図版 10

1. 大谷山5号墳 墳丘（調査前）
2. 大谷山5号墳 石室検出状況（調査前）

写真図版 11

1. 大谷山5号墳 横穴式石室（東から）

写真図版 12

1. 玄室奥壁（西から）
2. 玄室全景（東から）

写真図版 13

1. 玄室前壁（東から）
2. 玄門閉塞石検出状況（西から）

写真図版 14

1. 羨道中央付近閉塞石検出状況（西から）
2. 羨道及び羨門閉塞石（西から）
3. 羨門閉塞石（写真右が玄室側）
4. 羨門閉塞石検出状況（西から）

写真図版 15

1. 羨道前庭 排水溝検出状況①（東から）
2. 羨道前庭 排水溝検出状況②（東から）
3. 羨道前庭 排水溝上面土層断面（東から）
4. 玄室 排水溝検出状況①（東から）
5. 玄室 排水溝検出状況②（北から）

写真図版 16

1. 北トレンチ西壁土層断面①（東から）
2. 北トレンチ西壁土層断面②（東から）
3. 南トレンチ東壁土層断面（西から）
4. 東トレンチ北壁土層断面（西から）
5. 横穴式石室玄室裏込め検出状況
6. 西トレンチ西側（西端より羨道端をのぞむ）

写真図版 17

1. 大谷山5号墳 埴輪・須恵器・土師器・弥生土器

写真図版 18

1. 大谷山6号墳 墳丘（調査前）
2. 大谷山6号墳 横穴式石室（調査前）

写真図版 19

1. 大谷山6号墳 墳丘全景（南から）
2. 大谷山6号墳 墳丘全景 横穴式石室検出後（南から）

写真図版 20

1. 横穴式石室全景（西から）
2. 横穴式石室玄室前道及び玄室（西から）

写真図版 21

1. 玄室全景（東から）
2. 玄室奥壁（西から）
3. 玄室南側壁
4. 玄室北側壁
5. 玄室床面鉄斧出土状況（北側壁付近）

写真図版 22

1. 玄室南側壁突起石（1箇所）（西から）
2. 玄室南側壁突起石（1箇所）（北西から）

写真図版 23

1. 玄室北側壁突起石（西から）
2. 玄室北側壁突起石（2箇所）（南から）

写真図版 24

1. 羨道閉塞石検出状況（写真左側が玄室）
2. 羨道閉塞石土層断面（南西から）

写真図版 25

1. 縦穴式石室全景（北から）

写真図版 26

1. 縦穴式石室南側須恵器出土状況
2. 縦穴式石室検出状況及び土層断面（南から）

写真図版 27

1. 箱式石棺全景（北東から）
2. 箱式石棺全景（南東から）

写真図版 28

1. 箱式石棺（北西から）
2. 箱式石棺周辺土師器出土状況
3. 箱式石棺周辺須恵器・土師器出土状況
4. Fトレンチ南壁（北から）

写真図版 29

1. 西側くびれ部全景（西から）
2. 西側くびれ部（南から）

写真図版 30

1. 西側くびれ部（北東から）
2. 西側くびれ部 20・21・22・23号円筒埴輪・須恵器検出状況

写真図版 31

1. 西側くびれ部埴輪・須恵器検出状況（西から）

2. Dトレンチ 15・16号円筒埴輪検出状況（西から）

写真図版 32

1. 前方部前端円筒埴輪検出状況（東から）
2. 前方部前端（3トレンチ） 33・34・35号
円筒埴輪・須恵器検出状況（東から）

写真図版 33

1. Dトレンチ
北壁土層断面及び14号円筒埴輪検出状況（南から）
2. Dトレンチ南壁土層断面（北から）

写真図版 34

1. 後円部西側 9~14号円筒埴輪検出状況（南から）
2. 後円部西側 12・13・14号円筒埴輪検出状況（西から）

写真図版 35

1. 8トレンチ円筒埴輪検出状況（南から）
2. 8トレンチ 1・2・3・4・5・6号円筒埴輪
検出状況（北から）

写真図版 36

1. 横穴式石室奥壁裏込め及びFトレンチ土層断面
（東から）
2. 箱式石棺断割土層断面（東から）
3. Aトレンチ北壁土層断面（南から）
4. Eトレンチ西壁土層断面（東から）

写真図版 37

1. 大谷山6号墳 動物埴輪①

写真図版 38

1. 大谷山6号墳 動物埴輪②

写真図版 39

1. 大谷山6号墳 動物埴輪③

写真図版 40

1. 大谷山6号墳 人物埴輪

写真図版 41

1. 大谷山6号墳 家形埴輪

写真図版 42

1. 大谷山6号墳 器財埴輪

写真図版 43

1. 大谷山6号墳 不明形象埴輪

写真図版 44

1. 大谷山6号墳 円筒埴輪①

写真図版 45

1. 大谷山6号墳 円筒埴輪②

写真図版 46

1. 大谷山6号墳 円筒埴輪③

写真図版 47

1. 大谷山6号墳 円筒埴輪④

写真図版 48

1. 大谷山6号墳 円筒埴輪⑤

写真図版 49

1. 大谷山6号墳 須恵器・土師器①

写真図版 50

1. 大谷山6号墳 須恵器・土師器②

写真図版 51

1. 大谷山6号墳 須恵器・土師器③

写真図版 52

1. 大谷山6号墳 鉄製品・玉

写真図版 53

1. 大谷山39号墳 遠景
2. 大谷山39号墳 墳丘全景（調査前）

写真図版 54

1. 大谷山39号墳 埋葬施設全景（西から）

写真図版 55

1. 埋葬施設墓壇全景（西から）
2. 粘土槨東端
3. 粘土槨西端
4. 粘土槨断割土層東壁断面
5. 粘土槨棺内鉄鉋出土状況（東から）
6. 粘土槨棺外鉄刀出土状況（西から）
7. 棺外出土鉄刀

写真図版 56

1. 箱式石棺全景（西から）

写真図版 57

1. 箱式石棺東側副室状施設鉄製品出土状況
2. 箱式石棺内人骨（頭骨）遺存状況

写真図版 58

1. 箱式石棺蓋石（内側）
2. 箱式石棺長側石（内側）
3. 箱式石棺西側小口
4. 箱式石棺東側小口
5. 箱式石棺西側小口（短側板除去後）
6. 箱式石棺底石

写真図版 59

1. 箱式石棺蓋石検出状況（西から）
2. 箱式石棺検出状況（小口充填粘土除去後）
3. 南北トレンチ西壁土層断面
4. 東西トレンチ北壁土層断面
5. 東西トレンチ北壁東側土層断面

写真図版 60

1. 大谷山39号墳 鉄製品・土師器

第1章 経緯と経過

第1節 発掘調査事業

岩橋千塚古墳群内の大谷山地区は、昭和46年の紀伊風土記の丘の開園以降、地域開発の急激な波が押し寄せ、古墳の保存への影響が危惧されるようになった。このため、和歌山県では土地の買上げを進めると共に、昭和47年度に大谷山4・5・6号墳及び古墳と見られる地点（第1地点と呼称）を対象に、国庫補助を受けて緊急発掘調査を実施することとなった。

また、同じ頃、大谷山の北側丘陵端部で採土工事を始めるとの情報を得たため、現地踏査を行った結果、古墳と考えられる地点が含まれることを確認した（第2地点）。採土作業が進められる中、昭和46年に開発業者と協議を行った結果、大谷山4・5・6号墳及び第1地点の発掘調査に組み入れて、内容確認調査を実施することとなった。

昭和47年5月1日より調査地点の樹木伐採に入り、5月17日より測量を開始した。5月24日に6号墳、6月19日に5号墳、7月4日に第1地点、9月1日に第2地点、10月3日に4号墳の発掘調査に着手した。

その結果、4・5号墳は横穴式石室を埋葬主体とする円墳で、6号墳は横穴式石室、竪穴式石室、箱式石棺の埋葬施設を持つ前方後円墳であることが判明した。第1地点には円墳状の高まりがあったが、測量及びトレンチ調査の結果、古墳でないことが明らかとなった。第2地点は、蜜柑畑の開墾により墳丘が著しく損なわれていたが、トレンチ調査により粘土槨の断面を確認した他、箱式石棺の存在も確認されたため、新たに大谷山39号墳と呼称した。なお、大谷山39号墳の調査は、他の古墳と距離を隔てているため、関西大学考古学研究室へ協力を依頼し実施した。

また、調査期間中、文化庁記念物課田中琢氏の現地指導の他、39号墳に遺存した人骨については、大阪市立大学医学部講師（調査当時）藤原知氏の2度にわたる現地指導を受けた。

昭和47年4月に公有地化された大谷山4・5・6号墳は昭和63年12月21日に特別史跡に追加指定され保護措置が図られたが、大谷山39号墳は残念ながら開発により消滅する結果となった。

第2節 出土遺物等整理事業

現地調査終了後の昭和47年10月に和歌山県教育委員会により『大谷山4・5・6・39号墳発掘調査概報』が刊行された。この後、本報告書を刊行する必要があったが、予算面等において報告書作成に必要な条件を準備することができないまま、40年以上が経過した。

特別史跡岩橋千塚古墳群を管理する紀伊風土記の丘では、岩橋千塚古墳群の価値を再確認し今後の保存活用に活かすため、未報告調査の再整理事業を実施することとし、平成27年度と28年度の2カ年計画で本調査の再整理及び報告書の刊行を行なった。

なお、整理に当たって、当館主催の「和歌山県弥生・古墳時代研究会」での発表や資料検討等により、各方面の専門家の様々な意見を取り入れながら報告書を取りまとめた。

表1 大谷山4・5・6・39号墳発掘調査工程表

	昭和47年度				平成27年度				平成28年度			
現地調査													
準備・測量												
発掘調査												
概報作成												
出土遺物等整理・報告書刊行												



大谷山6号墳横穴式石室発掘調査状況



大谷山6号墳出土遺物実測状況



大谷山39号墳供養の状況



大谷山39号墳箱式石棺遺物取上げ状況

昭和47年度発掘調査状況



出土遺物接合状況



実測・トレース状況

平成27・28年度出土遺物等再整理状況

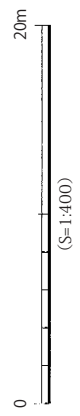
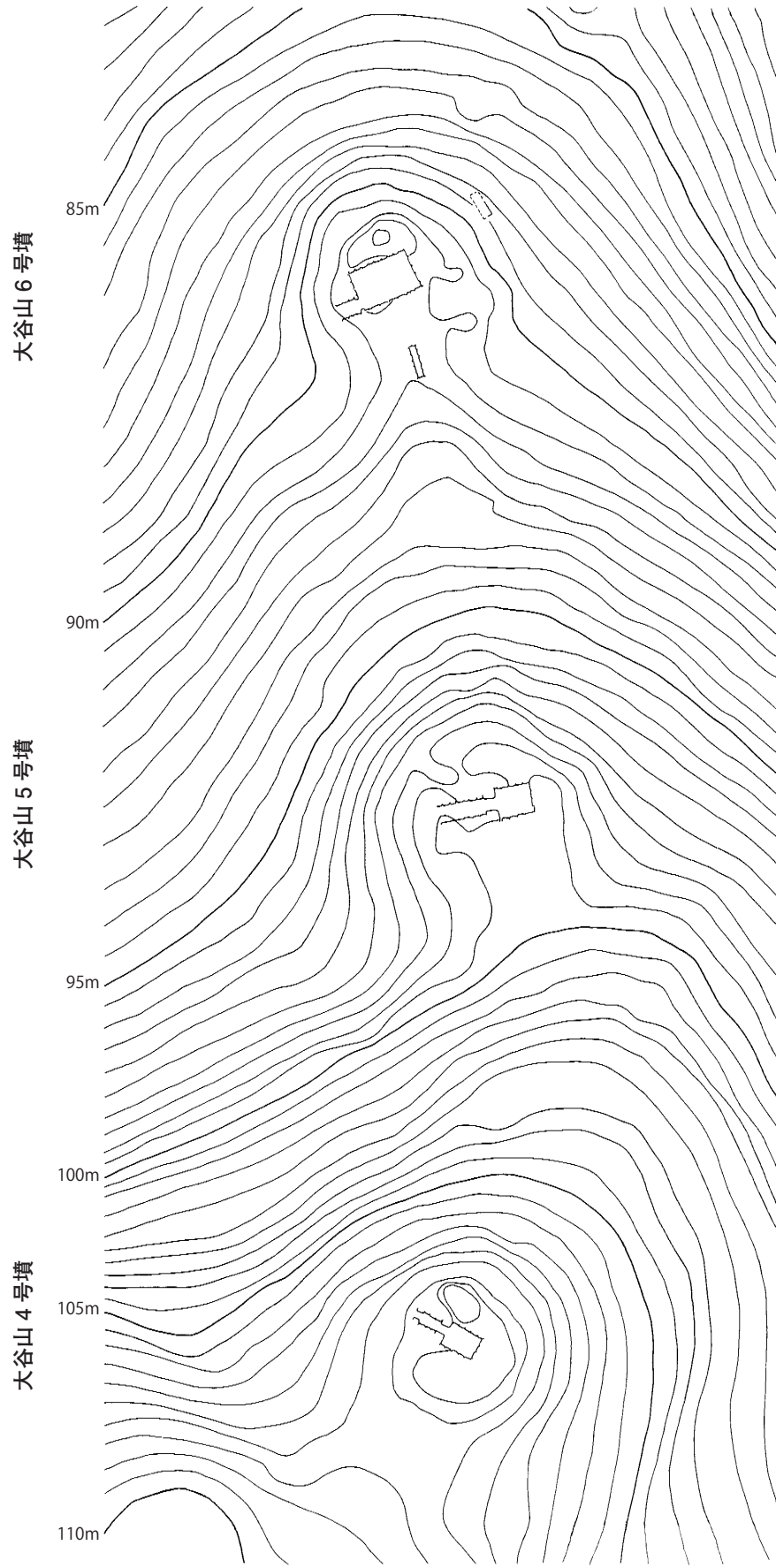


图1 大谷山4・5・6号墳 墳丘測量図

第2章 地理的・歴史的環境

古代において紀伊国は「木国」であった。和銅6年(713)国郡郷名の好字令によって「紀伊国」と改められた。木国は、温暖で樹木が繁茂していたから名付けられたといわれている。

大台ヶ原にその源を発し紀伊半島を東西に貫く紀ノ川は、和泉山脈と紀伊山地の谷あいを通り、紀伊水道に流れる全長136kmの河川で、北岸は和泉層群、南岸は三波川系に属する緑泥角閃岩を主体とする結晶片岩によって形成されている。この河谷に沿って列島の外帯と内帯を分ける中央構造線が東西に走る。紀ノ川によって運び出された土砂の沖積作用によって、河口部には最も肥沃で広大な平野部が形成された。この肥沃な平野部をかつて日下雅義氏は日前宮平野と称した。そこに展開された各時代の遺跡はそれぞれ有機的関連を以て成立していることがこれまでの調査、研究によって明らかになっている。紙面の都合もあり、古墳時代について紀ノ川下流域の歴史的・地理的環境を記述する。

古墳時代

岩橋山塊北西麓に展開する鳴神遺跡群が脚光を浴びるようになるのは5世紀以降である。花山丘陵周辺から岩橋周辺にかけて急速な集落の広がりが確認される。平野部の急速な陸化もさることながらその先駆けとなったのは灌漑施設の設備を含めた大規模な開発であったと考えられる。これによって、この地域が北岸地域に比べ優位性を保つことに繋がったといえる。

具体的に、この地区で行われた開発とはいかなるものだったのか、鳴神地区遺跡の調査で、その一端が明らかとなった。音浦遺跡は昭和46・53年の2度にわたる調査で、宮井用水に並行して、「音浦堰」に関連するとみられる大溝(音浦遺跡SD128)が検出された。昭和53年時の調査で発見されたSD128は溝の最大幅が約6m、深さ2mの大溝で庄内期~5世紀前半までの3時期の流路が確認できる。掘削の時期は庄内期と考えられ、下層からは木製農具(鋤)が出土している。下流にあたる鳴神V遺跡でも同時期の溝(SD-096、SD-094、SD-097、SD-204、SD-258)が調査され、岩橋西麓を流れる新溝用水に沿う形で、鳴神II遺跡でも古墳時代前期の灌漑用水が見つかったので早い段階から開発が行われていたことがわかる。まさに文献にみる「音浦堰」(現:音浦分水工)によって分水され、日前宮平野に広範囲に供給されていたことが理解できる。

大規模な灌漑用水の整備は小集団の力のみでは不可能であり、治水・灌漑を十分に行うには、共通の利害関係を持つ共同体を支配する族長クラスの指導によって初めてなされる事業である。このことは、農業生産力を飛躍的に増大させることは明らかで、共同体の首長、族長らによって支配管理されるのは自明である。紀氏の存在が前提とはなるが鳴神遺跡群に張り巡らされた灌漑用水は、首長にとってそれを背景として巨大な力を保持しえたことは想像に難くない。

鳴神遺跡群からは古墳、方形周溝墓、土壇墓、箱式石棺が数多くみつきその総数は管見では28基に及ぶ。これらの墓には、陶質土器・初期須恵器、馬歯が墳墓に供献されていることが多く、この地の開発事業に携わったのは渡来系の技術者集団であった可能性が高いと考えられる。

音浦遺跡では、灌漑用水以外では5世紀を主体とする竪穴住居跡14棟、掘立柱建物跡8棟、溝18条が見ついている。昭和46年時の調査で発見された掘立柱建物跡102・103は後年鳴神遺跡で発見された巨大倉庫群を彷彿とさせる建物で、遺跡の立地環境からはまさに名草堰を管理した集団にふさわしい遺跡であると考えられる。5世紀後半になると拮抗する紀ノ川北岸と南岸

のバランスが崩れ、南岸勢力が優位性を保つようになることが考古学的見地から推察でき、そこにはこの大規模な灌漑用水の存在が大きく関わっていたと思われる。紀ノ川南岸は灌漑施設の整備によって日前宮平野の各地へ網の目のように水路がめぐらされ、経済基盤が格段に安定し、生産力が向上したことは想像に難くない。6世紀以降の大谷山22号墳、大日山35号墳、天王塚古墳等の大型前方後円墳築造となって結実するのである。岩橋山塊を奥津城として、累々と古墳を築造し続ける基盤がこの水路の整備によって可能になったと考えられる。

古墳の変遷

紀伊における最古の前方後円墳は、和歌山市秋月に所在する秋月1号墳で定型化以前の前方後円墳である。日前・国懸神社の旧境内地で紀伊の国造につながる紀直の本願地から発見された古墳である。周辺地域の調査では、4世紀～6世紀にかけて方形周溝墓・古墳等が15基発見されており、岩橋千塚に先行する紀国造一族の奥津城と考えられる地域である。

秋月1号墳は、墳長26.8m、後円部径15.5m、前方部長さ11.3m、幅10mの規模を測り、墳丘を巡る周溝は前方部両端で途切れ、幅3mの陸橋となっている。後円部の中央には、長方形の土壌が存在する。墳丘は削平が著しく、再堆積した土層からは、副葬品の一部とみられるガラス製管玉、小玉、周溝からは小型丸底土器、二重口縁壺が出土し布留式土器の古相であると考えている。この段階では数は少ないものの秋月1号墳、鳴神遺跡SX-280が示すように平野部に築造され、5世紀代も変わらず平野部に古墳が築造される状況にある。

岩橋山塊の南西に位置する福飯ヶ峰丘陵の裾部で秋月1号墳に先行するの前方後方墳が発見され、これまでの考え方を大きく変えざるを得ない状況となった。紀氏は日前宮平野から岩橋にその造墓活動の場を移したと考えていたがその動向は一元的ではないことがわかってきた。これまで、福飯ヶ峰丘陵の裾部には井辺遺跡、岡崎遺跡といった古墳時代の集落が展開し『日本書紀』雄略九年の記事に大伴談連とともに登場する紀岡崎来目連の本拠である可能性が高く、紀氏が部族集団の連合体と考えると紀氏を構成する有力部族の奥津城の一つである可能性がある。福飯ヶ峰丘陵に分布する井辺前山古墳群の首長墓系列は後述する井辺前山24号墳→井辺八幡山古墳→(井辺前山26号墳)→井辺前山6号墳として理解しやすい。

4世紀末から5世紀初頭には独立丘陵花山に古墳が築造され始め、平野部と丘陵上の古墳では明らかにその規模、副葬内容に大きな格差が生じ墓域が二分化される。その代表的な古墳が花山8号墳である。花山8号墳は、花山支群の最高所に築造された全長52mの前方後円墳で後円部、前方部にそれぞれ粘土槨の埋葬施設を持ち、副葬品は滑石製の勾玉を中心として玉類と剣が出土している。花山からは、三角縁神獸鏡が二面、陶質土器壺が1点出土しているがこの花山8号墳から出土した可能性が高いと考えている。

福飯ヶ峰丘陵には前述の全長約60mの前方後円墳井辺前山24号墳が築造されており、未調査のため時期を特定できないがこの古墳は、前方部はやや柄鏡形に近い形状を示している。分布調査で庄内～布留期と考えられる二重口縁壺の破片が見つかり、24号墳に伴うものとするれば、秋月1号墳に近い時期の古墳である可能性もある。埋葬施設が粘土槨だとすると花山8号墳と同時期の可能性もある。いずれにしても、4世紀末から5世紀初頭が紀伊における画期となるであろう。

花山8号墳にやや遅れて築造されるのが全長30mの前方後円墳花山44号墳である。副葬品には、玉類、鉄剣、刀子、鉄鎌、ノミ状工具柄などが出土している。この時期、花山8号墳を凌駕する古墳は見当たらない。信ぴょう性はともかく「日本書紀」に記される「雄略九年(465)三

月条「紀伊小弓宿禰大將軍として新羅に進軍。礪の地を陥す。半島で病死、田身輪（大阪府岬町の淡輪）に墳墓を造る」を無視することはできない。淡輪には紀伊の古墳をはるかに凌駕する墳長 210 m の西陵古墳、墳長 180 m を誇る淡輪ニサンザイ古墳といった中期の大古墳が相対し、西小山古墳では、豊富な鉄製品、金銅製眉庇付冑が副葬されている。西陵古墳では、畿内で大王墓に多く用いられる長持ち形石棺が採用され権力の高さをうかがい知ることができる。鳴滝川と淡輪の番川は和泉山脈の分水嶺を境に南北に分かれて流れる河川でさほど地域間の距離は感じない。この時期、墓域を淡輪に設けた可能性は否定できない。

紀伊国に最初に横穴式石室が採用されたのは紀ノ川上流に位置する橋本市の陵山古墳である。大和、河内との交通の要衝にある古墳で、岩橋千塚と同様の結晶片岩を用い、内部は朱が塗られ、およそ 5 世紀中ごろに築造されたと考えられる。6 世紀初頭になってそれまで花山丘陵に築造されていた古墳が谷を挟んで大谷山→大日山→前山へと順次その造墓活動の範囲を推移・拡張させている。その理由はよくわからないが墓域が手狭になったとも考えられる。この時期に横穴式石室が導入されるが導入に当たっては前方後円墳に最初に採用される。花山丘陵に築造された花山 6 号墳（墳長 49 m）、大谷山に築造された 6 号墳（墳長約 25 m）、22 号墳（墳長 68 m）、27 号墳（墳長 21 m）、28 号墳（墳長 25 m）といった古墳がそれにあたる。岩橋における導入期の石室は、羨道が片側に寄った構造でプランは長方形を呈するのが一般的であり、岩橋型石室の出自については花山 6 号墳から新羅系の土器が出土していることから石室の系譜を考える上で注目される。

大日山山頂に築かれた大日山 35 号墳は墳長 86 m の前方後円墳で初期の横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳である。大谷山 22 号墳の例とも合わせ初期横穴式石室の石梁は水平に懸架されていることがわかる。両古墳については、どの古墳が先行する時期か、未だ決着をみていないが大谷山→大日山→前山へと古墳築造が推移することを考えれば大谷山 22 号墳、続いて大日山 35 号墳が築造されたと考えることも可能であろう。しかしながら、その差はごく近い時期に築造されたと考えられる。福飯ヶ峯には前述の前方後円墳井辺八幡山古墳（墳長 67 m）が築造されるのもこの時期である。花山 6 号墳、大谷山 22 号墳、大日山 35 号墳、天王塚古墳、井辺八幡山古墳といった盟主墳と思われる古墳がほぼ同時期に近い場所に築造されるのは、前述したように紀氏が部族連合であったことを如実に物語っているものと考えられる。それぞれ花山丘陵、岩橋山塊、福飯ヶ峯丘陵周辺に播居する紀氏集団の内部で拮抗する力を有する首長がこれら古墳を築造したためと考えるのが自然と考えるからである。

大谷山 22 号墳、大日山 35 号墳にやや遅れて天王塚古墳（墳長 88 m）が岩橋山塊の東方の丘陵に築造される。埋葬施設は横穴式石室でその規模は、全長 10.59 m、玄室長さ 4.22 m、石梁 8 本を懸架する古墳で天井の高さは 5.9 m を測る。平面形より空間を意識した石室を構築し、岩橋型石室の到達点である。この天王塚古墳以降各地に岩橋型石室を埋葬施設に持つ古墳が見受けられるようになる。岸俊男によって、瀬戸内海の沿岸部には紀氏及びその同族がかなり分布していたことが明らかにされ（岸 1963）、この研究を基に紀臣及び同族の分布と岩橋型石室の分布がかなり一致することが河上邦彦氏によって明らかとなっている（河上 1977）。瀬戸内～九州に至る広汎な地域に認められることは、紀氏が制海権を担っていた証左であろうと考えられる。

6 世紀中ごろから後半にかけて、前山 B53 号墳（将軍塚）、前山 B67 号墳（知事塚）、前山 B112 号墳（郡長塚）等の古墳が岩橋の尾根筋に次々と築造される。井辺前山古墳群には井辺前山 6 号墳（前方後円墳 49 m）が築造される。しかし、花山、大谷山、大日山、井辺前山には前述の古墳を凌駕する古墳は築造されず、6 世紀の後半の寺内 28 号墳（墳長 28.6 m）を最後に岩

橋千塚では前方後円墳は姿を消し、以降前方後円墳は築造されない。岩橋における首長墳は方墳へと移行する。寺内 57 号墳の石室規模は天王塚古墳クラスで、7 世紀代の井辺 1 号墳の石室を見ても往時に匹敵する規模を有していることがわかる。

5 世紀末～6 世紀初に岩橋山塊、花山丘陵に横穴式石室を埋葬施設に持った古墳が出現する。初期横穴式石室の花山 6 号墳からは新羅系の土器が出土し、6 世紀中ごろの前山 A46 号墳からも新羅系の土器が発見されている。6 世紀前半の前山 B70 号墳は鍛冶工具、百済系の陶質土器を副葬していることから百済系の韓鍛冶の墓であった可能性が高い。これらのことから推測すると、5 世紀に平野部の大規模開発を取り仕切り、鳴神～秋月の平野部に墓地を築造した第一波の技術者集団の大半が伽耶系の人たちであって、岩橋千塚築造に大きく関与した第 2 波は新羅系・百済系の人たちであったと考えられ、そこには、東アジアを取り巻く大きなうねりがあったものと推察される。渡来系の技術者集団を巧みに掌握することによって、紀氏は巨大な勢力を誇るまでになり 5 世紀から 7 世紀に大古墳群を造営し続ける基盤を作り上げたのではないかと推察している。

【参考・引用文献】

- 岸俊男「紀氏に関する一試考」『近畿古文化論考』檀原考古学研究所編 1963
『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室 1967
『近畿自動車道と歌山線埋蔵文化財調査報告』1972
『日本古代用水史の研究』亀田隆之 吉川弘文館 1973
『平群・三里古墳』奈良県立檀原考古学研究所 1977
『岩橋千塚とその周辺』紀伊風土記の丘管理事務所 1981
『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会 1984
『和歌山県史』考古資料 和歌山県史編纂委員会 1983
『田屋遺跡』財団法人和歌山県文化財センター 1990
『和歌山県史』原始・古代 和歌山県史編纂委員会 1993
『秋月遺跡』財団法人和歌山県文化財センター 1994
『鳴神 V 遺跡発掘調査概要報告書』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1994
『岩橋千塚周辺古墳緊急確認調査報告書』和歌山県教育委員会 2000
『秋月遺跡第 8 次発掘調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2000
『渡来文化の波—5~6 世紀の紀伊国を探る—』和歌山市立博物館 2002
『年代のものさし』平成 17 年度冬季企画展 大阪府立近つ飛鳥博物館 2005
『紀淡海峡の民—黄泉の世界—』和歌山県立紀伊風土記の丘 2006
このほか参考にした文献は数多いが紙面の関係で割愛させていただいた。

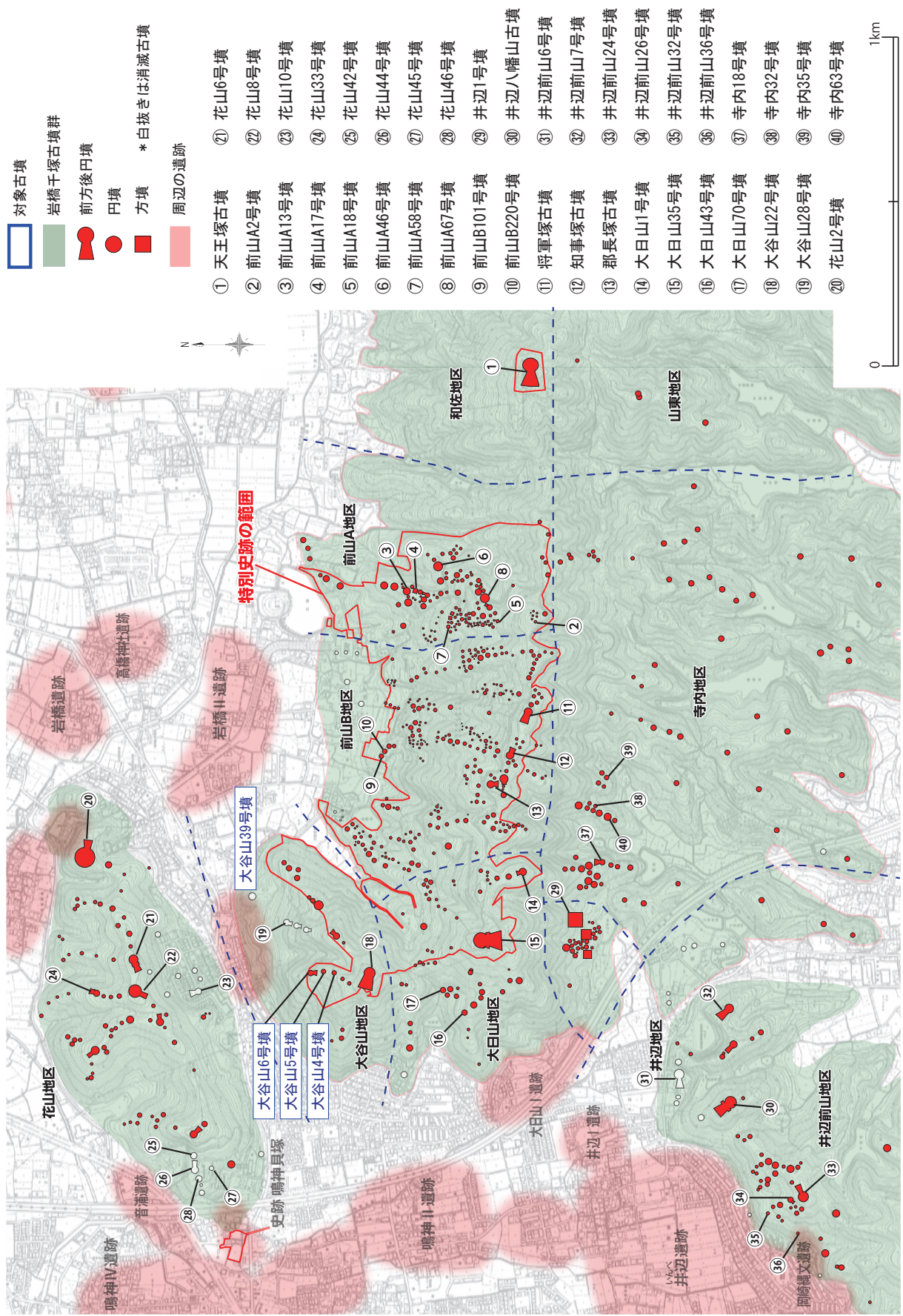


図2 対象古墳と岩橋千塚古墳群及び周辺施設

第3章 大谷山4号墳

第1節 発掘調査

(1) 調査の概要

大谷山4号墳は、大谷山山頂より北に派生する尾根の標高約107m付近に築造された円墳である。墳丘の中心は尾根の稜線の主軸線より西側に若干ずれて築かれている。4号墳と同じ尾根上には、南側に大谷山3号墳が、北側に大谷山5号墳が位置する。

発掘調査では、横穴式石室の構造を明らかにすることを目的としてトレンチ調査を行った。横穴式石室は後世の盗掘などにより大きく改変されており、天井石が抜き取られ開口している状態であった。

調査は、石室内の堆積土を除去し、玄室及び羨道を検出後、床面まで掘削するとともに、サブトレンチを設定し、排水溝の構造などを確認した。また、横穴式石室の平面図及び立面図等の記録作成を行った。

(2) 墳丘

墳丘調査が行われていないため、葺石及び周溝等の外表施設や盛土等、墳丘の構造は不明であるが、形象埴輪の出土が確認されていることから、埴輪が樹立していた可能性が考えられる。

なお、墳丘南西側の標高108m付近に広がる平坦面は、墳丘築造時の土取りによる掘削と南側の斜面から流れ込んだ流土によるもので、墳丘の西側の削平は盗掘の際に掘削されたものと考えられる。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は、墳丘のほぼ中央に横穴式石室が構築されており、北西方向に開口する。前述のように後世の改変を受け天井石及び石室上部が欠失し、羨道部と玄室の一部は埋没している状況であった。

石室は、玄室、内側に突出した玄門部（玄室前道）、羨道、羨門から構成され、玄室前道が玄室奥壁からみてやや右にかたよる両袖式の横穴式石室である。

石室の法量は、玄室長1.9m、奥壁幅1.6m、右袖部幅0.45m、左袖部幅0.6m、玄門幅0.5m、玄室前道長0.6m、羨道長1.5m、羨道幅0.8mである。

玄室は、天井石を含む上部が欠失している。玄室幅よりも玄室長がやや長く平面形は正方形に近い。奥壁の残存高は約1.35mであり、傾斜は、床面からの高さ0.7mまでは約75度で、0.7m以上からは約90度で持ち送られている。左側壁の残存高は最大1.4mであるが、中央部分の残存高は0.35mであり、傾斜は約75度で持ち送られている。右側壁の残存高は1.4mであり、傾斜は約90度である。上半部が欠失しているため、石梁及び石棚の有無は不明である。

玄室床面は、標高106.7m付近にあたり、床面には5~10cm大の川原石が敷き詰められる。奥壁から0.35m前壁側の左側壁近くに、奥壁と並行する方向で、幅0.6m、高さ0.5m、厚さ5cmの結晶片岩の板石が立てられている。また、奥壁から1.2m前壁側の右側壁近くに、奥壁と並行する方向で、幅0.35m、高さ0.4m、厚さ5cmの結晶片岩の板石が立てられており、玄室内をほぼ3等分している。板石は仕切石と考えられる。本報告では、奥壁側から第1屍床、第2屍床、

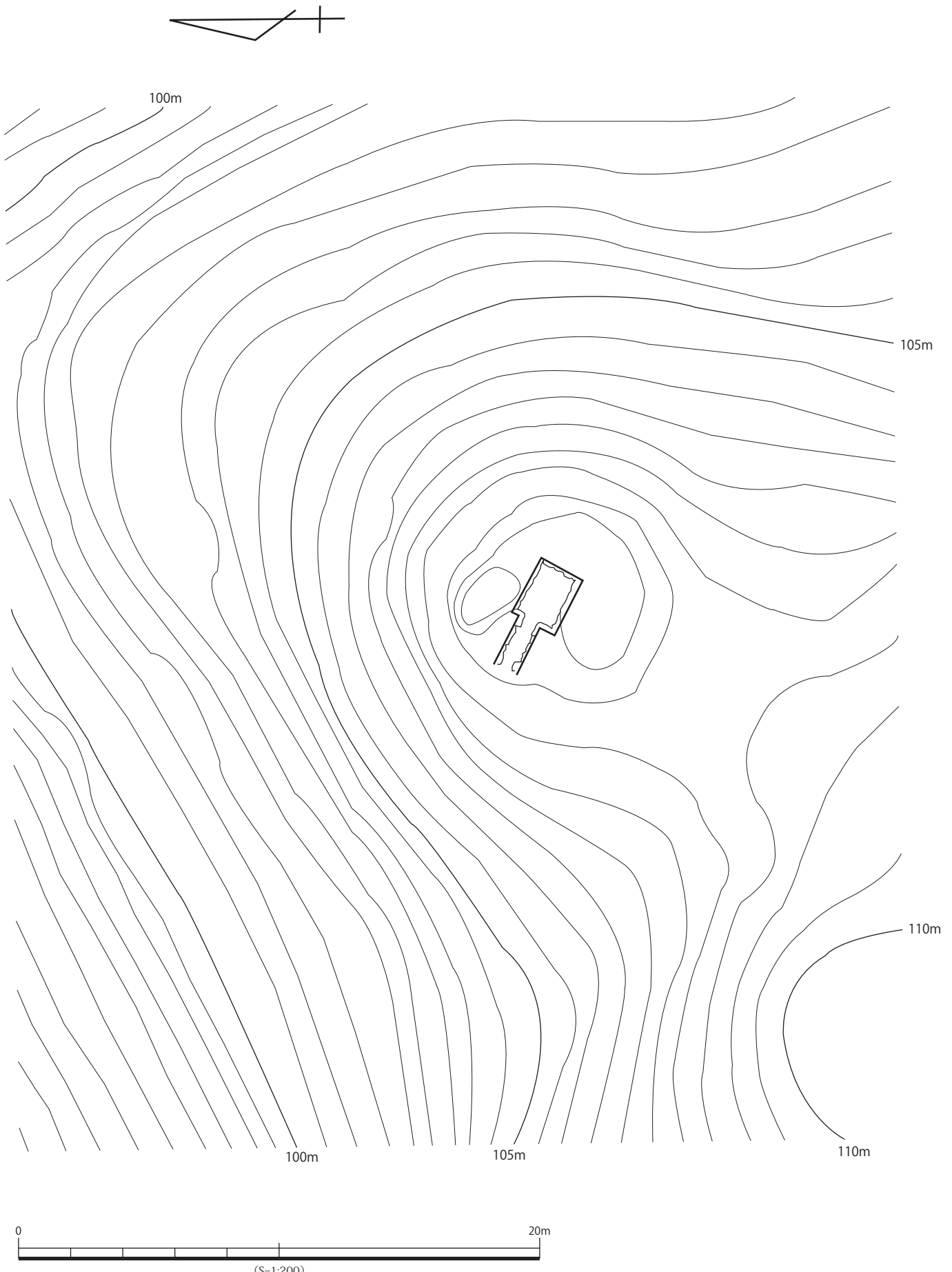


図3 大谷山4号墳 墳丘と調査区 (S=1/200)

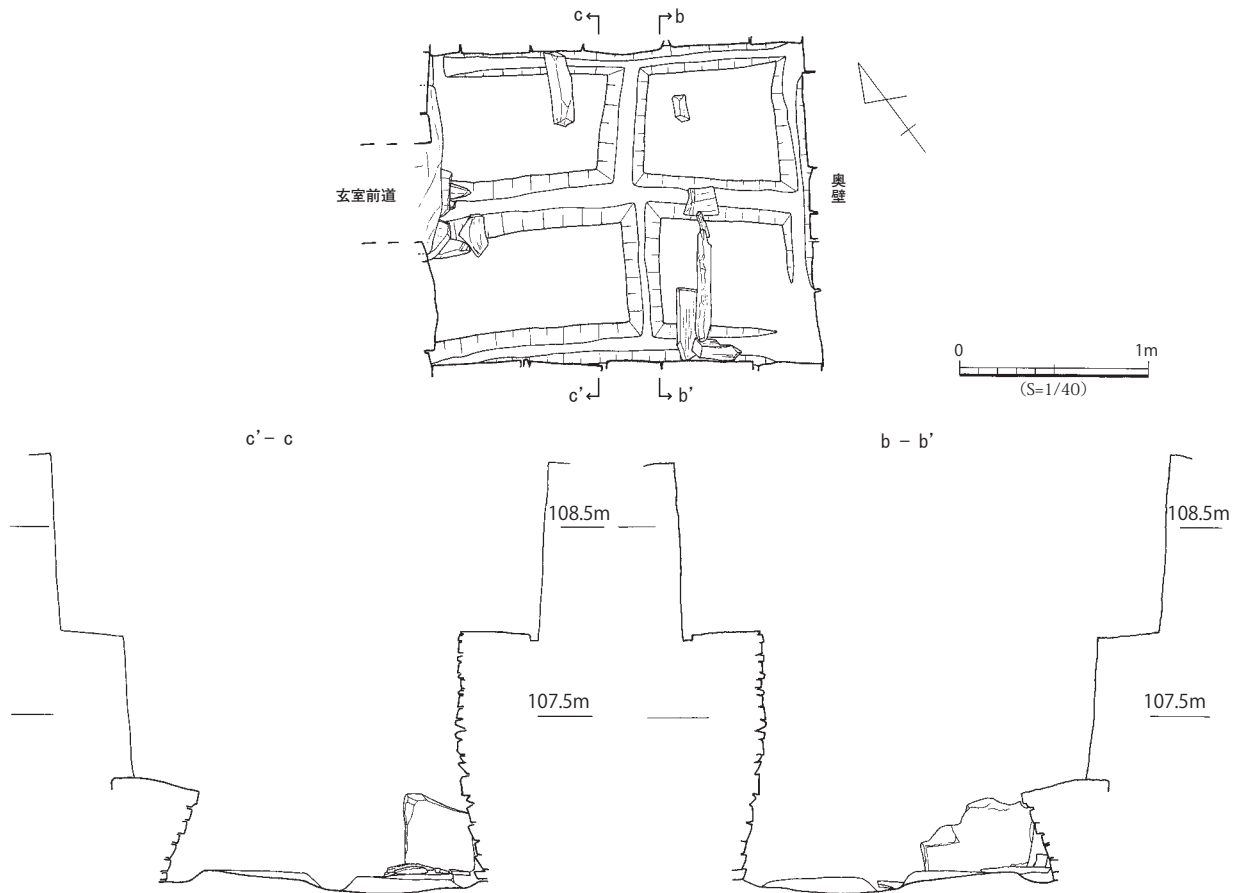


図5 大谷山4号墳 横穴式石室排水溝平面図・断面図 (S=1/40)

第3屍床と呼称することとする。

玄室前道は、天井石及び石室上部が欠失している。玄室前道長が幅よりもやや長い。壁面の残存高は0.4mで玄室側壁と比べやや厚みのある結晶片岩で両側壁を構築している。玄室前道の床には、長さ0.6m、幅約0.3mの基石を2枚敷き、その上に両側壁を構築している。玄室前道基石は、前壁と同工程で積み上げられた高さ約0.3mの石積みの上に置かれており、玄室床面よりも0.4m高くなる。

羨道は、天井石及び石室上部が欠失しており、壁面の残存高は0.9mで玄室側壁と比べやや厚みのある結晶片岩で両側壁を構築している。傾斜は、羨道右側壁は約70度、羨道左側壁は約65度の角度で持ち送られている。羨道の玄室前道側には、板石を立て扉石とし閉塞している。扉石は幅0.35m、高さ0.45m、厚さ5cmの結晶片岩で、羨道右側壁側に立てられており、羨道側から幅0.15m、長さ0.45mの石が斜めに立てかけられている。

玄門部閉塞石から約1.5mの位置で両側壁が内側に突出しており、羨門となる。長さ20cmの結晶片岩の板石を現状で6段程度積み重ねて閉塞している。なお、閉塞石の石積みは、現状で外側に向かって倒れる。

排水溝は、玄室内では前壁以外の壁際と玄室の中心を通るように十字に敷設されている。溝の幅は10~30cm、深さ15cmを測る。溝壁に結晶片岩の板石をあて、蓋石を被せている。排水溝は、前壁下を潜り、羨道側へと延びている。また、羨門から西に約1.6mの位置に排水溝確認のため

のトレンチを設定し、標高 106.1 m の地点で排水溝の延長部を検出した。溝内部には 5~10cm 大の川原石と結晶片岩の板石を充填し、上部に板石を被せて蓋としている。玄室内の排水溝底の標高は 106.7 m であるため、排水溝は羨道側に向かって約 8.5 度の傾斜で構築されている。

玄室内からは、須恵器 2 点 (13・14)、土師器 1 点 (15)、形象埴輪 3 点 (2・5・11) が出土している。須恵器は、坏蓋 (13) が玄室床面、長頸壺 (14) が第 2 屍床、土師器壺 (15) が第 3 屍床から出土している。形象埴輪 (2・5・11) は玄室内の攪乱土中から出土しており、墳丘からの転落によるものと考えられる。

第 2 節 出土遺物

(1) 埴輪

家形埴輪 (1~5)

1 は寄棟の軒下部分で、屋根が壁に取り付く部分である。表面は縦方向のハケを施す。壁に取り付く部分は粘土で補強を行っており、指押さえが目立つ。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。墳頂部攪乱土から出土している。2 は寄棟の軒先で、軒先に幅 2.5cm の帯状の粘土を貼り付けており、表裏両面ともナデ調整を施す。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。玄室攪乱土から出土している。3 は棟覆の押縁・筭の部分で、表面に 2 条のヘラ描き沈線を施す。裏面は剥離面となっている。焼成は良好で、色調は橙色である。墳頂部攪乱土から出土している。4・5 は棟覆の押縁の部分で、4 は 4 条のヘラ描き沈線、5 は 3 条のヘラ描き沈線を施す。裏面は 4・5 とも剥離面である。4 の焼成は良好で、色調は橙色である。墳頂部攪乱土から出土している。5 の焼成は良好で、色調は灰黄色である。玄室内から出土している。

動物埴輪 (6)

6 は脚部の蹄部分で、腕を伏せたような形態をしている。表裏両面とも磨滅気味であるが、ナデ調整を施す。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。羨道内攪乱土から出土している。馬形埴輪の可能性はある。

馬形埴輪 (7・8)

7 は尻繫の一部で、表面に幅 1cm の帯状の粘土を貼り付けている。8 は杏葉で、表面に 2 条のヘラ描き沈線を施した後に直径約 1cm の円形の粘土粒を貼り付けている。裏面は剥離面である。7・8 とも焼成は良好で、色調は橙色である。7 は羨道内攪乱土から、8 は羨道内から出土している。

蓋形埴輪 (9・10)

9 は笠部の笠縁部で、表裏両面にヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は橙色である。羨道上部攪乱土から出土している。馬形埴輪の鞍である可能性もある。

10 は立ち飾り部で、表裏両面に 2 条のヘラ描き沈線を施し、沈線の上に刺突を施す。全体的に磨滅気味なため、刺突の形状は不明である。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。玄室内下層から出土している。

形象埴輪基部 (11)

11 は形象埴輪基部で、底部端から上方 1.5cm の位置に突帯が巡る。表面はハケ、裏面はナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は明黄褐色である。羨道部上部攪乱土から出土している。

円筒埴輪 (12)

12 は円筒埴輪で、表面はハケ、裏面は指押さえとナデ調整を施す。突帯から下方 1cm の位置に

透孔を開けている。焼成は良好で、色調は橙色である。墳頂部から出土している。

(2) 土器類

須恵器 (13・14)

13は杯蓋で、口径12.2cm、残存高4.15cmである。内面は回転ヨコナデ、外面は回転ヘラケズリとやや強いヨコナデ調整を施す。口縁部は外反し、端部は内傾する面をつくる。天井部の1/2は回転ヘラケズリで、稜は明瞭ではない。外面全体に自然釉が付着する。焼成は良好、色調はオリーブ黒色である。玄室床面から出土している。TK10型式期の中でも新相の特徴をもつと考えられる。14は長頸壺の口縁部で、口径10.8cm、残存高3.7cmである。内外両面とも回転ナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は灰色である。玄室内(第2屍床)礫内攪乱から出土している。

土師器 (15)

15は壺の口縁から胴部で、口径11.2cm、残存高10.0cmである。内面はナデ・ヨコナデ、外面はヨコナデ・ハケ後ナデ・指押さえ調整が施される。焼成は良好、色調は明赤褐色である。羨道部と玄室内(第3屍床)から出土したものが接合する。

第3節 まとめ

大谷山4号墳は、大谷山から北に向かって延びる尾根上に位置し、標高約107m付近に築造されている。墳丘の調査を行っていないためその構造は不明だが、現況及び地形図から、東は標高106.5m付近、西は標高105m付近が地形の変換点にあたることから、直径約18mの円墳と推定される。埋葬施設は西に開口する横穴式石室であり、盗掘により大きく破壊を受けている。

石室は、玄室前道基石が玄室床面から0.4m高い位置にあり、他の岩橋型横穴式石室とは異なる特徴を持っている。また、玄室前道は板状の扉石により閉塞されているのに対し、羨門は石積みにより閉塞され、石室を異なる方法で2ヵ所閉塞している。

玄室には、石室主軸に直交する方向に仕切石と考えられる板石が立てられており、玄室内をほぼ3等分している。このことから、少なくとも2体の埋葬があったことが考えられるが、石室内からの出土遺物は少なく、出土位置がわかる遺物も少ないことから、各屍床の埋葬時期が同一のものか、もしくは追葬によるものかは不明である。

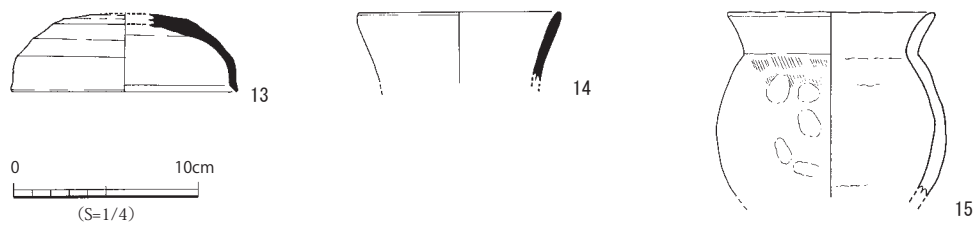
玄室床面出土の須恵器杯蓋の特徴及び、玄室平面が正方形に近くなる点や、玄室前道が玄室前壁の中央に位置する点などから、TK10型式期の中でも新相の時期の築造と考えられる。

【参考文献】

- 黒石哲夫 2005 「紀伊における後期古墳時代の集団関係－岩橋系横穴式石室の展開を中心に－」『待兼山考古学論集 都出比呂志先生退任記念』大阪大学考古学研究室
- 黒石哲夫 2007 「地域別概説 紀伊の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
- 中村貞史 2010 「岩橋千塚古墳群における板石閉塞」『紀伊考古学研究』第13号紀伊考古学研究会
- 広瀬和雄 2004 「紀伊岩橋千塚古墳群の諸問題」『地域と古文化』地域と古文化刊行会
- 関西大学文学部考古学研究室 1967 『岩橋千塚』
- 和歌山県文化財研究会 1968 『和歌山県文化財学術調査報告書 第三冊』
- 和歌山県教育委員会 2000 『岩橋千塚周辺古墳群 緊急確認調査報告書』
- 和歌山県教育委員会 2013 『大日山35号墳発掘調査報告書－特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書2－』
- 和歌山県教育委員会 2015 『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書3－大日山35号墳・前山A13号墳・前山A58号墳発掘調査報告書』



大谷山 4 号墳出土 埴輪



大谷山 4 号墳出土 土器

图 6 大谷山 4 号墳 出土遺物実測図

表2 大谷山4号墳 出土遺物観察表

No.	図版番号	種類器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成
1	図版8	家形埴輪 寄棟軒先	埴頂部 攪乱土	—	外面は縦方向のハケメを施し、内面の壁に取り付く部分は粘土で補強しており、指押さえが強く残る。	内)25Y7/2 灰黄色 外)10YR7/4 ぶい黄橙色	密 (5mm 以下の礫を含む、1mm 以下の白色、褐色砂粒を含む)	良
2	図版8	家形埴輪 寄棟軒先	玄室 攪乱土	—	内外両面ともナデ調整を施し、外面の軒先には幅2.5cmの帯状の粘土を貼り付けている。内面には指押さえが残る。	内・外)7.5YR7/4 ぶい橙色 断)10YR7/3 ぶい黄橙色	密 (少量の赤色酸化粒と砂粒が含まれる)	良
3	図版8	家形埴輪 棟覆・葺	埴頂部 攪乱土	—	外面はヘラ描きによる沈線2条を施文し、内面は剥離面となる。	内・外)7.5YR7/6 橙色 断)2.5Y7/2 灰黄色	密 (2mm 以下の白色・褐色砂粒を含む)	良
4	図版8	家形埴輪 棟覆	埴頂部 攪乱土	—	外面はヘラ描きによる沈線4条を施文し、内面は剥離面となる。	内・外)7.5YR6/6 橙色	密 (5mm 以下の片岩、1mm 以下の白色・褐色砂粒を含む)	良
5	図版8	家形埴輪 棟覆	玄室内	—	外面はヘラ描きによる沈線3条を施文し、内面は剥離面となる。	内)7.5YR7/6 橙色 外)2.5Y6/2 灰黄色	密 (3mm 以下の片岩、1mm 以下の白色・褐色砂粒を含む)	良
6	図版9	動物埴輪	羨道内 攪乱土	—	蹄部分にあたり、腕を伏せたような形態をしている。内外両面ともやや磨減している。内外両面ともナデ調整を施す。	内・外)7.5YR7/4 ぶい橙色	密 (5mm 以下の片岩、2mm 白色・砂粒と雲母を含む)	良
7	図版9	馬形埴輪 尻繫	羨道内 攪乱土	—	内外両面ともナデ調整を施す。外面に約1cmの帯状の粘土を貼り付けている。	内・外)5YR6/6 橙色	密 (7mm 以下の片岩、1mm 以下の白色・褐色砂粒と雲母を含む)	良
8	図版9	馬形埴輪 杵葉	羨道内	—	外面は2条一組のヘラ描き沈線を施した後に直径約1cmの粘土粒を貼り付けている。内面は剥離面となる。	内)5YR7/6 橙色 外)10YR7/4 ぶい黄橙色	密 (2mm 以下の白色・褐色の砂粒を含む)	良
9	図版8	蓋形埴輪 笠部	羨道部上部 攪乱土	—	内外両面ともにヨコナデ調整を施す。	内・外)7.5YR7/6 橙色～ 5YR7/6 橙色	密 (4mm 以下の片岩、1mm 以下の白色・褐色砂粒を含む)	良
10	図版8	蓋形埴輪 立ち飾り部	玄室内下層	—	内外両面とも磨減気味である。内外両面に2条のヘラ描き沈線を施し、沈線の間に刺突を施す。刺突の形状は不明である。	内・外)10YR7/4 ぶい黄橙色	密 (2mm 以下の片岩、白色・砂粒と雲母を含む)	良
11	図版9	形象埴輪 基部	羨道部上部 攪乱土	—	底部端から上方1.5cmの位置に突帯が巡る。外面はハケメ調整、内面はナデ調整を施す。	内・外)10YR7/6 明黄褐色～ 10YR7/4 ぶい黄橙色	密 (4mm 以下の片岩、2mm 以下の白色砂粒を含む)	良
12	図版9	円筒埴輪	埴頂部	—	外面はハケメ調整、内面はナデ調整を施し、指押さえが残る。突帯から下方1cmの位置に透孔を開けている。	内・外)7.5YR7/6 橙色 断)10YR7/3 ぶい黄橙色	密 (10mm 以下の片岩、5mm 以下の砂粒を多く含む)	良
13	図版9	須恵器 坏蓋	玄室床面	口径12.2cm 残存高4.15cm 残存率60%	外面全体に自然釉が付着。外面は天井部の1/2は回転ヘラケズリで、残りはやや強いヨコナデ調整を施す。稜は明瞭ではない。内面は回転ヨコナデを施す。口縁部は外反し、端部は内傾する面をつくる。ロクロ回転方向は右。	内)N6/0 灰色 外)5Y6/1 灰色・7.5Y3/1 オリープ黒色 断)	密 (1mm 以下の黒色砂粒を含む)、 外面全体に自然釉付着	良
14	図版9	須恵器 長頸壺	玄室内 (第2死床) 礫内攪乱土	口径10.8cm 残存高3.7cm	口縁部。内外両面とも回転ナデ調整を施す。	内)N4/0 灰色 外)N5/0 灰色	密 (2mm 以下の白色礫、砂粒を含む)	良
15	図版9	土師器 壺	羨道部 + 玄室内 (第3死床)	口径11.2cm 残存高10.0cm 残存率25%	口縁から胴部。外面はヨコナデ調整、頸部から胴部にかけてハケ後ナデ・指押さえ調整、内面はヨコナデ調整が施される。	内・外)5YR5/6 明赤褐色	密 (1mm 以下の白色砂粒、金雲母を全体に含む)	良

第4章 大谷山5号墳

第1節 発掘調査

(1) 調査の概要

大谷山5号墳は、大谷山山頂より北に派生する尾根の標高約97m付近に築造された円墳である。墳丘の中心は尾根の稜線の主軸線より若干ずらして築かれている。5号墳と同じ尾根上には、南側に大谷山4号墳が、北側に大谷山6号墳が位置する。墳丘盛土の範囲から東西方向の長径約19m、南北方向の短径が15mの円墳と推定される。葺石及び周溝等の外表施設は確認されていない。地山は南から北に向かって下がっており、墳丘南北裾の比高差は約3.5mを測る。

今回は、石室及び墳丘の調査を行った。石室の調査では、その構造を明らかにするため、横穴式石室の玄室と羨道部分について、石室主軸線に沿って幅約3m、長さ約18mの西トレンチを設定した。横穴式石室は後世の盗掘などにより大きく改変されており、天井石が抜き取られ開口している状態であった。

調査は、石室内の堆積土を除去し、玄室及び羨道を検出し、床面まで掘削するとともに、サブトレンチを掘削し、排水溝の構造などを確認した。また、横穴式石室の平面図及び立面図、土層断面図等の記録作成を行った。その後、排水溝の検出と図面作成を行った。

また、墳丘規模や構造を明らかにするために、石室を中心に北・東・南の3方向に幅約1mのトレンチを設定した。北トレンチは長さ約13m、東トレンチは長さ約10m、南トレンチは長さ約7mである。トレンチ掘削後は、土層断面図の作成を行っている。なお、南トレンチと西トレンチの間に南西方向の幅約1m、長さ約7mの南西トレンチを設定している。

(2) 墳丘

西トレンチ南壁 表土及び流土（第1層と第2層）の下に、墳丘盛土（第3層から第74層）が堆積する。墳丘盛土は、黄褐色土、灰褐色土、赤褐色土を中心とした土層で、これらを交互に積み上げて墳丘を構築している。玄室奥壁から約15m地点（標高95.5m付近）まで墳丘盛土が確認されている。

北壁 表土及び流土（第1層と第2層）の下に、墳丘盛土（第3層から第25層）が堆積する。墳丘盛土は、黄褐色土、灰褐色土、赤褐色土を中心とした土層で、これらを交互に積み上げて墳丘を構築している。玄室奥壁から約10m地点（標高96.2m付近）まで墳丘盛土が確認されている。

南トレンチ東壁 表土及び流土（第1層から第3層）の下に、墳丘盛土（第4層から第27層）が堆積する。南トレンチ北端から南に約2m地点（標高99.2m付近）から北に向かって地山を掘り込んでおり、地山整形痕跡と考えられる。灰褐色土を中心に赤褐色土などを10から30cm程度の厚さで交互に積み上げて墳丘を構築している。石室中心軸から南へ約5m地点（標高99.2m付近）で墳丘盛土が終わり、その南側で地山が凹状に整形されていることから、第5層南端部が墳丘裾と考えられる。

東トレンチ北壁 表土及び流土（第1層と第2層）の下に、墳丘盛土（第3層から第16層）が堆積する。墳丘盛土は、灰褐色土と赤褐色土を中心とした土層で、これらを交互に積み上げて墳丘を構築している。玄室奥壁から約4m地点（標高97.5m付近）まで墳丘盛土が確認されている。また、東トレンチ東端から西に約0.8m地点（玄室奥壁から約1.5m地点）で横穴式石室構築時

の掘方が検出されている。

北トレンチ西壁 流土(第1層)の下に、墳丘盛土(第2層から第30層)が堆積する。墳丘盛土は、黄褐色土、灰褐色土、暗灰色土を中心とした土層で、これらが交互に積み上げられて墳丘を構築している。石室中心軸から約10m地点(標高95.5m付近)まで墳丘盛土が確認されている。また、北トレンチ南端から北に約0.5m地点(石室中心軸から約2m地点)で横穴式石室構築時の掘方が検出されている。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は、墳丘のほぼ中央に横穴式石室が構築されており、西方向に開口する。前述のように後世の改変を受け天井石及び石室上部が欠失し、羨道部と玄室の一部は埋没している状況であった。

石室は、玄室、内側に突出した玄門部(玄室前道)、羨道、羨道前庭から構成され、玄室前道がほぼ中央にくる両袖式の横穴式石室である。

石室の法量は、玄室長2.1m、奥壁幅1.78m、右袖部幅0.5m、左袖部幅0.57m、玄門幅0.7m、玄室前道長0.9m、羨道長1.45m、羨道幅0.85m、羨道前庭長1.00m、羨道前庭幅0.85mである。

玄室は、天井石を含む上部が欠失している。玄室幅よりも玄室長がやや長く平面形は正方形に近い。奥壁の残存高は1.78mであり、傾斜は、約90度である。右側壁の残存高は1.6mであり、傾斜は、約70度で持ち送られている。左側壁の残存高は1.4mであり、傾斜は、約85度で持ち送られている。上半部が欠失しているため、石梁及び石棚の有無は不明である。

玄室床面は、標高96.9m付近にあたり、床面には5~10cm大の川原石が敷き詰められる。

玄室前道は、天井石及び石室上部が欠失しており、玄室前道長が幅よりもやや長い。壁面の残存高は1.0mで玄室側壁と比べやや厚みのある結晶片岩で両側壁を構築している。玄室前道の床には、長さ約1.1m、幅約0.45mの床石を2枚敷き、その上に両側壁を構築している。玄室前道基石は、前壁と同工程で積み上げられた高さ約0.2mの石積みの上に置かれており、その上面は玄室床面よりも0.45m高くなる。

羨道は、天井石及び石室上部が欠失している。残存高は1.3mでやや厚みのある結晶片岩で両側壁を構築している。傾斜は、羨道右側壁は約90度、羨道左側壁は約70度の角度で持ち送られている。玄室前道基石に接して、板石を立てている。板石は幅0.9m、高さ0.25m、厚さ10cmで、左右の側壁に組み込まれている。さらに板石の上部には、複数の板石からなる化粧石を確認した。

羨道と玄室前道の境から約1.4mの位置には羨門があり、幅1.1m、高さ0.3m、厚さ10cmの板石が左右の側壁に組み込まれている。この側壁には複数の板石からなる化粧石が組み込まれる。

また、羨門より西側に2mまで両側壁が続いている。

排水溝は、玄室内では玄室の中心から玄室前道まで延び、幅0.3m、深さ0.1mを測る。玄室前壁では、結晶片岩の板石で蓋をしている。また、羨道前庭において排水溝の有無を確認するために、トレンチを設定したところ、前壁から5.1m~7.6mの範囲に排水溝の延長部を確認した。この地点では、排水溝の流線に合わせて内部に結晶片岩の板石を溝いっぱい立て並べ、板石で蓋をしている。板石を立て並べた排水溝はトレンチ東端から1.8mまで確認できるが、そこから西では素掘りの溝となる。

玄室内からは、須恵器の甗(5)が玄室攪乱土中から、土師器の高杯(7)が床面付近の埋土から出土している。

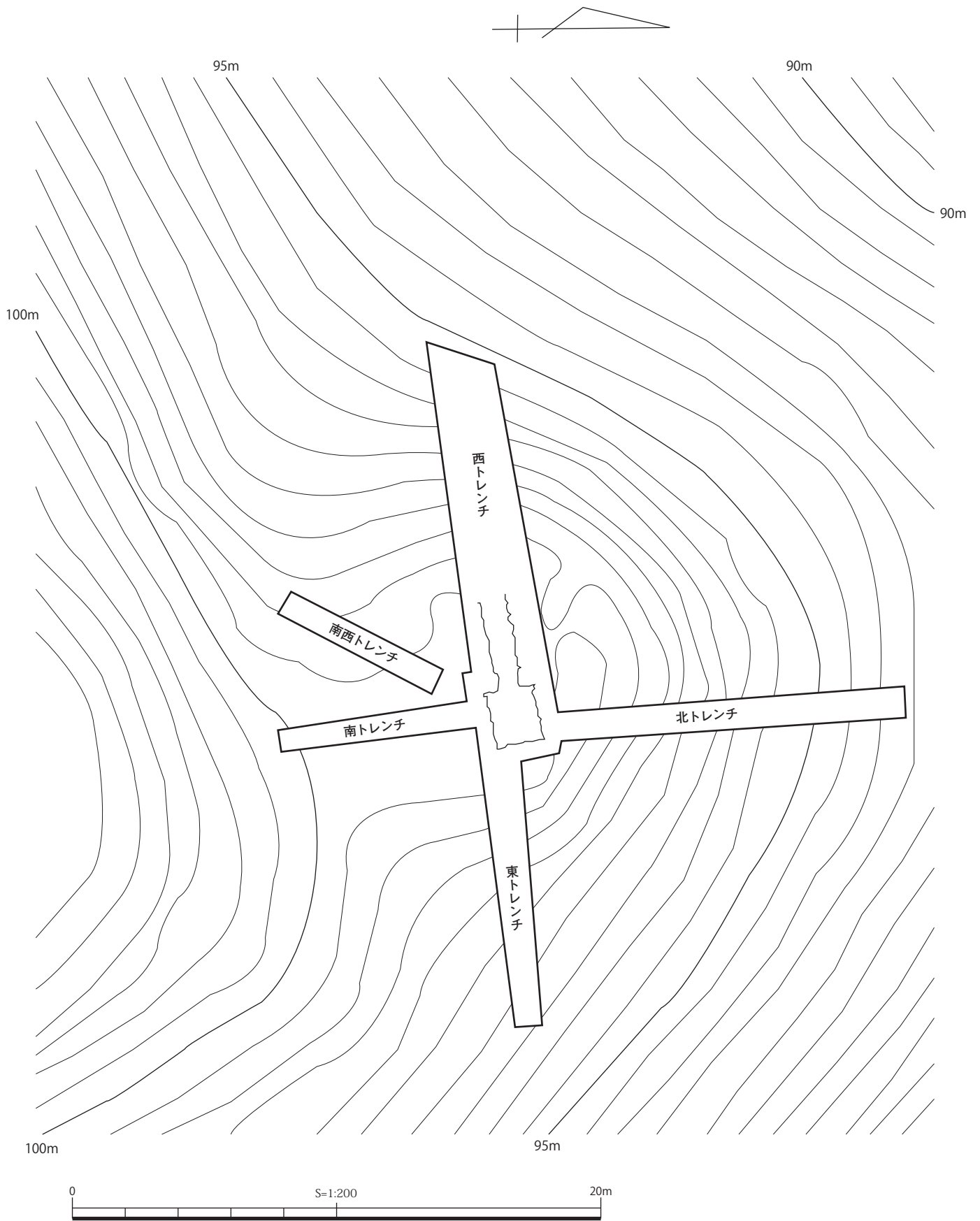


図7 大谷山 5号墳 トレンチ配置図 (S=1/200)

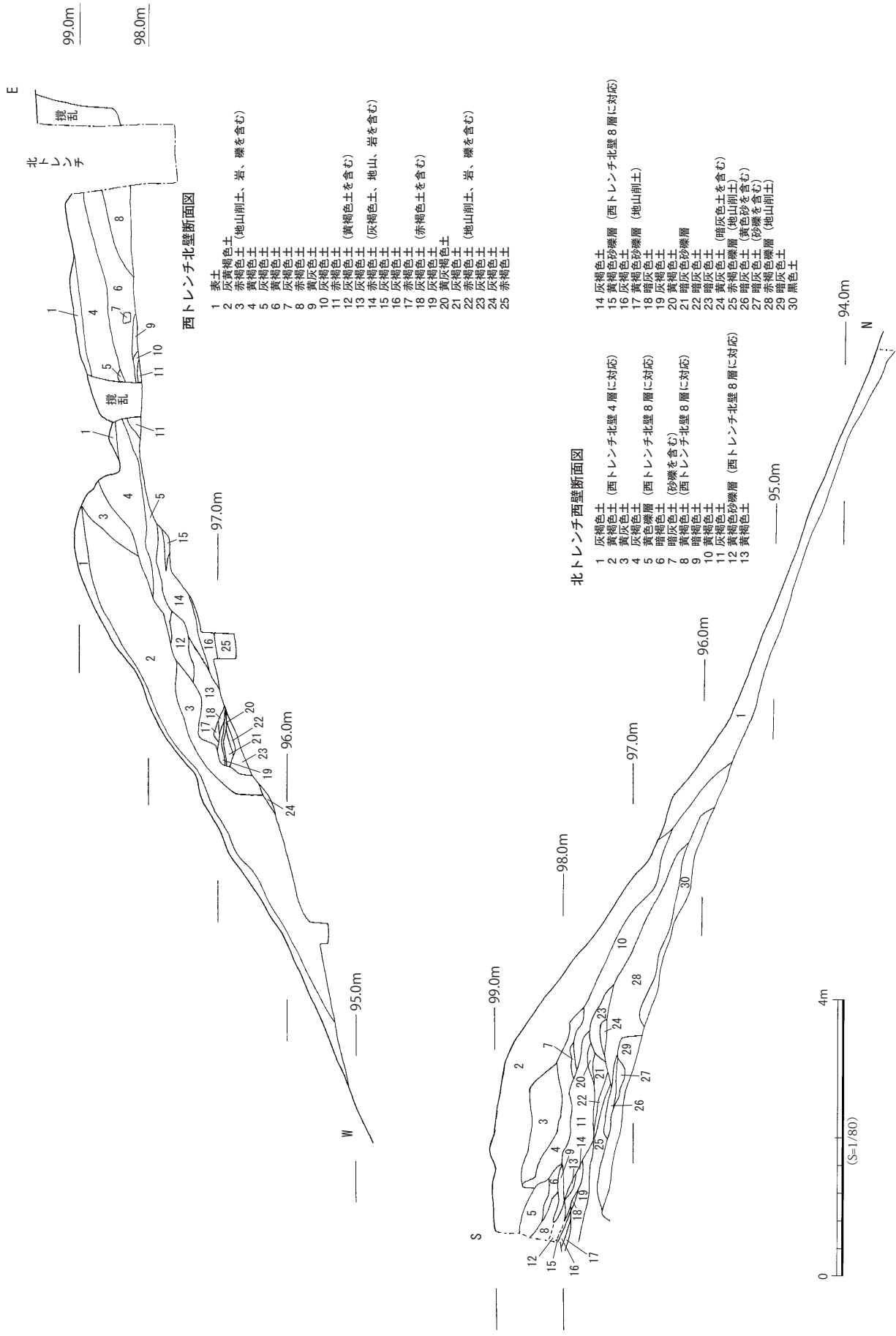
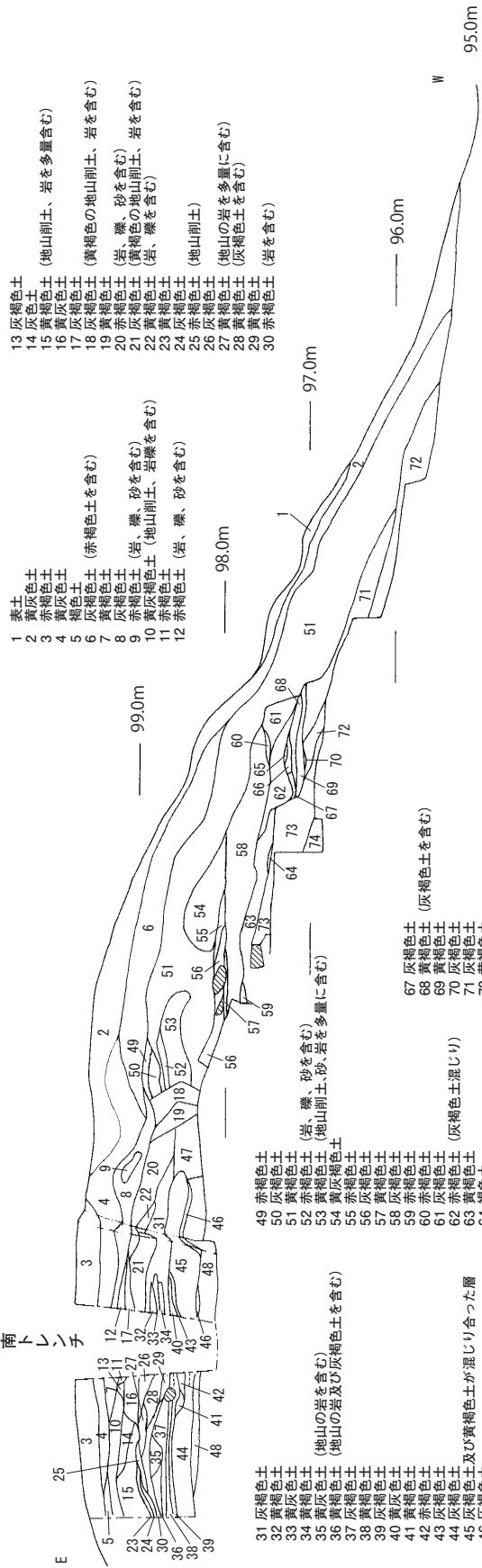


図8 大谷山5号墳 西トレンチ北壁・北トレンチ西壁土層断面図 (S=1/80)

西トレンチ南壁断面図



東トレンチ北壁断面図

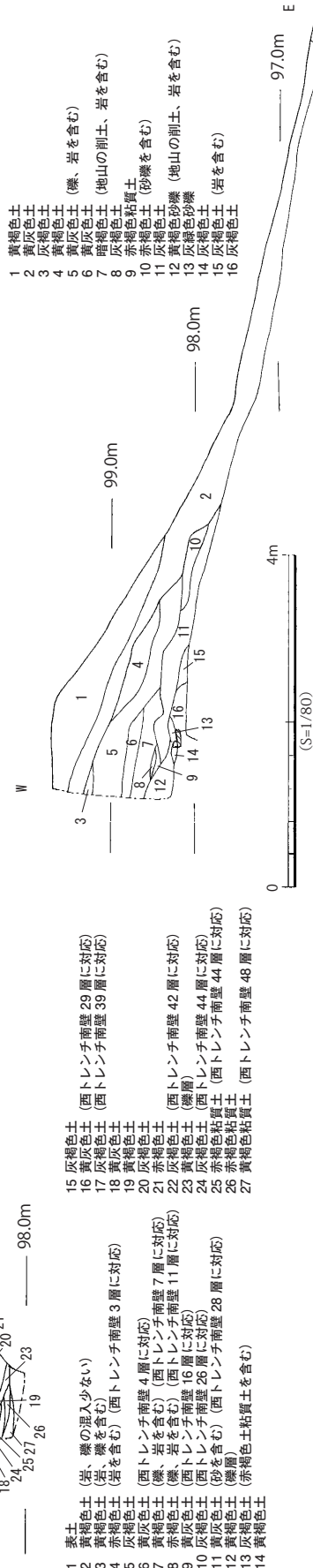


図9 大谷山5号墳 西トレンチ南壁・東トレンチ北壁土層断面図 (S=1/80)

第2節 出土遺物

(1) 埴輪

埴輪の出土は、3点のみである。

家形埴輪 (1)

1は寄棟の屋根で、表面は粗目のハケ、裏面は板状工具のナデ・ユビナデで調整を施す。焼成は良好で、色調は橙色である。南西トレンチ暗褐色土層から出土している。

盾形埴輪 (2)

2は盾部の右上端部にあたる。表面はナデ調整後に3条一括で沈線を施文する。裏面の下部が円筒部にあたり欠損する。上部は板補強用の粘土帯にあたる。上端はやや裏側に反る。焼成は良好で、色調は橙色である。南西トレンチから出土している。

形象埴輪基部 (3)

3は形象埴輪の基部で、表裏両面ともナデにより調整を施す。円筒状をなし、突帯が1条巡る。焼成は良好で、色調は橙色である。南西トレンチから出土している。

(2) 土器類

須恵器 (4~6)

4は杯蓋で、外面は回転ヘラケズリと回転ナデ、内面はヨコナデ調整を施す。天井から口縁部までは緩やかに弧を描くように端部に至り、端部は丸くおさめる。天井の外面1/2は回転ヘラケズリ調整が行われている。TK43型式期の特徴をもつと考えられる。焼成は軟質で、色調は白灰色である。羨道内埋土から出土している。

5は甗で、内外両面とも回転ヨコナデ調整を施し、外面の上段が斜め方向、下段が縦方向のヘラ描き文を施文する。口頸部から外反した後、角度を変え上方に開き、端部は内傾する面をつくる。屈曲部外面には凸線をめぐらせる。内外両面に自然釉が付着する。焼成は良好で、色調は灰色である。石室攪乱土から出土している。

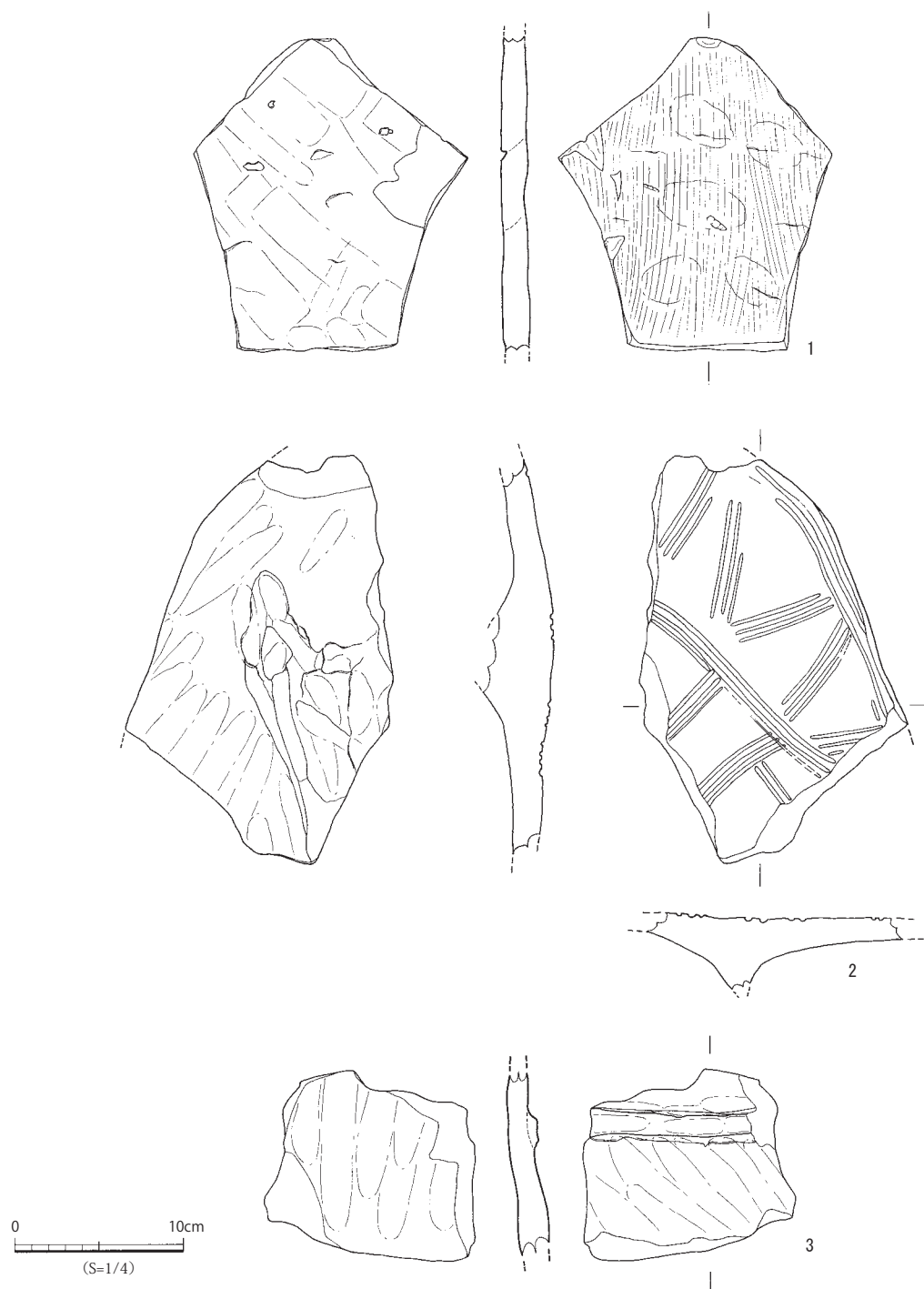
6は高杯で、内外両面とも回転ヨコナデで調整を施し、外面の底部付近は突帯状に削り出している。焼成は良好で、色調は灰色である。表採資料である。

土師器 (7)

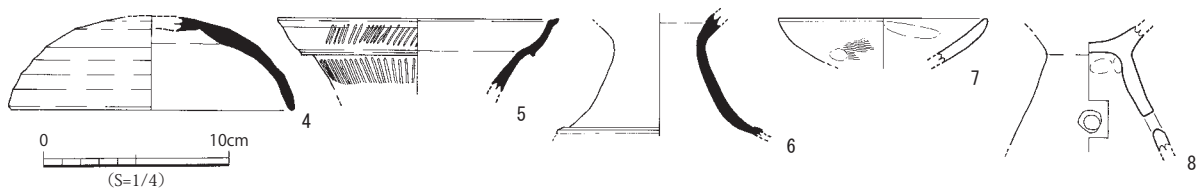
7は高杯で、内外両面にヨコナデ調整を施し、外面の部分的にハケメ・指押さえが残る。焼成は良好で、色調は明赤褐色である。玄室内（床面付近）埋土から出土している。

弥生土器 (8)

8は高杯で、内外両面にナデ調整を施し、内面には指押さえが残る。時期は弥生時代後期と考えられる。焼成は良好で、色調は橙色である。墳丘南トレンチから出土している。



大谷山 5 号墳出土 埴輪



大谷山 5 号墳出土 土器

图 12 大谷山 5 号墳 出土遺物実測図

第3節 まとめ

大谷山5号墳は、大谷山山頂から北に向かって延びる尾根上に位置し、標高約97 m付近に築造されている。墳丘盛土が確認されている範囲から推定すると、長径約19 m、短径約15 mの東西に長い円墳で、横穴式石室をもつ。

大谷山5号墳の構築工程としては、まず南から北に下る斜面を標高約99.3 mから標高約98 m付近まで切土及び盛土して平坦に整形した後、横穴式石室構築のために墓坑を標高97 m付近まで掘削している。なお、墓坑の掘方は、北トレンチで確認されるが、南トレンチでは認められないことから、最大でも幅約4 mと考えられる。横穴式石室を構築後、墳丘盛土を施している。

横穴式石室は、玄室前道基石が玄室床面から0.45 m高い位置にあるなど、大谷山4号墳と同様に、他の岩橋型横穴式石室とは異なる特徴を持っている。

他にも、羨道前庭をもつ点や、玄室長よりも羨道と羨道前庭のアプローチが長くなる点、玄室前道と羨道が板石により閉塞されている点、縦に並べた結晶片岩の板石を充填した排水溝をもつ点などが特徴としてあげられる。

羨道から出土した須恵器杯蓋の特徴及び、玄室平面が正方形に近く、玄室前道が玄室前壁の中央に位置する石室の特徴からTK43型式期の築造と考えられる。

なお、大谷山5号墳出土の埴輪については、岩橋千塚古墳群では当該時期には埴輪が樹立されなくなることや、大谷山5号墳から出土した埴輪は3点のみで、いずれも南西トレンチからしか出土していないことから、大谷山4号墳から流れ込んだ可能性が高いと考えられる。

【参考文献】

黒石哲夫 2005 「紀伊における後期古墳時代の集団関係－岩橋系横穴式石室の展開を中心に－」『待兼山考古学論集 都出比呂志先生退任記念』大阪大学考古学研究室

黒石哲夫 2007 「地域別概説 紀伊の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局

中村貞史 2010 「岩橋千塚古墳群における板石閉塞」『紀伊考古学研究』第13号紀伊考古学研究会

広瀬和雄 2004 「紀伊岩橋千塚古墳群の諸問題」『地域と古文化』地域と古文化刊行会

関西大学文学部考古学研究室 1967 『岩橋千塚』

和歌山県文化財研究会 1968 『和歌山県文化財学術調査報告書 第三冊』

和歌山県教育委員会 2000 『岩橋千塚周辺古墳群 緊急確認調査報告書』

和歌山県教育委員会 2013 『大日山35号墳発掘調査報告書－特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書2－』

和歌山県教育委員会 2015 『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書3－大日山35号墳・前山A13号墳・前山A58号墳発掘調査報告書』

表3 大谷山5号墳 出土遺物観察表

No.	図版番号	種類器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成
1	図版17	家形埴輪 寄棟	南西トレンチ 暗褐色土層	—	外面は指押さえ後粗目のハケメを施す。内面は指押さえ後板状工具によるナデを施す。	内・外)5YR6/6 橙色 断)2.5Y5/2 暗灰黄色	密(4mm大の片岩を含む 3mm以下の砂粒を多く含む 8mm、赤色酸化粒を含む)	良
2	図版17	盾形埴輪	南西トレンチ	—	外面はナデ調整後に3条一括の沈線を施文する。内面は下部が円筒部にあたり欠損している。上部は板補強用の粘土帯に当たり指押さえが残る。盾部は斜め方向のナデ調整を施す。	内・外)5YR6/6 橙色	密(5~15mm大の片岩を全体に含む、5mm以下の白色・黒色礫を含む)	良
3	図版17	形象埴輪 基部	南西トレンチ	—	内外両面ともナデ調整を施す。	内・外)7.5YR7/6 橙色~ 10YR7/4 にぶい黄橙色	密(3mm以下の白色・黒色の 礫、砂粒を含む)	良
4	図版17	須恵器 環蓋	羨道内 (第1・2閉塞間) 埋土上層	口径 15.2cm 残存高 4.95cm 残存率 30%	天井部はやや丸く、口縁部との境は不明瞭である。外面は天井部の1/2を回転ヘラケズリ、残りを回転ナデで調整する。端部は丸くおさめる。内面はヨコナデにより調整を施す。ロクロ回転方向は左。	内・外)2.5Y8/1 灰白色	密(2mm以下の黒色砂粒、 1mm以下の白色砂粒を全体 に含む)	軟
5	図版17	須恵器 甕	石室 攪乱土	口径 15.2cm 残存高 3.9cm 残存率 25%	口縁部から頸部。内外両面ともに自然釉が付着する。内外両面とも回転ヨコナデ調整を施す。外面は口頸部から外反した後、角度を変え上方に開き、端部は内傾する面をつくる。屈曲部外面には凸線をめぐらせ、凸線の上部は斜め方向のヘラ描き文、凸線の下段は縦方向のヘラ描き文を施す。	内)N4/0 灰食 外)5Y6/1 灰色	密(1mm以下の白色砂粒を全体に含む)、内外両面に自然釉付着	良
6	図版17	須恵器 高坏	表採	残存高 6.65cm	くびれ部から脚部。内外両面とも) 回転ヨコナデによる調整を施す。外面底部付近には突帯状の削り出しをもつ。	内)2.5Y6/2 灰黄色、 7.5Y4/1 灰色 外)5Y4/1 灰色	密(1mm以下の白色砂粒を全体に含む)着	良
7	図版17	土師器 高坏	支室内(床面付近) 埋土	口径 11.2cm 残存高 2.4cm 残存率 25%	内外両面ともヨコナデによる調整を施し、外面は部分的にハケメ・指押さえが残る。	内・外)2.5YR5/6 明赤褐色	密(1mm以下の白色砂粒・雲母を全体に含む)	良
8	図版17	弥生土器	墳丘南トレンチ	残存高 6.1cm 残存率 40%	内外両面とも全体的に磨滅気味である。内外両面ともナデ調整を施し、内面上部に指押さえが残る。	内)7.5YR7/6 橙色 外)10YR7/6 明黄褐色	やや軟(4mm以下の白色・透明の礫を全体に含む)、内外面とも表面磨滅	良

第5章 大谷山6号墳

第1節 発掘調査

(1) 調査の概要

大谷山6号墳は、同4号墳・5号墳と同一尾根上にあり、5号墳の北側の標高約86mから約94mの範囲に立地する。後円部を北方向に向けた墳長25mの前方後円墳である。埋葬施設は後円部の中央に構築された横穴式石室であるが、発掘調査の結果、墳丘上には別の埋葬施設として竪穴式石室と箱式石棺が付設されていることが明らかとなっている。

発掘調査では、墳形及び埋葬施設の確認を目的としてトレンチ調査を行った。

トレンチは、横穴式石室及び前庭部にDトレンチを、後円部に1・6・7・8・9・E・F・Hトレンチを、前方部にA・B・B'・C・G・3・4・5トレンチを設定し(図13)、調査の進捗に応じてトレンチを拡張した。

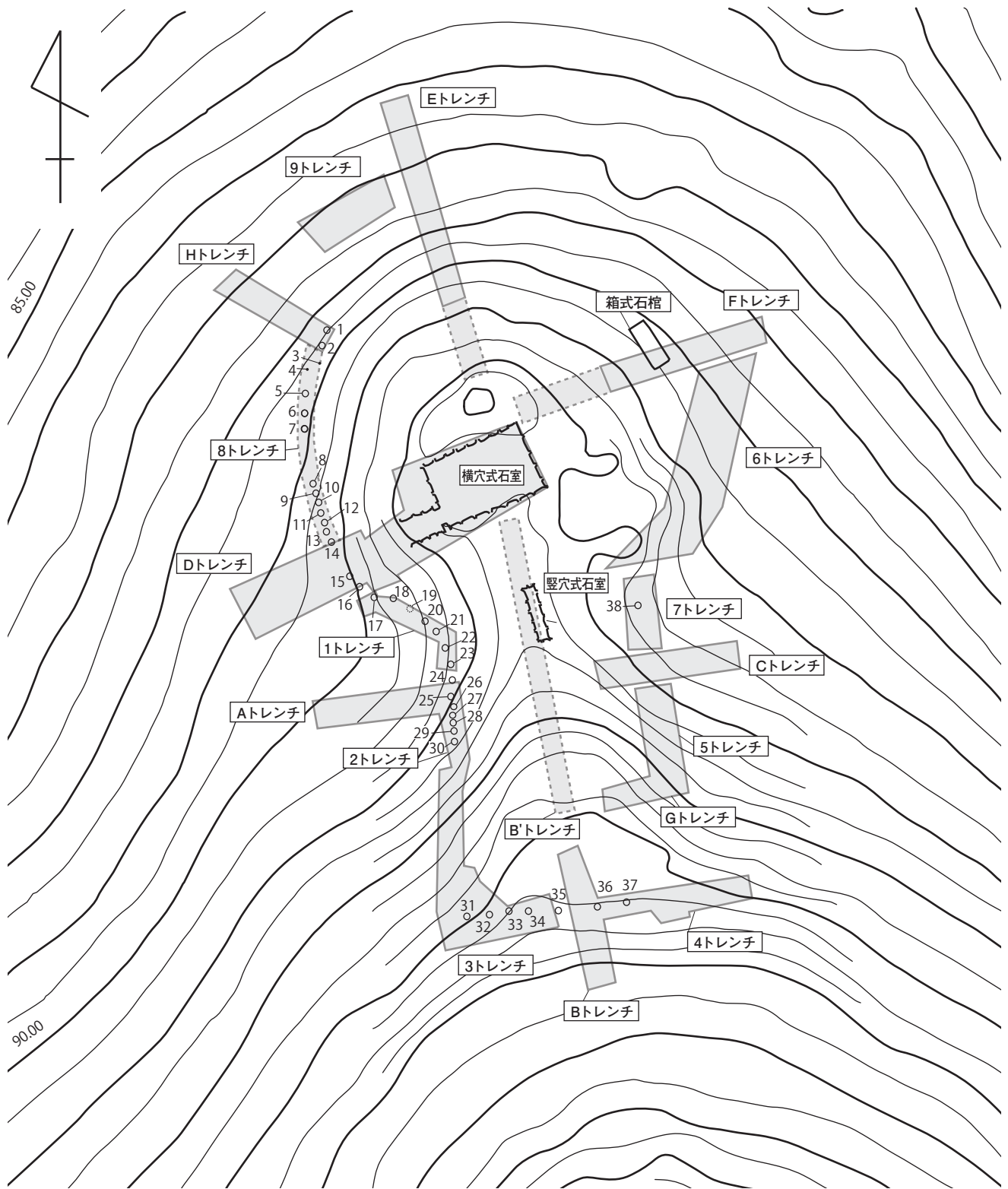
横穴式石室は、調査前から後世の地形改変等により石室の天井石は除去されており、壁面も上部が毀損した状態であった。また、玄室内の奥壁寄りには、石室崩落後の堆積土とともに、石室石材とみられる結晶片岩の割石が石積み状に積み重なった状態で検出されており、石材を二次的に利用した後世の石積みである可能性がある。調査では、Dトレンチを設定して崩落土等を除去して玄室及び羨道を検出し、床面まで掘削した。また、横穴式石室の平面図、立面図や土層断面図等の記録作成を行った。

墳丘の調査では、一部のトレンチで円筒埴輪列及び形象埴輪が散在した状況が検出された。このため、各トレンチの土層断面図を作成後に、墳形確認及び遺物の出土状況の面的な把握を目的として、西側くびれ部、前方部西側の1・2・3・A・Dトレンチ及び前方部東側の5・C・Gトレンチを拡張している。特に西側くびれ部付近の2トレンチ、Aトレンチでは形象埴輪の破片が散在した状況で検出されたため調査区を拡張しているが、このときAトレンチの北側をAN区、南側をAS区、東側をAE区と呼称して、さらに1m方眼のグリッドを設定し任意に番号を付与している(図25・26)。調査区拡張後の遺物の取り上げは、おおむねこのグリッドを基本に行った。遺物については出土状況図を作成し、基本的にはすべての遺物の取り上げを行っている。

円筒埴輪は、一部のトレンチにおいて基底部付近が樹立した状態で検出された。特に後円部西側からくびれ部、前方部西側と、前方部前端で比較的良好な状態で検出された。このほか、後円部北東側と東側くびれ部でも円筒埴輪が一部で検出された。これらの円筒埴輪列等については、調査時において個体識別のために各々の円筒埴輪に記号を付与している。ただし、調査時の記号はアルファベットや算用数字、イ・ロ・ハなど様々であったことから、煩雑さを回避するために、本報告においては改めて統一した個体識別番号として1号から40号までを付与している。両者の対応については、遺物観察表に記した。

墳丘主軸上に設定したB'トレンチでは竪穴式石室が確認されたため、当該範囲を東側へ拡張し、竪穴式石室の調査及び平面図・立面図等の記録作成を行った。

同様に、Fトレンチにおいても箱式石棺の南端部が確認されたため、その全容を把握する目的で調査区を北側へ拡張し、箱式石棺の調査及び平面図の作成を行っている。



- トレンチ**
 ・ 8トレンチ及び、B'トレンチの調査区範囲は、土層断面図等を基に破線で復元した。
 ・ 1・2・3・A・Dトレンチ及び5・C・Gトレンチは、調査最終段階において、東西くびれ部から前方部の墳形確認を目的として図示範囲よりも調査区の拡張を行っている。またFトレンチ及びB'トレンチは埋蔵施設の確認を目的として調査区の拡張を行った。しかし、その正確な範囲は不明であるため本図では明示していない。



円筒埴輪 (数字は検出時の個別番号を示す)

図 13 大谷山 6 号墳 トレンチ配置図 (S=1/200)

(2) 墳丘

後円部 後円部西側に設定したH・8トレンチで、樹立した円筒埴輪が検出された。これらの円筒埴輪については、便宜的に1号から14号の番号を付与したが、このうち3号と4号は原位置を保っていないものと考えられる(図14)。これらは後円部を圍繞する円筒埴輪と推定され、樹立が確認されなかった範囲においても本来円筒埴輪が樹立していた可能性がある。

後円部の北側に設定したEトレンチは、長さ9.9mの調査区である。墳丘は、土層断面図(図19)より、岩盤(4層)上に盛土層(3層)が堆積しており、盛土層はその土質から褐色土層(A層)、赤褐色土層(A'層)、暗褐色土層(B層)、灰褐色土層(C層~F層)、灰黒色土層(G・H層)等に細分される。このうち褐色土層(A層)、赤褐色土層(A'層)、暗褐色土層(B層)は互層に堆積する状況が確認され、調査区南側における堆積の厚さは約1.6mである。4層の地山(岩盤)は、南側へ標高を上げて傾斜するが、調査区北端から約2.9mの位置で傾斜変換点を確認でき、以南は傾斜が徐々に緩やかになる。また、調査区北端から約3.3mの位置より南側で盛土層(3層)の堆積が認められるが、約4.1mの位置で盛土層(3-4層)上面が大きく標高を上げることから、この地点が墳丘裾と考えられる。

後円部の東側に設定したFトレンチは、長さ9.0mの調査区である。盛土層(3層)は、Eトレンチと同様に、褐色土層(A層)、赤褐色土層(A'層)、暗褐色土層(B層)が互層に堆積し、下部は地山・岩盤の削土層(X・Y層)が堆積する状況が確認される。トレンチ西側では3層のうち褐色土層(A層)、赤褐色土層(A'層)、暗褐色土層(B層)が水平に堆積し、かつ西端で横穴式石室の裏込めが検出されており、石室構築に伴う盛土堆積の状況が確認される。また、調査区東端より約1.8mの位置で地山(4層)の傾斜変換点が認められ、以西は盛土層(3層)が堆積することから、墳丘裾とみられる。盛土層(3層)の上面は、墳丘裾から西側へ傾斜して標高を上げるが、トレンチ東端より3.1mの位置で傾斜変換点が認められ、幅0.9mの範囲で3層上面が平坦面状を呈している。この平坦面は、後円部の墳丘テラスに相当する可能性が高い。その標高は89.2mである。

なお、Fトレンチでは、調査区東端より3.5m付近の北壁側で、後述する箱式石棺の南端が確

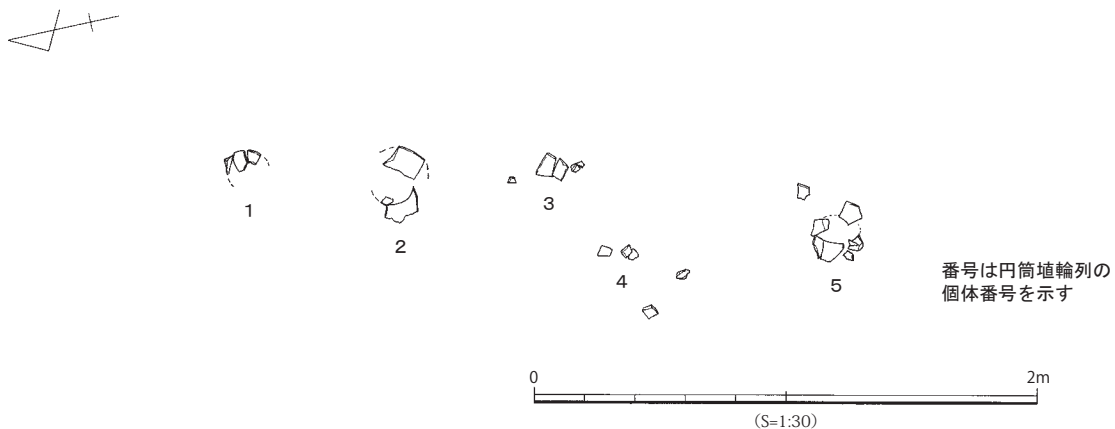


図14 大谷山6号墳 後円部西側円筒埴輪列平面図 (S=1/30)

認められたことから、調査区を北側へ拡張した。また、箱式石棺の北側付近では、円筒埴輪が確認されており（図15）、39号・40号としたが、樹立していないものと判断された。

後円部墳頂は、E・Fトレンチで3層（盛土層）の上に攪乱土とされる1層が厚く堆積していることから、墳頂部が後世の地形改変により大規模な削平を受けているものと推定される。また、Fトレンチで確認された横穴式石室残存部の上面が、3層上面の標高に近似することから、攪乱土である1層の堆積以前に、石室が墳丘とともに削平され、損壊を受けた可能性が高い。なお、後円部墳頂では表土層より形象埴輪が出土し、また横穴式石室攪乱土からも円筒埴輪や形象埴輪が出土していることから、墳頂部では古墳築造時に埴輪が樹立された可能性が高い。

以上の所見から、後円部の平面形態は以下のように復元される（図47）。検出された円筒埴輪列から復元される直径は約13.8mであり、この円周はFトレンチ土層断面より想定される墳丘テラスの位置と合致する。したがって、後円部には墳丘テラスの外縁に沿って円筒埴輪列が樹立していた可能性が高い。また、復元される円筒埴輪列の円周の中心点から、E・Fトレンチで確認された墳丘裾までの距離は、ともに約8mと一致することから、復元される後円部の直径は約16mと考えられる。

以上より、後円部は墳丘テラス上に円筒埴輪列が樹立する2段築成の構造であると考えられる。この円筒埴輪列は前方部へ連続し、墳丘を圍繞していたとみられる。

西側くびれ部 西側くびれ部に設定した1トレンチや、後円部西側のDトレンチ、前方部西側のAトレンチ・2トレンチにおいても、樹立する円筒埴輪列が検出された。これらの円筒埴輪については、15号から30号の番号を付与した。円筒埴輪は、15号より21号までが後円部に、22号から30号までは前方部に樹立されている。なお、19号は樹立した円筒埴輪が未検出であるが、調査時にはその推定位置が平面図上に破線で示され、番号が付与されていたことから、本報告においても同様の取り扱いとした。

円筒埴輪列は、15号から18号までは後円部の円周上に配置するが、くびれ部付近の19号か



図15 大谷山6号墳 後円部北東側円筒埴輪平面図 (S=1/30)

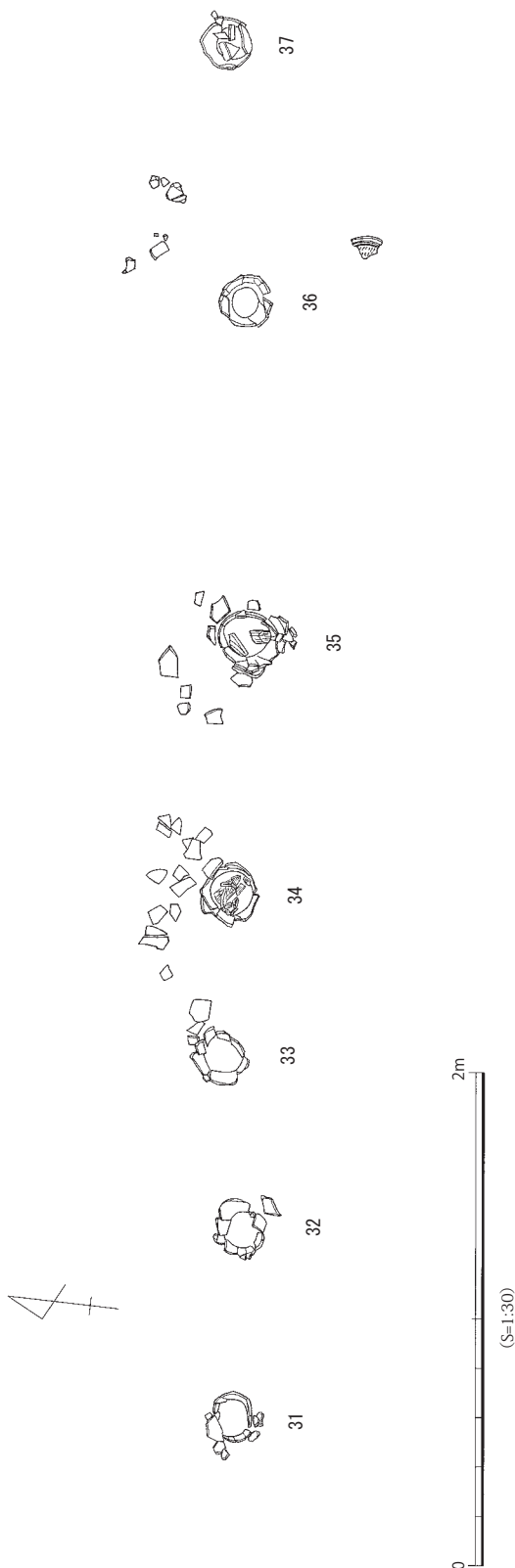


図 17 大谷山 6 号墳 前方部前端 円筒埴輪列平面図 (S=1/30)

ら 23 号までは外側へ開いて弧状に配置し、前方部の 24 号から 30 号までは前方部前端に向かって直線上に配置する。また、16 号では基部とともに同一個体とみられる朝顔形埴輪の口縁部が出土しており (図 37-93・94)、朝顔形埴輪が樹立されていた可能性が高い。したがって、円筒埴輪列には、普通円筒の間に朝顔形埴輪が組み込まれ樹立していたものと考えられる。

また、13 号から 21 号の円筒埴輪列付近には、10cm から 40cm 大の結晶片岩の割石が散乱した状態で検出された。その性格は明らかではないが、出土位置より墳丘盛土中の石材が、調査時の掘削による盛土除去によって検出された可能性が高く、葺石等の外表施設ではないと考えられる。

前方部西側に設定した A トレンチは、長さ 6.3 m のトレンチである。トレンチ東端より 1.5 m の地点では、流土と推定される 3 層の直下で円筒埴輪 24 号が検出された。円筒埴輪は盛土層と考えられる岩盤掘削土 (5 層) 中に据え付けられている。この円筒埴輪よりも西側は地山 (岩盤) (8 層) が標高を下げ傾斜すると推定され、東側は地山 (岩盤) の傾斜がやや緩やかで、上部に盛土層 (7 層) が堆積する。4 層の性格は明らかではないが、A トレンチの南側へ拡張した調査区では 7 層上面付近で形象埴輪片が散在していると考えられることから、4 層は流土である可能性が高い。盛土層である 5・7 層の上面は、やや傾斜が緩やかであること、円筒埴輪列の東側に位置するという位置関係から、前方部の墳丘テラスに相当する可能性が高い。

なお、西側くびれ部では、前述のように円筒埴輪列より西側は地山 (岩盤) が標高を下げ傾斜する状況と、墳丘測量図では後円部から前方部付近の等高線はくびれ状を呈しており地形の高まりなどは認めることができないことから、造り出し等の施設の存在を想定しうる積極的な情報を得ることはできなかった。

西側くびれ部では、円筒埴輪 20 号から 25 号

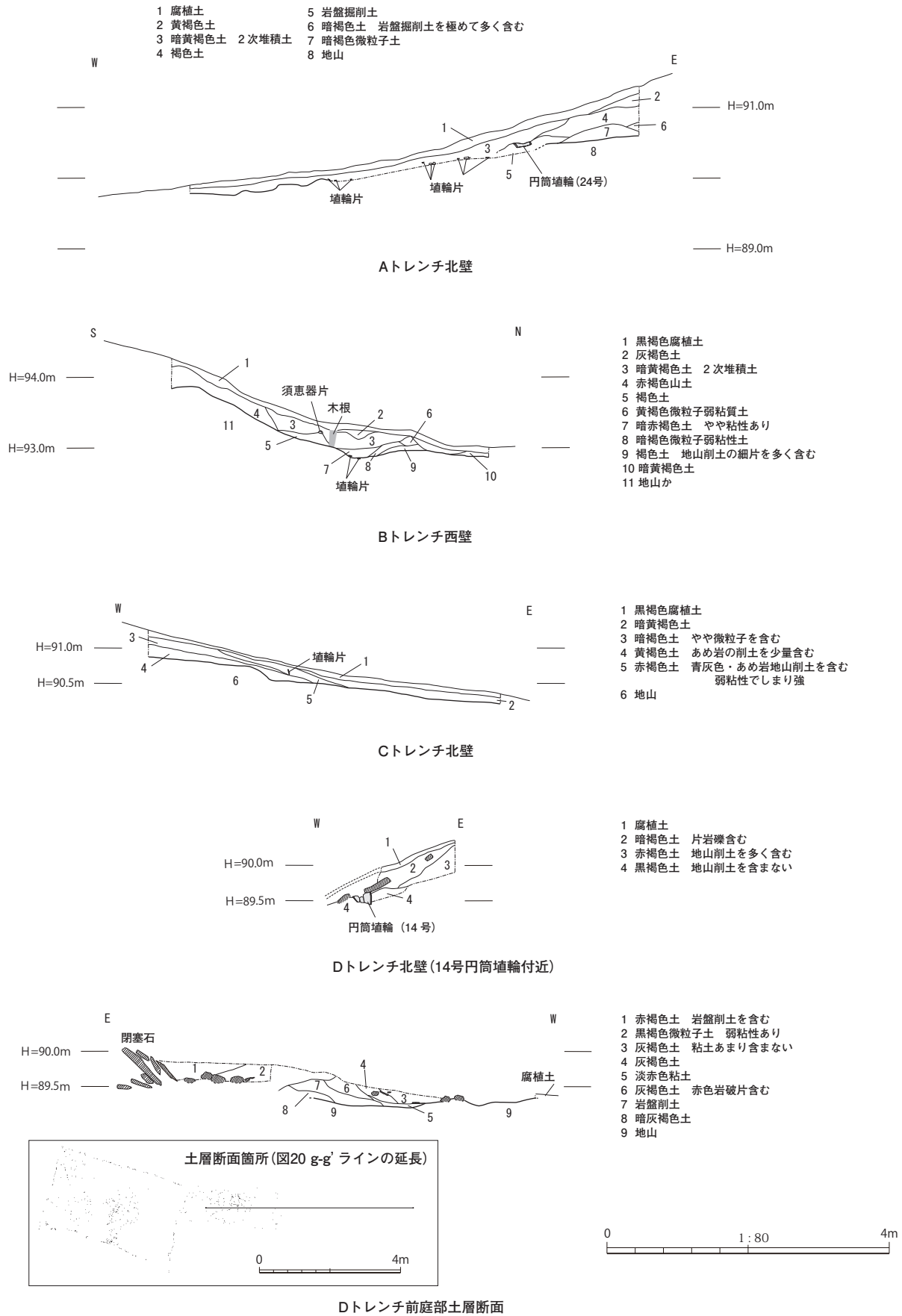


図 18 大谷山 6 号墳 調査区土層断面図(1) (S=1/80)

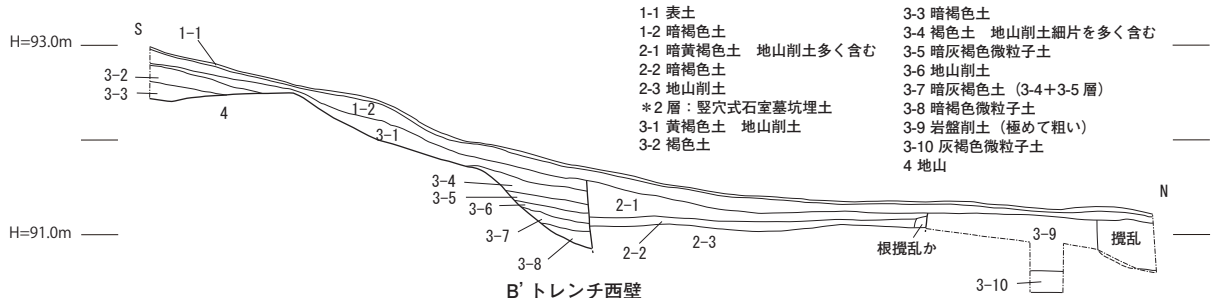
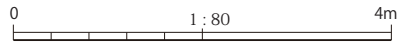
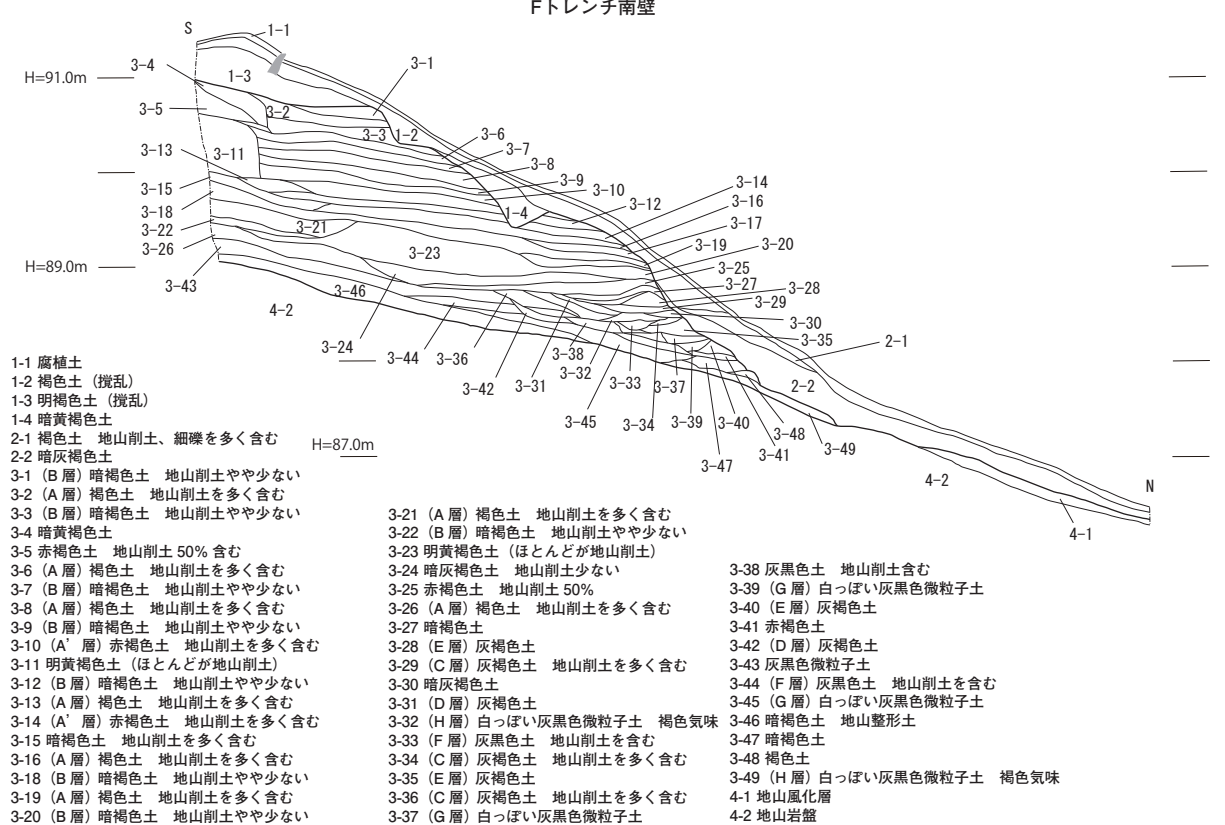
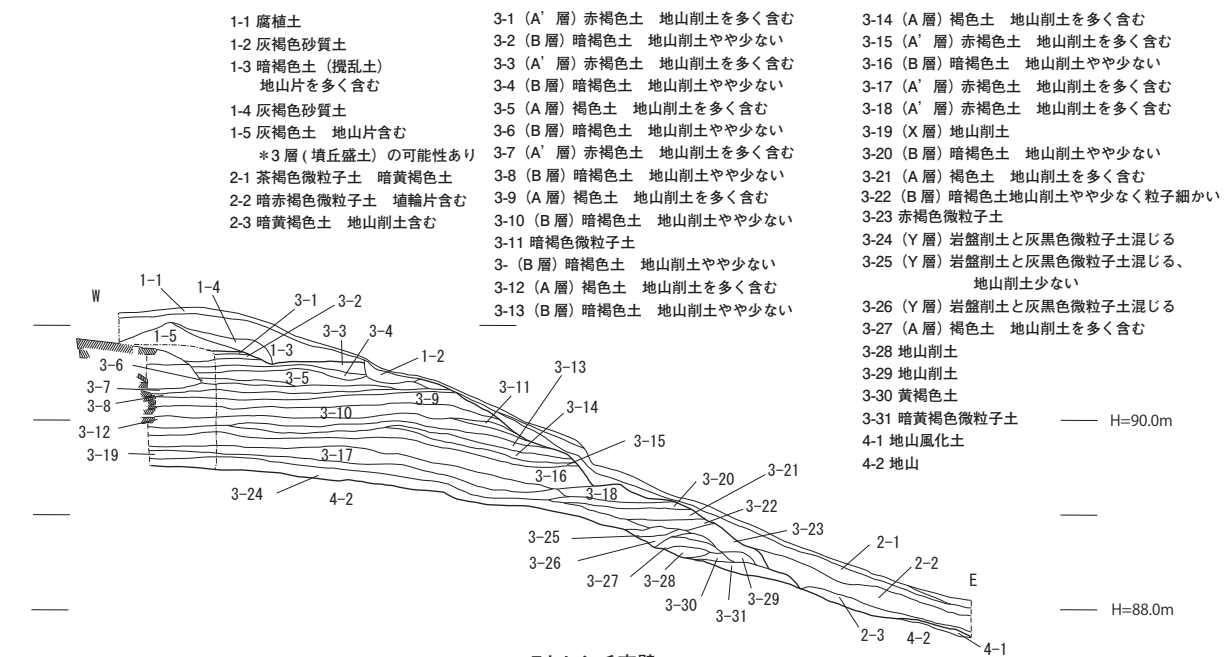


図 19 大谷山 6 号墳 調査区土層断面図(2) (S=1/80)

より西側で、東西約 4 m、南北約 4 m にわたり多数の形象埴輪の破片が散在した状態で検出された。また、円筒埴輪 20 号・21 号付近とその西側においては、須恵器の甕、高杯等の破片が東西約 4 m、南北約 0.5 m にわたって分布する状況が確認された。ただし、これらの形象埴輪及び須恵器は、樹立した状態のものは確認されていない。

さらに、円筒埴輪 25 号から 30 号よりも東側の範囲において、調査区の範囲内で形象埴輪片が出土した。当該範囲は、前述したように前方部の墳丘テラスと考えられる。

形象埴輪の出土状況の詳細は第 2 節で述べるが、同一個体の広範囲にわたる接合関係が認められ(図 25・26)、特に西側くびれ部と墳丘テラスの間で出土した破片相互の接合関係が複数の個体で認められた。したがって、出土状況から形象埴輪の樹立位置を特定することは困難であるものの、上記接合関係を示す形象埴輪の多くは、墳丘テラスないし墳頂部に樹立していたものが、転落したものである可能性が高い。

前方部 前方部は、前端付近に設定した 3・4 トレンチ及び B トレンチにおいて、前方部西側コーナーから墳丘主軸よりやや東側の範囲で樹立する円筒埴輪を確認した。これら前方部前端的円筒埴輪には 31 号から 37 号の番号を付与した(図 17)。前方部前端的東側では、円筒埴輪の樹立は確認できなかったが、本来は連続して樹立していたものと推定される。また、前方部東側くびれ部の 7 トレンチでは、樹立する円筒埴輪が 1 基確認され、38 号の番号を付与している。

墳丘主軸上の前方部前端付近に設定した B トレンチは、長さ 4.5 m の調査区である。土層断面では、トレンチ北端より約 1.9 m の地点で傾斜変換点の確認され、墳丘裾である可能性がある。ここより以南は、大谷山 4 号墳に向かって南側へ標高を大きく上げる地形となる。

後円部南側から前方部墳頂付近に設定した B' トレンチは、墳丘主軸上に設定した長さ 10.5 m のトレンチである。後円部に位置するトレンチ北端は標高 91 m で、そこから南へ約 4 m までは平坦面状を呈するが、トレンチ中央より前方部南側へ向かって緩やかに標高を上げ、トレンチ南端では標高 93.1 m を測る。B' トレンチでは、後述するように表土である 1 層の直下で竪穴式石室の墓坑の堀方が検出され、石室は天井部が欠失した状態であったことから、後円部南側斜面から前方部墳頂平坦面は後世の削平を受けており、古墳築造時の形状はとどめていないと考えられる。

以上から、樹立する円筒埴輪列と、B トレンチで確認された傾斜変換点を墳丘裾として復元される前方部の平面形態は以下のとおりである。前方部長は、くびれ部から前方部前端までの長さが墳丘主軸上で約 10 m であり、前方部前端的幅は 10.6 m である。前方部前端的円筒埴輪列と墳丘裾は、墳丘主軸に対して直交せず、やや南へ振れて斜交すると考えられる。前方部は後円部から連続して円筒埴輪列が圍繞するものと考えられる。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は、後円部の中央やや南寄りに横穴式石室が、後円部東北側に箱式石棺が、後円部から前方部に至る墳丘主軸上に竪穴式石室が各々構築されている。

横穴式石室(図 20~22) 横穴式石室は、後円部の南西方向に開口する。また、石室の主軸は墳丘主軸には直交せず、約 10 度南側へ振れる。前述のように後世の地形改変を受け天井石は除去されており、石室内部も石室崩落後の堆積が確認され攪乱を受けていた。この攪乱土を除去した結果、玄室では標高 89.3 ~ 89.45 m 付近で円礫が検出され、床面を確認した。

横穴式石室は、玄室と、内側に突出した玄門部、羨道から構成され、奥壁からみて右側に袖部

をもつ右片袖式の構造である。石室の法量は、玄室長 3.83 m、奥壁幅 2.38 m、右袖部 1.60 m、玄門幅 0.66 m、羨道右側壁 1.34 m、左側壁 1.32 m である。羨道は、その主軸が玄室の主軸とは平行せず、玄室の主軸に対して約 13 度南側へ振れる特徴をもつ。

玄室は、結晶片岩の割石を小口積みにして構築している。天井石を含む上部が欠失しており、残存高は奥壁寄り約 1.7 m である。左右の壁の傾斜は、床面からの高さ 1.1 m までは右側壁 88 度、左側壁 87 度で、1.1 m 以上では左側壁で 67 度、右側壁は土圧により変形しており不明である。奥壁の傾斜は、床面から高さ 1.1 m では 84 度で、1.1 m 以上では 70~73 度の角度で持ち送っている。

玄室の側壁には、棒状の結晶片岩による突起石を 3 カ所で確認した。右側壁では 2 カ所が確認され、奥壁から 0.8 m に位置する突起石は (e-e' ライン)、床面からの高さ 0.79 m、突起部の壁面からの長さは 0.11 m である。奥壁から 1.6 m の位置する突起石は (f-f' ライン)、床面より 0.78 m の高さで、突起部の長さ 0.09 m である。左側壁では奥壁から 1.3 m の位置で 1 カ所確認され (d-d' ライン)、床面からの高さは 0.8 m、突起部の長さは 0.1 m である。以上から、確認された 3 カ所の突起石は、床面からの高さや、壁面からの突起部の長さがほぼ一致する特徴をもつ。

また、玄室の石材では、部分的に赤色顔料が残存していた。両側壁及び奥壁、前壁で確認され、その付着範囲は図 22 に示すとおりである。

前壁のうち玄門部北側の石積みは主軸に直交して小口を向け、かつ羨道右側壁よりも内側に突出させている。また対になる玄門部南側の石積みも、羨道左側壁よりも内側に小口を突出させた構造である。この玄門は、岩橋型横穴式石室の玄室前道に相当する部分と考えられるが、その長さは左側壁側で 0.3 m、右側壁側で約 0.32 m と短い。また、玄室前道基石も明確ではなく、床面に幅 62cm、長さ 15cm、高さ 9cm の梱石を据えている。なお、玄門には扉石などの施設は確認されなかった。

羨道は玄室に対して短い。羨道には幅 1 m、長さ 1.6 m にわたって閉塞石と考えられる板石が分布しており、一部は前庭部におよぶ。g-g' ラインのエレベーションでは、板石が羨道入口側へ傾斜した様相を示している。

遺物は、玄室床面付近から土師器、須恵器、管玉、鉄刀破片が出土したが (図 21)、攪乱を受けていたために原位置ではないと考えられる。また、上層に堆積した攪乱土からは須恵器、土師器、埴輪が出土した。埴輪と、土器類の一部は後円部墳頂から石室内に転落したものとみられる。**箱式石棺** (図 24) 箱式石棺は、F トレンチ東端より 3.5 m 付近で石棺石材の南側が確認された。このため、調査区を北側へ拡張して調査を行った。

箱式石棺は、盛土の土圧の影響を受けて原形を保っていないため、その正確な法量は不明である。ただし石棺の石材除去後に墓坑が検出されており、その規模は長さ 2.1 m、幅 0.75 m である。

出土状況から、石棺は長さ約 0.3~0.9 m の板石を組合わせて長側石とし、小口側の短側石には長さ約 0.5 m の板石を使用したものと考えられる。また、南西側の長側石とみられる板石を除去した結果、墓坑内で長さ約 0.1~0.4 m の扁平な礫や板石が分布するとともに、一部は石棺内に倒れた状態で検出された。また、北東側の板石の北側にも長さ 0.2~0.4 m の扁平な礫や板石が検出された。これらは、側石を支えるための裏込めや、側石の一部や蓋石等と考えられる。箱式石棺の標高は、比較的原位置を保つと推定される南東側の短側石の下部で約 88.70 m、北東側の長側石の下部で 88.74 m である。

遺物は、墓坑の北東壁付近で須恵器小型壺 (160) が出土した。壺の底部付近の標高は 88.74 m であり、位置、標高から本来は箱式石棺内に設置されていた可能性が高い。また、墓坑より南

西へ約 0.25 m の位置では、標高 89.09 m で土師器の椀 (161) が出土した。土師器椀は原位置を保っていないとみられ、出土位置が石棺底面よりも約 0.35 m 上位に位置することから、石棺構築に伴い石棺外の墓坑付近に設置されたものである可能性が高い。

なお、箱式石棺の墓坑の平面位置は、F トレンチ南壁土層断面で確認される墳丘テラス付近に位置する。石棺の所在するトレンチ北壁土層に係る調査記録が不在であるため、石棺の構築過程における墳丘との層位的関係は明らかではない。しかし、石棺側石下部の標高が約 88.7 m であること、また、調査時の F トレンチ南壁土層と箱式石棺の撮影写真などから推測される両者の位置関係 (写真図版 28) から、箱式石棺は F トレンチ南壁土層の 3-25・26 層付近の調査区北壁側で検出されたものと考えられる。このことから、箱式石棺は墳丘テラス付近に墓坑を掘削して、設置されたものと推測される。

竪穴式石室 (図 23) 竪穴式石室は、後円部南側から前方部墳頂の墳丘主軸上に設定した B' トレンチより検出された。

B' トレンチの中央やや北よりの平坦面付近で検出された。当初は石室の西半が検出されたが、その後トレンチの一部を拡張して石室全体の調査を実施した。竪穴式石室の墓坑は、西壁土層断面よりトレンチ北端の 2.4 m から 5.8 m の範囲で検出されている。なお、トレンチよりも北側に位置する横穴式石室の i-i' ラインから、竪穴式石室の墓坑北端までの距離は 3.08 m である。また、石室は表土である 1 層の直下で検出され、天井部は欠失した状態で検出されたことから、後円部から前方部にかけての墳丘が後世の削平を受けたときに、石室の上部が毀損したものと考えられる。

石室下部の残存状態は比較的良好であり、平面内法は、幅 0.45 m、長さ 1.75 m、残存高は 0.35 m である。長側壁と短側壁に結晶片岩の割石を積んで構築している。また、床面は扁平な割石を敷いている状況が確認された。

遺物は、石室の南側で、須恵器の小型壺 (158) が原位置を保ち出土した。壺底部の標高は 90.95 m である。石室外からは、石室南側に接して須恵器の蓋杯 (156・157) がセットで出土した。蓋杯は、杯身の底部の標高で 91.29 m である。須恵器の蓋杯は、竪穴式石室の構築に伴い石室外の墓坑付近に設置・埋納されたものとみられる。

なお、墳丘上における竪穴式石室の構築位置は、墳丘復元図 (図 47) より、前方部墳頂平坦面の後円部寄りであった可能性が高い。

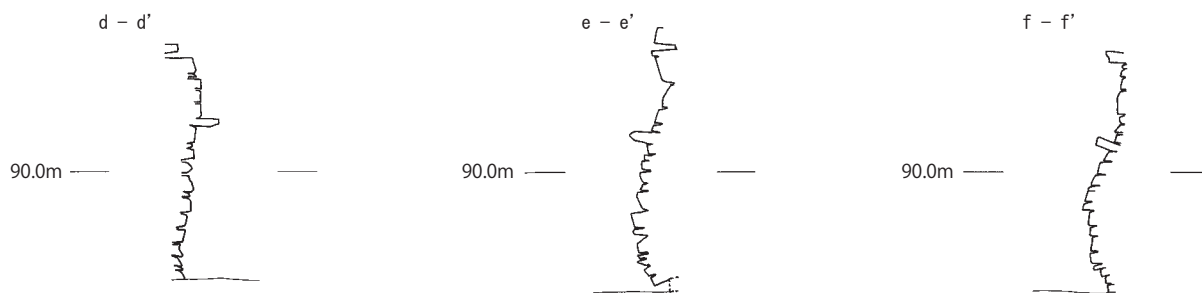
第 2 節 出土遺物

(1) 埴輪

埴輪は、動物埴輪、人物埴輪、家形埴輪、器財埴輪等の形象埴輪と、円筒埴輪が確認された。

形象埴輪と円筒埴輪は、胎土に砂粒を多く含み一部に結晶片岩を含むこと、色調は橙色から明赤褐色を呈するものを主体とすること、全体的に軟質で表面の摩滅が著しい例が多いことなどの共通した特徴をもつ。

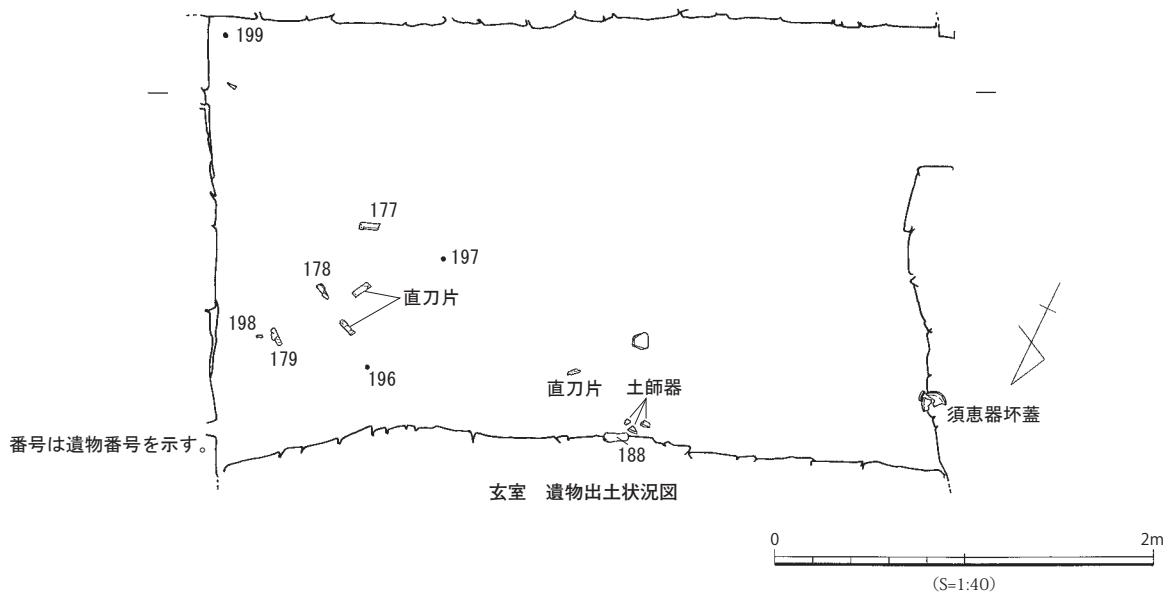
以下、形象埴輪は器種ごとの出土地点の概要について述べた後に、各資料の特徴について記述する。また、円筒埴輪は各調査区で検出された樹立埴輪を主体とする円筒埴輪 (1~40 号) のほか、包含層出土資料の一部について図化・掲載をおこない、これらの全体的特徴について項目ごとに記述する。各資料の調整、胎土、色調、焼成等の諸属性は、別表の遺物観察表にまとめた。



玄室 側壁突起石付近エレベーション図



羨道 閉塞石エレベーション図



玄室 遺物出土状況図

図 21 大谷山 6 号墳 横穴式石室実測図(2) (S=1/40)

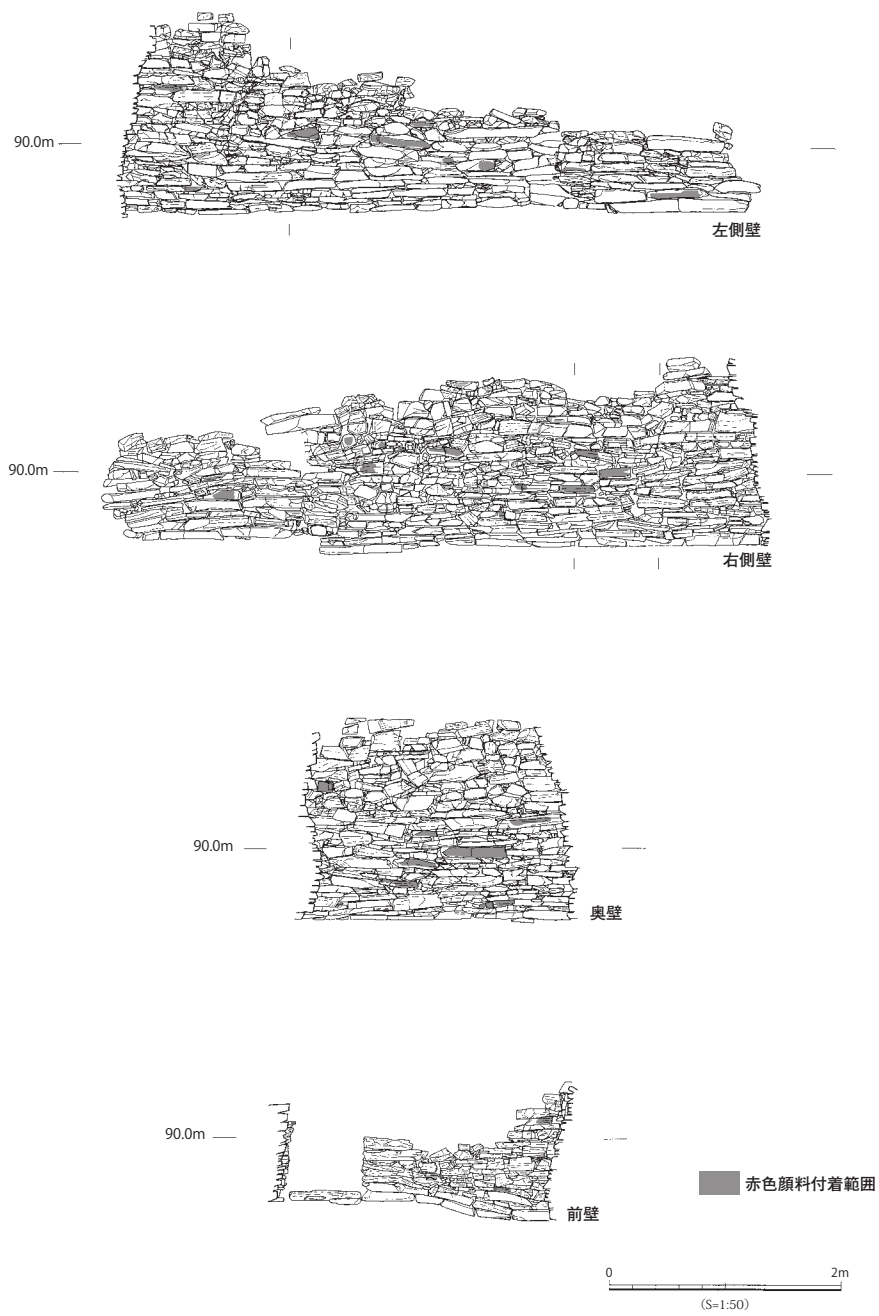


图 22 大谷山 6 号墳 横穴式石室赤色顔料付着範囲図 (S=1/50)

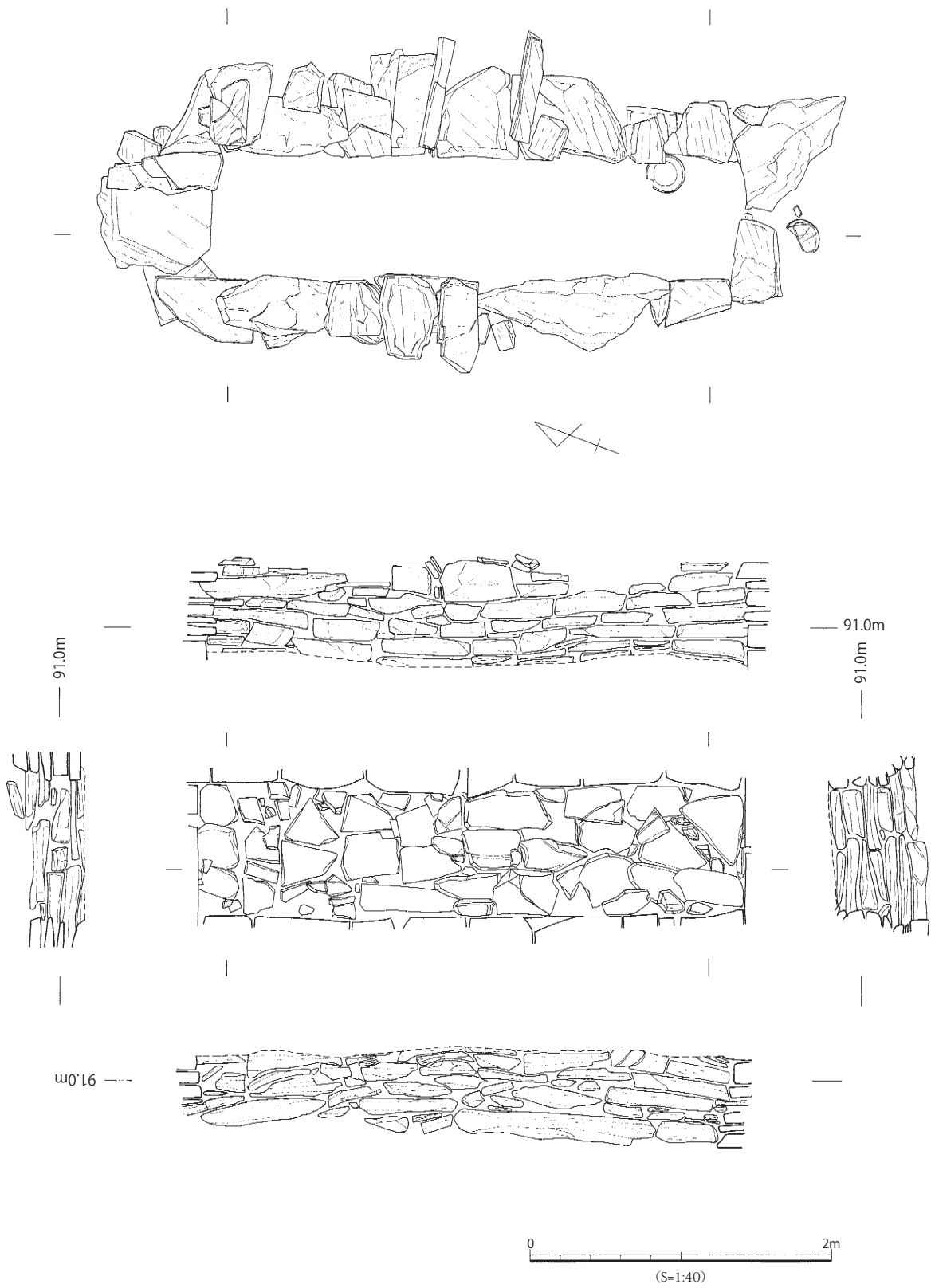
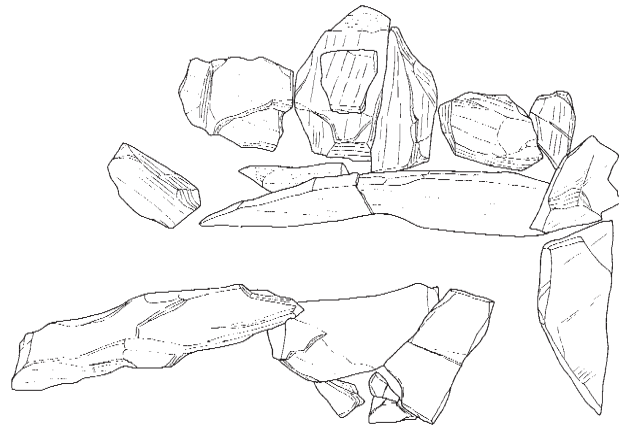
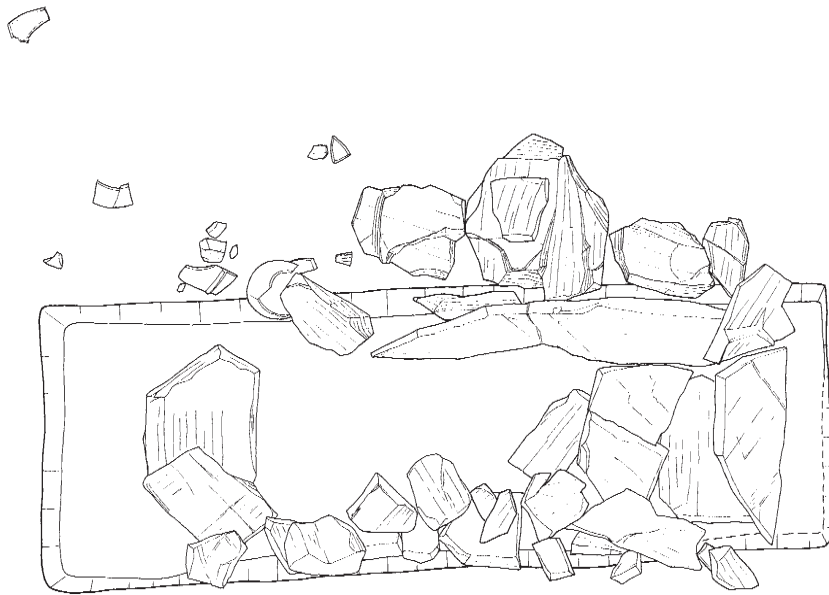


图 23 大谷山 6 号墳 竖穴式石室実測図 (S=1/40)



箱式石棺 検出状況 1



箱式石棺 検出状況 2

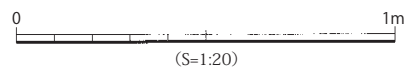


图 24 大谷山 6 号墳 箱式石棺平面図 (S=1/20)

動物埴輪 (図 27~30) 動物埴輪は、頭部やたて髪、鞍、障泥などから馬形埴輪と判断されるものと、種別不明の四足動物が確認される。動物埴輪またはその可能性のある破片は、横穴式石室の攪乱土から出土した5を除いて、前庭部から西側くびれ部、墳丘テラス付近における比較的広範囲にわたって出土した。

このうち西側くびれ部における出土状況は図 25 に示すとおりである。馬頭部 (1) は、前方部の円筒埴輪列東側の墳丘テラス付近 (Atr1 区、AE3 区) で出土し、くびれ部付近 (AN2 区) に分布する破片がこれに接合した。また、たて髪 (2) や鞍 (6) は、墳丘テラス付近 (AE1 区) で出土し、西側くびれ部付近 (Atr5 区、AN2・7・9 区) の破片と接合した。これらは約 1~5 m 離れた破片との接合関係が認められ、墳丘テラスから西側くびれ部の広範囲に散在する状況が確認される。鞍 (7・8) や障泥 (9・10・11) は、西側くびれ部 (AS4・5 区、AN4・7・8・13 区) で出土した。脚部は、同一個体の可能性のある 27 と 28 が墳丘テラス付近 (AS1 区、Atr1 区、AE3 区) を中心に出土した。また、これらと別個体である 23~26 は、西側くびれ部の AN3・8・12・13 区で出土している。

1~19 は馬形埴輪と推定される。1 は頭部で、左耳と目、額の一部、左右の頬の一部が残存する。下顎の先端は欠失する。面繫は頬革の一部が残存し、幅 15~20mm の粘土帯が貼り付けられ表現される。額革は粘土の剥離痕によりその存在が確認できる。また手綱の先端には鏡板が表現される。頭部は、粘土紐を目から鼻先にかけて積み上げた後に、下顎の左右に粘土板を接合して成形される。2・3 はたて髪である。2 は左図が頭部の右側面、右図が左側面とみられる。後方は厚みを増し、かつ端部に剥離痕が認められることから、鞍との接合部の可能性がある。3 は、2 と形態や胎土が類似する。4 はたて髪から延びる手綱付近の部位と考えられる。5 はたて髪の付け根部分と推定される。6~8 は鞍と推定され、胎土の特徴より 6 と 8 は別個体とみられる。9~11 は障泥である。10 は残存部より、脇腹に幅 18.3 cm の障泥が垂下する形態と考えられる。これと胎土の特徴が類似する 9 は、同一個体の対となる部位である可能性がある。一方、色調、胎土が鞍 (6) と類似する 11 は、別個体の障泥と判断される。

馬形埴輪は、頭部 (1)、たて髪 (2・3)、鞍 (8)、障泥 (9・10) は色調や胎土が類似し、同一個体の可能性があるものの、断定は困難である。しかし、色調・胎土より明らかに別個体とみられる鞍 (6)、障泥 (11) の存在から、馬形埴輪は少なくとも 2 個体以上の存在が推定される。

12・13 は馬形埴輪ないし、その他の動物の耳である。14 は部位が不明であるが、粘土帯の表現から馬形埴輪の可能性はある。15 は馬頭部の耳付近の可能性があり、面繫と推定される粘土帯の表現が認められる。ただし、一部に穿孔が認められる点は類例が乏しく、別部位ないしは馬以外の器種の可能性もある。16 は、粘土帯が 4 方向に延びる表現から、尻繫の一部である可能性がある。粘土帯間にヘラ描の沈線が認められる。17 は左側の胸繫の可能性はある。18・19 は動物の尻尾で、馬形埴輪の可能性はある。

20~22 は、馬形埴輪ないしその他の動物で、20 は首から胸付近、21 は胴部から脚の付け根付近、22 は脚の付け根付近と推定される。23~28 は脚部である。23~26 は比較的薄手で脚端部を肥厚させる。25 は底部の直径約 9.2cm で、23・24・26 も 25 に近い直径と推定され、橙色を呈し胎土の特徴も類似することから同一個体の可能性がある。一方、27・28 は、脚端部を大きく肥厚させる形態的特徴や、明赤褐色を呈し胎土の特徴が類似することから同一個体と判断される。

人物埴輪 (図 31~32) 人物埴輪は、腕部、美豆良、袈裟状衣、下裳と推定される資料が確認される。人物埴輪の出土地点については、横穴式石室攪乱土 (29)、箱式石棺付近 (30) から出土した他は、

西側くびれ部から墳丘テラス付近（図 26）で比較的広範囲にわたり出土した。

このうち横穴式石室攪乱土や箱式石棺付近から出土した人物の腕部（29・30）は、後円部墳頂付近に樹立した人物埴輪が転落した可能性がある。西側くびれ部では、腕部（31・33）が墳丘テラス付近（AE1 区、AS8 区）で出土した（図 26）。腕部（34）は西側くびれ部（AN2・3 区）で出土し、墳丘テラス（AE1 区）の破片と接合した。巫女の袈裟状衣（38）は、西側くびれ部（AN8・13 区）で出土し、墳丘テラス（Atr1 区）出土の破片と接合した。また、下裳の可能性がある 37 は、墳丘テラス（AE1 区、AS1 区）からくびれ部（AN2 区、AN8 区）の広範囲にわたる破片が接合している。このように、人物埴輪についても、約 1~5 m 離れた破片間での接合関係が認められ、同一個体が墳丘テラスから西側くびれ部の広範囲に散在している。

29~34 は人物埴輪の腕部である。29・30 は前腕部に相当し、いずれも断面中央に接合用の小孔が穿たれている。29 は掌部に剥離痕が認められ、形状から器物等を持つ表現であろうか。30 は掌の表現から左腕と推定される。他の腕部の資料に比し大型品であることから、力士などの大形の人物を表現した可能性がある。32 は上腕部が中空、前腕部付近が中実となる。掌の表現は簡略化される。31 は動物の尻尾の可能性もあるが、大きさより腕部の可能性が高く、掌の表現は著しく簡略化している。33 は上腕部が中空、前腕部が中実となる。掌に指が作出され、親指の位置から右腕と判断される。34 は肩から腕部にかけての破片資料で、33 と同様に上腕部が中空で、中実の前腕部がつく。掌は指が作出され、形状より左腕と考えられるが、摩滅が著しいために細部の形態が判然としない。33 と 34 は胎土や形態的特徴から右腕と左腕の組み合わせの同一個体の可能性がある。

35・36 は美豆良と考えられる。36 は端部の平坦面に径 7mm の竹管状工具による刺突が認められる。

38 は巫女の袈裟状衣である。筒状の胴部側面に、扁平な粘土帯が断面 U 字状に取り付き袈裟状衣が表現される。37 はスカート状に開いた下裳と推定される。巫女の下裳の表現である可能性がある。

家形埴輪（図 33） 家形埴輪（39~50）は、可能性もある個体も含めて掲載した。家形埴輪の出土地点については、後円部墳頂部からの出土（44・50）や横穴式石室の攪乱土からの出土（41・42・46~49）が多く、西側くびれ部付近の出土（40・45）や前方部東側（5 トレンチ）出土（39）の例は少ない。前者のうち、44 は後円部墳頂と横穴式石室攪乱土の破片が接合したこと、また同一個体の可能性のある 48~50 は、50 が後円部墳頂からの出土であることから、家形埴輪と推定される個体の一部は、後円部墳頂に樹立していた可能性が高い。横穴式石室から出土した破片は、後世の墳頂部の削平時に毀損した石室内に転落したものと推定される。

39 は、器種の特定が難しいが、家形埴輪屋根部の棟木の可能性がある。40~43 は扁平な断面形態と、斜位方向の小孔が穿たれる特徴をもち、屋根部の破片であろうか。44~50 は壁体部から基部の破片と考えられる。44 は基部に粘土貼り付けの痕跡が認められる。48~50 は基部とみられ、内外面に粗いハケメ調整が認められ、形状や胎土より同一個体と考えられる。このうち 48 は、妻側と平側の屈曲部付近と推定される。

器財埴輪（図 34） 器財埴輪は、大刀、蓋、盾ないし石見型埴輪の可能性のある個体が出土した。器財埴輪の出土地点は、西側くびれ部付近（51・56・57）、横穴式石室攪乱土（52・53）、後円部墳頂（B' トレンチ）（55）である。

51 は大刀の盾部と推定される。馬の障泥の可能性もあるが、障泥（9~11）に比して薄く扁平

な形状から大刀の可能性が高いと判断した。また、52・53は、円筒部に短い粘土板が接合する形態から、大刀の盾部の可能性がある。

54~56は蓋の笠部の笠縁付近と考えられる。54は外面にハケ調整後にナデが施され、笠縁の先端は強いヨコナデにより面取りされる。56は小破片であり、馬の鞍との判別が難しい。

57は盾ないし石見型埴輪の形象部と考えられる。にぶい横橙色を呈し、胎土・色調が他の出土埴輪とは異なっている。盾面ないし形象部には、二条一括の沈線により線刻が施される。文様の構成は不明であるが、直弧文である可能性がある。背面には粘土帯の貼り付けによる補強が認められることから、盾面ないし形象部の上部付近と考えられる。

不明形象埴輪 (図35) 形象埴輪のうち、器種の不明な一群を不明形象埴輪として掲載した。

58は馬のたて髪結び飾りないし、家形埴輪の棟木の可能性がある。62~64は、人物埴輪の美豆良や装飾等の一部である可能性がある。65は棒状部に幅11mmの粘土帯が螺旋状に巻き付いており、人物埴輪の美豆良ないし、馬のたて髪結び飾りと考えられる。71は突帯が一条貼り付いており、人物埴輪であると仮定すれば、力士のふんどしの形状に類似する。73は器種不明であるが、やや湾曲する形状で、波状の沈線が一条施される。

円筒埴輪・朝顔形埴輪 (図36~41)

出土した円筒埴輪は、普通円筒と朝顔形埴輪がある。各調査区で出土した円筒埴輪のうち、口縁部形態や調整等の確認できる資料はすべてIV群系埴輪(紀伊型)の特徴をもつ。このことから、墳丘に樹立される円筒埴輪は、IV群系埴輪に限られる可能性が高い。

以下、出土した円筒埴輪にかかる各属性の全体的特徴について記述する。

①器形・法量

円筒埴輪の全体を復元できた個体がなく、器高や突帯の段数等は不明である。円筒埴輪15号として取り上げた91・92は同一個体とみられ、口径と底径から逆台形の器形を呈し、IV群系埴輪の特徴をもつ。底部径は、16~17cmの個体が多いが、17cmを越える個体も複数認められる。口径は復元径で28~31cmの個体がある。

②調整

器面の摩滅が著しく調整等の観察が困難なものが多いが、外面調整は1次調整にタテハケ、ナナメハケを施し、2次調整にヨコハケを施すことを原則とする。ヨコハケは口縁部から胴部にかけて施され、下段突帯よりも下位に及ぶ例(92・111)は少ない。

内面調整は、ユビナデないしナデを原則とし、1次調整のタテハケないしナナメハケを残す例がある。また、口縁部付近でヨコハケを施す例(91・128)が確認される。

③基底部調整

基底部の外面調整は、板状工具によるオサエないしはナデを施すことを基本とするが、1次調整のハケメが残存する例もある。また、78・94・95・97・112等は、倒立して板状工具により押さえたとみられる痕跡が底面に明瞭に認められる。内面調整は、ユビナデが明瞭に認められるものが多く、一部は1次調整のハケメが残存する。

④突帯

突帯の段数や突帯間隔を明らかにできた資料はない。口縁部端部から最上段の突帯までの間隔は、91は6.8cm、119は7.8cmである。底面から下段突帯までの高さは、おおむね約12~14cm前後の一群(92・100・101・102・103・104・112)と、約17~19cmの一群(87・90・94・98・111)を認めることができる。後者の一群うち、94は朝顔形埴輪である。

下段突帯の断面形態は、明瞭なM字状となるものと、台形状を呈するものがある。

⑤口縁部

口縁部は、端部が肥厚して外側に突出するⅣ群系埴輪（紀伊型）の特徴をもつ。これらは、端部内面をヨコナデによりわずかに凹ませ、外面を強いヨコナデにより外方へ突出させることを原則とするが、内面のヨコナデは顕著ではなく外方のみ突出させた例（132・133）もまれに認められる。

⑥胎土・色調

色調は、橙色～明赤褐色を呈している。胎土は5mm前後の結晶片岩や、赤色酸化した砂粒を含むものが多い。

⑦その他

125・129はヘラ記号が認められる。一条の沈線が確認でき、波状を呈すると推定される。

(2) 土器類

須恵器及び土師器は、横穴式石室、竪穴式石室、箱式石棺から出土した。そのほか、墳丘の各調査区より須恵器が出土している（図42～44）。

139～155は横穴式石室からの出土である。このうち139～149、151～155は玄室の攪乱土層から、150は羨道の攪乱土層から出土した。横穴式石室は後世の攪乱を受けたために原位置を保つものは少ないとみられる。また、横穴式石室の攪乱土層からは埴輪片も出土し、後円部墳頂から転落したものと判断されることから、須恵器、土師器についても同様のものを含むと考えられる。

139～150・155は須恵器、151～154は土師器である。139・140は須恵器杯蓋で、139は口径11.8cm、器高は4.4cmで、天井部と口縁部の境は突出し、端部は内傾して凹む。140は口径13.6cm、器高4.6cmで、口縁部端部は内傾して面をもつ。141～145は杯身である。141は口径10.3cm、器高5.4cm、142は口径10.5cm、器高5.3cmで、口縁部が内傾して立ち上がり端部は内傾して面をもつ。143は口径12.5cm、器高4.9cmで、口縁部がやや垂直気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。146・147は同一個体の器台である。杯部は口径36.5cmで、外面は上下を3条一組の突線で区画された文様帯に波状文が、またその下部にも波状文が配置する。下半はタタキ成形で、外面に格子タタキ目、内面に同心円状の当て具痕が認められる。147は同一個体とみられる脚部で、脚端部径は28.1cm、残存高18.2cmである。突線を3段配置して各文様帯に波状文を施す。148は高杯の脚部、149は短頸壺である。150は小型壺で、口縁外面に突線を挟み波状文が2段配置する。断面の色調が明赤褐色で、他の出土須恵器と異なる胎土の特徴をもつ。151～153は土師器の椀、154は高杯の杯部である。155の大甕は口縁部、肩部、胴部の破片からなり、図上で復元した。口径は35.6cm、復元高は81.0cm、最大径62.7cmである。口縁部は段を有するが端部は丸くしあげられる。突線で区画された文様帯に波状文が2段配置し、下部はナデ調整である。胴部は外面に格子タタキ、内面に同心円文が認められる。横穴式石室出土の須恵器は、杯身141・142などTK47型式期の型式学的特徴を有するものも一部に認められるものの、おおむねMT15型式期に位置づけることができる。

156～158は竪穴式石室から出土した須恵器である。158は小型壺で、石室内に原位置を保ち出土した。156・157は蓋杯で、石室外から蓋と杯を合わせた状態で出土した。杯蓋（156）は口径13.8cm、器高4.2cmで、突出部は稜をもち、口縁部端部は内傾して面をもつ。杯身（157）は口径11.4cm、器高4.5cmで、口縁部端部は丸くおさめる。蓋杯はTK10型式期の特徴をもつと考えられる。

159~161は箱式石棺から出土した。159は須恵器の杯蓋で、口径13.0cm、器高4.8cmで突出部は稜をもち、口縁部端面は内傾して面をもつ。特徴からMT15型式期に位置づけられる。160は須恵器の小型壺である。161は土師器の椀で、箱式石棺の墓坑付近で出土した。内外面にヨコナデが、外面下部にユビオサエ痕が確認できる。

162~165は、西側くびれ部(図26)から出土した須恵器である。西側くびれ部のうち、AE4区、AN6・7・8区を中心に出土した。162は無蓋高杯の杯部、163は脚部である。特徴からMT15型式期と推定される。164は甕の口縁部破片で、復元の口径は約24cmである。165は器台の杯部片で、突線と波状文が施される。

166は3トレンチより出土し、167は3トレンチとAN区出土の破片が接合した。166は甕の底部で、前方部前端的33・34・35号円筒埴輪列付近から出土した。167は甕の口縁部で、復元口径は22.8cmである。

168~174は、出土した調査区が不明の須恵器、土師器である。168~170は須恵器の杯蓋、171は無蓋高杯、172は小型壺、173は甕、174は土師器の高杯である。

(3) 鉄製品

鉄刀(175~181) 鉄刀片は7点出土した。このうち切先に相当する破片が2点存在するので、2点以上の鉄刀が副葬されていたことは確実である。

175は切先で、刃部幅2.6cm、現存長7.6cm、厚さ55mmを測る。断面形が楔形を呈する平造りの刃部である。176は幅3.1cm、現存長5.3cm、厚さ6mmをはかる。断面形が楔形を呈する平造りの刃部である。177は幅2.8cm、現存長12.8cm、厚さ8mmを測る。断面形は楔形を呈する。保存処理がなされているが、錆膨れのため本来よりもの厚くなっている可能性がある。178は幅2.2cm、残存長8.7cm、厚さ55mmを測る。端部を欠くものの、先端に向かい刃部幅が狭くなっていることから、切先に近い部分とみられる。179は幅2.35cm、現存長18.3cm、厚さ6mmを測る。断面形が楔形を呈する平造りの刃部である。180は幅2.35cm、現存長8.3cm、厚さ5mmを測る。断面形が楔形を呈する平造りの刃部である。181は茎部の破片である。残存長11.8cm、幅1.5cm、厚さ3.5mmを測る。断面形は長方形を呈するが、関部付近ではわずかに腹側が薄くなる。平面形は、茎尻に向かってわずかに幅が狭くなる。目釘孔は、X線画像の観察から茎の中央に2つ穿たれている。茎部の表面には、巻き付けられていた樹皮が一部付着している。

鉄刀は刃部幅が2.6~3.1cmの一群(175・176・177)と幅2.2~2.35cm(178・179・180)の一群に分けられるが、それぞれが同一の個体であるかは不明である。

鉄銚(182~184) 鉄銚片は3点出土した。

182は切先で、残存長6.6cm、幅1.5cm、厚さ1.2cmを測る。刃部の断面形状は厚みが大きい菱形を呈し、刃部中央には鑄が形成される。錆膨れにより本来よりも厚くなっている可能性がある。

183は刃部から袋部にかけての関部である。残存長5.4cm、刃部幅1.9cm、刃部厚0.8cm、関部幅2.4cm、袋部幅1.6cm、袋部厚1.3cmを測る。刃部は厚みが大きい菱形を呈し、刃部中央には鑄が形成される。関は浅く緩やかに落ちる形態を持つ。袋部は断面円形で、関から袋部端に向かって緩やかに広がるものを見られる。

184は袋部の一部で、残存長3.8cm、断面厚0.3cmを測る。断面は円形で、全体の形状は関から袋部端に向かって緩やかに広がるものとなる。袋部の内部には長柄に由来する木質が残存する。

馬具(189~195)

①**責金具** (193・194) 責金具は2点出土している。

193は、全長3.7cm、幅0.4cm、厚さ0.2cmを測る。194は、端部を欠く残存長1.8cm、幅0.4cm、厚さ0.2cmを測る。

②**革帯金具** (189~191) 3点出土し、全て鉄製である。

189は爪形で、幅2.1cm、長さ2.4cm、厚さ1.5mmを測る。鋌は3箇所のうち1つを欠く。190は鉄斧に錆着した個体である。爪形で、幅2.1cm、長さ2.3cm、厚さ1.0mmを測る。3箇所に鋌を打つ。191は、一部を欠く現存長1.5cm、幅2.4cm、厚さ2.5mmを測る。保存処理がなされるが錆膨れのため本来より厚い可能性がある。鋌頭を欠いた鋌脚が1箇所で確認される。

③**吊金具** (192) 方形部は幅2.4cmで、立間部に通す鉤は幅0.5cmである。方形部上半が欠損しているが、現状で2箇所の鋌を確認した。

④**鉸具** (195) 断面は円形を呈する棒状の鉄製品で、緩やかにカーブする形状から鉸具片と考えられる。

鉄鏃 (185・186)

185は鏃身部片で、残存長4.75cm、身部幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。断面は三角形を呈し、中央に鑄を持つ。186は鏃身部片で、残存長3.35cm、身部幅1cm、厚さ0.3cmを測る。断面は半円から三角形を呈し、中央にわずかに鑄が認められる。

U字形鍬先 (187) 187は刃幅2.8cmを測る。全体の形状はU字形を呈し、着柄部に溝を持つ。

鉄斧 (188) 188は、肉厚の刃部をもつ袋状鉄斧である。保存処理がなされているが、錆膨れにより本来より厚くなっている可能性がある。刃部の先端の一部を欠く。全長12.5cm、袋部幅3.8cm、袋部厚6mm、刃部幅1.7cmである。明確な肩は見られず、袋部側縁は直線的で、刃部側面は緩やかに広がる。袋部の横断面はやや隅丸方形に近い楕円形である。袋部の折り返しは左右対称で、密着している。なお袋部には、帯金具(190)1点が錆着している。

(4) 装身具

管玉 (196~200) 管玉は5点出土している。いずれも碧玉製である。色調は4点が深緑色、1点(200)が淡緑色を呈する。全長21~23mm、幅8.5~9mmの一群(196~198)と、全長14.5~17mm、径が6mmの一群(199・200)に分けられる。

196は完形で全長21.0mm、径8.5mm、孔径は上面2.5mm、下面0.5mmを測る。片面穿孔で、上面と下面の孔径の差が大きい。

197は完形で全長22.0mm、径9.0mm、孔径は上面2.5mm、下面1.5mmを測る。片面穿孔である。

198は完形で全長23.0mm、径9.0mm、孔径は上面2.0mm、下面0.5mmを測る。片面穿孔で、上面と下面での孔径差が大きい。

199は完形で全長14.5mm、径6.0mm、孔径は上面2.0mm、下面1.0mmを測る。片面穿孔で、穿孔開始面と貫通面との孔径の差は大きい。上面の中央からやや側面側にずれた位置から穿孔し、下面では貫通した孔が側面にかかっている。

200は完形で全長17.0mm、径6.0mm、孔径は上面2.0mm、下面1.5mmを測る。下面には孔が2つあり、1つは上面からの穿孔とつながり貫通し、1つは下面から2mmで穿孔が終わっている。上面穿孔した後、下面からも穿孔を行った際の痕跡と考えられる。

いずれの管玉も両端面には細かな研磨痕が観察される。

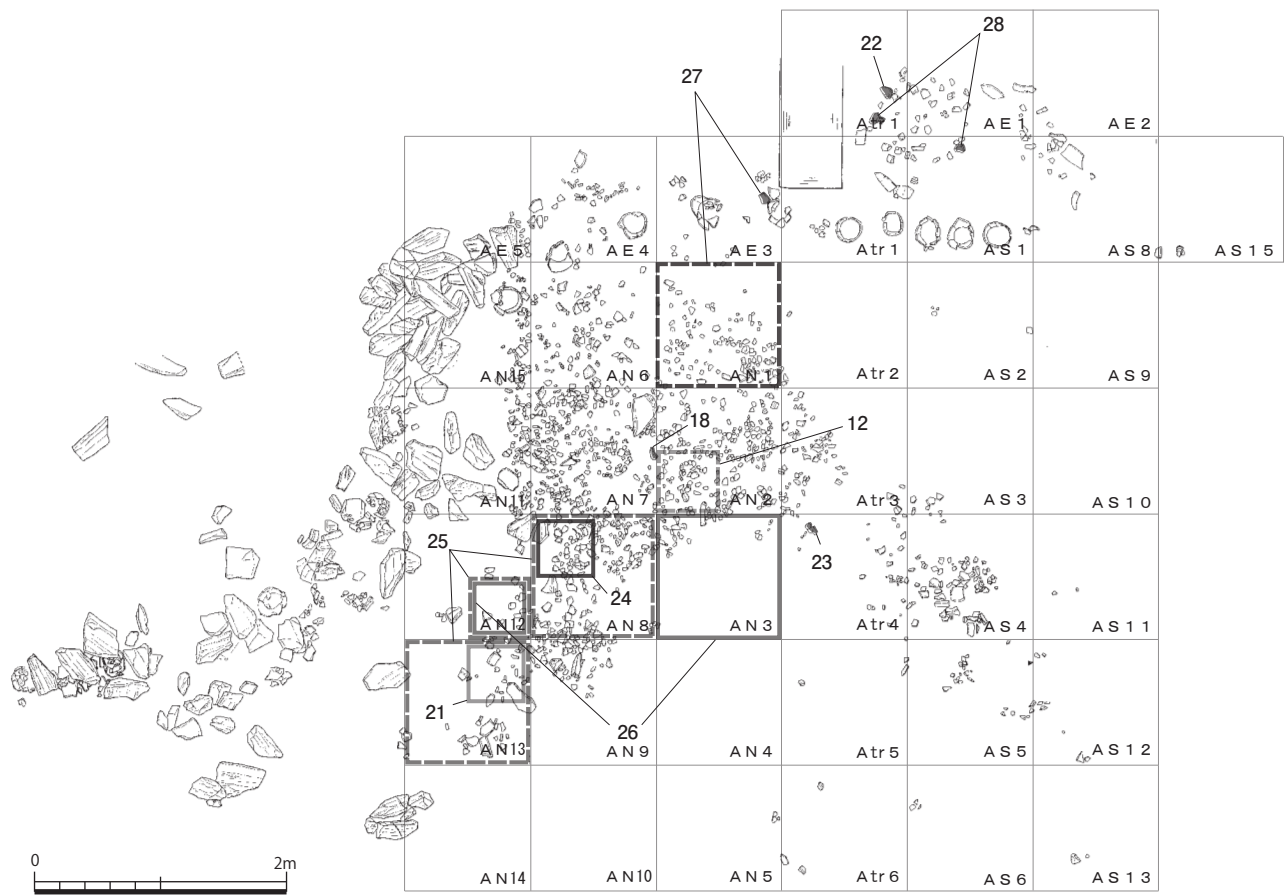
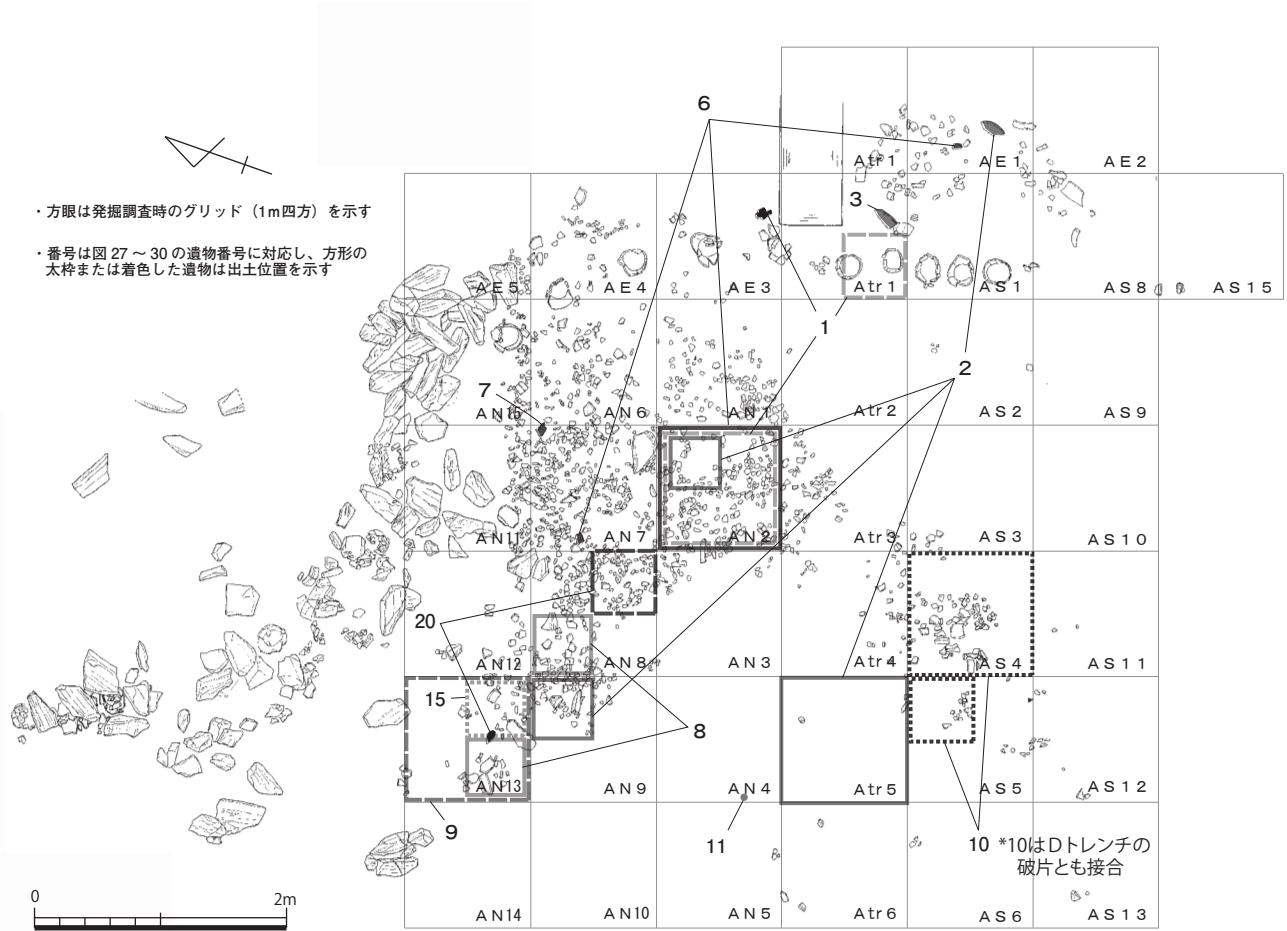
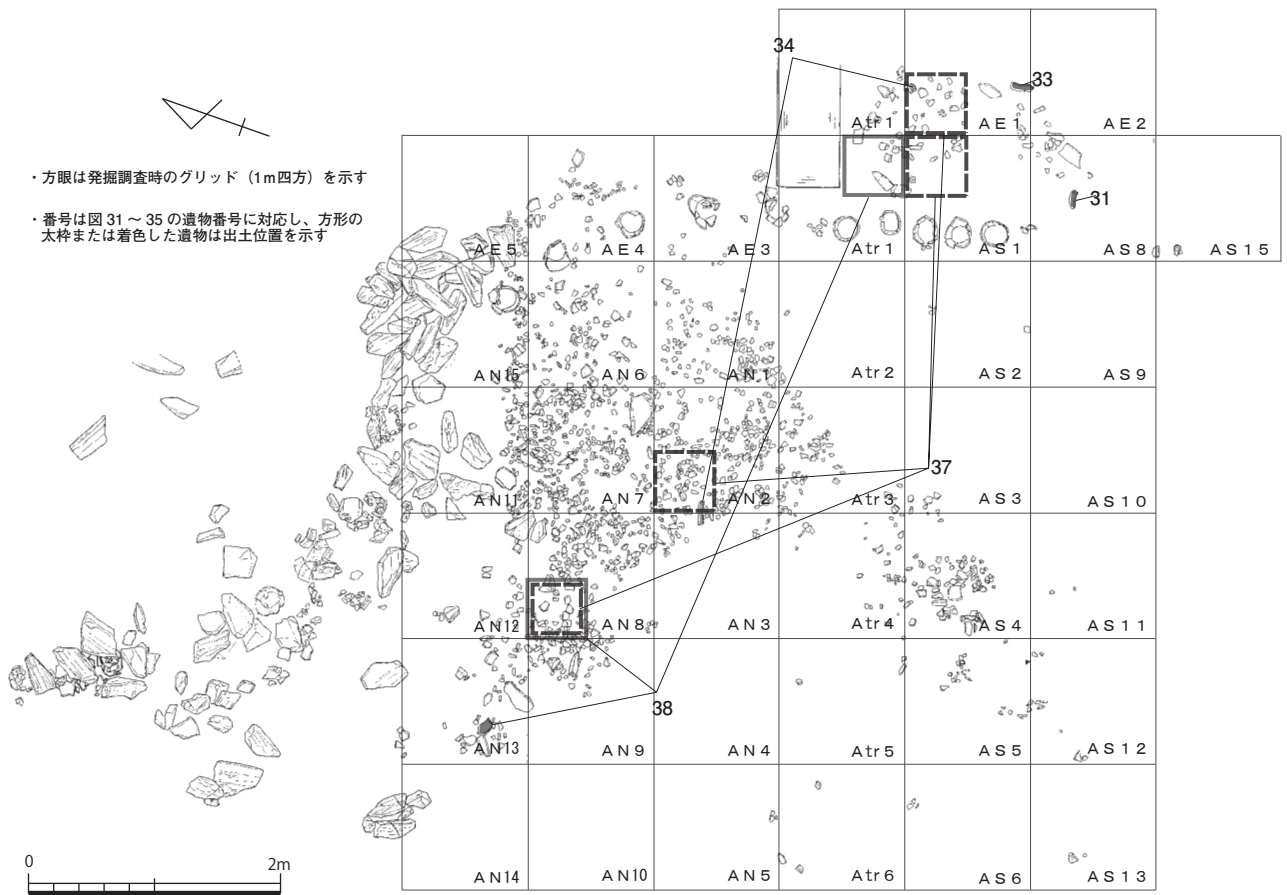
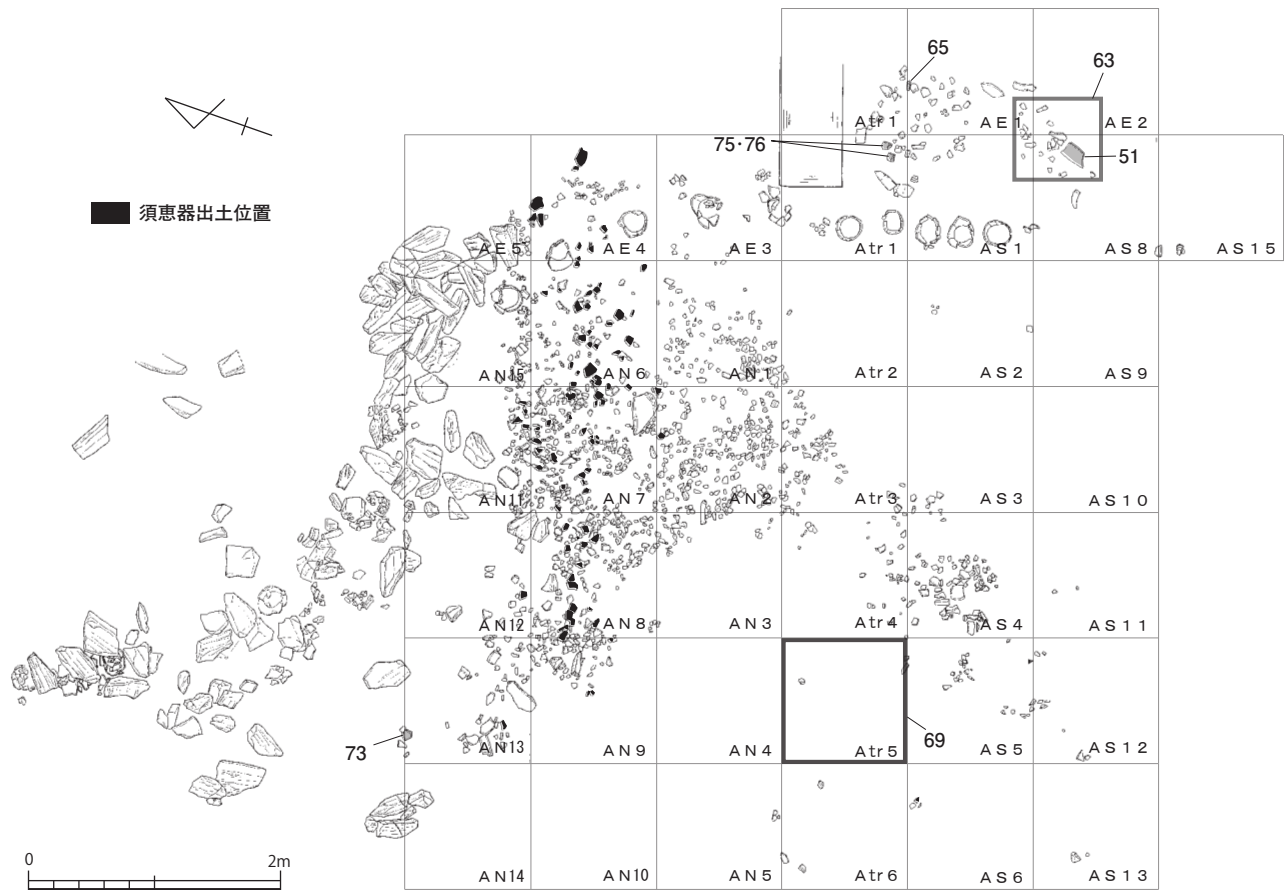


図 25 大谷山 6 号墳 西側くびれ部遺物出土状況図(1) (S=1/60)



人物埴輪出土状況



器財埴輪・不明形象埴輪・須恵器出土状況

図 26 大谷山 6 号墳 西側くびれ部遺物出土状況図(2) (S=1/60)

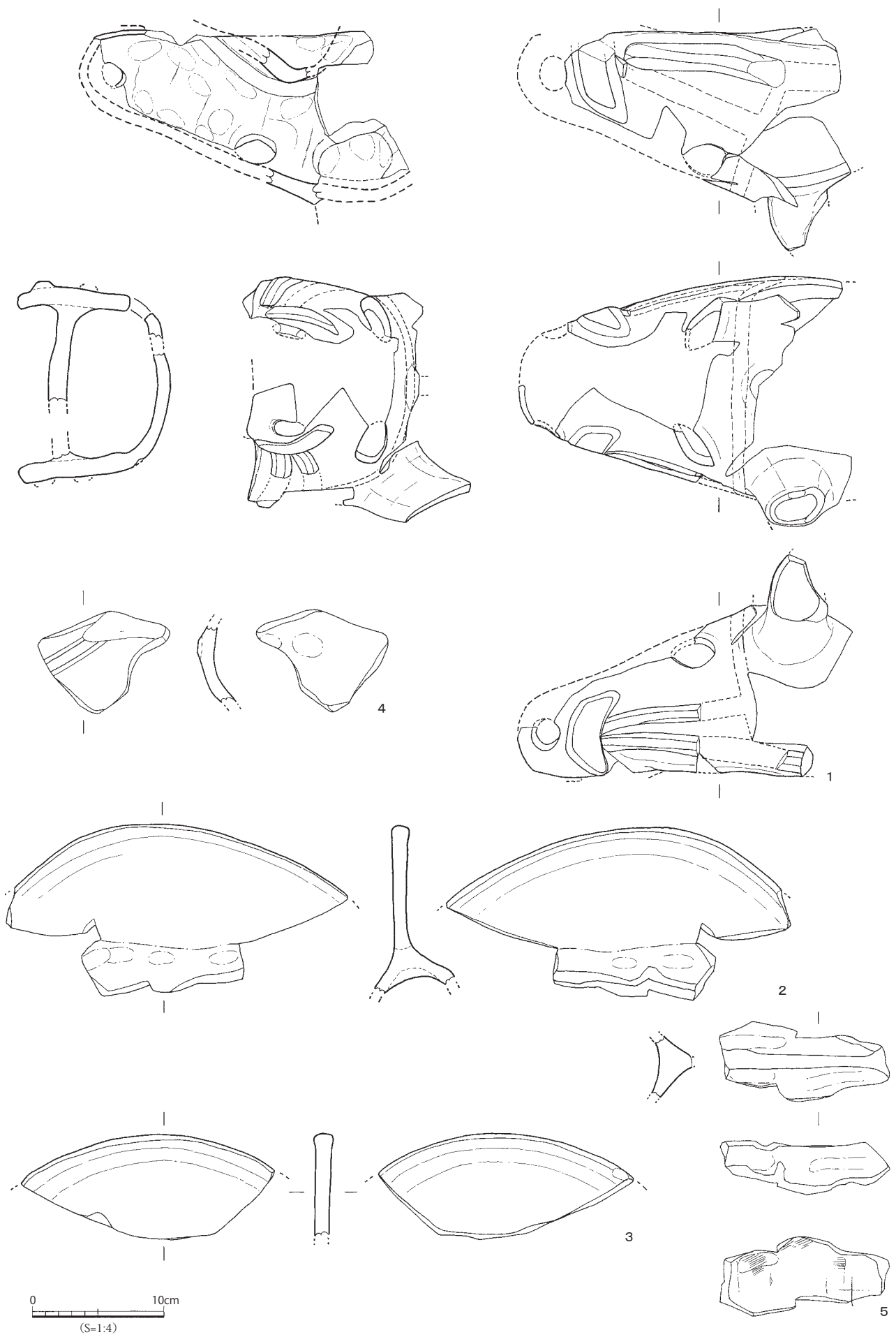
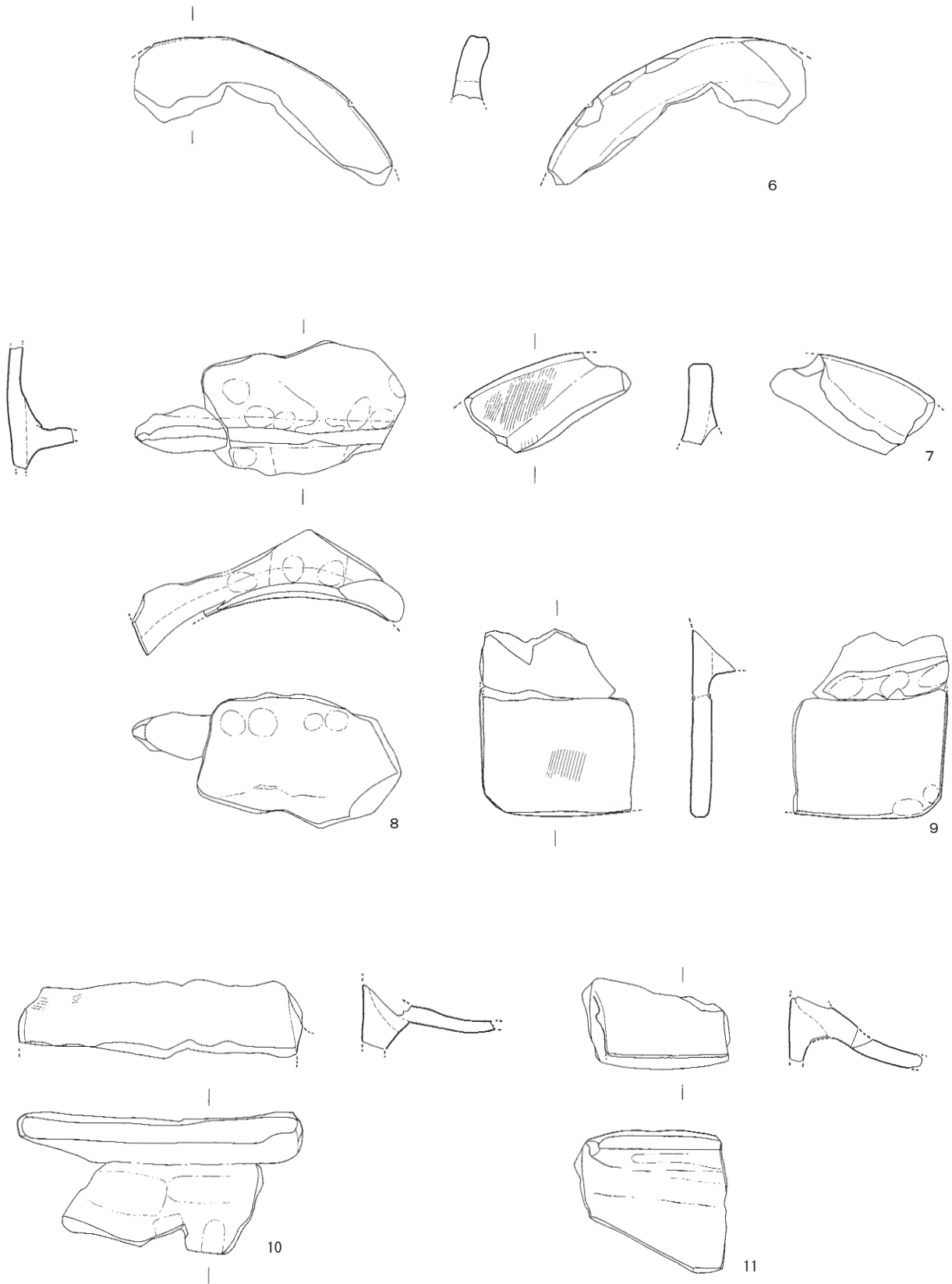


图 27 大谷山 6 号墳出土 動物埴輪(1)



0 10cm
(S=1:4)

图 28 大谷山 6 号墳出土 動物埴輪(2)

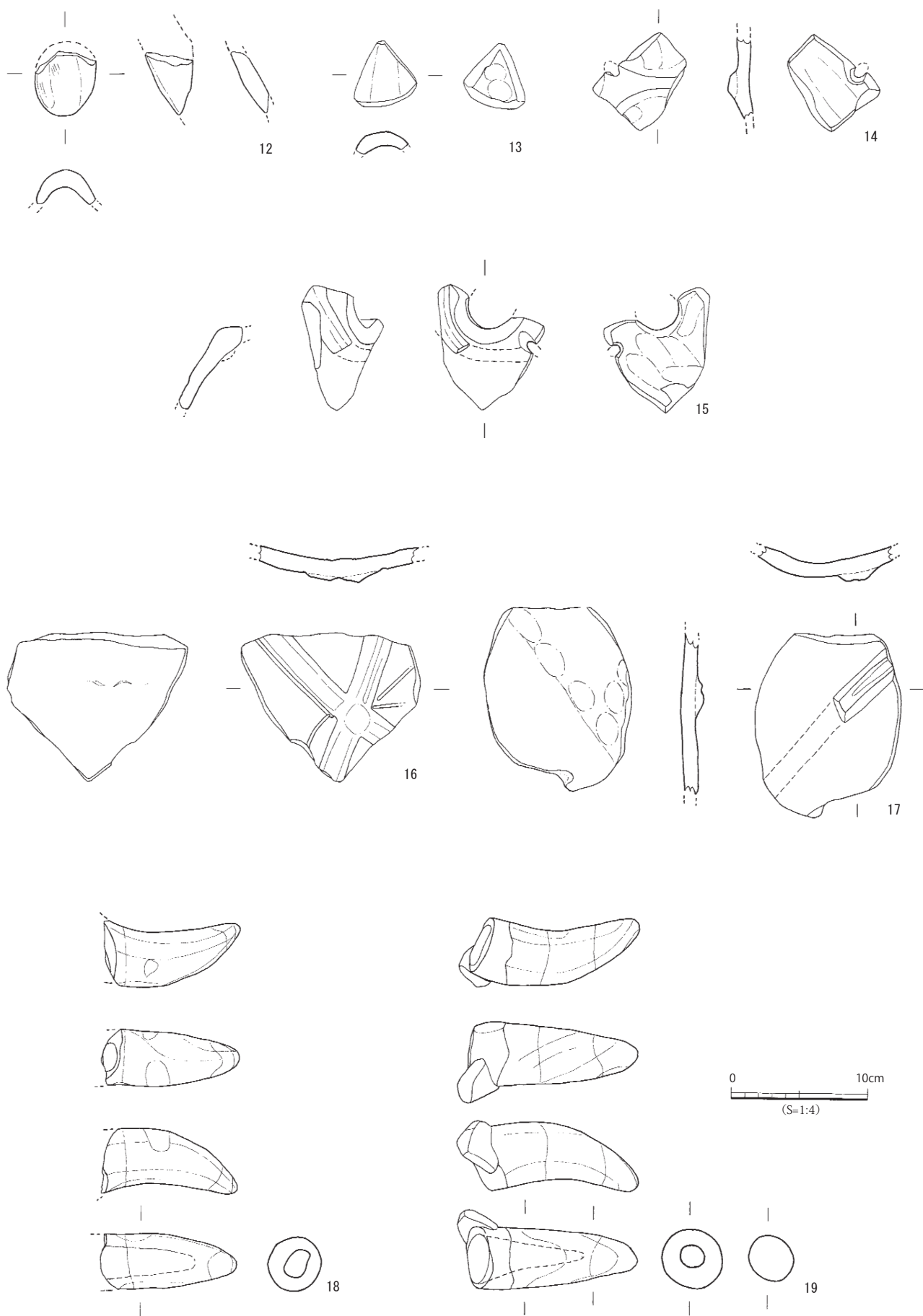


图 29 大谷山 6 号墳出土 動物埴輪(3)

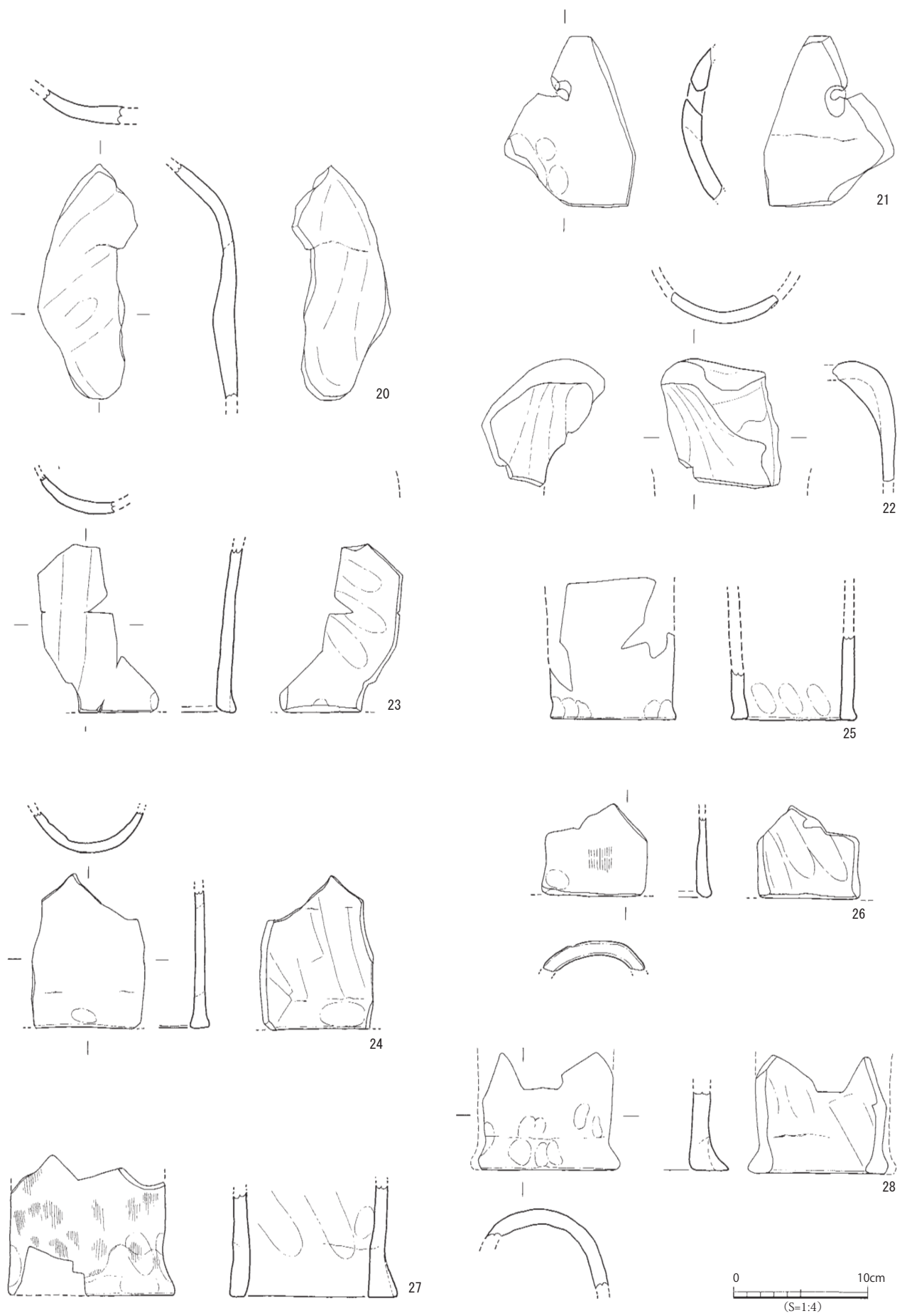


图 30 大谷山 6 号墳出土 動物埴輪(4)

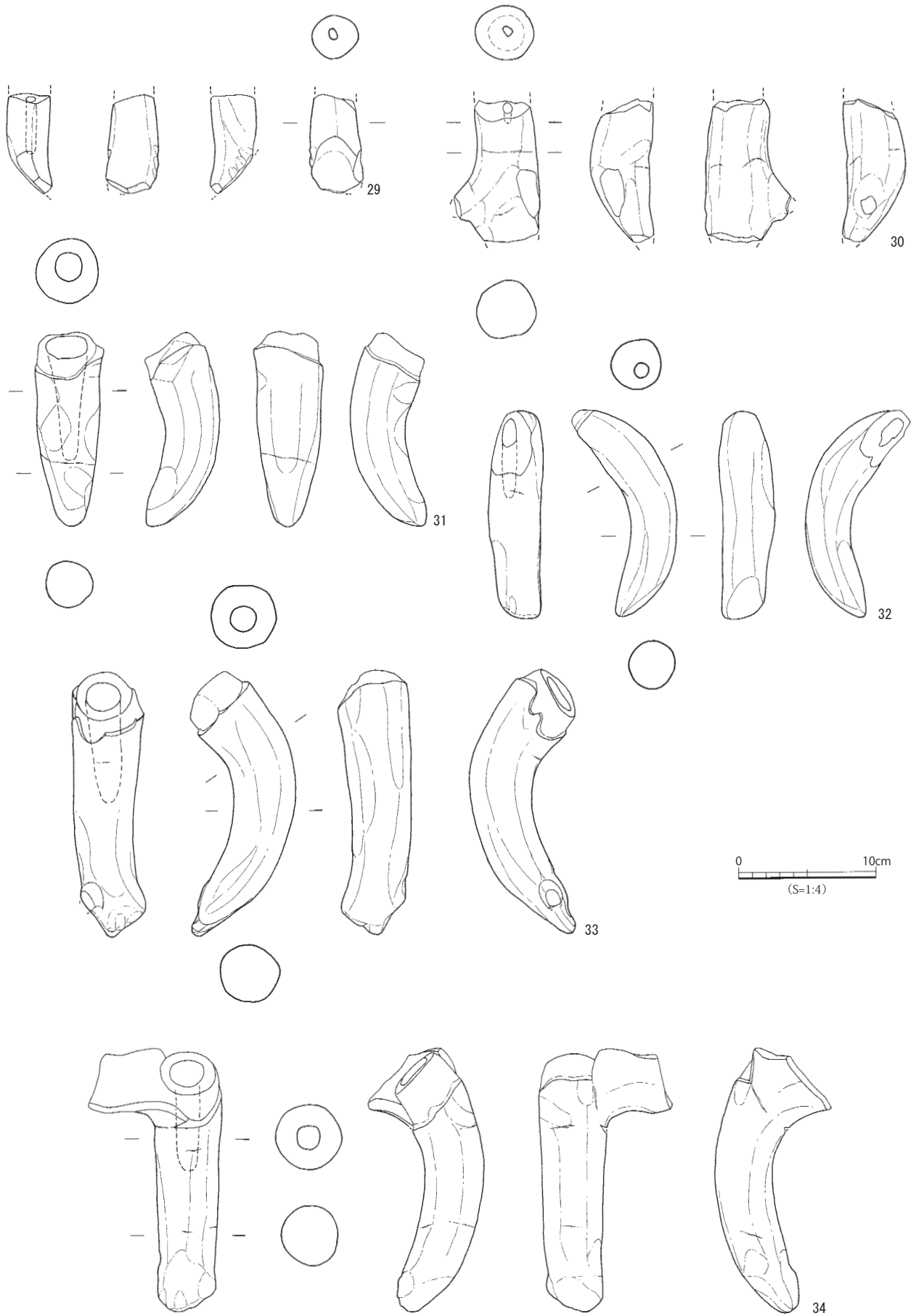


图 31 大谷山 6 号墳出土 人物埴輪(1)

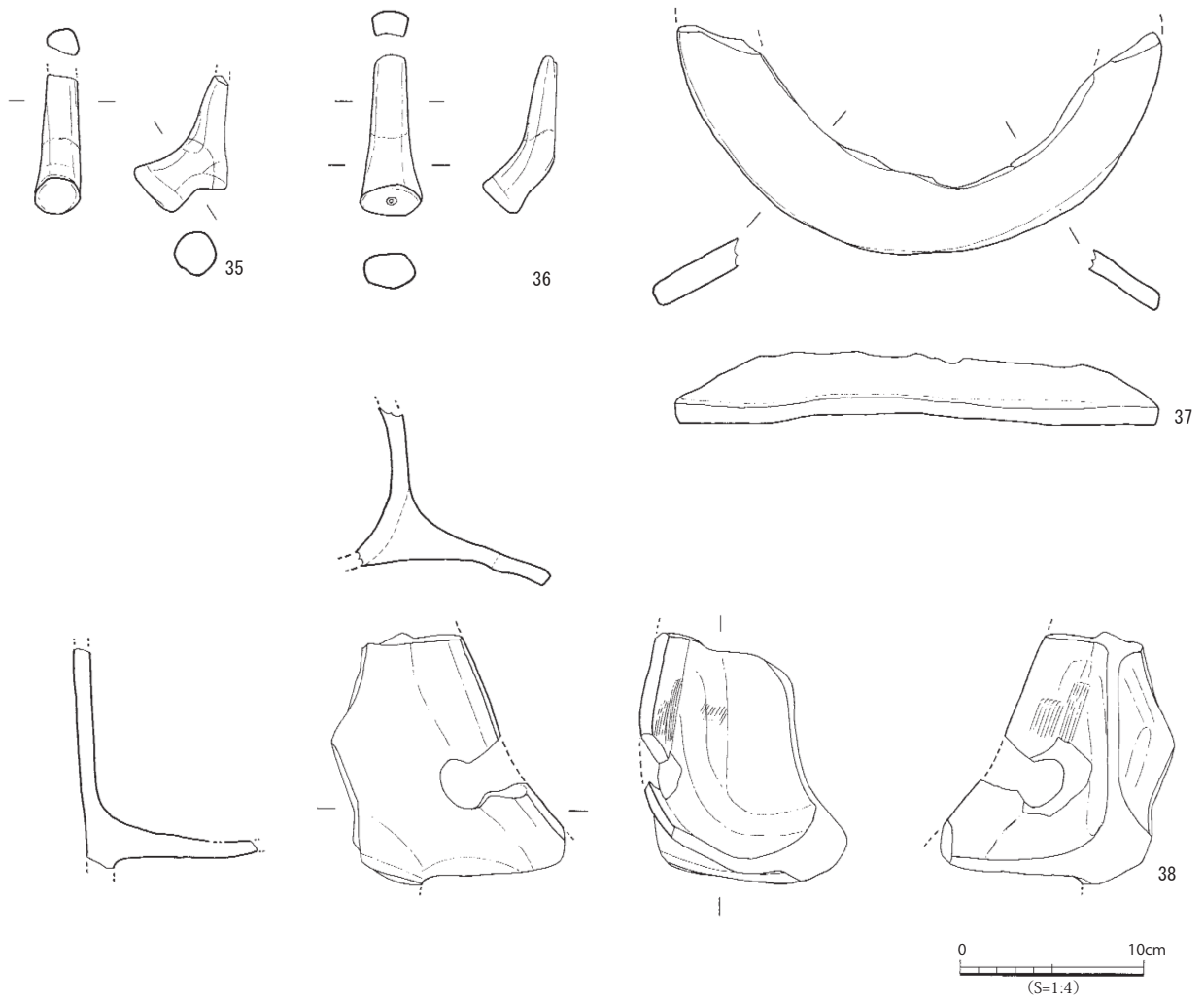


图 32 大谷山 6 号墳出土 人物埴輪(2)

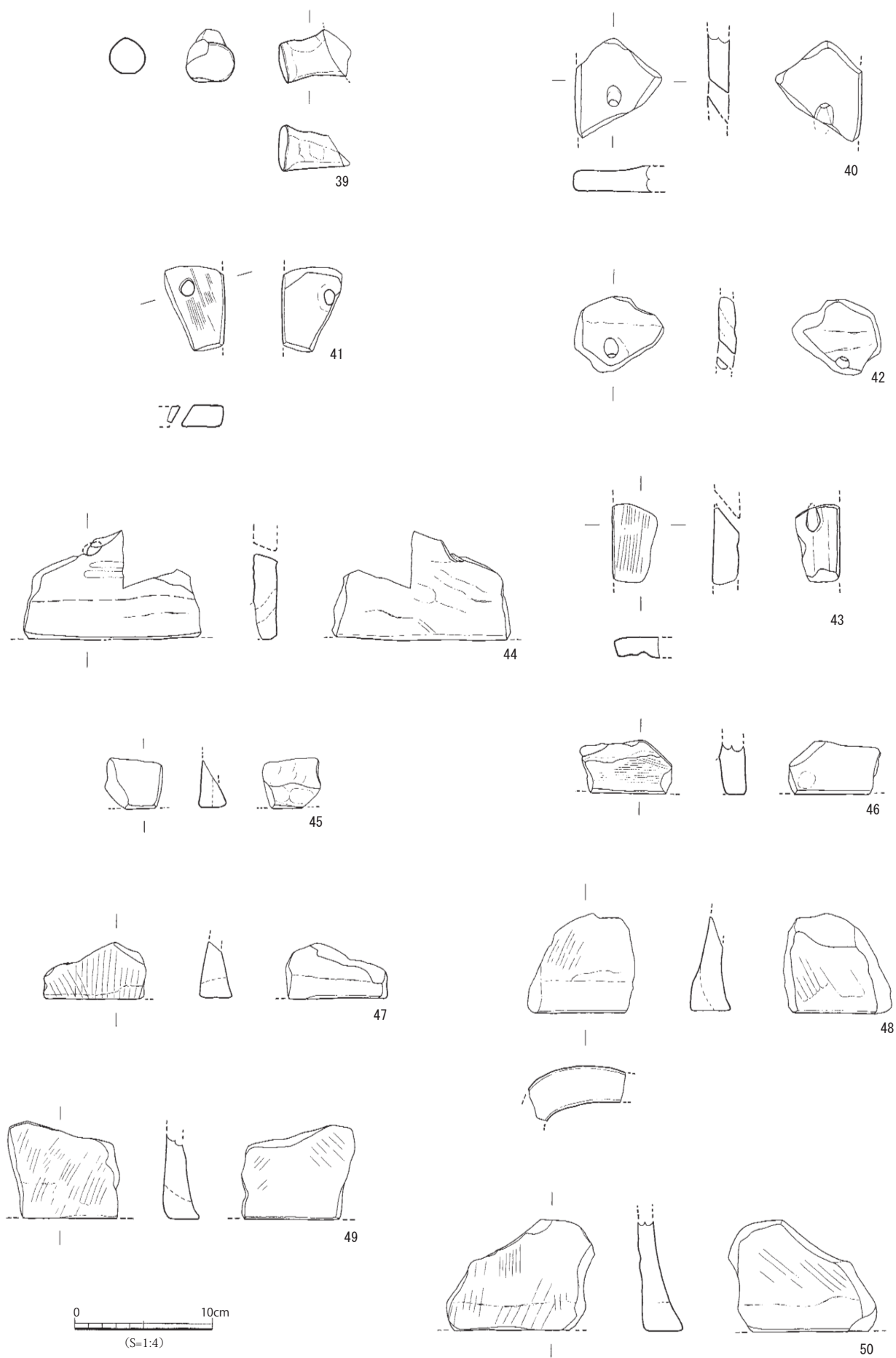


图 33 大谷山 6 号墳出土 家形埴輪

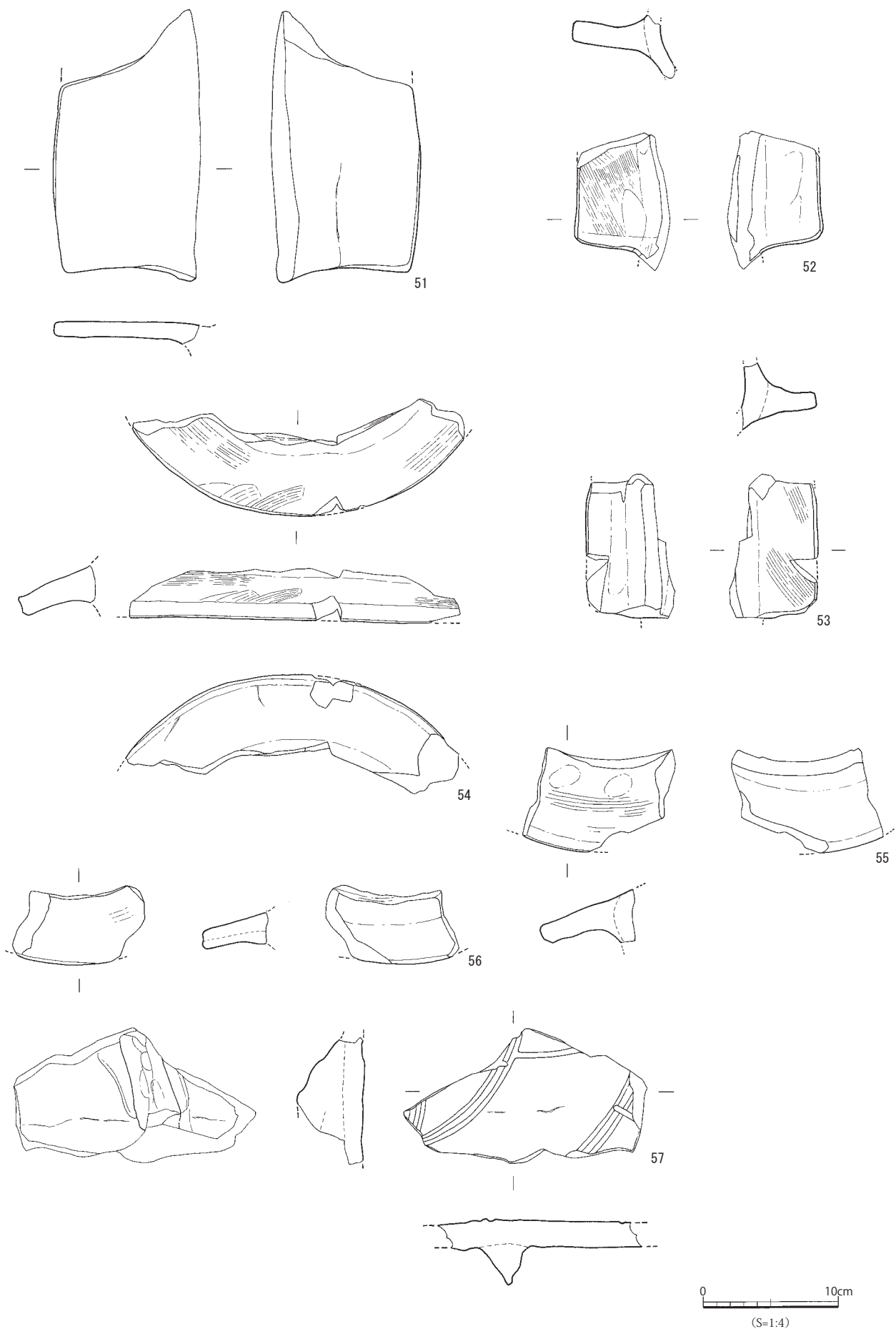


图 34 大谷山 6 号墳出土 器財埴輪

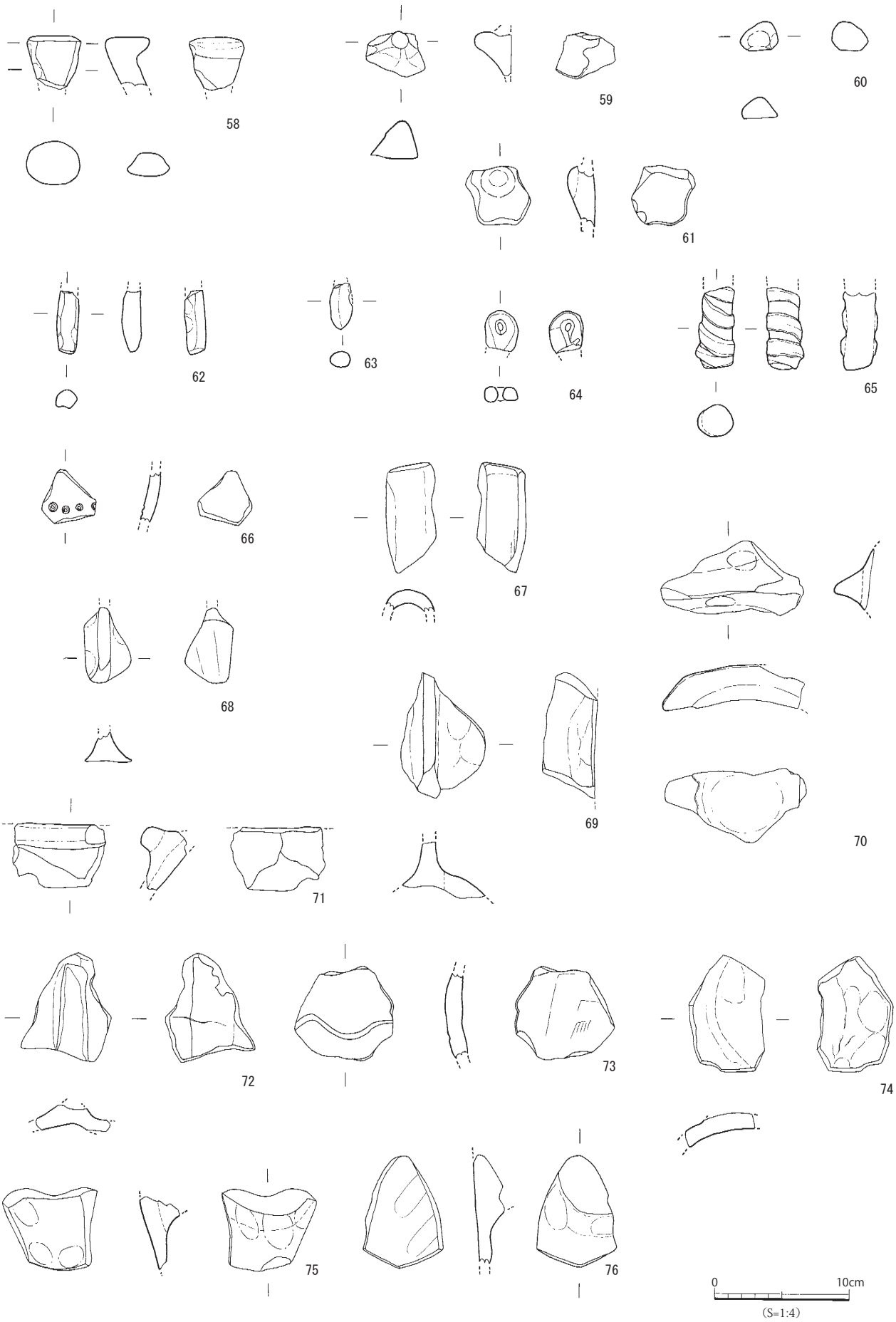


图 35 大谷山 6 号墳出土 不明形象埴輪

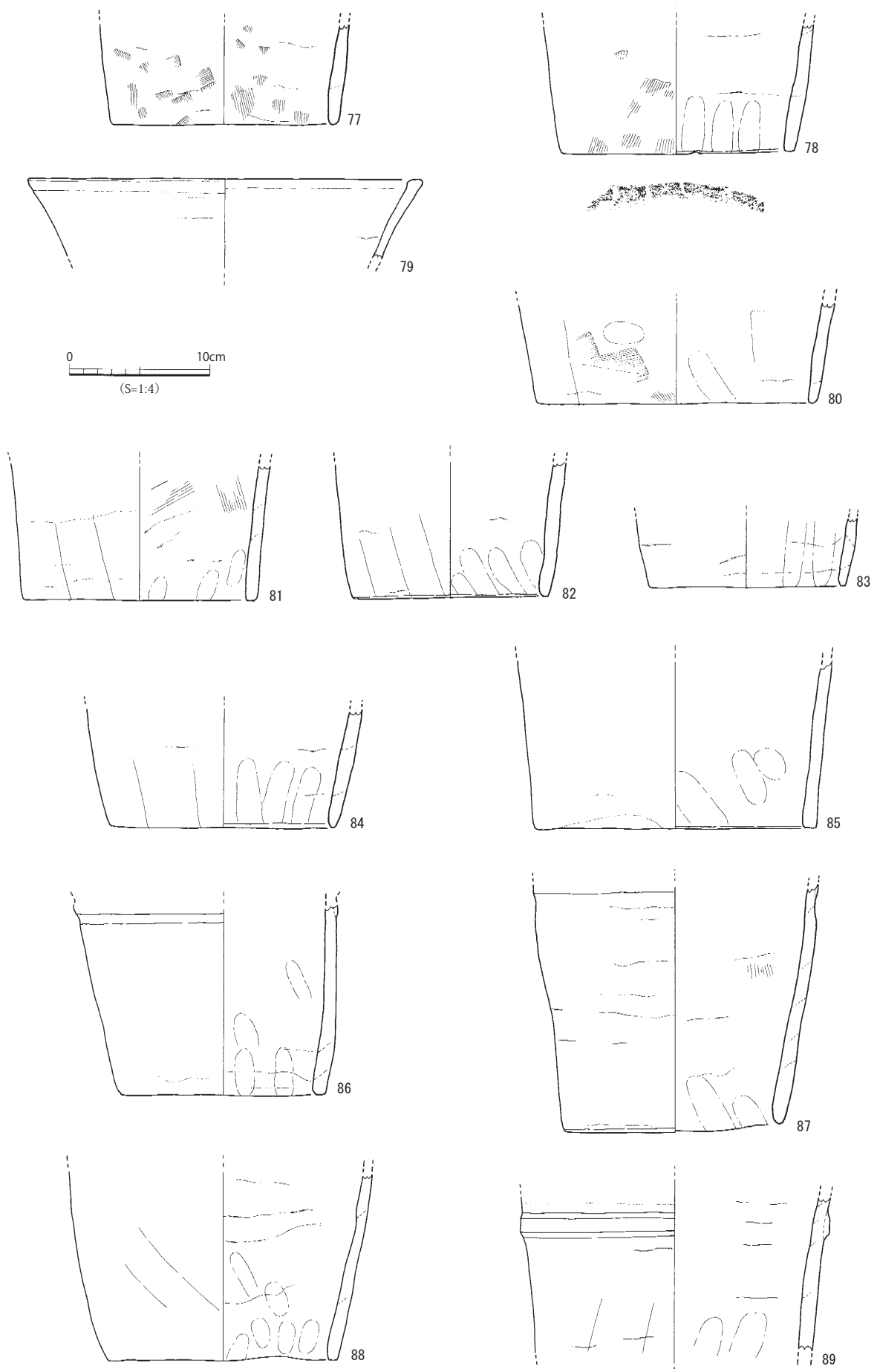


图 36 大谷山 6 号墳出土 円筒埴輪(1)

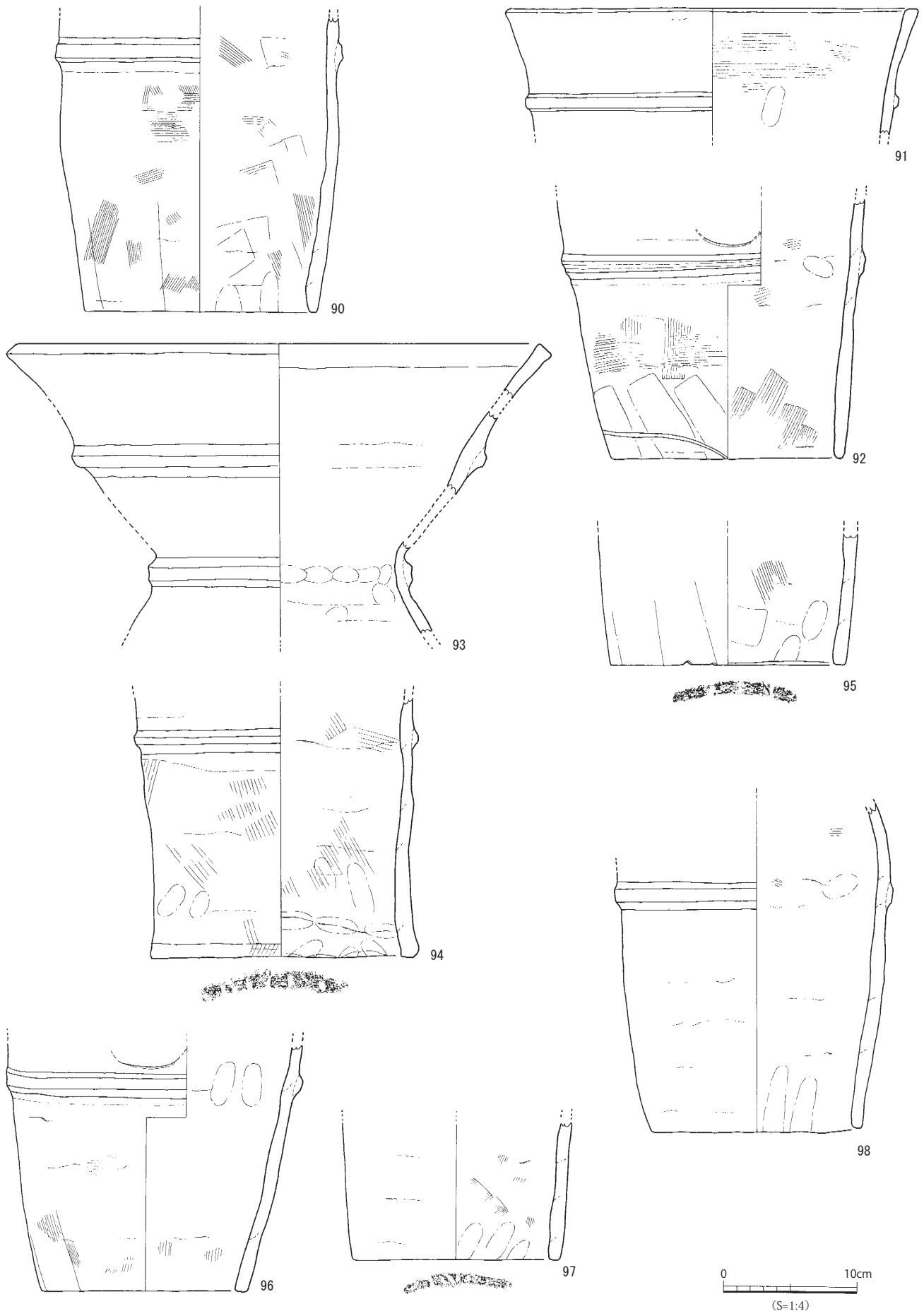


图 37 大谷山 6 号墳出土 円筒埴輪(2)

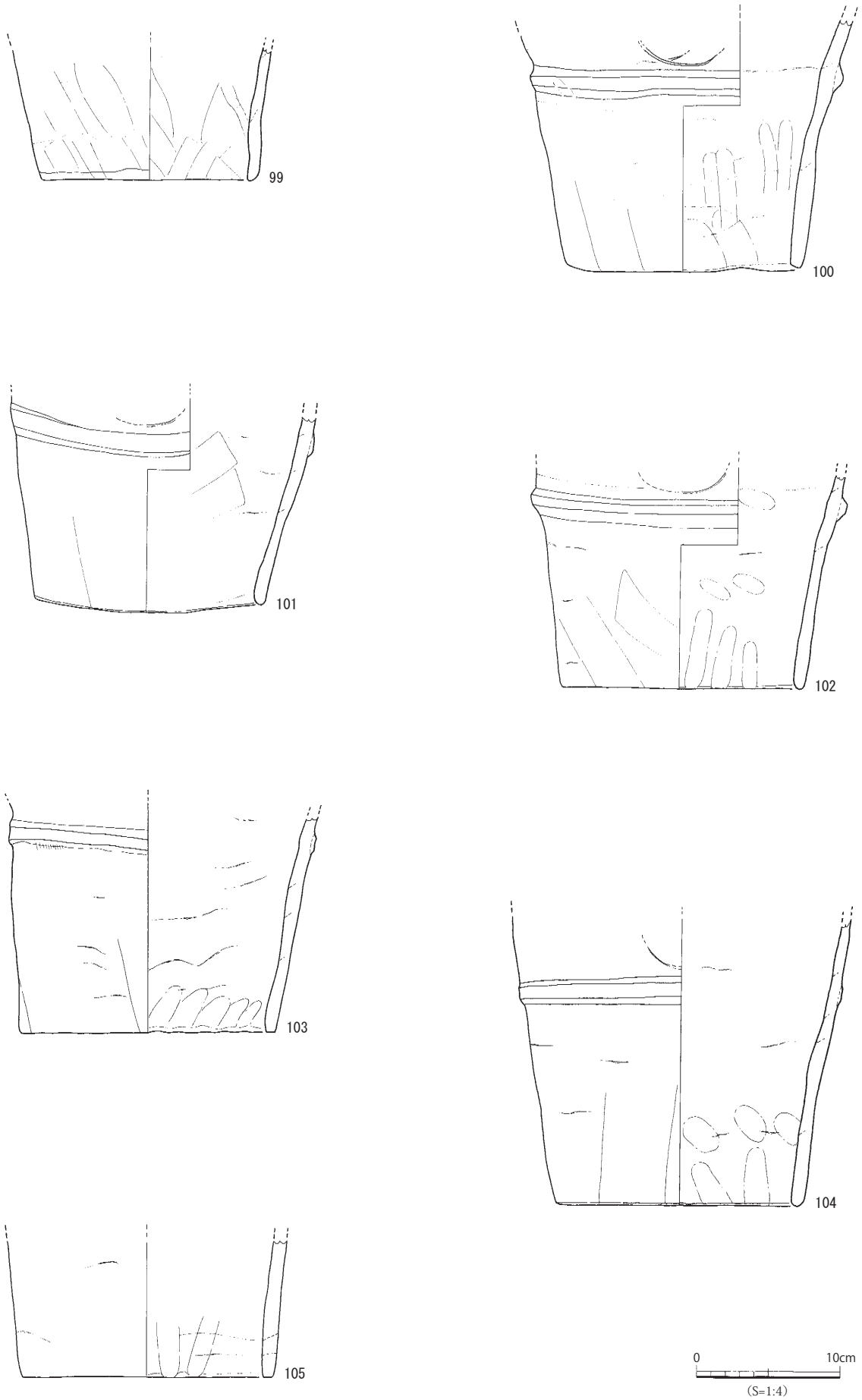


图 38 大谷山 6 号墳出土 円筒埴輪(3)

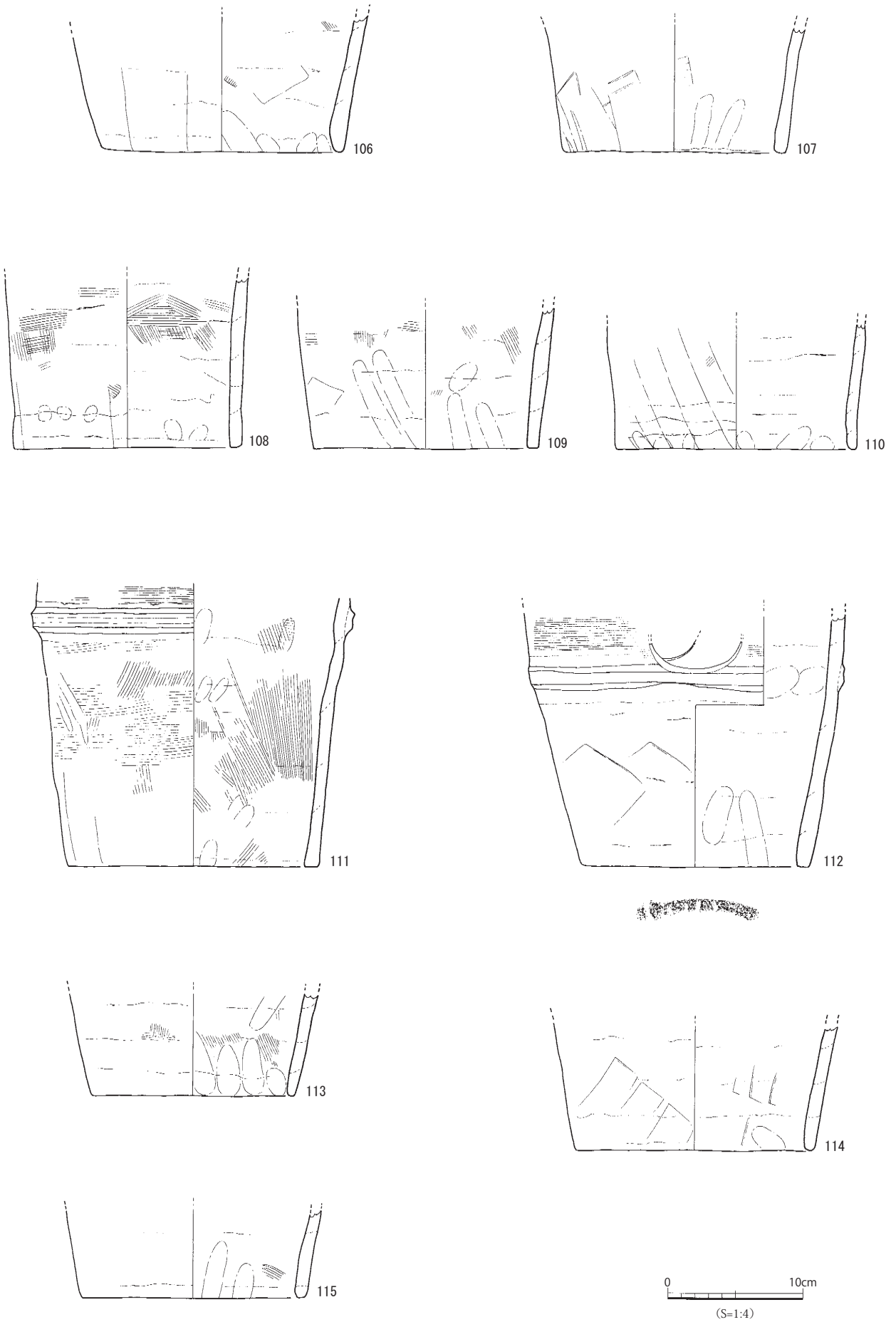


图 39 大谷山 6 号墳出土 円筒埴輪(4)

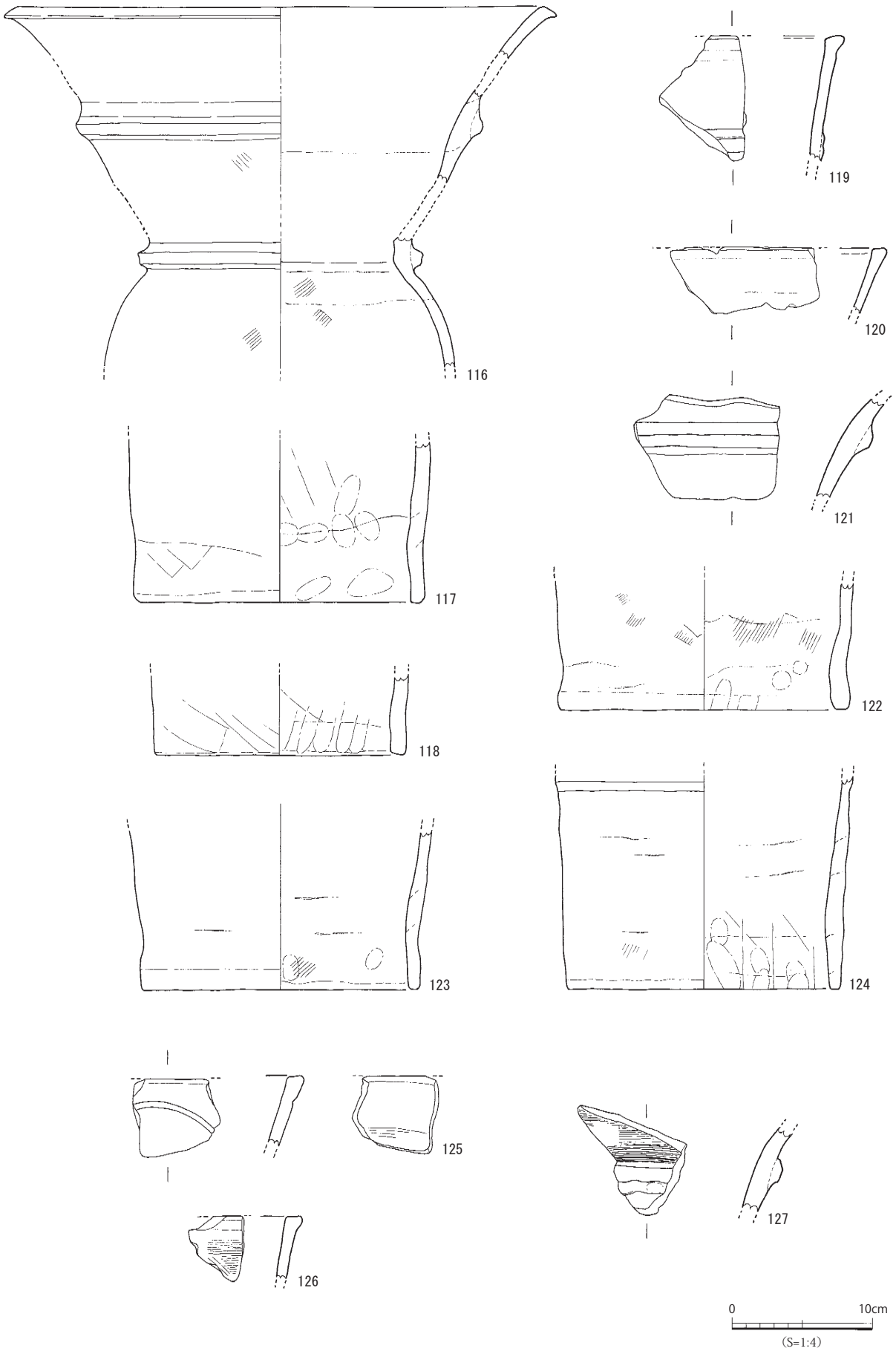


图 40 大谷山 6 号墳出土 円筒埴輪(5)

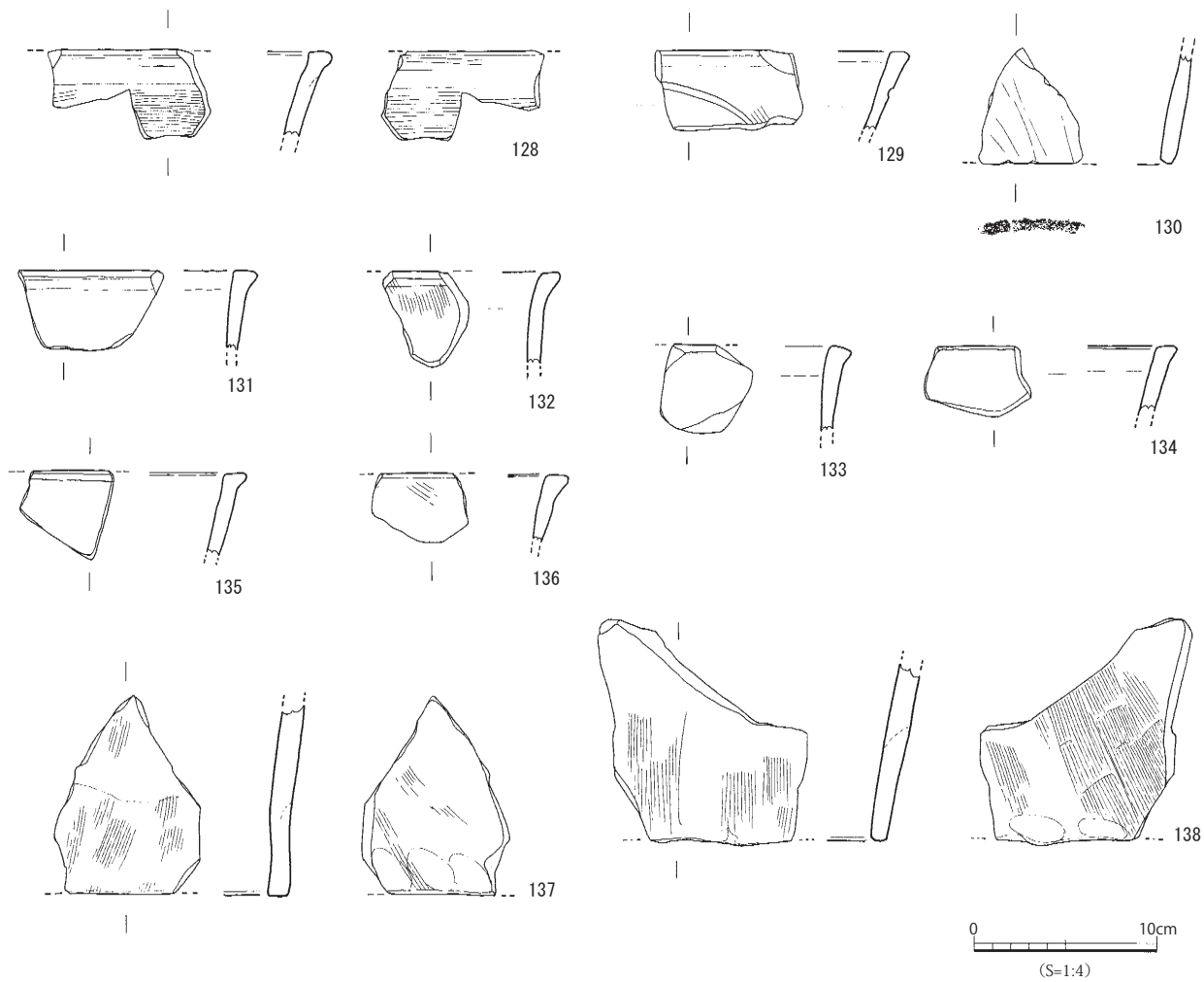


图 41 大谷山 6 号墳出土 円筒埴輪(6)

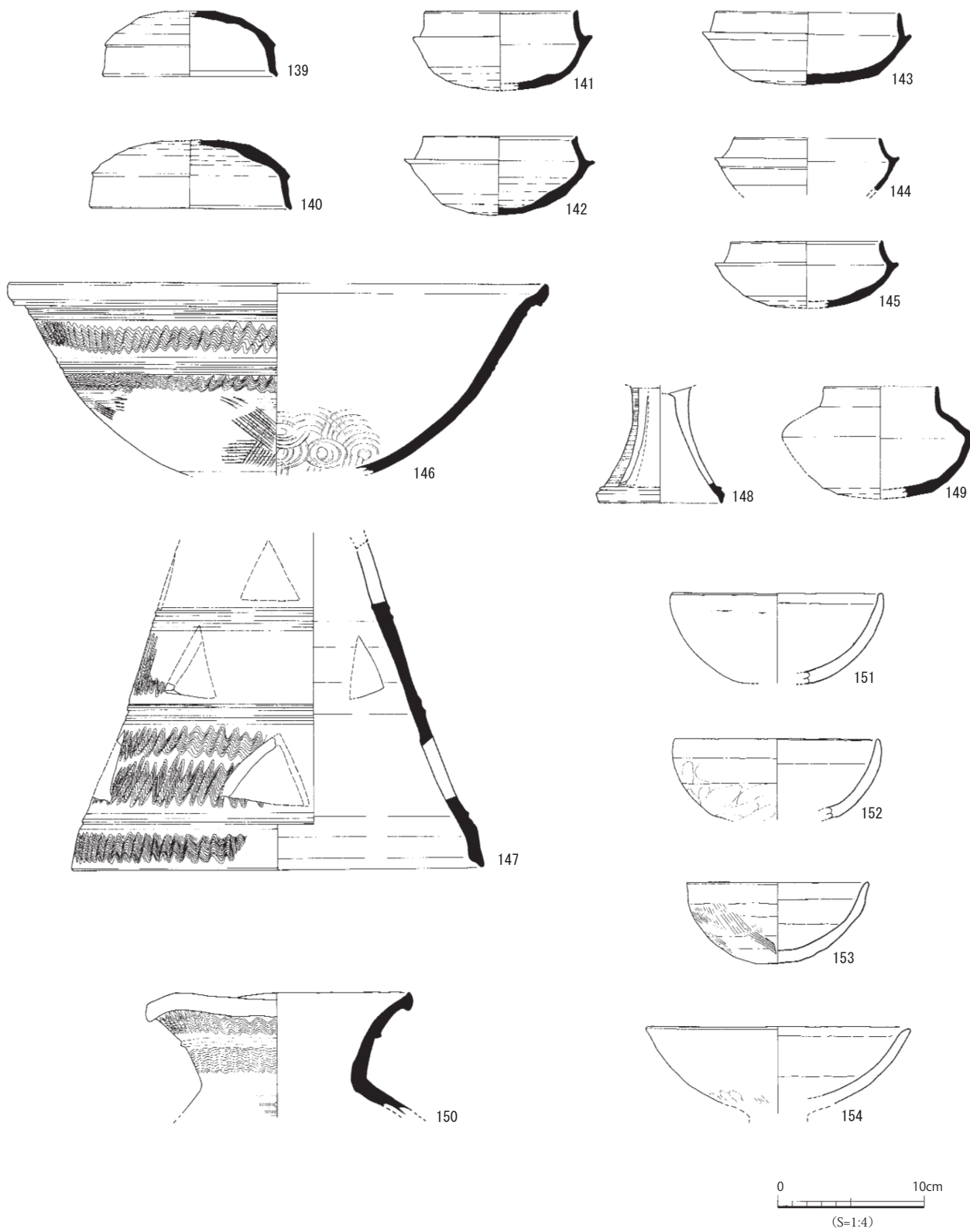
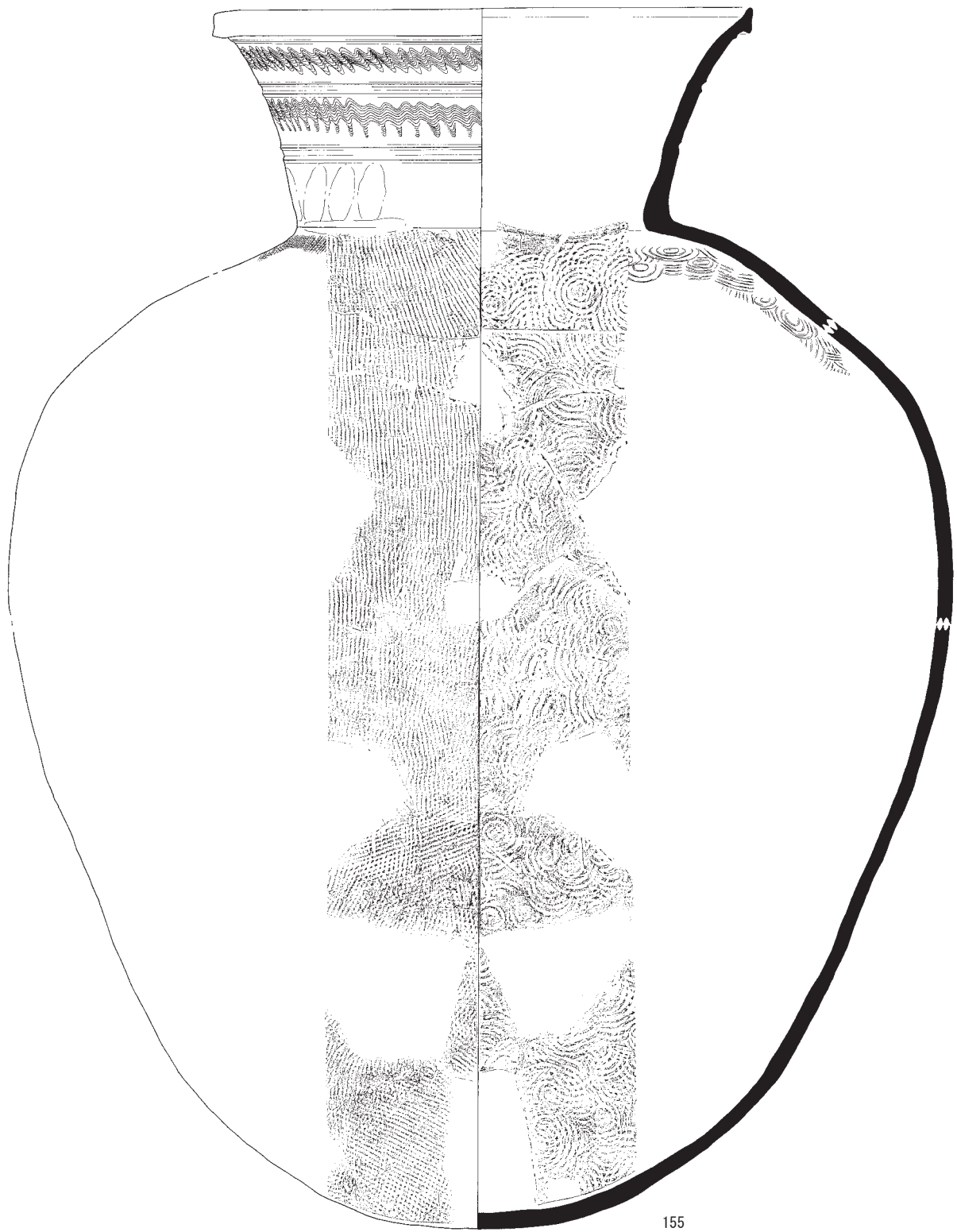


图 42 大谷山 6 号墳出土 土器類(1)



0 10cm
(S=1:4)

图 43 大谷山 6 号墳出土 土器類(2)

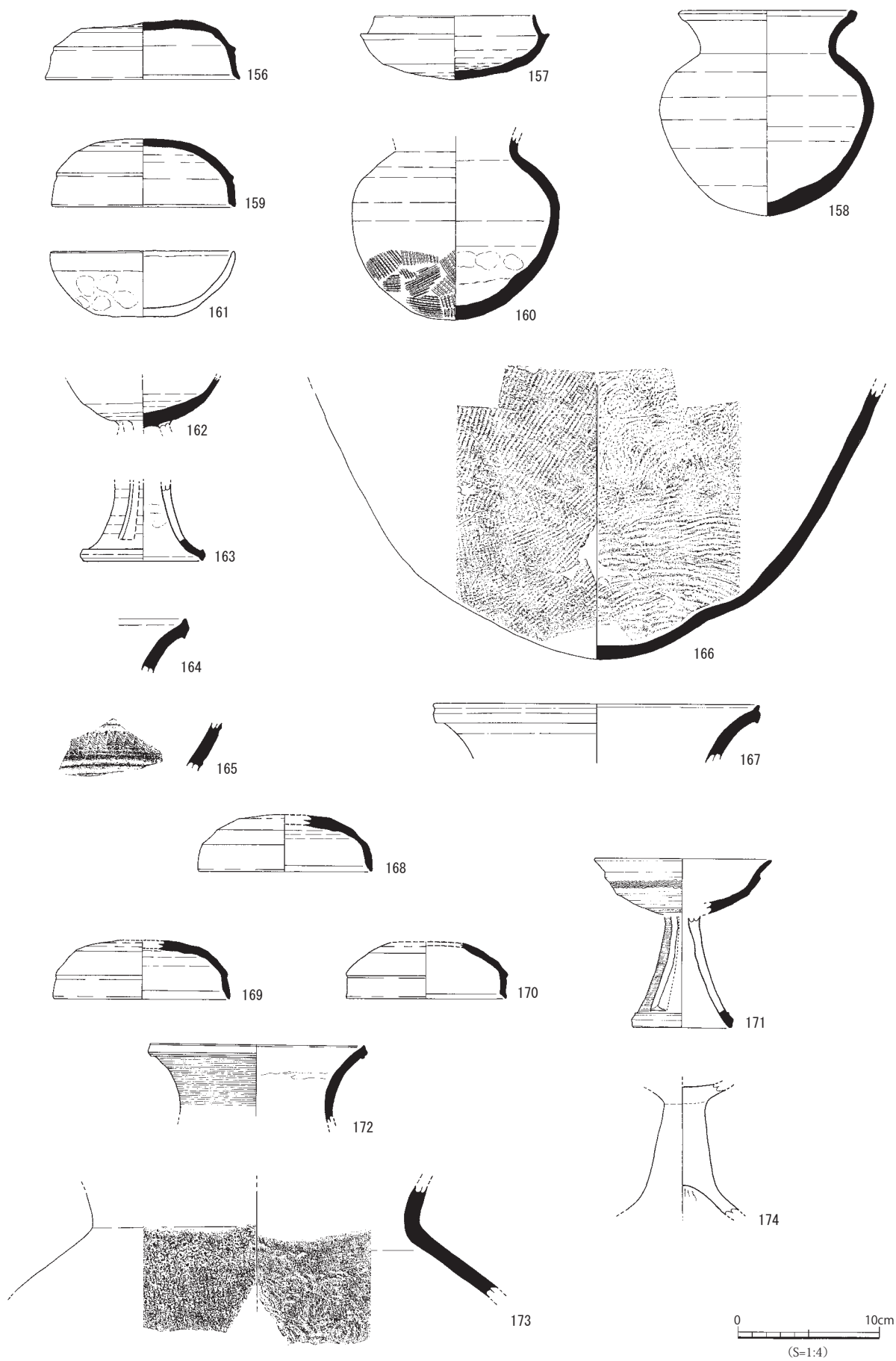


图 44 大谷山 6 号墳出土 土器類(3)

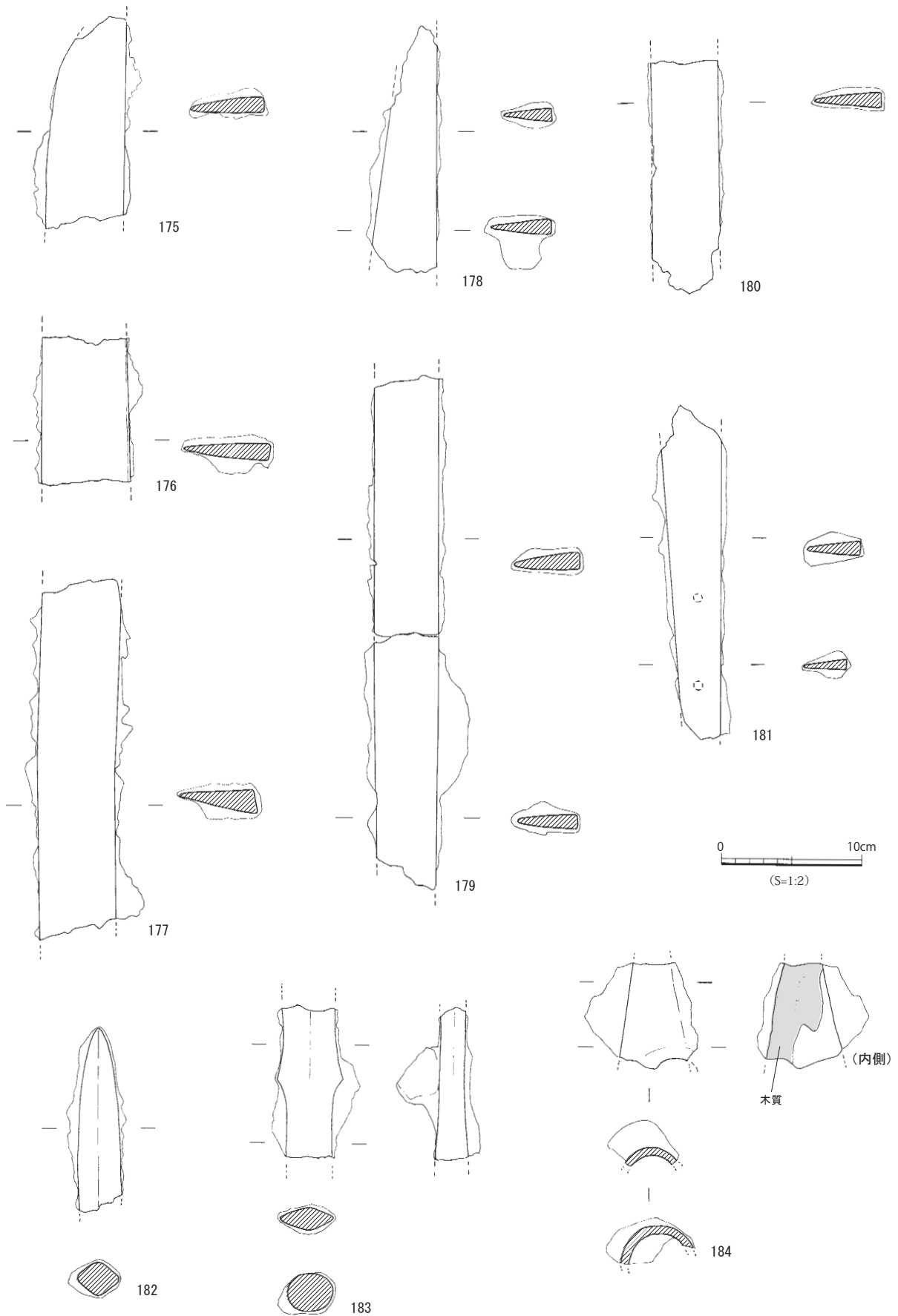


図 45 大谷山 6 号墳 横穴式石室出土遺物 鉄製品

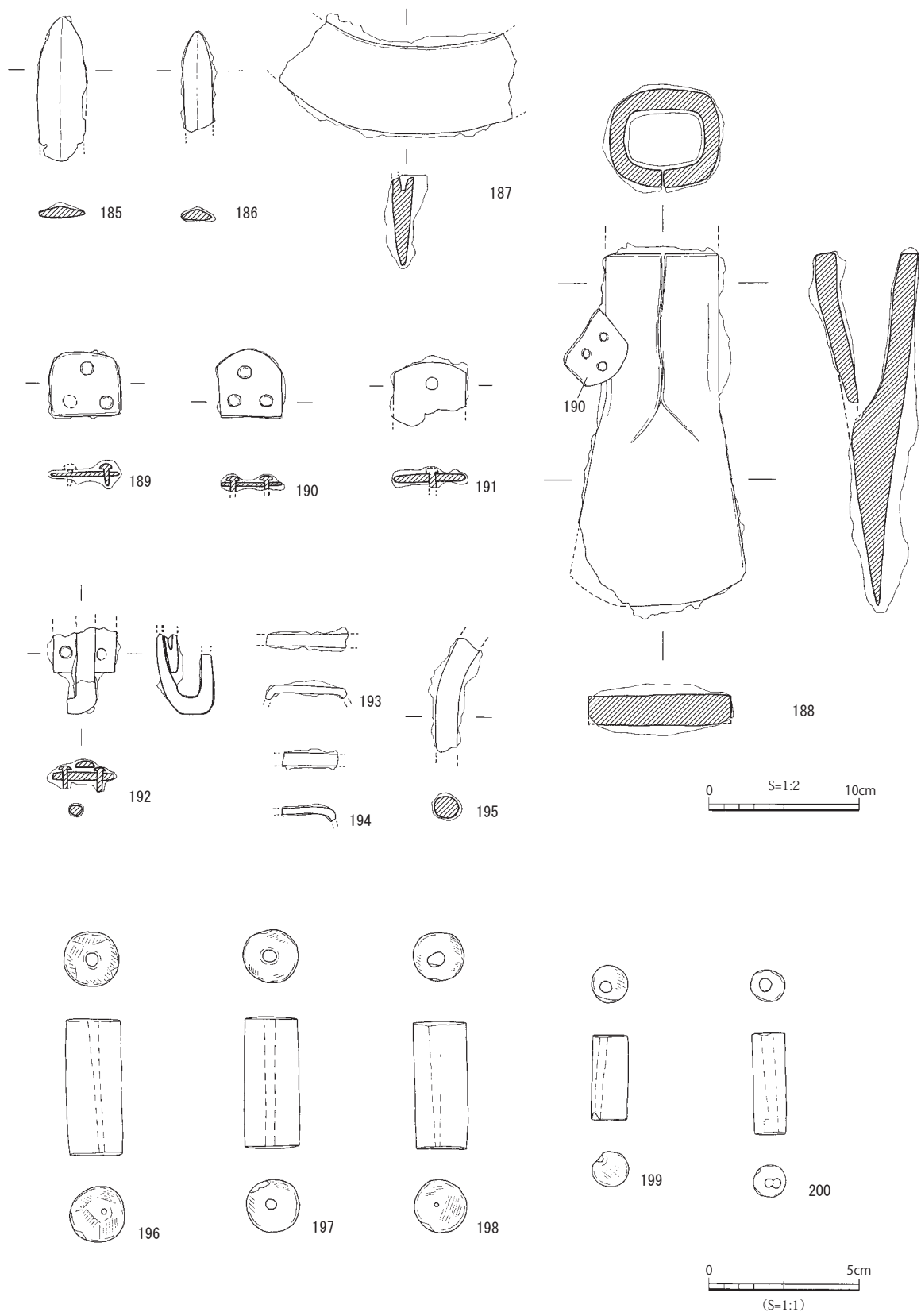


图 46 大谷山 6 号墳 横穴式石室出土遺物 鉄製品・玉類

第3節 まとめ

発掘調査の結果、大谷山6号墳は、後円部の直径約16m、前方部の長さ約10m、墳長約25mの前方後円墳であることが明らかとなった(図47)。

後円部で検出された円筒埴輪列は直径13.8mの円周上に位置し、後円部の墳丘テラスの外縁に樹立されていたものと考えられる。樹立する円筒埴輪列は前方部へ連続して墳丘を圍繞していたと考えられ、また、墳丘テラスは後円部から少なくとも前方部西側へ連続していたと推測される。これらの円筒埴輪は全てⅣ群系埴輪(紀伊型)である。以上から、大谷山6号墳は後円部2段、前方部2段の段築を有する前方後円墳であると判断される。なお、前述のように造り出し等の施設の存在を積極的に認めうる情報は得られなかった。

また、西側くびれ部付近や墳頂部を中心に、多数の形象埴輪片が検出された。これらの形象埴輪は、馬を主体とする動物埴輪、巫女を含む人物埴輪、家形埴輪、大刀や蓋、盾ないし石見型埴輪などの器財埴輪である。また、西側くびれ部では甕、高杯、器台等の須恵器片も出土した。

形象埴輪の出土状況からは正確な樹立位置の特定は困難であるが、前述のように、家形埴輪や人物埴輪の一部は墳頂部に樹立していたとみられる。また、西側くびれ部付近で検出された埴輪の一部は、接合状況より墳丘テラスないし墳頂部に樹立していたものが転落した可能性が高い。なお、形象埴輪や須恵器の出土状況からは、西側くびれ部にこれらの一部が樹立ないし据え付けられていたと結論づけることは現時点では困難であり、今後の調査で明らかにされるべき重要な課題である。

埋葬施設は、後円部の中央南寄りに構築された横穴式石室のほかに、前方部墳頂平坦面付近に竪穴式石室が、後円部北東側の墳丘テラス付近に箱式石棺が構築されることが明らかとなった。横穴式石室は、出土した須恵器の多くがMT15型式期に位置づけられることから、構築時期は6世紀初頭頃と推測され、大谷山6号墳の築造時期を示すと考えられる。玄室からは、土器類の他に、管玉、鉄刀、鉄銚、馬具、鉄鏃、U字形鍬先、鉄斧が出土しており、その遺存状況は決して良好ではないが、玉類、武器、馬具、農具、工具の副葬が確認された。また、石室の形態は岩橋型横穴式石室であるものの、玄室前道が未発達であり玄門部がその初源的な形態を示している。扉石などは確認されずその有無は明らかではないが、羨道部を板石を積み閉塞するなどの特徴をもつ。この他、左側に袖部を有さず右片袖式の形態をとること、玄室前道基石が明確でなく梱石が据えられていること、両側壁に突起石を有すること、玄室の壁面に赤色顔料が塗布されること、玄室主軸に対して羨道部の主軸がやや南側に振れる平面形態であることなど、6世紀前半より盛行する典型的な岩橋型横穴式石室に比して異なる特徴や古相の特徴をもつ点が注目される。

竪穴式石室は出土須恵器がTK10型式期に比定され、6世紀前半の構築である可能性が高い。また、箱式石棺は出土須恵器がMT15型式期であり、6世紀初頭頃の構築と考えられる。

以上より、大谷山6号墳は、6世紀初頭頃に後円部の横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳が構築され、これと近接する時期に箱式石棺が付設されたとみられ、その後6世紀前半になり竪穴式石室が追加されたものと推定される。こうした一つの墳丘に複数の埋葬施設をもつ特徴も、本古墳の大きな特徴の一つである。

大谷山6号墳は、大谷山地区に所在する小型の前方後円墳であるが、今回の調査成果は、岩橋千塚古墳群における階層性の研究や、紀ノ川下流域を中心に分布する岩橋型横穴式石室の成立過程を明らかにする上で、重要なデータになると考えられる。

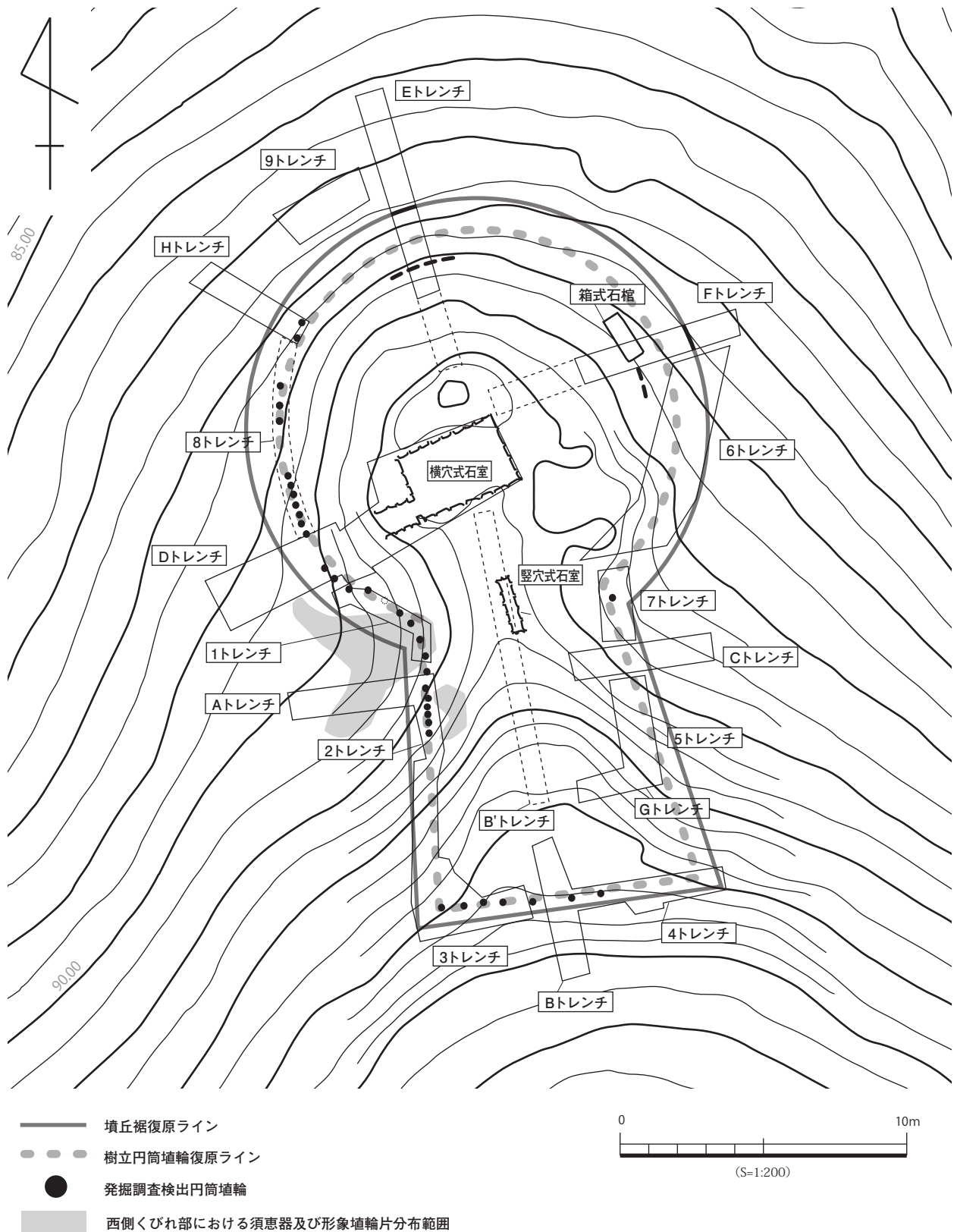


図 47 大谷山 6 号墳 墳丘復原図 (S=1/200)

表4 大谷山6号墳 出土遺物観察表

(埴輪・土器類)

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1	図版37	馬形埴輪(頭部)	羨道前庭、西側くびれ部、Atr1区、AN2区、石棺?	-	器面磨滅。頭部。面繫は類草の一部が残存し、幅15~20mmの粘土帯が貼り付く。額草部分は剥離痕。手綱の先端には鏡板が表現される。下顎先端は欠失。目から鼻先までは幅3~4cmの粘土紐を積み上げ後、下顎に板状粘土を貼り付けて成形。	外)5YR6/6橙~2.5YR6/6橙 内)5YR6/6橙~5YR6/4にぶい橙	5mm以下の砂粒、赤色酸化粒を多く含む	良好	70%	
2	図版37	馬形埴輪(たて髪)	西側くびれ部、Atr5区、AN2・9区	-	器面磨滅。たて髪破片。図左が頭部の右側面、右が左側面か。後方は厚みを増し、端部に剥離痕があり鞍との接合部か。たて髪の端部は肥厚。	外・内)5YR5/8明赤褐	6mm以下の砂粒を少量と砂粒を含む	良好	-	
3	図版37	馬形埴輪(たて髪)	西側くびれ部	-	器面磨滅。たて髪破片。たて髪はたて髪との接合部、幅16mm粘土帯は手綱か。	外・内)5YR5/8明赤褐	4mm以下の砂粒を少量含む	良好	-	
4	図版37	馬形埴輪(頭部か)	Aトレンチ(Atr5区)	-	器面磨滅。たて髪と頭部~頸部の接合部付近か。外面接合部を指ナデ。内面ハケメ後ナデ。	外・内)5YR6/8橙	1mm以下の白色、褐色の砂粒、片岩を含む	良好	-	
5	図版37	馬形埴輪(たて髪)	横穴式石室攪乱土	-	器面磨滅。鞍破片か。端部は面をもちヨコナデにより凹む。	外・内)5YR6/8橙	5mm以下の白色、褐色の砂粒を多く含む	良好	-	
6	図版37	馬形埴輪(鞍か)	西側くびれ部、AN2区	-	器面磨滅。鞍破片か。外面ハケメ後ナデ。	外・内)7.5YR6/6橙	3mm以下の白色、黒色の礫・砂粒、雲母を含む	良好	-	
7	図版38	馬形埴輪(鞍か)	西側くびれ部	-	器面磨滅。湾曲する背部にアーチ状の鞍が接合。鞍は端部を欠損。指オサエ痕あり。	外・内)5YR6/8橙	1cm大の白色礫含む、3mm以下の透明、白色、褐色礫を含む	良好	-	
8	図版38	馬形埴輪(鞍)	AN8・13区	-	器面磨滅。腹部~降泥。腹部から幅18.3cmの降泥が垂下する形態。降泥は欠損部先端で厚14mm。9と胎土、色調が類似。	外・内)5YR6/6橙	2mm以下の片岩や白色砂粒を含む	良好	-	
9	図版38	馬形埴輪(降泥)	Dトレンチ(6区)、AS4区、AS5区	-	器面磨滅。腹部~降泥。腹部からの降泥が垂下。降泥は欠損部先端で厚11mm。9・10とは胎土が異なり別個体。	外・内)5YR6/8橙	5mm以下の片岩、白色、褐色の砂粒を多く含む	良好	-	
10	図版38	馬形埴輪(降泥)	AN16区	-	器面磨滅。馬またはその他の動物の耳。	外)5YR5/6明赤褐 内)5YR6/6橙	4mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
11	図版38	動物埴輪(耳)	AN2区	-	器面磨滅。馬またはその他の動物の耳。	外・内)5YR6/8橙	1mm以下の白色砂粒を含む	良好	-	
12	図版38	動物埴輪(耳)	AN8区	-	器面磨滅。部位不明。幅30mmの粘土帯貼り付け。径8mmの穿孔あり。	外・内)5YR6/8橙	6mm以下の白色、褐色砂粒を含む	良好	-	
13	図版38	馬形埴輪か	AN5区	-	器面磨滅。馬頭部の耳付近か。面繫と推定される幅17mmの粘土帯の表現あり。径8mm以上の穿孔があり、別部位ないし馬以外の器種の可能性もある。	外)5YR6/8橙	2mm以下の白色、褐色砂粒を少量含む	良好	-	
14	図版38	馬形埴輪か	AN13区	-	尻繫破片か。幅訳20mm粘土帯が4方向に延びる。また、粘土帯に沿って1条、粘土帯間に数条のヘラ插の沈線が施される。胎土は6、11に類似。	外・内)5YR5/6明赤褐	5mm以下の白色、褐色砂粒を多く、7mm大の片岩を含む。	良好	-	
15	図版39	馬形埴輪(尻繫か)	前庭部	-	器面磨滅。胸部破片か。幅22mmの粘土帯が斜方向に貼り付き、左側の胸繫の可能性あり。	外・内)5YR6/8橙	5mm以下の片岩や白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	
16	図版39	動物埴輪(尻尾)	西側くびれ部	-	器面磨滅。尻尾で、馬形埴輪か。内面は中空に成形。胎土は6、11、16にやや類似。	外・内)5YR6/6橙	5mm以下の白色、褐色、黒色の砂粒を多く含む。	良好	-	
17	図版39	動物埴輪(尻尾)	羨道前庭	-	器面磨滅。尻尾で、馬形埴輪か。内面は中空で、粘土帯を積み上げて成形。胴部との接合部は、約20mmの剥離痕がみられる	外)2.5YR6/8橙 内)10YR7/4にぶい黄橙	6mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
18	図版39	動物埴輪	AN8・13区	-	器面磨滅。馬またはその他の動物。首から胸付近の破片か。ナデ調整。	外・内)5YR6/8橙	5mm以下の砂粒を少量含む	良好	-	
19	図版39	動物埴輪	西側くびれ部、AN13区	-	器面磨滅。馬またはその他の動物。胴部から脚部付け根付近か。径13mmの穿孔あり。	外・内)5YR6/6橙	2mm以下の白色、褐色の砂粒を全体に含む	良好	-	
20	図版39	動物埴輪	西側くびれ部	-	器面磨滅。馬またはその他の動物。脚部付け根付近か。ナデ調整。	外・内)5YR6/8橙	3mm以下の褐色の礫、白色砂粒を含む	良好	-	
21	図版39	動物埴輪(脚部)	西側くびれ部	-	器面磨滅。比較的薄手で脚端部を粘土貼り付けにより肥厚。23~46は形態、色調、胎土が類似し同一個体の可能性あり。	外・内)5YR6/8橙	2mm以下の白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	
22	図版39	動物埴輪(脚部)	AN8区	-	器面磨滅。比較的薄手で脚端部を粘土貼り付けにより肥厚。内面は板状工具によるナデ。	外)5YR5/6明褐 内)5YR6/6橙	3mm以下の白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
25	図版39	動物埴輪(脚部)	西側くびれ部、AN8・12・13区	底部直径9.2-9.7cm	器面磨減。比較的薄手で脚端部を粘土貼り付けにより肥厚。脚部径は上部で直径約9.5cm。	外・内)5YR6/8橙	5mm大の片岩を含む、5mm以下の白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	
26	図版39	動物埴輪(脚部)	AN3区、AN12区	-	器面磨減。比較的薄手で脚端部を粘土貼り付けにより肥厚。外面はタテハケ後ナデ。	外・内)5YR6/6橙～7.5YR6/6橙	2mm以下の白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	
27	図版39	動物埴輪(脚部)	西側くびれ部、AN1区	-	器面磨減。脚端部を粘土貼り付けにより大きく肥厚。外面タテハケのちナデ。脚部径は上部で11cm。形態、色調、胎土が類似し27・28は同一個体か。	外)2.5YR5/6明赤褐 内)5YR5/6明赤褐	4mm以下の白色の砂粒を多く含む、2mm以下の片岩を含む	良好	-	
28	図版39	動物埴輪(脚部)	西側くびれ部、Atr1区	-	器面磨減。脚端部を粘土貼り付けにより大きく肥厚。外面ナデ。脚部径は復元10cm。27・28は同一個体か。	外・内)5YR5/8明赤褐	5mm以下の片岩、白色の砂粒を多く含む	良好	-	
29	図版40	人物埴輪(腕部)	横穴式石室攪乱土	-	前腕部。中央に径5mmの小孔。掌部に剥離痕が認められ、形状から器物等を手に持つ表現か。	外)5YR6/6橙	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
30	図版40	人物埴輪(腕部)	箱穴式石棺付近	-	前腕部。中央に径7mmの小孔。他の腕部に比し大型品であり、力士などの大形の人物か。	外)2.5YR5/6明赤褐	8mm以下の片岩、砂粒を少量含む	良好	-	
31	図版40	人物埴輪(腕部)	西側くびれ部	-	中空に成形し、胴部との接合部に幅10～19mmの剥離痕。掌の表現は著しく簡略化する。	外)5YR5/8明赤褐	3mm以下の砂粒を含む	良好	-	
32	図版40	人物埴輪(腕部)	Aトレンチ表土直下	-	上腕部が中空、前腕部付近が中空。掌の表現は簡略化する。	外・内)5YR5/6明赤褐～7.5YR5/4にぶい褐	5mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
33	図版40	人物埴輪(腕部)	西側くびれ部	-	上腕部が中空、前腕部が中空。掌に指が表現され、親指の位置から右腕と推定される。胴部との接合部に幅11～23mmの剥離痕。	外・内)5YR6/6橙～5YR5/6明赤褐	7mm以下の白色、褐色の砂粒を多く含む	良好	-	
34	図版40	人物埴輪(腕部)	西側くびれ部	-	肩から腕部。上腕部が中空、前腕部が中空。磨減するが、掌は指が表現され形状より左腕と推定される。形態、胎土、色調から33と同一個体か。	外・内)5YR6/6橙～5YR4/2灰褐	4mm大の片岩を含む、3mm以下の白色、褐色の砂粒を多く含む	良好	-	
35	図版40	人物埴輪(美豆良)	Atr1区	-	頭部に貼り付けられた美豆良か。端部は径24～27mm。	外)2.5YR5/8明赤褐	6mm以下の白色、褐色砂粒を含む	良好	-	
36	図版40	人物埴輪(美豆良)	西側くびれ部	-	頭部に貼り付けられた美豆良か。端部は径33～23mm、端部平坦面に径7mmの竹管状工具による刺突。	外)2.5YR5/8明赤褐～5YR5/6明赤褐	4mm以下の砂粒を含む	良好	-	
37	図版40	人物埴輪(巫女か)	AE1区、AN2・8区、AS1区	-	器面磨減。スカート状に開く下裳の先端付近か。	外・内)5YR5/8明赤褐	4mm以下の砂粒を含む	良好	-	
38	図版40	人物埴輪(巫女)	西側くびれ部、AN13区、AN8区、2tr1区	-	巫女袂袷衣か。筒状の胴部側面に、扁平な粘土帯が断面U字状に取り付き袂袷衣を表現。袂袷衣内部はタテハケ後ナデ。	外)5YR6/8橙	6mm以下の片岩、砂粒を含む	良好	-	
39	図版41	家形埴輪(棟木か)	5トレンチ	-	小型の家形埴輪の棟木か。下面はヘラ状工具によるナデ。端部直径は34mm。	外)5YR5/6明赤褐	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
40	図版41	家形埴輪	AN8区	-	器面磨減。屋根部破片か。扁平で、径10mmの孔を斜め方向から穿つ。	外・内)5YR6/8橙	6mm以下の砂粒を含む	良好	-	
41	図版41	家形埴輪	横穴式石室攪乱土	-	屋根部破片か。扁平で、径10mmの孔を斜め方向から穿つ。外面にハケメ、端部はナデにより面取り。ハケの密度は7本/1cm	外・内)5YR5/6明赤褐	4mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
42	図版41	家形埴輪	横穴式石室攪乱土	-	器面磨減。屋根部破片か。扁平で、径9mmの孔を斜め方向から穿つ。	外・内)5YR6/8橙	4mm以下の砂粒が2個、その他砂粒を含む	良好	-	
43	図版41	家形埴輪	表土攪乱土	-	屋根部破片か。扁平で、径9mmの孔を斜め方向から穿つ。外面にハケメ、端部はナデにより面取り。ハケの密度は6本/1cm。41と同一個体。	外・内)5YR6/8橙～10YR7/2にぶい黄橙	3mm以下の砂粒を含む	良好	-	
44	図版41	家形埴輪(壁部～基部)	後円部墳頂横穴式石室攪乱土	-	器面磨減。壁部～基部破片。壁部に幅4mmの沈線が2条あるか。端部外面に幅25mmの突帯の粘土貼り付け痕。46と同一個体か。	外・内)5YR6/8橙	2mm以下の白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	
45	図版41	家形埴輪(基部か)	西側くびれ部	-	器面磨減。基部破片か。端部は断面三角形で内側に肥厚する。	外・内)5YR6/6橙	赤色酸化粒を含む、1mm以下の砂粒を含む	良好	-	
46	図版41	家形埴輪(基部)	横穴式石室攪乱土	-	基部破片。端部外面に幅25mmの突帯の貼り付け痕あり。貼り付け痕部分はヨコハケ。ハケの密度は6本/1cm。	外・内)5YR6/6橙	5mm以下の乳白色の砂粒、1mm以下の白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	
47	図版41	家形埴輪(基部)	横穴式石室攪乱土	-	器面磨減。基部破片。端部は断面三角形で内側に肥厚する。外面はタテハケ後ナデ。ハケの密度は4本/1cm。48～50は同一個体か。	外・内)5YR6/8橙	5mm以下の白色・褐色の砂粒を多く含む	良好	-	
48	図版41	家形埴輪(基部)	横穴式石室攪乱土	-	器面磨減。基部破片で、妻側と平側の屈曲部付近か。扁平で、端部は断面三角形で内側に肥厚する。内外面はナメハケメ後ナデ。ハケの密度は3～4本/1cm。48～50は同一個体か。	外)2.5YR5/8赤褐色 内)5YR6/6橙	5mm以下の白色・褐色の砂粒を多く含む、7mm大の片岩を含む	良好	-	

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
49	図版41	家形埴輪(基部)	横穴式石室攪乱土	-	器面磨滅。基部破片。扁平で、端部は断面三角形で内側に肥厚する。内外面はナナメハケメ後ナデ。48～50は同一個体か。	外)5YR6/6橙 内)5YR6/8橙	5mm以下の白色・褐色の砂粒を多く含む	良好	-	
50	図版41	家形埴輪(基部)	Fトレンチ墳頂表土	-	器面磨滅。壁部破片。扁平で、端部は断面三角形で内側に肥厚する。内外面はタテハケメ後ナメハケメ後ナデ。ハケの密度は4～5本/1cm。48～50は同一個体か。	外・内)5YR6/8橙	5mm以下の白色・褐色の砂粒を多く含む	良好	-	
51	図版42	器財埴輪(大刀盾部か)	西側くびれ部	-	器面磨滅。大刀の盾部破片か。厚み12～13mmの薄く扁平な形状を呈する。上部は欠損。	外・内)5YR5/8明赤褐	5mm以下の砂粒を含む	良好	-	
52	図版42	器財埴輪(大刀盾部か)	横穴式石室攪乱土	-	大刀の盾部破片か。円筒部に幅約4.5cmの板状の粘土が接合。前面はハケ後ナデ。ハケの密度は6本/1cm。盾部左側か。53・53と同一個体か。	外)2.5YR6/8橙 内)7.5YR7/6	4mm以下の砂粒を含む	良好	-	
53	図版42	器財埴輪(大刀盾部か)	横穴式石室攪乱土	-	大刀の盾部破片か。円筒部に幅約4.5cmの板状の粘土が接合。前面はハケ後ナデ。ハケの密度は6本/1cm。盾部右側か。53・53と同一個体か。	外)5YR6/8橙	5mm以下の砂粒を含む	良好	-	
54	図版42	器財埴輪(蓋笠部か)	表土攪乱土	-	器面磨滅。外面ハケメ後ナデ。笠縁先端は面をもちヨコナデにより凹む。内側接合部にハケメ。ハケの密度は6本/1cm。笠縁の復元径は約34cm。	外)5YR5/4にぶい赤褐 内)5YR6/6橙	赤色酸化粒を含む、5mm以下の石英、長石、砂粒を多く含む	良好	25%	
55	図版42	器財埴輪(蓋笠部か)	Bトレンチ後円部墳頂	-	器面磨滅。外面ハケメ後にナデ。笠縁先端は面をもちヨコナデにより凹む。内側接合部は指サエトハケメ。ハケの密度は5本/1cm。笠縁の復元径は約35cm。	外)5YR5/6明赤褐 内)5YR6/6橙	1.3cm大の片岩を含む、5mm以下の石英、長石、砂粒を多く含む	良好	15%	
56	図版42	器財埴輪(蓋笠部か)	西側くびれ部	-	器面磨滅。外面ハケメ後にナデ。先端は面をもちヨコナデにより凹む。内側接合部にハケメ。馬形埴輪の鞍の可能性もある。	外・内)5YR5/6明赤褐	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
57	図版42	器財埴輪(盾または石見型埴輪)	2トレンチ	-	胎土・色調が他の大谷山6号墳出土埴輪とは異なる。盾面ないし形象部。二条一括沈線により線刻が施される。条線幅は3～3.5mm、条線間は3mm。文様は直弧文か。背面に幅約30mmの粘土帯を貼り付けて指ナデ。	外)10YR7/3にぶい黄橙 内)5YR6/6橙	1cm大の片岩を含む、7mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
58	図版43	不明形象埴輪	Dトレンチ	-	馬のたて鬚の結び飾りか、家形埴輪の棟木の可能性がある。端部は平坦で長径40mm、短径31mm。	外・内)5YR6/6橙～ 7.5YR7/6橙	5mm以下の白色、黒色の砂粒を全体に含む	良好	-	
59	図版43	不明形象埴輪	西側くびれ部	-	家形埴輪屋根部品か。突起状を呈する。	外・内)7.5YR7/6橙	5mm以下の白色礫、1mm以下の白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	
60	図版43	不明形象埴輪	横穴式石室攪乱土	-	幅28mm。丸みのある突起状。扁平な本体に貼り付いていた部品か。	外・内)5YR6/6橙	2mm以下の白色砂粒を含む	良好	-	
61	図版43	不明形象埴輪	横穴式石室攪乱土	-	直径32mmの円形の突起が貼り付く。人物埴輪の部品の可能性あり。	外・内)5YR6/6橙	2mm以下の白色、褐色砂粒を含む	良好	-	
62	図版43	不明形象埴輪	Cトレンチ(N3区)	-	幅15mm。人物埴輪の美豆良の可能性あり。	外・内)5YR6/8橙	2mm以下の白色の砂粒を含む	良好	-	
63	図版43	不明形象埴輪	西側くびれ部	-	幅16mm。人物埴輪の部品の可能性あり。	外・内)5YR6/6橙～ 7.5YR6/4にぶい橙	2mm以下の砂粒を含む	良好	-	
64	図版43	不明形象埴輪	横穴式石室攪乱土	-	幅10mmの粘土紐を「の」の字状に曲げて成形。人物埴輪部品か。	外・内)7.5YR7/6橙～ 7.5YR6/6橙	1mm以下の白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	
65	図版43	不明形象埴輪	西側くびれ部	-	棒状部に幅11mmの粘土帯が螺旋状に巻き付く。人物埴輪の美豆良ないし、馬のたて鬚の結び飾りか。	外・内)2.5YR5/6明赤褐 ～5YR5/4にぶい赤褐	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
66	図版43	不明形象埴輪	横穴式石室閉塞石	-	径5mmの竹管状工具による刺突。	外・内)5YR6/8橙	2mm以下の白色、黒褐色の砂粒を含む	良好	-	
67	図版43	不明形象埴輪	横穴式石室攪乱土	-	復元径35mmの筒状を呈する。	外・内)5YR6/6橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
68	図版43	不明形象埴輪	羨道前庭	-	器面磨滅。上部を欠損。板状の粘土の部品で、断面形から扁平な本体に貼り付いていた部品か。	外)5YR5/8明赤褐	3mm以下の砂粒を少量含む	良好	-	
69	図版43	不明形象埴輪	Atr5区	-	器面磨滅。上部を欠損。板状の粘土の部品で、断面形からやや湾曲する形態の本体に貼り付いていたものか。	外)5YR6/8橙	砂粒を含む	良好	-	
70	図版43	不明形象埴輪	AS4区	-	器面磨滅。弧状を呈する本体に貼り付いていた痕跡。馬の鞍か人物埴輪(力士)頭部の可能性あり。	外)5YR5/8明赤褐 内)7.5YR6/6橙	3mm以下の片岩、白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	
71	図版43	不明形象埴輪	AN13区	-	幅17mm、高さ12mmの突起が一条貼り付く。人物埴輪とすれば、力士のふんどしに類似。	外・内)5YR6/6橙	5mm以下の砂粒を含む	良好	-	
72	図版43	不明形象埴輪	後円部墳頂	-	器面磨滅。幅22mmの粘土帯が貼り付いていた痕跡。人物頭部または馬頭部の可能性もある。	外)5YR5/6明赤褐 内)5YR6/6橙	3mm以下の白色、褐色の礫・砂粒、雲母を含む	良好	-	

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
73	図版43	不明形象埴輪	西側くびれ部	-	器面磨減。やや湾曲する形状で、幅3mmの波状の沈線が一条施される。	外・内)5YR6/6橙	5mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
74	図版43	不明形象埴輪	横穴式石室攪乱土		上面に粘土貼り付け痕あり。内外面ナデ。	外)5YR6/6橙 内)7.5YR6/6橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
75	図版43	不明形象埴輪	西側くびれ部		剥離痕から径約7cm程度の円形の部品が接合していたか。内外面ナデ。74・75は同一地点から出土し、特徴から同一個体か。	外・内)5YR6/6橙	5mm以下の白色、褐色の砂粒を含む	良好	-	
76	図版43	不明形象埴輪	西側くびれ部		内外面ナデ。74・75は同一地点から出土し、特徴から同一個体か。	外・内)5YR6/8橙	4mm以下の褐色の礫、白色砂粒を含む	良好	-	
77	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪1号	底径16.0cm(復元)	外面はタテハケ・ナナメハケ後にナデ、内面はタテハケ後にナデ。	外)5YR5/6明赤褐 内)10YR6/4にぶい黄橙 ~5YR5/6明赤褐	7mm大の片岩を含む、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	14%	旧を号
78	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪2号	底径17.5cm	外面はタテハケ後にナデ、内面は底部付近を指ナデ。	外・内)7.5YR6/4にぶい橙	7mm以下の赤色酸化粒を含む、7mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む	良好	62%	旧を号
79	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪3号	口径28.0cm(復元)	器面磨減。口縁端部内面はヨコナデによる凹み。外面はヨコナデにより外方へ肥厚。	外・内)2.5YR6/6(橙)	片岩、赤色酸化粒、その他の砂粒を多く含む	良好	20%	旧ぬ号
80	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪4号	底径20.0cm(復元)	器面磨減。外面はタテハケ・ナナメハケ、板状工具によるオサエ。内面は指ナデ。	外)10YR6/3にぶい黄褐 内)7.5YR5/4にぶい褐	1.4cm大の片岩を含む、赤色酸化粒を含む、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	14%	旧り号
81	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪5号	底径16.4cm(復元)	外面は板状工具によるオサエ、内面はナナメハケ、底部付近は指オサエ。	外・内)5YR6/6橙	最大で1cm強までの赤色酸化粒とその他の砂粒を多量に含む	良好	25%	旧ち号
82	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪6号	底径14.0cm(復元)	器面磨減。外面は板状工具によるオサエ、内面は底部付近は指オサエ。	外)5YR6/6橙~ 10YR6/4にぶい黄橙 内)10YR6/3にぶい黄橙	赤色酸化粒を含む、4mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む	良好	30%	旧と号
83	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪7号	底径14.0cm(復元)	器面磨減。外面は調整不明。内面は指ナデ。	外・内)2.5YR6/6橙	片岩、赤色酸化粒、その他の砂粒を多く含む	良好	12%	旧へ号
84	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪8号	底径16.0cm(復元)	外面は板状工具によるオサエ。内面は底部付近を指ナデ。	外)10YR6/4にぶい黄褐 ~2.5YR5/6明赤褐 内)5YR6/6橙	5mm大の片岩を含む、5mm大の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	15%	旧5号
85	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪9号	底径20.0cm(復元)	器面磨減。外面はナデか。内面は指ナデ。	外)5YR6/6橙 内)5YR6/8橙	7mm大の片岩を含む、7mm以下の砂粒を多く含む	良好	20%	旧4号(に号)
86	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪10号	底径14.6cm	器面磨減。外面はナデか。内面は指ナデ。一部に下段突帯が残存し、底面からの高さ13.2cm。	外・内)5YR6/6橙	1.5cm以下の片岩、9mm以下赤色酸化粒、それ以下の砂粒を多く含む	良好	62%	旧3号(は号)
87	図版44	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪11号	底径15.5cm	器面磨減。外面はナデか、内面はタテハケ、底部付近を指ナデ。底面から下段突帯までの高さ17.2cm。	外・内)5YR6/6橙~ 10YR7/4にぶい黄橙	5mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む	良好	100%	旧2号(ろ号)
88	図版45	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪12号	底径16.2cm	器面磨減。外面は板状工具によるナデか。内面はナデ、底部付近を指ナデ。	外・内)2.5YR6/6	1cm以下の片岩を少量含む 1mm~4mm大の赤色酸化粒とその他の砂粒を多く含む	良好	98%	旧1号(い号)
89	図版45	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪13号	-	器面磨減。外面は板状工具によるオサエ。内面は指ナデ。下段突帯は断面やや台形状。	外)7.5YR6/6橙 内)5YR6/8橙	3mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	-	旧C'号
90	図版45	円筒埴輪	8トレンチ円筒埴輪14号	底径17.2cm	外面はタテハケのちヨコハケ、底部付近は板状工具によるオサエ。内面はタテハケ、ヨコハケ、底部付近指オサエ。下段突帯は断面M字状で、底面からの高さ19.5cm。ハケの密度は7本/1cm。	外・内)5YR6/6橙	約9mm以下の赤色酸化粒とその他の砂粒を多く含む	良好	78%	旧B'号
91	図版45	円筒埴輪	Dトレンチ円筒埴輪15号	口径31.0cm(復元)	外面は器面磨減。内面はヨコハケ。口縁端部内面はヨコナデによりわずかに凹み、外面は肥厚。ハケの密度は6本/1cm。突帯は断面台形状で、口縁端部からの間隔は6.8cm。	外・内)5YR6/6橙	5mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	17%	旧A号(92と同一個体として取り上げ)
92	図版45	円筒埴輪	Dトレンチ円筒埴輪15号	底径17.1cm	外面はタテハケのちヨコハケ、底部付近は板状工具によるオサエ。内面はナナメハケ、ヨコハケのち一部指オサエ。下段突帯は断面M字状で、底面からの高さ14.2cm。底部に沈線。下段突帯の上に透孔。ハケの密度は6本/1cm。	外・内)5YR6/6橙	5mm大の片岩を含む、5mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を多く含む	良好	87%	旧A号
93	図版45	朝顔形埴輪	Dトレンチ円筒埴輪16号	口径38.8cm(復元) 頸径19.6cm(復元)	器面磨減。口縁端部内外面はヨコナデによる肥厚。口縁部及び頸部の突帯は断面台形状。	外・内)5YR6/6橙	6mm以下の片岩、5mm以下の赤色酸化粒とその他の砂粒を含む	良好	-	旧B号(94と同一個体として取り上げ)

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
94	図版45	朝顔形埴輪	Dトレンチ 円筒埴輪16号	底径19.6cm	器面やや磨減。タテハケのちヨコハケ、指オサエ。内面はナメハケ、底部付近は指オサエ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ16.2cm。ハケの密度は4～5本/1cm。	外)5YR6/8橙 内)7.5YR7/8黄橙	最大で1cmまでの片岩と赤色酸化粒とその他の砂粒を多く含む	良好	100%	旧B号
95	図版45	円筒埴輪	1トレンチ 円筒埴輪17号	底径17.5cm(復元)	外面は板状工具によるオサエ。内面はタテハケ、底部付近は板状工具によるナデ、指オサエ。	外)5YR6/6橙 内)5YR6/6橙～ 10YR6/4にぶい黄橙～ 10YR5/1褐灰	片岩を含む、4mm以下の砂粒を含む、赤色酸化粒を含む	良好	50%	旧C号
96	図版46	円筒埴輪	1トレンチ 円筒埴輪20号	底径15.8cm	外面はタテハケ、ヨコハケ、板状工具によるオサエ。内面はタテハケのちナデ、指オサエ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ15.5cm。下段突帯の上に透孔。ハケの密度は6本/1cm。	外・内)5YR6/6橙	8mm以下の砂粒を多く含む、片岩を含む	良好	98%	旧F号
97	図版46	円筒埴輪	西側くびれ部	底径15.8cm(復元)	器面磨減。外面は調整不明。内面はナメハケ、底部付近指オサエ。ハケの密度は9本/1cm。	外・内)5YR6/6橙～ 10YR7/4にぶい黄橙	4mm大の片岩を含む、4mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	38%	円筒埴輪21号(旧G号)または22号(旧H号)か
98	図版46	円筒埴輪	1トレンチ 円筒埴輪23号	底径15.5cm	外面はナデ調整。内面は器面磨減するがハケメのちナデ、底部付近はユビナデ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ17.7cm。	外)5YR6/6橙～ 7.5YR7/4にぶい橙 内)5YR6/6橙	6mm大の片岩を含む、6mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	100%	旧I号
99	図版46	円筒埴輪	西くびれ部 円筒埴輪24号	底径14.6cm	外面は板状工具によるオサエ。内面は板ナデ。	外)5YR7/6橙 内)10YR7/6黄橙	5mm以下の片岩、赤色酸化粒、砂粒を多量に含む	良好	75%	旧J号
100	図版46	円筒埴輪	2トレンチ 円筒埴輪25号	底径16.4cm	外面は器面磨減。板状工具によるオサエ。内面は指ナデ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ13.2cm。下段突帯の上に透孔。	外・内)5YR6/6橙	5～7mmの礫を少量、1～6mm位の赤色酸化粒を多量、その他の片岩、砂粒を全体に含む	良好	100%	旧イ号
101	図版46	円筒埴輪	2トレンチ 円筒埴輪26号	底径16.0cm	器面磨減。外面は板状工具によるオサエ。内面は板状工具によるナデ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ12.5cm。下段突帯の上に透孔。	外・内)5YR6/6橙	1cm大の片岩を含む、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	98%	旧口号
102	図版46	円筒埴輪	2トレンチ 円筒埴輪27号	底径16.7cm	器面磨減。外面は板状工具によるオサエ。内面は指オサエ、底部付近指ナデ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ13.0cm。下段突帯の上に透孔。	外)5YR6/6橙 内)5YR6/6橙～ 10YR6/4明黄褐	5mm大の結晶片岩を含む、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	83%	旧ハ号
103	図版46	円筒埴輪	2トレンチ 円筒埴輪28号	底径17.8cm	器面磨減。外面は板状工具によるオサエ。内面底部付近指ナデ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ14.0cm。	外・内)5YR6/6橙	9mm以下の赤色酸化粒を多量に、7mm以下の砂粒を多量に含む	良好	98%	旧ニ号
104	図版47	円筒埴輪	2トレンチ 円筒埴輪29号	底径16cm	器面磨減。外面は板状工具によるオサエ。内面底部付近指オサエ、指ナデ。下段突帯は断面台形状で底面からの高さ14.5cm。下段突帯の上に透孔。	外)5YR6/6橙～ 10YR6/3にぶい黄 内)5YR6/6橙	3mm大の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む、片岩を含む	良好	95%	旧ホ号
105	図版47	円筒埴輪	2トレンチ 円筒埴輪30号	底径17.4cm(復元)	器面磨減。外面は調整不明。内面底部付近指ナデ。	外・内)5YR6/6橙	9mm大(1個)と1～7mm位までの赤色酸化粒を少量含む	良好	16%	旧ヘ号
106	図版47	円筒埴輪	3トレンチ 円筒埴輪31号	底径17.5cm	器面磨減。外面は板状工具によるオサエ。内面はハケメ、板状工具によるナデ、指オサエ。ハケの密度は7本/1cm。	外・内)5YR6/6橙	5mm大の片岩を含む、5mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	73%	旧ホ'号
107	図版47	円筒埴輪	3トレンチ 円筒埴輪32号	底径16.5cm(復元)	外面は板状工具によるオサエ。内面はハケメ、底部付近指ナデ。	外・内)5YR6/6橙	5mm以下の片岩、5mm以下の砂粒、赤色酸化粒を含む	良好	20%	旧ニ'号
108	図版47	円筒埴輪	3トレンチ	底径16.6cm(復元)	器面磨減。外面はタテハケのちヨコハケ、ナデ、板状工具によるオサエ。内面はタテハケのちヨコハケ、底部付近指オサエ。ハケの密度は6～7本/1cm。	外・内)5YR6/6橙	6mm以下の片岩とその他の砂粒を多く含む	良好	38%	108・109は調査時に33号(旧ハ'号)として取り上げているが別個体。
109	図版47	円筒埴輪	3トレンチ	底径16.6cm(復元)	器面磨減。外面はタテハケのちヨコハケ、ナデ、板状工具によるオサエ。内面はタテハケの、底部付近指ナデ。ハケの密度は6本/1cm。	外・内)5YR6/6橙	1cm大の片岩を含む、5mm大の砂粒を多く含む	良好	41%	108・109は調査時に33号(旧ハ'号)として取り上げているが別個体。32号(ニ'号)として取り上げた破片が接合。
110	図版47	円筒埴輪	3トレンチ 円筒埴輪34号	底径17.8cm(復元)	器面磨減。外面は板状工具によるナデか。内面は底部付近指オサエ。	外・内)5YR6/6橙	約8mm長石が1個、その他の砂粒を多く含む	良好	25%	旧ロ'号
111	図版47	円筒埴輪	前方部前端 円筒埴輪35号	底径18.4cm	外面はタテハケ、ヨコハケ、底部付近は板状工具によるオサエ。内面はタテハケのち一部指オサエ。下段突帯は断面M字状で、底面からの高さ18.2cm。ハケの密度は7本/1cm。	外・内)5YR6/8橙～ 5YR5/8明赤褐	最大で7mmの片岩とその他の砂粒を多く含む	良好	96%	旧a号
112	図版48	円筒埴輪	Bトレンチ 円筒埴輪36号	底径17.0cm	外面は下段突帯より上はヨコハケ、基底部は板状工具によるオサエ。内面は指オサエとナデ。下段突帯は断面台形状で、底面からの高さ14.0cm。ハケの密度は7本/1cm。	外・内)5YR6/6橙～ 7.5YR6/4にぶい黄橙	4mm大の片岩を含む、5mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	100%	旧イ'号

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
113	図版48	円筒埴輪	東側くびれ部 円筒埴輪38号	底径15.0cm	外面はタテハケ、ヨコハケのちナデ。内面はタテハケ後ナデ、指ナデ。	外・内)5YR6/6橙	5mm大の片岩を含む、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	72%	旧甲号
114	図版48	円筒埴輪	後円部 円筒埴輪39号	底径17.4cm (復元)	外面は板状工具によるオサエ。内面は板状工具によるナデ、指オサエ。	外)7.5YR6/4にぶい橙 ～5YR6/8橙 内)5YR6/6橙	5mm大の片岩を含む、5mm以下の砂粒を多く含む、赤色酸化粒を含む	良好	25%	旧乙号
115	図版48	円筒埴輪	後円部 円筒埴輪40号	底径16.4cm	器面磨減。外面は調整不明。内面はハケのち指ナデ	外・内)2.5YR6/6橙	5mm以下の片岩、赤色酸化粒、その他の砂粒を多く含む	良好	17%	旧丙号
116	図版48	朝顔形埴輪	AS4区	口径39.2cm (復元) 頸部 径20.2cm (復元)	器面磨減。口縁端部は内面がヨコナデ、外面が強いヨコナデにより外側へ肥厚。調整は不明だが体部内外面にハケメあり。頸部突帯の断面はややM字状に凹む。	外・内)5YR6/6橙	約6mm位の片岩と5mm以下の赤色酸化粒を少量含む、その他砂粒を含む	良好	—	
117	図版48	円筒埴輪	AS4区	底径20.6cm (復元)	器面磨減。外面は調整不明だが板状工具によるオサエ痕あり。内面はナデ、指オサエ。	外・内)5YR6/8橙	3mm以下の砂粒を含む	良好	20%	
118	図版48	円筒埴輪	AN6区	底径18.0cm (復元)	外面は板状工具によるオサエ。内面は板状工具によるナデ後指ナデ。	外・内)5YR6/6橙	砂粒を含む	良好	20%	
119	図版48	円筒埴輪	AS17区	—	器面磨減。口縁端部内外面をヨコナデにより肥厚。突帯は断面M字状で、口縁端面からの間隔は7.8cm。	外・内)5YR6/6橙	砂粒を含む	良好	—	
120	図版48	円筒埴輪	2トレンチ	—	器面磨減。口縁端部内外面をヨコナデにより肥厚。	外・内)5YR6/6橙	5mm以下の赤色酸化粒とその他の砂粒を少量含む	良好	—	
121	図版48	朝顔形埴輪	AN15区	—	朝顔形埴輪の口縁部。器面磨減。突帯は断面台形状。	外)5YR6/8橙	3mm以下の赤色粒が少量とその他砂粒を含む	良好	—	
122	図版48	円筒埴輪	Atr5区	底径20.4cm (復元)	外面はナメハケのちナデ。内面はナメハケのちナデ、一部指オサエ。ハケの密度は5本/1cm(内面)。	外・内)5YR5/8明赤褐	8mm以下の赤色酸化粒とその他の砂粒を多く含む	良好	16%	
123	図版48	円筒埴輪	Dトレンチ	底径19.6cm (復元)	器面磨減。外面は調整不明。内面はナメハケメ、指オサエ。	外)5YR6/6橙 内)5YR5/8明赤褐	5mm以下の片岩、赤色酸化粒、その他の砂粒を多く含む	良好	12%	
124	図版48	円筒埴輪	西側くびれ部	底径19.2cm (復元)	器面磨減。外面は調整不明だが一部ハケメあり。内面は、板状工具によるナデ、指オサエ。下段突帯の底面からの高さ15.0cm。	外)2.5YR8/5明赤褐 内)10YR6/4にぶい黄橙	6mm以下の片岩とその他の砂粒を多く含む	良好	12%	
125	図版48	円筒埴輪	羨道部 攪乱土	—	口縁端部外面は外方へ肥厚。幅3mmの一条の沈線によるヘラ記号。	外・内)2.5YR6/6橙	6mm以下の砂粒を含む	良好	—	
126	図版48	円筒埴輪	羨道上部 攪乱土中	—	外面ヨコハケ。内面ナデ。口縁端部内外面をヨコナデにより肥厚。ハケの密度は7本/1cm	外・内)2.5YR6/6橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	—	
127	図版48	朝顔形埴輪	閉塞石	—	外面ヨコハケ。内面は器面磨減により不明。突帯は断面台形状で、強い指オサエ痕あり。ハケの密度は6本/1cm	外)5YR6/6橙 内)7.5YR7/6橙	2mm以下の褐色、白色の砂粒を含む	良好	—	
128	図版48	円筒埴輪	Bトレンチ	—	外面ヨコハケ。内面ヨコハケ。口縁端部内外面をヨコナデにより肥厚。ハケの密度は6本/1cm	外・内)5YR6/6橙	砂粒を含む	良好	—	
129	図版48	円筒埴輪	Cトレンチ	—	外面ナメハケ後ナデ。内面器面磨減。口縁端部内外面をヨコナデにより肥厚。幅5mmの1条の沈線によるヘラ記号。	外・内)5YR6/8橙	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	—	
130	図版48	円筒埴輪	Cトレンチ	—	外面は板状工具によるオサエ。内面は指ナデ。	外・内)5YR6/6橙	最大で4mm以下の赤色酸化粒を多く、その他の砂粒を含む	良好	—	
131	図版48	円筒埴輪	Eトレンチ	—	器面磨減。口縁端部内外面をヨコナデにより肥厚。	外・内)5YR6/6橙	4mm以下の片岩が少量、その他の砂粒を含む	良好	—	
132	図版48	円筒埴輪	Fトレンチ	—	外面タテハケ。内面は器面磨減。口縁端部外面をヨコナデにより肥厚。	外・内)5YR6/6橙	4mm大の赤色酸化粒を少量含む、その他砂粒を含む	良好	—	
133	図版48	円筒埴輪	Gトレンチ	—	器面磨減。口縁端部内外面をヨコナデにより肥厚。	外・内)5YR6/8橙	砂粒を含む	良好	—	
134	図版48	円筒埴輪	Hトレンチ	—	器面磨減。口縁端部内外面をヨコナデにより内外方へ肥厚。	外)10YR6/4にぶい黄橙 ～2.5YR5/8明赤褐 内)10YR6/4にぶい黄橙 ～2.5YR6/8橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	—	
135	図版48	円筒埴輪	6トレンチ	—	器面磨減。口縁端部内外面をヨコナデにより内外方へ肥厚。	外)5YR5/6明赤褐 内)5YR5/6明赤褐～ 10YR6/4にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	—	
136	図版48	円筒埴輪	9トレンチ	—	外面ハケメ。口縁端部内外面をヨコナデにより外方へ肥厚。	外・内)5YR5/6明赤褐	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	—	
137	図版48	円筒埴輪	墳頂部 表土中	—	外面はタテハケ。端部外面に板状工具によるオサエ。内面はタテハケ、指オサエ。ハケの密度は5本/1cm	外)7.5YR6/4にぶい橙 ～5YR6/8橙 内)5YR6/6橙	5mm大の石英を含む、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	—	

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
138	図版48	円筒埴輪	墳頂部表土中	-	外面はタテハケ。内面はタテハケ、指オサエ。ハケの密度は6本/1cm	外)5YR5/6明赤褐 内)5YR4/4にぶい赤褐	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	-	
139	図版49	須恵器杯蓋	横穴式石室盗掘坑	口径11.8cm (復元)	天井部が平たく、稜がぶく突出。口縁部は内傾して浅く凹む。天井部外面2分の1を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は左。	外・内・断面)5Y7/1灰白色	密(2mm以下の白色砂粒を含む)	不良	40%	
140	図版49	須恵器杯蓋	横穴式石室床面攪乱土	口径13.6cm 器高4.6cm	天井部が平たく、稜がぶく突出。口縁部は内傾して浅く凹む。天井部外面3分の2を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は左。	外)5Y5/1灰~5Y6/1灰、5Y6/2灰オリーブ 内)7.5Y6/1灰	密(2mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良好	80%	
141	図版49	須恵器杯蓋	横穴式石室床面攪乱土	口径10.3cm (復元) 器高5.4cm (復元)	口縁部が内傾して立ち上がり端部は内傾して面をもつ。底部外面2分の1を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は右。	外・内)2.5Y7/3浅黄	密(1mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	不良	50%	
142	図版49	須恵器杯身	横穴式石室床面攪乱土	口径10.5cm 器高5.35cm	口縁部が内傾して立ち上がり端部は内傾して面をもつ。底部外面3分の2を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は左。	外)5Y7/1灰白 内)7.5Y6/1灰 断面)5Y6/1灰	密(3mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	不良	90%	
143	図版49	須恵器杯身	横穴式石室床面攪乱土	口径12.5cm 器高4.9cm	口縁部がやや垂直気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部外面3分の2を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は右。	外)5Y8/1灰白 内)2.5Y8/2灰白~ 7.5YR6/6橙	密(2mm以下の白色、黒色砂粒を全体に含む)	不良	80%	
144	図版49	須恵器杯身	横穴式石室盗掘坑	口径10cm (復元)	口縁部が内傾して立ち上がり端部は丸くおさめる。	外)N6/0灰~N4/0灰 内)N6/0灰 断面)2.5YR4/3にぶい赤褐	密(1mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良好	20%	
145	図版49	須恵器杯身	横穴式石室床面攪乱土	口径10.3cm (復元)	口縁部が内傾して立ち上がり端部は内傾して面をもつ。底部外面3分の2を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は左。	外・内)2.5Y6/2灰黄 断面)2.5Y6/1黄灰	密(2mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	不良	50%	
146	図版49	須恵器器台	横穴式石室床面攪乱土	口径36.5cm (復元)	杯部。外面は上下を3条1組の突線で区画し、波状文が2段配置。下半は外面に格子タタキ目とカキ目。内面に同心円状の当て具痕。他は回転ナデ。	外)N4/0灰~N5/0暗灰 内)7.5Y6/1灰	密(3mm以下の白色砂粒をわずかに含む)	良好	25%	
147	図版49	須恵器器台	横穴式石室床面攪乱土	脚部端部28.1cm (復元) 残存高18.2cm	146と同一個体の脚部。突線を3段配置して各文様帯に波状文。内面回転ナデ。	外)7.5Y5/1灰~5Y5/2灰オリーブ 内)N4/0灰 断面)N4/0灰	密(1mm以下の白色砂粒をわずかに含む)	良好	50%	
148	図版49	須恵器高杯	横穴式石室床面攪乱土	底径8.4cm (復元)	脚部で、長方形の透孔が3方向にけられる。外面にカキ目。	外・内・断面)7.5Y7/1灰白	密(1mm以下の白色、黒色砂粒を全体に含む)	良好	25%	
149	図版49	須恵器短頸壺	横穴式石室床面攪乱土	口径7.9cm	口縁部は短く直立し端部は丸くおさめる。肩の張りが大き。底部は回転ヘラケズリ。ロクロ回転方向は左。	外)5Y6/1灰、5Y5/1灰 内)5Y5/1灰	密(2mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	60%	
150	図版49	須恵器小型壺	Dトレンナ表道上部攪乱土	口径17~18cm	口縁外面に突線を挟み波状文が2段配置。口縁部、内面は回転ナデ。肩部はタタキ成のち回転ナデ。	外・内)N5/0灰 断面)2.5YR5/8明赤褐	密(2mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	75%	
151	図版49	土師器椀	横穴式石室攪乱土	口径14.2cm (復元) 器高4.7cm (復元)	口縁部内外面をヨコナデ。その他はナデ。	2.5YR5/6明赤褐	緻密(0.1mmの石英を少量含む)	良好	40%	
152	図版49	土師器椀	横穴式石室攪乱土	口径15.2cm (復元)	口縁部内外面をヨコナデ。外面は指オサエ。内面はナデ。	外)2.5YR6/6橙 内)7.5YR7/6橙	緻密(0.1mmの石英、長石を少量含む)	良好	30%	
153	図版49	土師器椀	横穴式石室攪乱土	口径12.3cm (復元) 器高5.5cm	外面はタテハケ・ナメハケ後、内外面をヨコナデ。底部外面はナデ。	外・内)5YR7/6橙	密(1mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	不良	75%	
154	図版49	土師器高杯	横穴式石室攪乱土	口径18.0cm (復元)	高杯杯部。外面は口縁部をヨコナデ、杯底部付近は指オサエ痕。内面ナデ。	2.5YR6/6橙	緻密(0.1mmの石英を少量含む)	良好	30%	
155	図版50	須恵器大甕	横穴式石室床面	口径35.6cm (復元) 胴部径62.7cm (復元) 器高81.0cm (復元)	口縁部、肩部、胴部の破片。口縁部は突線で区画された文様帯に波状文が2段配置し、下部はナデ調整。胴部は外面に格子タタキ、内面に同心円文。	外)5Y5/1灰~5Y5/2灰オリーブ 内)7.5Y6/1灰~5Y6/1灰 断面)5Y6/1灰	密(2mm以下の白色、黒色砂粒を全体に含む)	良好	40%	
156	図版50	須恵器杯蓋	縦穴式石室	口径13.8cm 器高4.2cm	天井部が平たく、稜がぶく突出。口縁部はやや外反し、端部は内傾して面をもつが凹みはない。天井部外面3分の2を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は左。	外・内)5Y6/1灰	密(2mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	75%	
157	図版50	須恵器杯身	縦穴式石室	口径11.4cm (復元) 器高4.5cm	口縁部が内傾して立ち上がる。端部を丸くおさめる。底部外面3分の2以上を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は左。	外・内)5Y6/1灰	密(2mm以下の白色砂粒を含む)	良好	60%	
158	図版50	須恵器小型壺	縦穴式石室	口径12cm 器高14.45cm	口縁部は外反して段をもち、端部は面をもつ。回転ナデ。	外)5Y8/1灰白、5Y7/2灰白 内)5Y7/3浅黄 断面)5Y7/2灰白	密(4mm以下の黒色、白色砂粒を含む)	不良	95%	

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
159	図版50	須恵器杯蓋	箱式石棺	口径13.0cm 器高4.8cm	稜がぶく突出しその下が凹む。口縁部端部は内傾して浅く凹む。天井部外面3分の2以上を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は右か。	外)2.5Y8/2灰白 内)2.5Y8/3淡黄 断面)2.5Y8/2灰白	密(2mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	不良	75%	
160	図版50	須恵器小型壺	箱式石棺	胴部径15.3cm 残存高12.9cm	口縁部を欠損。底部付近を格子タタキ。他は回転ナデ。外面の一部に自然釉。	外)2.5Y7/2灰黄~5Y5/1灰 (自然釉部分2.5Y5/2暗灰黄) 内)2.5Y6/1黄灰 断面)5Y5/1灰	密(2mm以下の白色砂粒を含む)	良好	80%	
161	図版50	土師器椀	箱式石棺	口径14.8cm 器高5cm	口縁部内外面をヨコナデ、外面下半にオサエ痕。内面下半をナデ。	外)2.5YR6/8橙 内)5YR6/6橙	密(2mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良好	90%	
162	図版51	須恵器無蓋高杯	西側くびれ部(21号円筒埴輪付近)	-	杯部破片。3方向に透孔あり。底部外面を一部回転ヘラケズリ後回転ナデ。その他は回転ナデ。	外・内・断面)5Y6/1灰	密(2mm以下の白色砂粒を全体に含む、1mm以下の褐色砂粒をわずかに含む)	良好	20%	
163	図版51	須恵器高杯	西側くびれ部(21号円筒埴輪付近)	底径8.4cm (復元)	脚部破片。3方向に透孔あり。回転ナデ。	外)5Y6/2灰オリーブ 内・断面)5Y6/1灰	密(1mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	20%	
164	図版51	須恵器甕	西側くびれ部(21号円筒埴輪付近)	口径約24cm (復元)	口縁部破片。口縁部は外反して段をもち、端部を丸くおさめる。回転ナデ。	外)N3/0暗灰 内)5Y6/3オリーブ黄 断面)5YR4/1褐灰	密(1mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	10%以下	
165	図版51	須恵器器台	2トレンチ	-	杯部破片。外面は上下を突線で区画し、波状文が配置。内面に回転ナデ。	外)N4/0灰 内)5Y5/1灰 断面)5YR5/2褐灰	密(1mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	10%以下	
166	図版50	須恵器甕	3トレンチ	-	胴部下半から底部破片。外面に格子タタキ、内面に同心円文。	外)7.5Y5/1灰~N5/0灰色 内)7.5Y5/1灰~5Y5/2灰オリーブ 断面)7.5Y5/1灰	密(5mm以下の白色礫、1mm以下の白色砂粒を含む)	良好	50%	
167	図版51	須恵器甕	AN区3トレンチ	口径22.8cm (復元)	口縁部破片。口縁部は外反して段をもち、端部を丸くおさめる。回転ナデ。	外)7.5Y4/1灰 内)5Y6/2灰オリーブ 断面)5YR5/2褐灰	密(1mm以下の白色砂粒を全体に含む)	良好	15%	
168	図版51	須恵器杯蓋	Cトレンチ	口径12.2cm (復元)	天井部はやや丸く、天井部と口縁部の境は不明瞭。口縁部端部は内傾して面をもつ。天井部外面3分の2を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は左か。	外)2.5Y5/2暗灰黄 内・断面)5Y5/1灰	密(3mm以下の白色砂粒を多く含む)	良好	30%	
169	図版51	須恵器杯蓋	地区不明	口径12.4cm (復元)	天井部はやや丸く、天井部と口縁部の境は不明瞭。口縁部端部は内傾して面をもつ。天井部外面2分の1を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転方向は左。	外・内・断面)5Y5/1灰	密(2mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良好	40%	
170	図版51	須恵器杯蓋	地区不明	口径11.3cm (復元)	稜がぶくわずかに突出。口縁部端部は内傾して浅く凹む。天井部外面は3分の2を回転ヘラケズリか。他は回転ナデ。	外・内・断面)N5/0灰	密(1mm以下の白色砂粒を多く含む)	良好	25%	
171	図版51	須恵器無蓋高杯	地区不明	口径12.4cm (復元) 底径6.8cm (復元)	杯部は口縁部と底部の間が突出し直下に波状文。底部外面は下半部ケズリ後一部カキメ。脚部は長方形の透孔が3方向。外面にカキ目。他は回転ナデ。	外・内・断面)2.5Y6/1黄灰	密(2mm以下の白色砂粒を含む)	良好	40%	
172	図版51	須恵器小型壺	地区不明	口径15cm (復元)	口縁部破片。口縁部は外反して段をもち、端部を丸くおさめる。外面にカキメ。他は回転ナデ。	外)5Y5/1灰、5YR5/4に ぶい赤褐 内)N4/0灰、5YR5/4に ぶい赤褐 断面)5YR5/4にぶい赤褐	密(2mm以下の白色砂粒を含む)	良好	25%	
173	図版51	須恵器甕	地区不明	頸部径23.2cm (復元)	口縁部下半から肩部破片。肩部外面は格子タタキ後ナデ。肩部内面は同心円文後ナデ。他は回転ナデ。	外)2.5Y7/3浅黄、 2.5Y5/2暗灰黄 内)2.5Y6/2灰黄、 2.5Y5/2暗灰黄 断面)2.5Y5/2暗灰黄	密(2mm以下の白色、黒色砂粒を含む)黒色砂粒を全体に含む)	良好	12%	
174	図版51	土師器高杯	地区不明	-	杯底部内面はナデ。脚部は中実で外面はナデ、内面はヨコナデ。	外)5YR6/6橙 内)7.5YR7/6橙	緻密(0.1mmの石英、長石を多く含む)	良好	90%	

(鉄製品)

No.	図版番号	器種	法量 (いずれも破片のため、完形・破片を問わず現況の法量を記載。)	備考
175	図版52	鉄刀	長さ 7.6cm、幅 2.6cm、厚 0.55cm。	切先。断面は楔形を呈する。平造りの刃部。
176	図版52	鉄刀	長さ 5.3cm、幅 3.1cm、厚 0.6cm。	断面は楔形を呈する。平造りの刃部。
177	図版52	鉄刀	長さ 12.8cm、幅 2.8cm、厚 0.8cm。	断面は楔形を呈する。平造りの刃部。
178	図版52	鉄刀	長さ 8.7cm、幅 2.2cm、厚 0.55cm。	切先。断面は楔形を呈する。平造りの刃部。
179	図版52	鉄刀	長さ 18.3cm、幅 2.35cm、厚 0.6cm。	断面は楔形を呈する。平造りの刃部。
180	図版52	鉄刀	長さ 8.3 m、幅 2.35cm、厚 0.5cm。	断面は楔形を呈する。平造りの刃部。
181	図版52	鉄刀	長さ 11.8cm、幅 1.8cm、厚 0.35cm。	茎部。断面形は長方形。茎尻から関に向かって、緩やかに開く。目釘孔は 2 箇所。
182	図版52	鉄鉞	長さ 6.6cm、幅 1.5cm、厚 1.2cm。	切先。断面は厚い菱形で、中央に鑄を持つ。
183	図版52	鉄鉞	長さ 5.4cm、刃部幅 1.9cm、刃部厚 0.8cm、関部幅 2.3cm、袋部幅 1.6cm、袋部厚 1.3cm。	関部。刃部から関にかけて緩やかに広がる。刃部は断面菱形で中央に鑄をもつ。
184	図版52	鉄鉞	長さ 3.8cm、厚 0.3cm。	袋部。内部に木質付着。
185	図版52	鉄鏃	長さ 4.75cm、幅 1.6cm、厚 0.4cm。	鏃身部片。断面形は三角形を呈し、中央に鑄を持つ。
186	図版52	鉄鏃	長さ 3.35cm、幅 1.0cm、厚 0.3cm。	鏃身部片。断面形は三角形を呈し、中央に鑄を持つ。
187	図版52	U字鋤先	長さ 7.7cm、刃部幅 2.8cm。	着柄部に溝を持つ。
188	図版52	鉄斧	長さ 12.5cm、袋部幅 3.8cm、刃部幅 5.3cm、刃部厚 1.7cm。	袋状鉄斧。袋部の断面は、隅丸方形に近い楕円形を呈する。
189	図版52	貴金具	長さ 2.7cm、幅 0.4cm、厚 0.2cm。	端部欠損。
190	図版52	貴金具	長さ 1.8cm、幅 0.4cm、厚 0.2cm。	端部欠損。
191	図版52	革帯金具	長さ 2.1cm、幅 2.4cm、厚 1.5cm。	爪形。鉞 (3 箇所) を打つ。そのうち 1 箇所は鉞の痕跡のみ。
192	図版52	吊金具	方形部幅 2.4cm、鈎部幅 0.5cm、鉞頭径 0.4cm、鉞長 0.8cm。	方形部に 2 カ所の鉞を打つ。上半欠損。
193	図版52	革帯金具	長さ 2.3cm、幅 2.4cm、厚 0.1cm。	爪形。鉞 (3 箇所) を打つ。袋状鉄斧に鑄着。
194	図版52	革帯金具	長さ 1.4cm、幅 2.3cm、厚 0.25mm。	爪形。下半部欠損。鉞 (1 箇所) を打つ。
195	図版52	絞具	長さ 3.8cm、厚 0.75cm。	断面が円形を呈する棒状の鉄製品で、緩やかにカーブする。

(装身具)

No.	図版番号	種類	材質	最大径 (mm)	最大長 (mm)	上面孔径 (mm)	下面孔径 (mm)	重量 (g)	色調	残存率 (%)	出土位置	備考
196	図版52	管玉	碧玉	9	23.0	2	0.5	3.82	深緑色	100	玄室 (奥壁より 80cm、 右側壁より 30cm)	片面穿孔
197	図版52	管玉	碧玉	9	22.0	2.5	1.5	3.53	深緑色	100	玄室 (奥壁より 120cm、 右側壁から 90cm)	片面穿孔
198	図版52	管玉	碧玉	8.5	21.0	2.5	0.5	3.28	深緑色	100	玄室 (奥壁より 25.5cm、 右側壁より 62.5cm) 床面直上	片面穿孔
199	図版52	管玉	碧玉	6	14.5	2	1	0.97	深緑色	100	玄室 (奥壁から 10cm、 左側壁より 10cm)	片面穿孔
200	図版52	管玉	碧玉	6	17.0	2	1.5	1.07	淡緑色	100	玄室 (玄門より 2 m)	両面穿孔

第6章 大谷山 39号墳

第1節 発掘調査

(1) 調査の概要

当該地は、昭和47年に民間業者等の採土工事に先立つ現地踏査とその後のトレンチ調査の結果、古墳であることが判明し、大谷山39号墳と呼称された。

調査では、墳丘規模や構造を明らかにするために墳頂部を中心に墳丘の主軸方向と主軸直交方向に調査区を設定しているが、蜜柑畑の開墾による掘削の影響を受け墳丘及び旧地形は著しく損なわれており、南側を除いて墳丘裾部については確認できていない。したがって次節で述べる墳丘形状や規模等については、一部のトレンチの成果を基に推定したものである。

墳頂部では2基の埋葬施設（粘土郭の断面及び箱式石棺）が確認されたため、調査区を拡張し主体部全体の調査をおこなっている。

なお、調査終了後に大谷山39号墳は消滅した。

(2) 墳丘

大谷山より北東に派生した尾根は標高約70m付近から急傾斜で下方に至り、標高38m地点で舌状の地形をつくり出している。大谷山39号墳はこの舌状地に築造されている。周囲には古墳等は確認できず単独の立地を示す。

当該地は、蜜柑畑の開墾に伴い掘削されているため、墳丘の形状及び規模は明確にしがたいが、埋葬施設の位置及び調査区南側の地山整形痕跡等から推定すると直径20m超の円墳であった可能性が高い。

基本層序は、第1層から第3層が表土及び蜜柑畑開墾時の客土、第4層及び第5層は流土、第6層から第45層は墳丘盛土、第46層が地山にあたる。

墳丘は、東側及び西側で開墾による大幅な削平を受けているが、埋葬施設が位置する中央部付近から北側にかけては最大で高さ1.5mの盛土を測る。地山が南側から北側にかけて緩やかに傾斜し、現存地での墳丘の高さは約2.5mを測る。

盛土直下から旧表土に相当する層が確認されていないことや南側で地山整形痕跡が認められることから、旧表土を除去し、地山をある程度整形した後に盛土を施したものと考えられる。地山（第46層）は岩盤層で北側から南側にかけて緩やかに傾斜し比高差約2.5mを測る。

墳丘盛土（第6層から第45層）は地山上に10cmから30cmの厚さで水平に積み上げられており、地山の傾斜に対応して南側に比べて北側に盛土がより厚く積まれている。一方、墳丘東側では後世の削平のため墳丘盛土及び旧地形は著しく改変されている。墳丘は、北側では地山上に約1mの高さまで、盛土である地山起源と考えられる礫混じりの赤褐色土層と細かな礫を含む緑色の粘質土層を交互に積み上げ（第31層から第45層）、標高37m付近で南側の地山に取り付き、平坦面を作り出している。さらにその上に、いずれも礫を含む暗褐色土層と黄褐色土層が交互に積み上げられ（第25層から第30層）墳丘を構築している。墳丘北側では、墳丘盛土である第45層が調査区端まで続いていることから、墳丘裾は調査区端より北側に位置すると考えられる。南側では、標高38m付近で地山整形痕跡がみられ、墳丘裾と推定される。

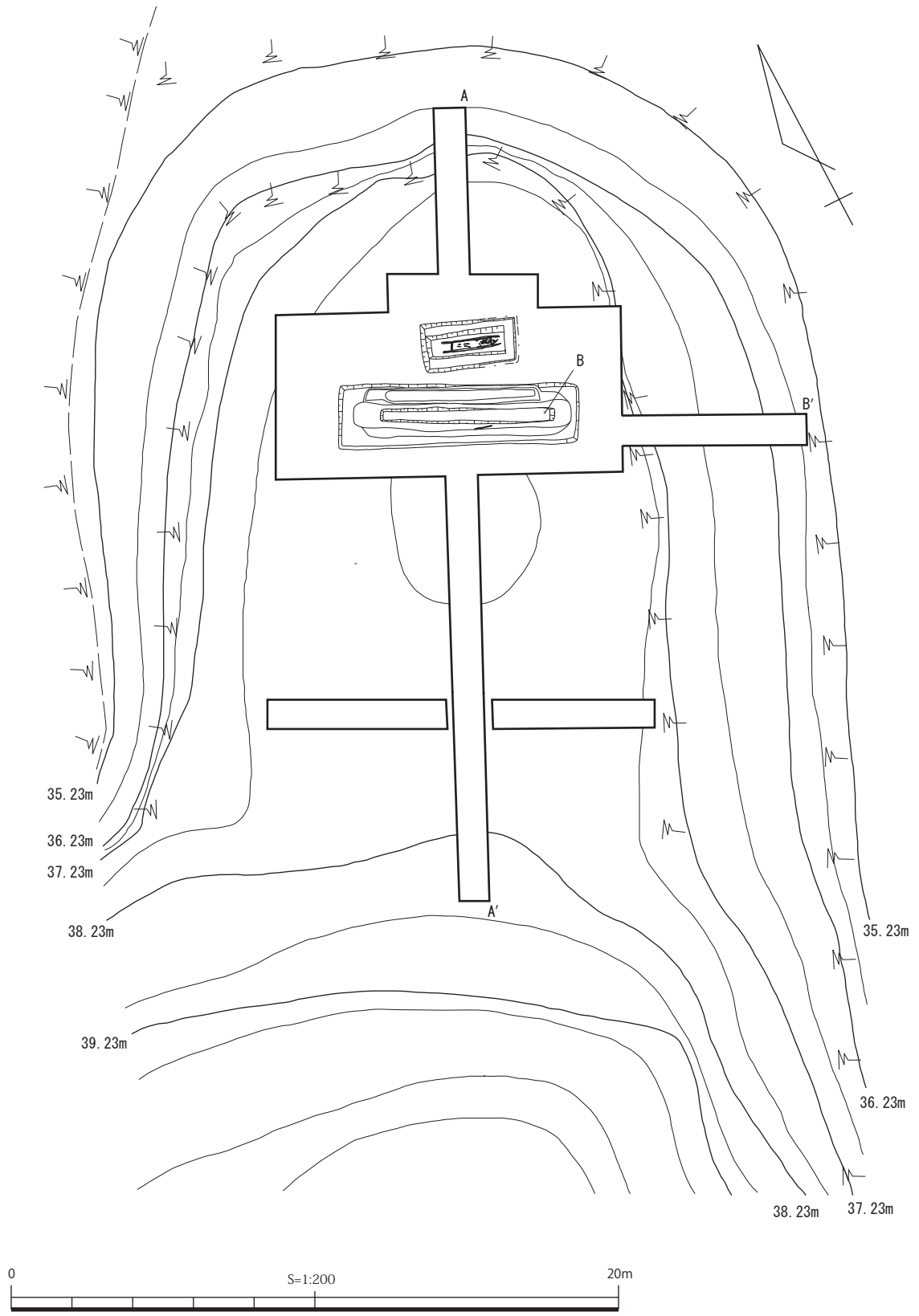


图 48 大谷山 39 号墳 墳丘と調査区 (S=1/200)

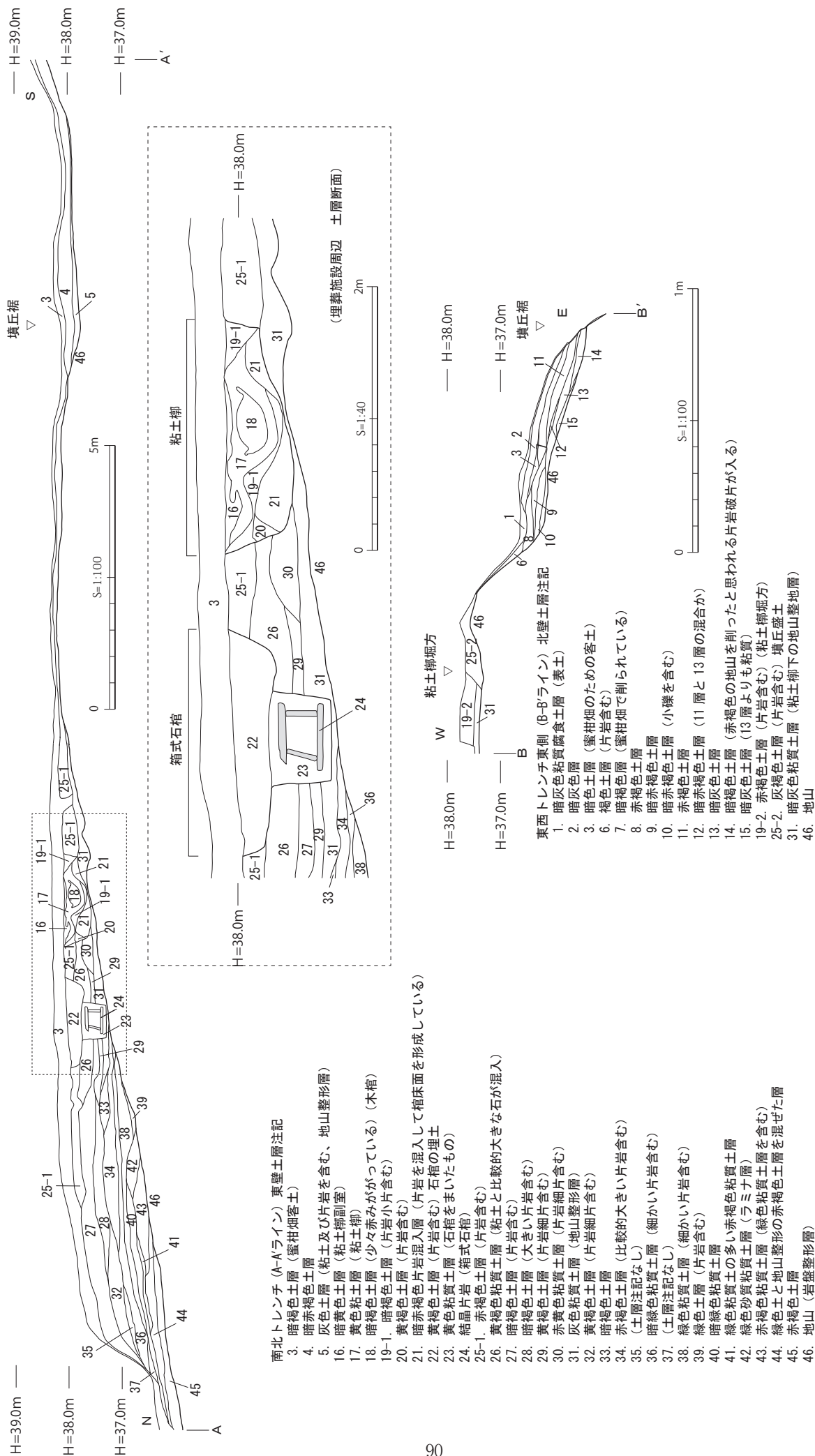


図 49 大谷山 39 号墳 墳丘調査区土層断面図 (S=1/100)

後述する埋葬施設(粘土槨及び箱式石棺)は、いずれも第25-1層上面で掘方が検出されており、地山を整形し盛土した後に盛土内に掘方をつくり埋葬施設を構築したことが推定される。墓壙に重複がないことや第25-1層より上面が削平されていることから、2基の埋葬施設の先後関係は明らかではない。

なお埴輪や葺石及び周溝等の外表施設は確認されていない。

(3) 埋葬施設

墳丘の中央部と推定される位置に東西方向を主軸に南北に並列して、粘土槨と箱式石棺が各1基設置されている。

① 粘土槨

【概要】 墳丘中央南側に設置され、長方形墓壙を掘り込み、長大な割竹形木棺を据えた後に粘土で被覆した粘土槨である。棺内及び棺外で副葬品が確認されている。

【墓壙】 墓壙は黄褐色粘質土と赤褐色土層が交互に積み上げられた墳丘盛土に掘り込まれている。平面形は検出面で幅2m、長さ7.8mを測る。深さは検出面から54cmを測り、標高37.5m前後に位置する。墓壙壁は約70度の傾斜で掘り込み、途中で段などは設けられていない。墓壙底面は、地山より数cm上で灰色粘質土層(第31層)にあたる。

墓壙を穿った後、底面に礫を多く含む暗褐色土(第21層)でM字形の棺床を形成し、その上に厚さ約10cmの黄色粘土を布敷し棺を設置した後、棺上面を黄色粘土で被覆している。

また、墓壙内の北側には同一の掘方上面に長さ約4.8m、幅約30cmのやや湾曲した粘土床(第16層)が検出されているが、これが埋葬施設であったのか有機質遺物の埋納施設であったかは明らかにできていない。

【棺】 棺は、下半部及び上半部の痕跡から、割竹形木棺であるとみられる。上半部と下半部の合わせ目付近の木質の腐食等により上半部が落ち込んでいるが、棺床の規模から、長さ6.7m、直径53cm以上に復元できる。棺材は残存しておらず、小口等の構造も不明である。

【副葬品】 棺内及び棺外より出土している。

棺内 割竹形木棺内の東側から鉄鉈1点が出土した。鉄鉈は刃先を南側に向けて置かれていた。また、中央よりやや東側に約30cm×40cmの範囲で赤色顔料の薄い膜面が遺存していた。

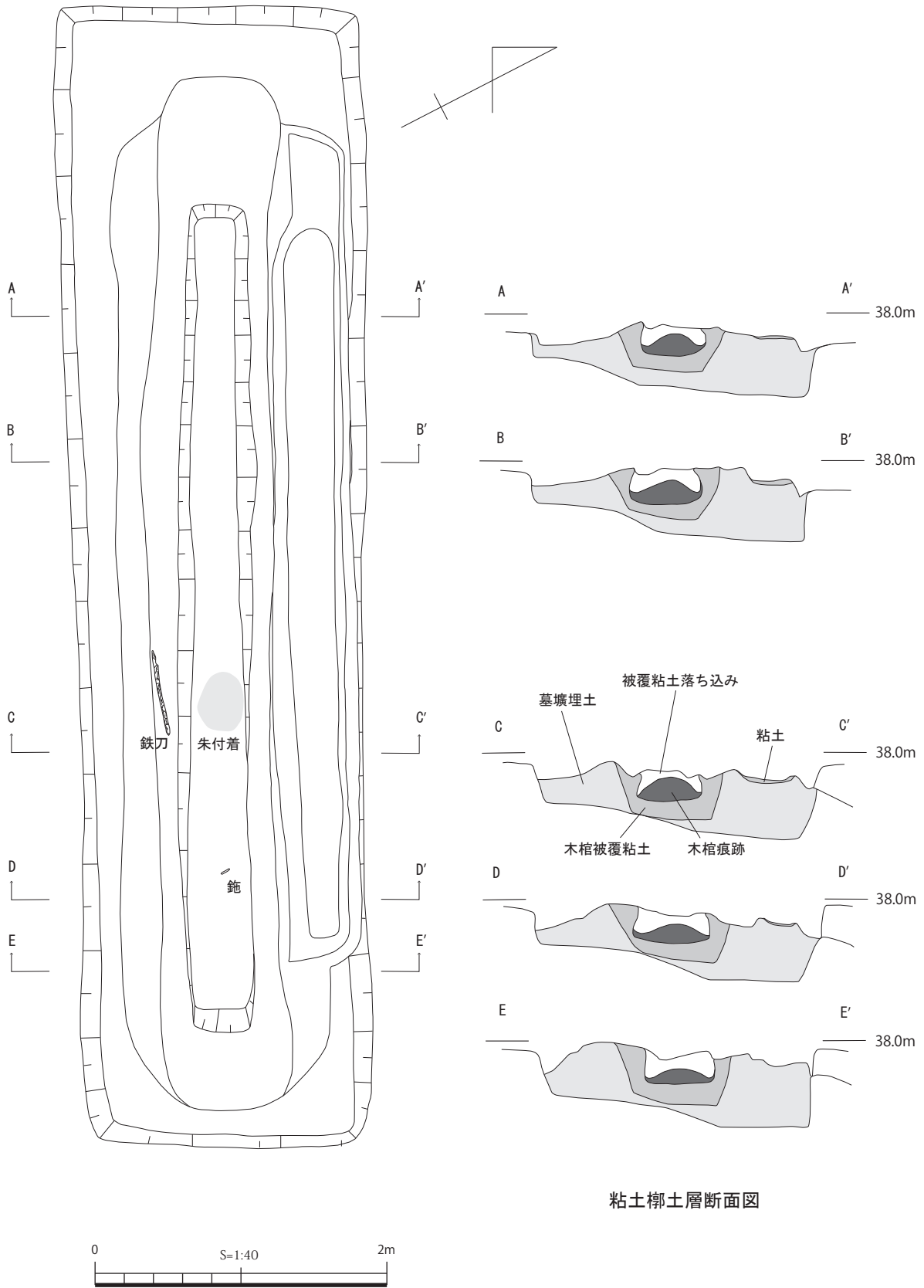
棺外墓壙内 鉄刀1点及び鉄斧1点が出土した。鉄刀は、墓壙内に木棺を据え20cmほど埋土を行った後に、木棺南側に棺側壁に沿ってほぼ水平レベルで副葬されている。棺中央よりやや東側に位置し、切先を東側に向け、刃部は北側(棺側)に向けて置かれている。鉄刀の切先方向から、被葬者は西側に頭を向けて埋葬された可能性が高い。

鉄斧の出土地点は不明であるが、昭和47年度の概報では鉄刀とともに木棺の南側より出土したと報告されている。

② 箱式石棺

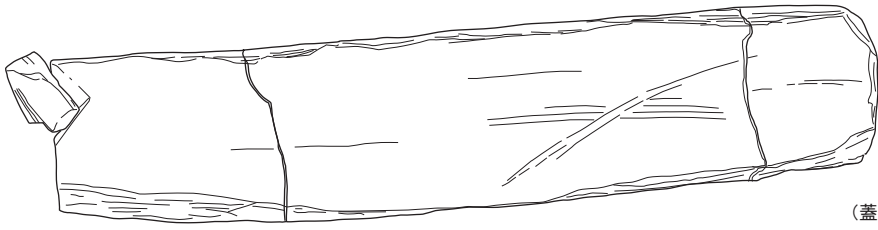
【概要】 墳丘中央に設置された結晶片岩製の組み合わせ式の箱式石棺である。粘土槨の北側に位置し、それと長軸方向を同じくする。棺内に人骨及び歯牙が遺存していたほか、棺内及び棺外から副葬品が出土している。

【墓壙】 墓壙は長方形で、黄褐色粘質土と赤褐色土層が交互に積み上げられた墳丘盛土に、2段

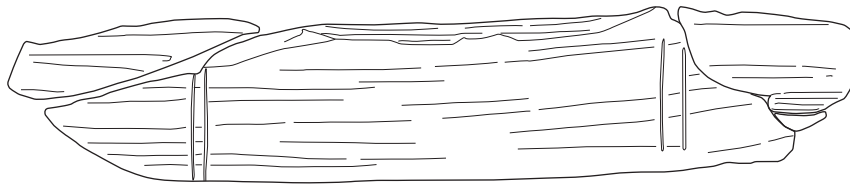
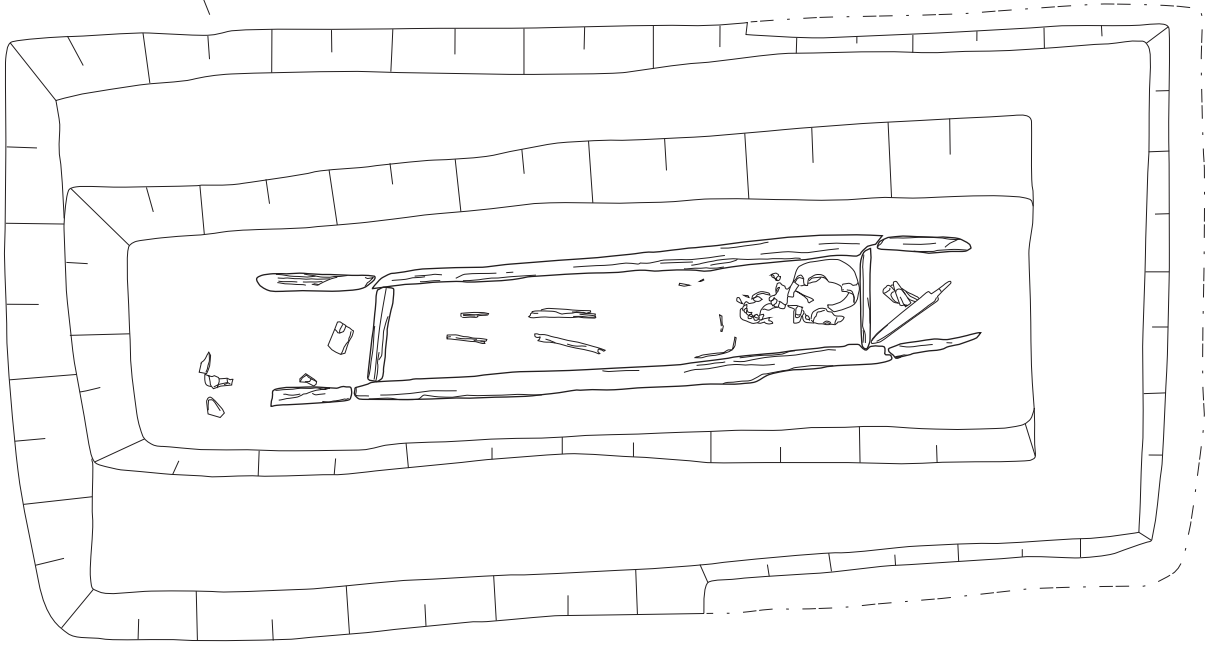
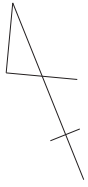


粘土槨土層断面図

图 50 大谷山 39 号墳 埋葬施設（粘土槨）（S=1/40）



(蓋石)



(底板)

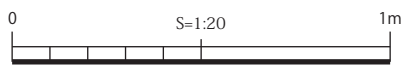


图 51 大谷山 39 号墳 埋葬施設 (箱式石棺) (S=1/20)

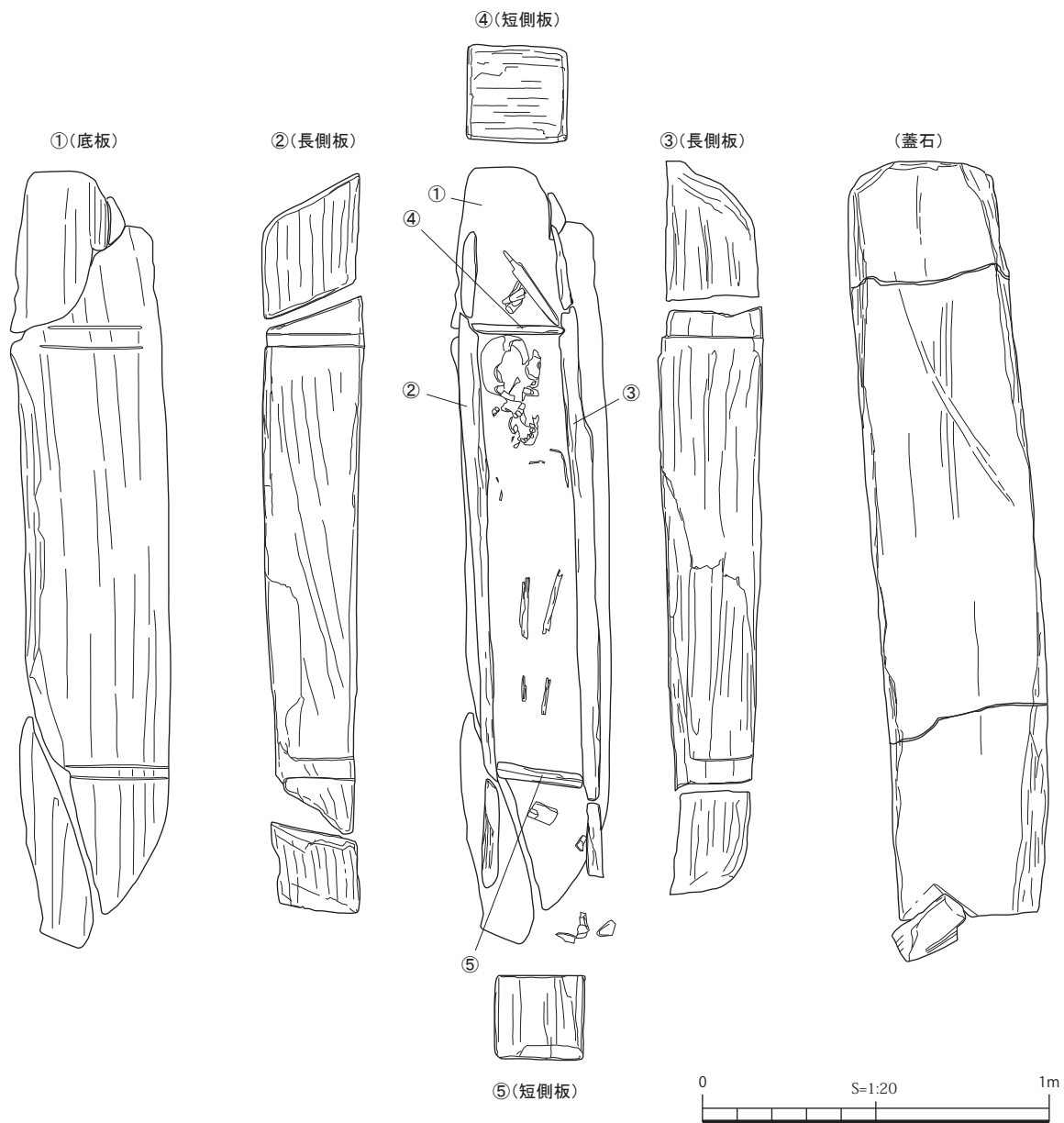


図 52 大谷山 39 号墳 箱式石棺 (S=1/20)

階にわけて掘り込まれている。上半部は検出面で長さ約 3 m、幅 1.6 m、深さ約 30cm、下半部は長さ 2.5 m、幅 74cmから 88cm、深さ 50cmを測る。墓壙壁は、上半部が 60 度の傾斜を持つものに対して、下半部はほぼ垂直に立ち上がっている。粘土槨と同様に、箱式石棺の墓壙底面も地山からわずか数cm上に位置し、灰色粘質土層にあたる。標高 37 m付近に位置し、粘土槨と高さが異なるものの、2つの埋葬施設の墓壙底面は、地盤の安定した地山直上まで掘り込まれている共通点をもつ。地山面が南北で比高差を持つため、2つの埋葬施設の墓壙底面にも高さの差が生じていると考えられる。

墓壙を掘り込んだ後、下半部床面に黄色粘質土を布敷し、その上に箱式石棺を埋設し、石棺全体を厚さ約10cmから15cmの黄色粘質土で密封している。上半部は、黄褐色土で埋め戻されている。

【棺】 石棺は組み合わせ式の箱式石棺で、底板1枚、蓋石1枚、長側板6枚（3枚+3枚）、短側板2枚の合計10枚の石材で構成されている。石材は結晶片岩で、いずれも厚さ6cmから8cm前後の板石である。平面形は、長側板が短側板を挟むH字形を呈し、短側板は長側板端部から約30cm内側に設置されている。

棺身の内法は長側板の長さで約1.9m、2枚の短側板の間隔で約1.24m、棺幅は約24cm、深さ約20cmを測る。長側板は、平継ぎされた3枚の板石で構成され、そのうち最も長いものは約1.4mを測る。また、蓋石と底板はそれぞれ長さ2mを超える1枚板を使用している。底板、蓋石、長側板には、短側板をはめ込むための幅約4cmの溝が施されている。

棺の両端は、約1.4mの長側板の両端にいずれも約20cmから30cmの板石を平継ぎし、長さと同幅が約30cmの副室状の空間を作り出している。副室状の空間は、継ぎ足した長側板の両端の板石を固定させるために、いずれも粘土が充填されていた。東側には、充填した粘土と蓋石との間にあるわずかな空間に鉄剣と農工具（いずれも雛形）を副葬している。なお、底板、蓋石、長側板の内面にはいずれも赤色顔料が塗布されていた。

【人骨・歯牙】 石棺内には、人骨及び歯牙が遺存していた。頭骨及び左右大腿骨と左右脛骨と、歯28本が検出された。人骨及び歯牙の鑑定結果から、被葬者は12歳前後の小児と判明した。被葬者は頭部を東側に向け、脚を伸ばした状態で石棺の長軸長及び短軸幅いっぱいにおさめられていた。

【副葬品】 棺内及び棺外から出土している。

棺内（東側副室状施設内）鉄剣1点、鉄斧1点、鉄鎌1点、鉄鉈3点が出土した。いずれも頭部側にあたる東側の副室状施設内で、板石を固定するために充填された粘土と蓋石との間に重ねられた状態で副葬されていた。鉄鉈3点は主軸を石棺主軸に対して斜め向きの南北方向にそろえて並べ、その上に刃部を南に向け袋部の合わせ口を上面にした鉄斧を重ね、さらにその上に鉄鎌を置いている。また、その上から切先を西側（頭部方向）に向けた鉄剣を配置している。

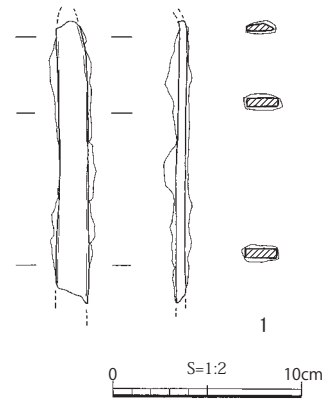
棺外 箱式石棺を密封していた粘土から、土師器片が数点検出された。いずれも細片である。出土地点は石棺南側と石棺西側小口付近に集中している。これらの土師器片が、石棺を被覆していた粘土に混入していたものなのか、粘土被覆前の副葬行為に伴うものであるのかは明らかではない。

第2節 出土遺物

(1) 粘土槨出土の遺物

① 棺内出土の遺物

鉄鉈 (1) 刃部から茎部にかけての破片である。両端を欠く。現存長7.3cm、刃部幅0.75cm、刃部厚0.2cm、茎部幅0.85cm、茎部厚0.2cmを測る。刃部の断面は三角形を呈する。錆はなく、明確な裏透きを持たない。

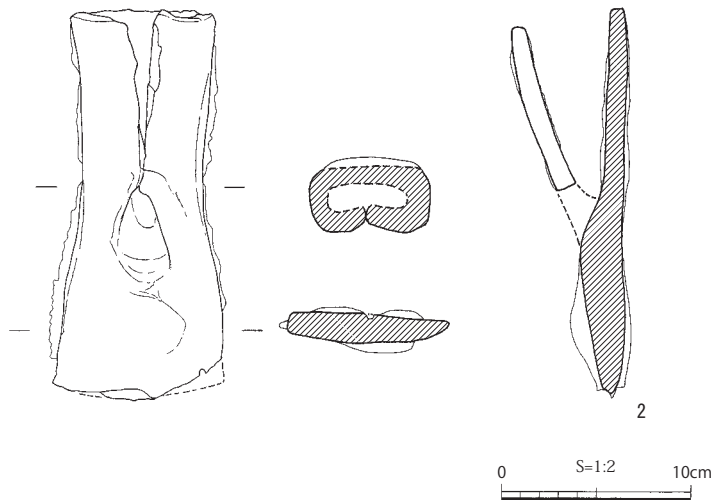


(棺内出土)

② 棺外墓壙出土の遺物

鉄刀 (2) 鉄刀1点が出土した。遺存状態が悪く、現状では接合面を持たない4点の破片であるが、出土状況図及び写真を基に図面上で復元した。復元長は59.5cm、幅1.4～1.9cm、厚0.5cmを測る。断面が楔形を呈する平造りの刃部である。茎部を欠く。

鉄斧 (3) 袋状鉄斧が1点出土した。刃部端の一部を欠くがほぼ完形である。全長10.3cm、袋部幅3.4cm、袋部厚0.5cm、刃部幅4.4cm、刃部厚0.8cmである。保存処理がなされているが、錆膨れにより本来より太くなっている。明瞭な肩は見られず、袋部端から中央に向かって緩やかにすぼまり、中央から刃部端に向かって緩やかに広がる。袋部の横断面は隅丸方形に近い楕円形である。袋部の折り返しは、0.7cmほど開いている。



(棺外墓壙内出土)

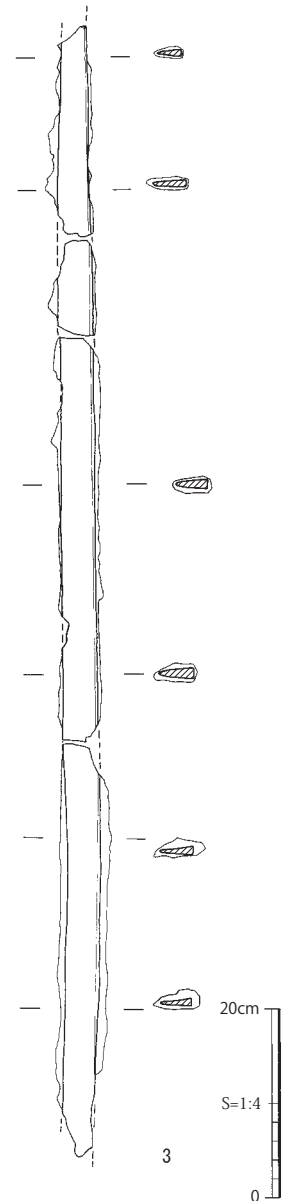


図53 大谷山39号墳 粘土槨出土鉄製品実測図

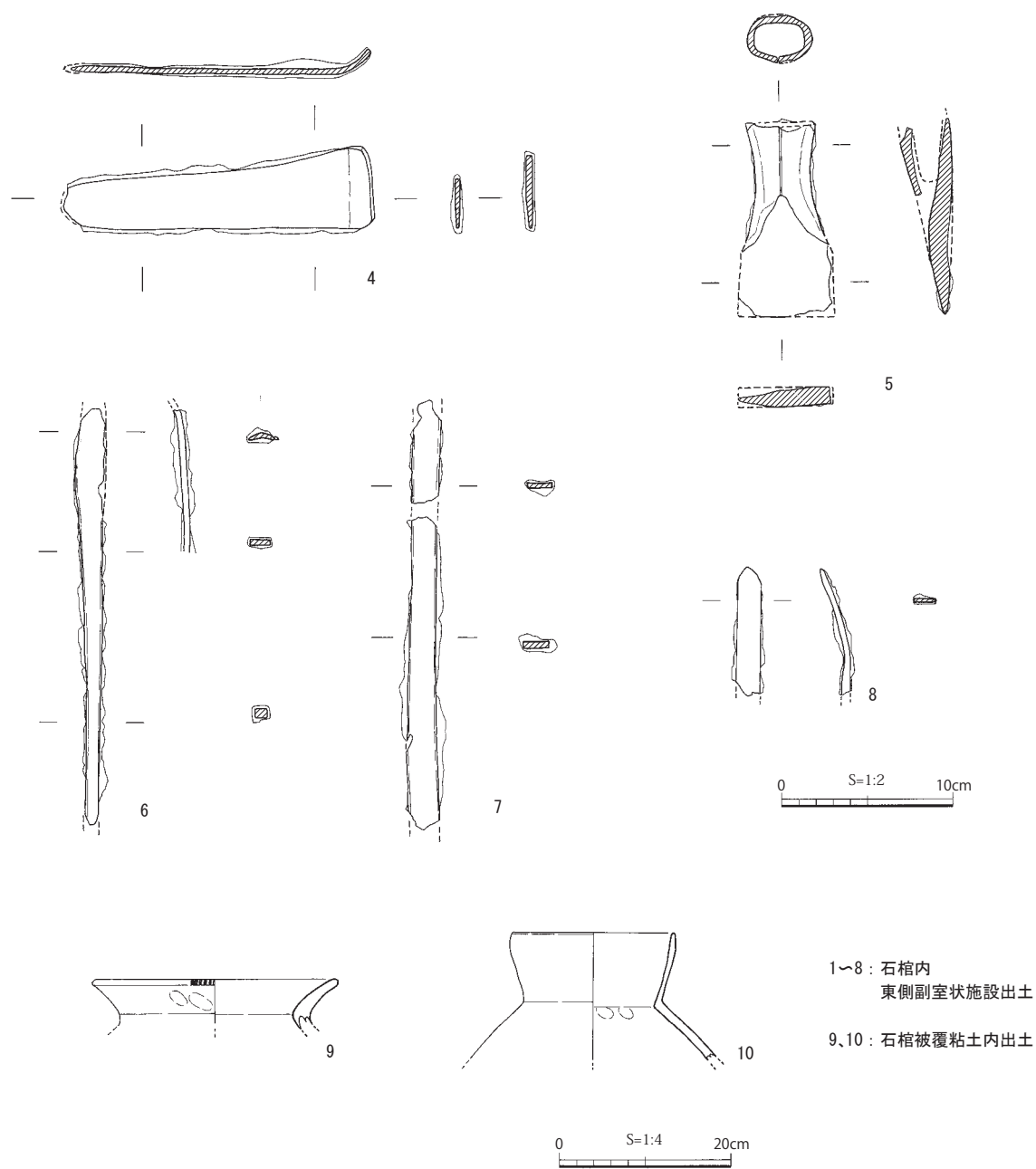


図 54 大谷山 39 号墳 箱式石棺出土鉄製品・土師器実測図

(2) 箱式石棺出土の遺物

① 棺内

(主室出土)

人骨及び歯牙が検出された。これらの鑑定については、藤原知氏（大阪市立大学医学部講師：昭和 47 年当時）に依頼した。なお、詳細については、付論「和歌山県岩橋千塚「大谷山 39 号墳」出土小児人骨体について」に掲載している。

人骨 1 体分の頭骨及び左右大腿骨、左右脛骨が検出された。鑑定の結果、被葬者は 12 歳前後の小児と判明した。

歯牙 歯 28本が残存していた。永久歯の大きさに関する計測値から、男性である可能性が推測されている。

(東側副室状施設出土)

鉄剣 (写真図版 57-1) 出土状況図及び写真より、鉄剣 1 点の出土を確認した。出土状況図より全長約 32cm、刃部長約 25cm、刃部幅約 2.5cm、茎部長約 7.0cm、茎部幅約 1.0cm と推定される。茎部には目釘孔 1 点を確認できる。

鉄鎌 (4) 先端の一部を欠損するが、ほぼ完形の直刃鎌である。刃は直線的であるが、刃と背は並行せず基部から刃先にかけて狭くなり、刃縁は直線的にならず丸みを帯びている。現存長 9.5cm、最大幅 2.4cm、厚 0.2cm を測る。刃部の断面形は楔形となることから両刃である。厚さ 0.2cm の薄型の鉄鎌である。基部の折り返しは刃部に対して垂直にならず鈍角となる。刃縁を手前にして折り返しを右に置いた場合、折り返しが表面になる。法量及び形状から、いわゆる雛形 (ミニチュア) であると考えられる。

鉄斧 (5) 刃部側縁を僅かに欠損するもののほぼ完形の小型の袋状鉄斧である。全長 5.8cm、袋部幅 2.0cm、袋部厚 0.2cm、刃部幅 2.7cm、刃部厚 0.5cm を測る。側縁を欠損するもののわずかに肩を持つとみられる。縦断面は刃部と袋部の厚さに差が生じている。袋部断面形は隅丸方形に近い楕円形を呈する。袋部合わせ目は密着している。いわゆる雛形 (ミニチュア) であると考えられる。

鉄鉞 (6～8) 3 点出土している。6 は両端部を欠く。現存長 12.2cm、刃部幅 0.8cm、刃部厚 0.1cm、茎部幅 0.6cm、茎部厚 0.2cm を測る。刃部断面は三角形を呈するが、鏑及び明確な裏透きは持たない。刃部端に向かってわずかに内湾する。

7 は、現状で 2 点の破片であるが、出土状況より同一個体と考えられる。全長 12.1cm 以上で、幅 0.75cm、厚 0.15cm を測る。刃部断面は三角形で、鏑等により明瞭ではないが鏑及び裏透きが認められる。

8 は、現存長 3.8cm、幅 0.7cm、厚 0.15cm を測る。断面が長方形で明瞭な刃は確認できていないが、端部に向かって内湾していることから刃部にあたと推定される。

いずれも形状や法量より、いわゆる雛形 (ミニチュア) であると考えられる。

②棺外 (箱式石棺を密封していた粘土内出土)

土師器 (9・10) 土師器片は全部で 10 点以上出土しているが、いずれも細片であったため、図化できたのは 2 点のみである。

9 は、土師器の甕の口縁部片である。復元口径 14cm を測る。「く」の字形で端部に向かって斜め上方にのびている。口縁端部には刻目が施されている。内外面ともに横方向のナデが施されている。

10 は、土師器の小型壺の口縁部片である。口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部付近でやや内湾する。肩部を張り、球体の形状を呈する。口縁部内面はハケの後、縦方向のミガキを施し、端部は横方向にナデている。外面もミガキが施されているとみられるが、摩滅のため明瞭ではない。

いずれも、古墳時代中期前葉から中葉の様相を示している。

第3節 まとめ

大谷山 39 号墳は、中央に粘土槨と箱式石棺の 2 つの埋葬施設をもつ全長 20 m 超の円墳であることが明らかとなった。

墳丘は、斜面地の旧地形を一部整形した後、低い部分に盛土を施し、標高 37 m 付近で平坦にした後、赤褐色土と黄色土の盛土を交互に積み上げ墳丘を構築している。

墳丘中央部には、主軸を東西方向にそろえた 2 つの埋葬施設が南北に並列して配置されている。

南側に位置する粘土槨は、長方形墓壇内に割竹形木棺設置し粘土で被覆したもので、棺内から鉄鉈、棺外墓壇内から鉄刀と鉄斧が出土している。岩橋千塚古墳群内で粘土槨を埋葬施設として設置している古墳は、花山 8 号墳や花山 44 号墳、寺内 63 号墳などいずれも 4 世紀末から 5 世紀前半にあたることと、同古墳群における鉄刀の副葬が 5 世紀前半以降に認められることから、大谷山 39 号墳の粘土槨も同様の時期（5 世紀前半）に設置されたと考えられる。

北側に位置する箱式石棺は、長方形の 2 段階墓壇に結晶片岩製の箱式石棺が設置され、粘土で密封されていた。赤色顔料が塗布されていた棺内には人骨と歯牙が遺存しており、被葬者は 12 才前後の小児と判明した。頭部側にあたる東側の副室状施設には、鉄剣と小型の鉄製農工具（鉄斧・鉄鎌・鉄鉈）が重ねて副葬されていた。石棺を被覆していた粘土内からは、5 世紀前半の様相を示す土師器片が出土している。

箱式石棺に伴う副葬品の特徴として、①同古墳群内で 5 世紀代に特徴的にみられる鉄剣の副葬がみられること、②武器と農工具が一括で副葬されていること、③副葬されている農工具は全て籬形であること、④農工具の種類は斧・鎌・鉈など前期からのセット関係を保っていること、⑤小型鉄斧がモデルとの類似性を意識して制作されているなど石製模造品との共通性が見られること、などが挙げられる。これらの特徴から、副葬品の示す様相は 5 世紀前半頃にあたりとみられる。箱式石棺は岩橋千塚古墳群では、前山 A17 号墳のほか、大谷山 6 号墳、寺内 35 号墳などで採用されており、5 世紀から 7 世紀までみられる埋葬施設であるが、土師器の年代観と副葬品の様相から、大谷山 39 号墳の箱式石棺の設置は 5 世紀前半にあたりと考えられる。

墳丘上部の削平により 2 つの埋葬施設の墓壇の重複は確認できず先後関係は不明であるが、2 つの埋葬施設が主軸をそろえて墳丘中央部に並行して配置されていることや、ともに 5 世紀前半の様相を示すことから、2 つの埋葬施設の被葬者は近い時期に相次いで埋葬されたと推測される。なお、副葬品の出土位置から、粘土槨では頭部を西向きに、箱式石棺では頭部を東向きに埋

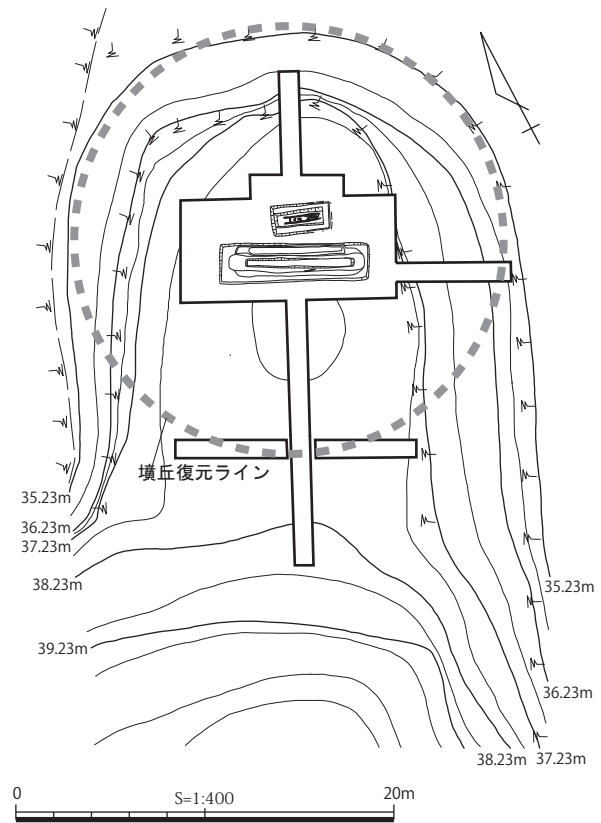


図 53 大谷山 39 号墳 墳丘復元図

葬していたと考えられる。

以上が、大谷山 39 号墳の発掘調査成果のまとめである。墳丘は削平により著しく失われていたものの、2つの埋葬施設は未盗掘の状態であったことから副葬状況が明らかとなり、さらに箱式石棺には人骨及び歯牙が遺存していたことから被葬者の具体的な年齢も判明した。岩橋千塚古墳群内において事例の少ない 5 世紀前半の古墳の様相が明らかとなったことは、古墳群全体の変遷を考える上でも有用な成果であると言えよう。

【参考文献】

魚津知克 2000 「鉄製農具副葬についての試論」『表象としての鉄器副葬』第 7 回鉄器文化研究集会 鉄器文化研究会
 魚津知克 2005 「鉄製農具の副葬と農具形石製祭器の副葬」『古代』第 118 号早稲田大学考古学会
 河野正訓 2014 『古墳時代の農具研究－鉄製刃先の基礎的検討をもとに－』雄山閣
 清家章 2001 「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』152 古代学研究会
 瀬谷今日子 2016 「岩橋千塚古墳群における副葬品の様相」『岩橋千塚とその時代－紀ノ川流域の古墳文化－』和歌山県立紀伊風土記の丘
 都出比呂志 1967 「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13 卷 3 号 考古学研究会
 寺沢知子 1979 「鉄製農具副葬の意義」『橿原考古学研究所論集』第四
 萩野谷正宏 2016 「紀ノ川下流域の群集墳について」『岩橋千塚とその時代－紀ノ川流域の古墳文化－』和歌山県立紀伊風土記の丘
 藤原知・藤原定 1976 「古代人の歯牙に関する研究補遺－和歌山県岩橋千塚「大谷山 39 号古墳」人の場合－第 1 編 歯牙所見」『歯基礎誌』18
 藤原知・島田武男 1975 「和歌山県岩橋千塚「大谷山 39 号古墳」出土小児骨体について」『人類学輯報』37
 和歌山県教育委員会 1972 『岩橋千塚大谷山 4・5・6・39 号古墳発掘調査概報』

表 5 大谷山 39 号墳 出土遺物観察表

(粘土槨)

No.	図版番号	器種	法量 (いずれも破片のため、完形・破片とわず現況の法量を記載。)	備考	出土位置
1	図版 60	鉄鉈	長さ 7.3cm、幅 0.85cm、厚 0.2cm。	両端部欠損。	木棺内
2	図版 60	鉄刀	復元長 59.5cm、幅 1.4 ~ 1.9cm、厚 0.5cm。	茎部欠損。断面は楔形を呈する。平造りの刃部。	棺外墓域内
3	図版 60	鉄斧	長さ 2.5cm、幅 1.4cm、厚 0.4cm。	袋状鉄斧。刃部端一部欠損。	棺外墓域内

(箱式石棺)

No.	図版番号	器種	法量 (いずれも破片のため、完形・破片とわず現況の法量を記載。)	備考	出土位置
-	図版 57-1	鉄剣	(刃部長さ 59.5cm、幅 1.4 ~ 1.6cm、厚 0.5cm)	写真及び出土状況図をもとに確認。茎部を欠く。	東側副室状施設内
4	図版 60	鉄鎌	長さ 9.5cm、幅 1.6 ~ 2.4cm、厚 0.2cm。	直刃鎌。鎌形。	東側副室状施設内
5	図版 60	鉄斧	長さ 5.8cm、袋部幅 2.0cm、袋部厚 0.2cm、刃部幅 2.8cm、刃部厚 0.5cm。	鎌形。	東側副室状施設内
6	図版 60	鉄鉈	長さ 12.2cm、幅 0.4 ~ 0.6cm、厚 0.2 ~ 0.3cm。	両端部欠損。鎌形。	東側副室状施設内
7	図版 60	鉄鉈	復元長 12.1cm、幅 0.7 ~ 0.9cm、厚 0.2cm。	両端部欠損。鎌形。	東側副室状施設内
8	図版 60	鉄鉈	長さ 3.8cm、幅 0.7cm、厚 0.15cm。	刃部片。鎌形。	東側副室状施設内
9	図版 60	土師器甕	(復元) 口径 14cm 色調：(外面) 7.5YR6/4 に近い橙色 (内面) 5YR7/6 橙色 焼成：良好 胎土：密 (5mm以下の石英、片岩を含む)	口縁部。「く」の字形に屈曲し斜上方にのびる。端部に刻目が施される。口縁部は口縁部内外面ナデ調整。	石棺被覆粘土内 西小口付近
10	図版 60	土師器小型壺	(復元) 口径 9.4cm 色調：(外面) 2.5Y5/8 明赤褐色 (内面) 2.5Y5/8 明赤褐色 焼成：良好 胎土：密 (1mm以下の白色砂粒を含む)	口縁部から肩部。口縁部は外上方にのびるが、端部はやや内湾する。肩の張った球形の体部。口縁部内面は、ハケ後縦ミガキ。口縁部はヨコナデ。外面は、摩滅しているがミガキを施していると推定される。	石棺被覆粘土内 西小口付近

付論 和歌山県岩橋千塚「大谷山 39 号古墳」出土小児人骨体について

藤原 知 島田 武男 (大阪市立大学医学部第 2 講座 (指導: 寺門之隆教授)
『人類学輯報』第 37 輯 昭和 50 年 11 月 大阪市立大学医学部解剖学教室 掲載論文) (註 1)

はじめに

この報告は、和歌山県文化財課学芸員笠井保氏を調査担当者とし、和歌山県教育委員会が主体となって、昭和 47 年 5 月以来同年 10 月にわたって発掘調査を実施してきた和歌山県岩橋千塚古墳群に属する、大谷山 39 号古墳出土小児人骨に関する報告である。

稿をはじめに当り、御指導を賜った寺門之隆教授 (大阪市立大学医学部解剖第 2 講座) に謝意を表するとともに、本調査研究の機会を与えられた調査組織の関係者、とくに前田敏郎・笠井保夫の両氏に深甚の謝意を表するものである。

われわれの知りえた限りでは、古代日本人の小児人骨に関する記載は比較的稀であり、この方面での研究において本報告が活用されることがあれば幸いである。

大谷山 39 号古墳の概要

和歌山市岩橋千塚古墳群に関する発掘調査概要は、すでに昭和 47 年 10 月、和歌山県教育委員会によって公表されており、それによれば、大谷山 39 号古墳のほか、大谷山 4・5・6 号古墳がある。これらの古墳群のうち人骨を容れたものは 39 号古墳のみであり、その築造の時期は 5 世紀代であると推定されている。

39 号古墳には、埋葬施設として、墳丘のほぼ中央で東西方向にほぼ並列して埋置された粘土郭と、小児の遺骨を容れた箱式石棺がある (第 1 図参照)。

箱式石棺は、封土を二段に約 70cm 以上掘り込んだ墓坑内に埋置されており、厚さ 10 ~ 15cm の土師器片を含む粘土で密封されている。この構造については、一枚石の底石と蓋石を使用し、箱型に組み合わせた左右側石の両先端にさらに約 30cm 継ぎたして、墓坑壁とのあいだに副室状の空間を造りだしていることを指摘しよう。

この場合、東側副室状施設からは剣 1、鎌 1、鉞 3、

鉄斧 1 の出土をみているが、後述するように埋葬者が小児であることにふさわしく、これらはすべて小型品である。

39 号古墳人骨の出土状態とその保存状態

先述した箱式石棺内には、東西方向に頭骨、左右の大腿骨および脛骨の残遺が認められる (第 1 図)。そしてこの場合、頭骨を中心に棺内全体に水銀朱と見られる赤色顔料が検出されている。

残遺骨は全体として、それに触れれば破損を来すほどの風化状態にあり、さらに、体幹をなす骨は何ら存在していないことを付記しておく。

頭骨の残存状況については、頭蓋冠、とりわけその左半部の保存がやや良好であるが、残遺骨片の極度にもろいこともあって十分な復元を期すことはできない (第 1 図)。さらに、右側側頭骨の保存も比較的良好で一定の観察に耐えうるものであり、そのほか、歯牙を植立せしめた部分も含む上顎骨と下顎骨の分離骨片のいくつかがある。左右の残遺大腿骨は、その風化度がいちじるしくて痕跡をとどめているにすぎない脛骨に比すれば、幾分その保存状態は良いといえるが、すでにその両骨端は風壊して存在せず、したがって十分な観測の資料とはなりえない。

残存する人骨 (歯牙を含む) の所見

まず頭蓋冠をみるに、矢状縫合、冠状縫合および人字縫合は完成しており、泉門の存在はこれを認めない。骨の厚みは総じて薄く 2 ~ 4mm 程度である。なお、計測しえたのは頭長のみであり、それは 179mm である (第 1 図)。

右側側頭骨については、下外側面にみられる下顎窩が浅い凹窩を示し、かつ、前縁をなす関節結節が低いなどの特徴がある (第 2 図)。

上顎骨および下顎骨は、第 3 図にみるように破損、破壊の程度がいちじるしく、歯牙の配列状況につい

ては、上・下顎とも左側において一応確認しうるも、右側の歯牙は散在してあるので、それらを歯列として現認することはできない。

しかしその歯列は、左側のそれからも明らかなように混合型歯列であり（第3図）、形態上の特徴にもとづいて散在する歯牙の歯種決定を行なったうえで、これを歯式によって表現すればおよそ次のようであろうとおもわれる。

5	4	3	3	4	5								
7	6	E	D	C	2	1	1	2	C	D	E	6	7
7	6	E	D	2	1	1	2	D	E	6	7		
5	4	3	3	4	5								

半萌出歯
 完全埋伏歯

さて、本例の歯牙所見上の特徴とみなしうることは、残存乳歯にかなり高度のう蝕性実質欠損の認められることであり、加えて、歯根吸収がほとんど進行をみしていないことである。すなわち、実質欠損については、右側下顎第2乳臼歯はいわゆる根分岐を伴うほどに高度のそれであり、明らかに歯髓腔に達するまでそのう蝕は進行している。また、左側上顎第1乳臼歯の咬合面には歯髓腔に達する深い凹窩がその全域にわたって観察され、左側下顎第2乳臼歯の近心面寄りの頬面には象牙質に達する類円形の小窩がある。歯根吸収機転がまだ起こっていないことについては、完全な形姿のまま採取しえた右側下顎第2乳臼歯、左右の上顎乳犬歯、右側上顎第1と第2乳臼歯で確認しうる。なお、これらのことについての一部は、第3図において現認することができよう。

つぎに、永久歯については次の諸点が指摘しうるとおもわれる。

完全な形姿を保って出土をみた歯牙に限って述べるが、完全萌出をみている下顎切歯の根端閉鎖は完了しているが、同じく完全萌出をみている第1大臼歯のそれは未完了である。そのほかの完全萌出済みの

歯牙にあつては、歯根が現存していないこともあつて、これ以上の言及を避けるほかはない。

第2の点は咬耗に関する問題であり、すべての第2大臼歯が確実に無咬耗な状態にあることが先ず指摘されるのである。第1大臼歯もきわめて軽度できわめて小範囲の咬耗を受けているにすぎず、それは勿論象牙質に達するようなものではない。切歯もまた咬耗所見を示さないが、これについては、上下の対向・接触関係が不明であるので、後で行なう考察の対象とはなりえない。完全埋伏歯、半萌出歯についても言及の限りではない。

つぎに、今回観測しえた歯牙の諸計測値を表示しておく。

第1表 歯牙の大きさに関する計測値

(藤田の計測基準による)

		上顎		下顎	
		右側	左側	右側	左側
中切歯	歯冠長	11.7	11.6	9.8	9.7
	歯冠幅	8.6	8.7	6.6	6.4
	歯冠厚	7.3	7.4	6.4	6.6
側切歯	歯冠長	10.8	10.7	9.9	9.7
	歯冠幅	7.7	7.6	6.5	6.3
	歯冠厚	7.0	7.4	6.2	6.2
犬歯	歯冠長	10.8	10.7	10.1	10.0
	歯冠幅	8.2	8.4	7.4	7.2
	歯冠厚	8.2	8.3	7.2	7.1
第1小臼歯	歯冠長	7.9	7.4	6.6	6.5
	歯冠幅	7.0	7.4	7.2	7.2
	歯冠厚	9.5	10.1	7.6	7.4
第2小臼歯	歯冠長	7.6	7.3	6.8	7.0
	歯冠幅	7.4	7.4	7.3	7.4
	歯冠厚	9.6	10.0	7.2	7.2
第1大臼歯	歯冠長	7.5	7.4	7.7	7.8
	歯冠幅	10.3	10.6	11.2	11.3
	歯冠厚	11.7	11.9	10.5	10.3
第2大臼歯	歯冠長	7.6	7.8	6.9	7.0
	歯冠幅	9.6	9.9	11.0	11.3
	歯冠厚	11.3	11.4	10.5	10.6

すでに述べたように風化状態にあってその痕跡をとどめているにすぎない脛骨については勿論、薄弱ながらその骨幹部をとどめている大腿骨についても、後者の周径が48.8mmである点を除いて特記すべき事柄はない。

大谷山 39 号古墳埋葬者についての 骨学的見地から小考察

埋葬者が小児であることは確実である。その根拠としては、混合型歯列の保有者であること、その窩浅くして関節結節の低い側頭蓋骨下顎窩を有していたこと、および48.8mmという大腿骨周径などがある。

年令については、すべての第2大臼歯に咬耗所見が何ら認められず萌出直後のものと解されることからして、それを12才前後と推定するのが妥当であろう。

その性別については、なお憶測の域を出ないが、すでに第1表に掲げた永久歯の大きさに関する計測値を、現代人および古代人のそれに関する先輩の成績に照らしてみる限り、それは男性に属するようにおもわれる。東側副室状施設から剣を含む若干の出土をみているが、この場合、当時の社会的状況などが十分に解明されていない今日、この事実をもって埋葬者を直ちに男性と判定することにはなお疑問があるというべきであろう。

最後に、この埋葬者がかなり高度で多発的な乳歯う蝕の保有者であり、したがって乳歯の自然脱落による永久歯列への交換機転が円滑、正常に進行していなかったことは、付記されておいてよいとおもわれる。

おわりに

この報告は、大谷山 39 号古墳の箱式石棺に遺存していた人骨（歯牙を含む）の所見と、それにもとづく埋葬者についての考察を内容としている。その要点は次のようである。

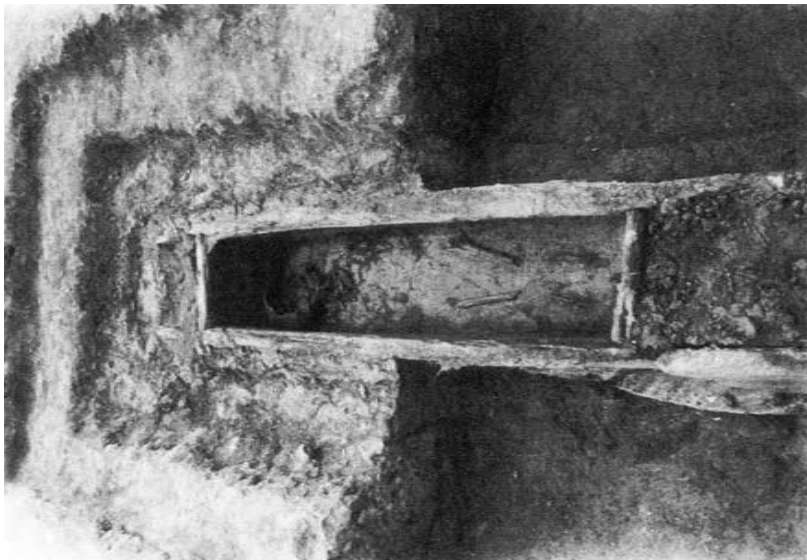
1. 残存せる人骨は頭骨、左右大腿骨と脛骨である。
2. 骨学的所見と歯牙所見からして、埋葬者は12才前後の小児である。
3. 混合型歯列を有するこの埋葬者には乳歯う蝕が多発しており、永久歯との交換が順調に進行していない。

4. 基礎資料として、永久歯に属する歯牙の計測を行ない記載している。

主要参考文献

- 1) 鈴木誠：昭43. 長野県北相木村栃原岩陰遺跡と人骨. 人類学雑誌, 第76巻
- 2) 和歌山県教育員会：昭和47. 大谷山4・5・6・39号古墳発掘調査概報.
- 3) 藤田恒太郎：昭和32. 歯の計測基準について. 人類学雑誌, 第61巻
- 4) 上条雍彦：昭和37. 日本永久歯の解剖学.
- 5) 藤原知・藤原宗：昭和42. 兵庫県田能遺跡出土弥生式時代人の歯牙について. 人類学輯報, 第36輯
- 6) 大野章：昭和32. 佐賀県三津遺跡出土弥生式時代人の歯牙の人類学的研究. 人類学研究, 第4巻
- 7) 讚井善治：昭和35. 山口県土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人歯牙の人類学的研究. 人類学研究, 第7巻

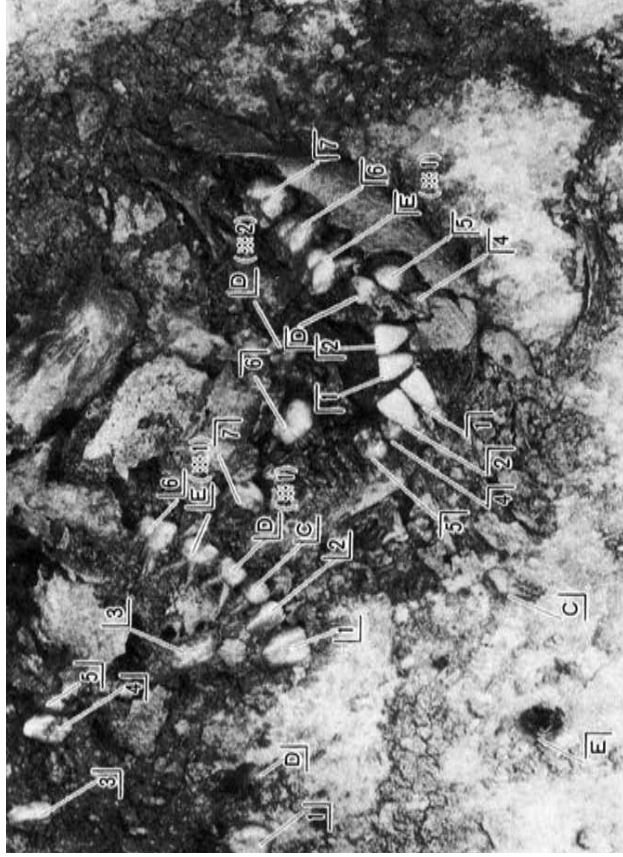
註1) 本論文は、『人類学輯報第37輯』（昭和50年11月 大阪市立大学医学部解剖学教室）に掲載されたものを、著作者の承諾のもと、再掲したものである。再掲にあたり、本文のレイアウトを一部変更している。ただし、文章中の文字表記及び記載内容については原文のままである。



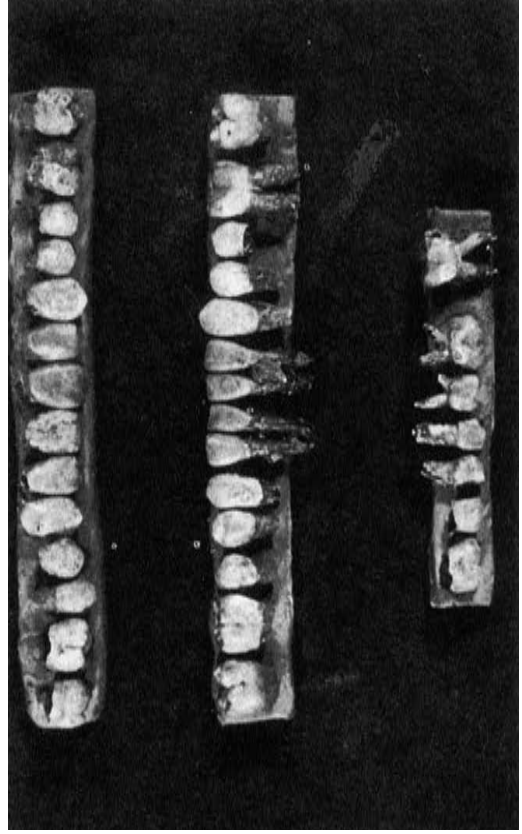
第1図 小児骨体を容れた箱式石棺を示す



第2図 右側頭骨を示す



第3図 上顎骨と下顎骨片およびそれらに植立または植立せずして散在する歯牙などを示す
数字は永久歯に属する歯牙を示し、例えば「7」は下顎左側第2 第臼歯、「16」は上顎左側第1 大臼歯である。
C, D, Eは乳歯に属し、例えば「E」は下顎左側第2 乳臼歯、「C」は上顎左側乳犬歯を示す。
なお、「※1」では歯根吸収が認められない。また「※2」では象牙質に達する深い蝕性実質欠損の存在がみられる。



第4図 上段：上顎永久歯、中段：下顎永久歯、下段：残存乳歯

第7章 総括

第1節 大谷山6号墳の横穴式石室

大谷山6号墳は、後円部の直径約16m、前方部の長さ約10m、墳長約25mの前方後円墳であり、その築造時期は前述のようにMT15型式期、6世紀初頭頃と推測される。6号墳の主要な埋葬施設である横穴式石室は、岩橋千塚古墳群で特徴的な岩橋型の横穴式石室の初源的な形態であり、その特徴はその後盛行する岩橋型横穴式石室の系譜や成立を理解する上で重要であると考えられる（土生田1980、中司2003、広瀬2004、黒石2007）。

本節では、大谷山6号墳の横穴式石室の特徴について、再度整理しておきたい。

6号墳の横穴式石室の特徴を列挙すると以下の通りである。①石室は後円部の中心からやや南寄りに構築され南西に開口する。玄室の主軸は墳丘の主軸とは直交せず、やや南側（前方部側）に振れる。②検出された玄室床面の標高は、89.3m～89.45mであり、Fトレンチで墳丘テラスと推定される位置の標高89.2mに近接する。石室の平面形態は、③左側に袖部を有さず右片袖式の形態をとり、④玄室主軸に対して羨道部の主軸が約13度南側に振れる。⑤玄室の規模は玄室長3.83m、奥壁幅2.38mと墳丘規模に比して大きく、岩橋千塚古墳群では花山6号墳に次ぐ玄室規模である。一方、羨道は長さ1.32～1.34mと短い。玄門は、⑥玄室前道が未発達であり玄門部が内側に突出する構造で、⑦玄門には梱石が据えられる。また、⑧羨道部を板石積みで閉塞する。さらに、玄室では⑨両側壁の3カ所で突起石を有しており、⑩玄室の各壁面に赤色顔料が塗布される。

一方、岩橋千塚古墳群を中心に紀ノ川流域周辺に分布する岩橋型横穴式石室の総体的な特徴のうち主要な点を列挙すると（黒石2007）、a. 板状の結晶片岩を使用する、b. 玄門部が内側に突出する、c. 玄室前道を有し基石を据える、d. 玄門部を板状の扉石で閉塞する、e. 排水溝を備える、f. 石柵・石梁を備える、g. 石障や仕切石などの屍床を有する、h. 遺骸を石室主軸に直交配置する、i. 玄室の平面形態が長方形、方形、T字型の石室が存在する、j. 横穴式石室と同一墳丘内に竪穴式石室や箱式石棺をもつものが多い、k. 石棺を納置しない、などである。

これらの諸特徴と比較すると、大谷山6号墳の横穴式石室は、排水溝の有無など不明な点もあるが、上記のうち少なくともa、b、i、j、kなどの特徴が明瞭であり、岩橋型横穴式石室の特徴の一部を備えている。また、大谷山6号墳の羨道を石積みで閉塞する特徴は、TK10型式期の築造とみられる大谷山22号墳でも確認される。さらに大谷山6号墳では玄室の残存範囲では石柵・石梁は認められず架構されていない可能性が高い点は、MT15型式期の築造とみられる花山6号墳と共通する。上記2点は6世紀初頭から前半の岩橋型横穴式石室で確認される特徴である。

一方、大谷山6号墳では岩橋型横穴式石室で通有の特徴である玄室前道は未発達であり、玄門下部に梱石を設置するのみの特徴は、典型的な岩橋型横穴式石室との最も大きな相違点である。大谷山6号墳と築造時期が近接する花山6号墳は、墳長49m以上の前方後円墳であるが、玄室の主軸が墳丘主軸に直交せずやや前方部側に振れる点や、玄室主軸に対して羨道主軸が左側へ振れ斜行する平面形態である点が大谷山6号墳と共通する。一方で、右片袖傾向ではあるが玄室前壁の左側にも短い袖部を有する点や、長さ0.75mの玄室前道をもつ点は、大谷山6号墳よりも型式学的に新しい特徴である。しかし、玄室前道に据えられる基石は未発達で、石室主軸方向で長さ0.35mの板石が羨道寄りに据えられるのみであり、前壁の一部を構成していない点は、大

谷山6号墳の玄門部の榦石と類似する。したがって、すでに先行研究で検討が加えられているように、大谷山6号墳の横穴式石室は、花山6号墳に比して類似点が少なくない一方で、玄門形態において明らかに古相の特徴をもち、岩橋型横穴式石室の最古の型式であると評価できる。

突起石を有する点も大谷山6号墳の大きな特徴である。岩橋千塚古墳群を含む紀ノ川下流域では、発掘調査が実施された古墳で本特徴をもつ確実な例は他に認められない^(註)。突起石をもつ横穴式石室は、九州の有明海沿岸に主体的に分布するが、近畿地方周辺では滋賀県高島市斎頼塚古墳や草津市北谷古墳群北谷5号墳、愛荘町金剛寺野古墳群たぬき塚古墳、三重県志摩市おじよか古墳等で確認される。このうち6世紀前半の築造である北谷5号墳では奥壁に3カ所、床面からの高さ0.6mの位置に突起石が確認され、6世紀前半の築造である斎頼塚古墳は左側壁の2カ所、高さ0.7mの位置に確認され、複数の突起石が床面からほぼ同じ高さに設置されるという点で大谷山6号墳との共通性が指摘される。なお、斎頼塚古墳では石棚が付設されて岩橋型横穴式石室との類似性も確認できる。突起石については、木製棚を支える施設(黒石2007)や刀架(土生田1980)としての可能性が指摘されるが、正確な用途や系譜は不明である。大谷山6号墳の3カ所の突起石は、床面からの高さ、突出する長さの共通性から、各々が有機的な関連をもって設置されたとみられることを指摘するにとどめたい。

玄室における赤色顔料の塗布については、岩橋千塚古墳群では大谷山6号墳の他に、花山6号墳、花山33号墳、前山B101号墳で確認される。大谷山6号墳、花山6・33号墳は6世紀初頭から前半の築造とみられるから、赤色顔料は当該期の岩橋型横穴式石室の特徴と考えられる。ただし、前山B101号墳は玄室前道の発達した両袖式で6世紀中葉以降の築造と考えられ、こうした特徴をもつ石室が少なくとも当該期まで継続する点にも注意する必要がある。

以上、大谷山6号墳の横穴式石室についてその特徴を整理したが、最古段階の岩橋型横穴式石室として、その成立過程や系譜についてさらなる検討が必要と考えられる。

【註】 このほか、岩橋千塚古墳群では未調査の前山B86号墳、前山B89号墳、前山A20号墳で突起石が存在する可能性が指摘されている(大野1986)。

第2節 大谷山地区における古墳の展開

大谷山4号墳は、直径約18mの円墳で、形象埴輪の出土から墳丘に埴輪が樹立していたと考えられる。埋葬施設の岩橋型横穴式石室は、玄室前道が玄室の中央やや右寄りに取り付く両袖式で、玄室は屍床仕切石が付設される、玄室前道が扉石で、羨門が板石を積み閉塞されるなどの特徴をもつ。出土須恵器がTK10型式期新相の特徴をもち6世紀前半から中頃の築造と考えられる。

大谷山5号墳は、4号墳の北側に隣接する長径約19mの円墳で、出土した形象埴輪は4号墳に樹立した埴輪の一部が流れ込んだ可能性が高い。埋葬施設の岩橋型横穴式石室は、玄室前道が玄室の中央に取り付く両袖式で、羨道に羨道前庭が接続する。玄門と羨門は側壁に板石が組みこまれ、床面に板石が据えられており、板石閉塞の機能を有したとみられる。出土須恵器はTK43型式期で、玄室前道や羨道前庭が発達する岩橋型横穴式石室の特徴から6世紀後半の築造と考えられる。4号墳と5号墳の岩橋型横穴式石室は、5号墳が型式学的に新しい特徴を有するが、玄室前壁を構成する石積み上に玄室前道基石が組み込まれ、玄室床面との間に高低差を有するという共通した特色をもつ。

大谷山6号墳は、後円部の横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳で、円筒埴輪や形象埴輪が

樹立する。出土須恵器や石室の諸特徴から、MT15 型式期の 6 世紀初頭頃の築造と考えられる。また、近接する時期に後円部墳丘テラス付近に箱式石棺が付設され、その後 TK10 型式期の 6 世紀前半に前方部墳頂平坦面付近に竪穴式石室が付設されたものと推定される。

同一尾根上に近接して立地する大谷山 4・5・6 号墳の築造順序は、まず 6 世紀初頭頃に小型前方後円墳の大谷山 6 号墳が築造され、その前方部には 6 世紀前半に竪穴式石室が付設される。その後、6 世紀前半ないし中葉に、6 号墳より約 40 m 南側の地点に円墳の 4 号墳

が築造された。さらに 6 世紀後半には 4・6 号墳の間の空閑地に円墳である 5 号墳が築造されたとみられる。なお、4 号墳の南西には直径約 14 m の円墳で横穴式石室を埋葬施設とする大谷山 3 号墳、直径約 7 m の円墳とみられる新 1 号墳が近接する。詳細な時期は明らかではないが、大谷山 4・5・6 号墳と有機的な関連をもち築造されたものと推定される。

一方、大谷山の山頂の標高約 132 m には、大谷山地区最大の前方後円墳である大谷山 22 号墳が所在する。大谷山 22 号墳は、全長約 80 m、墳長約 68 m で基壇や別区などの施設をもち、墳丘テラスや基壇テラスには円筒埴輪が、別区には多数の形象埴輪が樹立される。出土須恵器より TK10 型式期の 6 世紀前半の築造と考えられており、大谷山 6 号墳の次段階に築造され、かつ 4 号墳にやや先行するとみられる。また、大谷山山頂から北東へ分岐する尾根の頂部には墳頂約 37 m の前方後円墳である大谷山 20 号墳が立地し、さらに北東へ二方向に分岐する各々の尾根上には、小型前方後円墳の大谷山 26・27・28 号墳の一群と、直径 10～20 m の円墳である 12・13・14・15・16・17・38 号墳の一群が立地する。これらの古墳の築造時期については別途詳細な検討が必要だが、大谷山 14・15 号墳（和歌山県教育委員会 2003）や、大谷山 27・28 号墳（和歌山県史編さん委員会 1983）が 6 世紀初頭から前半の築造と推定され、大谷山 4・6・22 号墳の築造時期と一部併行するとみられる。したがって、大谷山地区の古墳群は、5 世紀前半頃に大谷山 39 号墳が築造された後、造墓活動の低調となる可能性のある 5 世紀後半の段階を経て、6 世紀初頭より小型前方後円墳や円墳が順次築造され、6 世紀前半の首長墓である大谷山 22 号墳の築造前後に造墓活動のピークを迎えると考えられる。なお、大谷山 13 号墳からは TK217 型式期の須恵器が出土しており、追葬を含め 7 世紀代まで機能した古墳が存在することも特筆される。

今後は、未調査の古墳の検討や、既調査の古墳の調査成果の再検討を踏まえて、大谷山地区の古墳群の展開過程をより明確にしていく必要がある。昭和 47 年度に実施された大谷山 4・5・6・39 号墳の発掘調査成果は、岩橋千塚古墳群における各地区、各古墳群の展開過程や群集墳としての特質、階層構成、岩橋型横穴式石室の系譜などを明らかにする上で、様々な重要な知見をもたらしたと考えられる。残された課題も多くあるが、それらについては今後の継続的な調査研究



図 56 大谷山地区の古墳分布図 (S=1/8000)

によって明らかにしていく必要がある。

第3節 岩橋千塚古墳群における箱式石棺

大谷山39号墳と大谷山6号墳では、埋葬施設として箱式石棺が採用されているが、岩橋千塚古墳群では、848基の古墳のうち埋葬施設が判明している古墳は全体の約半数で、その中で箱式石棺が占める割合はわずか5%（黒石2010）である。^(註1)

ここでは、大谷山39号墳と大谷山6号墳の箱式石棺の岩橋千塚古墳群における位置づけを考えるために、岩橋千塚古墳群における箱式石棺の特徴についてまとめた。なお、箱式石棺の属性については、すでに畿内周辺における箱式石棺を分析している清家章氏の分類（清家2001）を基に行う。

使用石材 古墳群内の竪穴式石室及び横穴式石室と同様に全て結晶片岩製である。

長側石の枚数 いずれも長側石2枚又は3枚で構成される。寺内35号墳では長側石1枚であるが、長さ78cmの小型の石棺である。一方、大谷山39号墳は、長側石3枚で構成されるが、そのうち1枚は140cmを測り、底石や蓋石も長さ200cmを超える大型の石材を用いている。また、前山A17号墳でも、2枚の長側石のうち長いものは170cm超を測る。こうした大型石材を用いた箱式石棺は、いずれも5世紀代の古墳に採用されている。

底石の有無 ほぼ有底石タイプであるが、大谷山6号墳では底石が確認されていない。^(註2・3)

石棺の内法 最小のもので78cm、最大で222cmとかなりの幅をもつ。また、小児用とみられる140cm以下の棺も全体の半数にみられる。

小口構造 ほとんどがH字形タイプで、一部に口字形が見られる。^(註4) このうち副室をもつものは、大谷山39号墳と前山A17号墳の2例で認められる。

箱式石棺を有する古墳 岩橋千塚古墳群では5世紀前半（大谷山39号墳）から7世紀前半（寺内35号墳）まで箱式石棺が埋葬施設として採用されている。箱式石棺は、小型の円墳や方墳に多いが、6世紀初頭以降は大谷山6号墳や大谷山28号墳のように小型の前方後円墳にもみられる。

埋葬施設の位置 大谷山39号墳や前山A17号墳のように5世紀代の古墳では、箱式石棺は単独あるいは他の埋葬施設と並んで墳丘中央に設置されている。一方、大谷山6号墳や大谷山28号墳、寺内35号墳のように6世紀初頭以降の古墳では、箱式石棺を単独の埋葬施設として採用する事例は現在のところ確認できておらず^(註5)、箱式石棺は横穴式石室の周辺に付設されている。

副葬品 箱式石棺に伴う副葬品は、岩橋千塚古墳群の他の埋葬施設の副葬品と比較して、質・量ともに劣る。古墳群において古墳の規模や埋葬施設の差を超えて共通して副葬されている鉄鏃やガラス小玉が、箱式石棺から出土していないことも特徴として挙げられる。

さらに、5世紀代には大谷山39号墳で鉄製農工具類（いずれも雛形）や前山A17号墳で衝角付冑が副葬されているのに対して、大谷山6号墳では須恵器壺と土師器椀が各1点、寺内35号墳では刀子1点といったように、6世紀初頭以降には副葬品は質・量ともにより簡素なものとなる。箱式石棺の位置づけ 以上のように、岩橋千塚古墳群における箱式石棺は、使用石材、長側板構造、底石の有無、小口構造などに多少の差異はあるものの^(註6)、全体としては古墳群内で共通する傾向にある。一方で、墳丘における埋葬施設の位置や副葬品には差異があり、これは時期差によるものとみられる。5世紀代の大谷山39号墳や前山A17号墳では、大型の長側石や蓋石、底石を用いていること、短側板をはめこむ溝状加工が施されていること、鉄製農工具のセットや衝角付

冑のような副葬品をもつこと、石棺の内部に赤色顔料が塗布されていること、箱式石棺が墳丘の中央部に設置されていることなどが特徴として挙げられる。一方、6世紀初頭以降の大谷山6号墳や寺内35号墳では、大型の石材を用いず底板や蓋石も複数の割石で構成されること、副葬品は須恵器や刀子1点など簡素なものであること、石棺が墳丘中央から離れたところに設置されていること、などの特徴がみられる。こうした箱式石棺にみられる変化は、6世紀初頭つまり岩橋千塚古墳群における横穴式石室の導入時期に見出すことができる。(註7)

箱式石棺の被葬者は、すでに指摘されているように(黒石2010、藤井2012)採用される古墳の規模や埋葬施設の構築にかかる労力、副葬品の質・量などからみて古墳群内でも下位に位置づけられると言える。さらに6世紀初頭の横穴式石室導入後は、横穴式石室をもつ古墳に箱式石棺が副次的な役割を果たしていることで、古墳群内での階層差とともに、墳丘単位での集団の階層差を顕在化させるものとなっている。

表6 岩橋千塚古墳群における箱式石棺集成^{※1}

古墳名	時期	墳形規模	埋葬施設の位置	その他の埋葬施設	長側石の枚数	小口 ^(※2)	石材	加工 ^(※3)	内法長×幅	蓋石	底石	長側板継ぎ方 ^(※4)	副室	副葬品	被葬者 ^(※5)	備考
大谷山39号墳	5世紀前半	円墳20	墳丘中央に並列	粘土郭	3+3	H	結晶片岩	有	124×24	1	有	平	有	鉄剣1・鉄斧1 鉄鎌1・鉄鉈3 (農工具は雛形) 土師器	12才	粘土で密封 内面に赤色顔料
井辺前山37号墳	5世紀	不明	主	無	2+3	H	結晶片岩	不明	153×35	1	有	重	無	鉄剣1(棺外)	壮年・男性	粘土で密封
前山A17号墳	5世紀中葉～後半	方墳14	主	無	2+2	H	結晶片岩	有	222×66	-	一部残	重	有	主室：鉄刀2 副室：銜角付冑1	-	内面に赤色顔料
寺内22号墳	5世紀末	円墳12	-	小型竪穴式石室	-	-	-	-	120×60	-	有・円礫	-	-	-	小児	-
大谷山6号墳	6世紀初頭	前方後円墳25	副	横穴式石室・竪穴式石室	1+不明	口	結晶片岩	不明	156以上×40	-	無	-	無	須恵器壺1 土師器壺1	-	側板を裏込め石で固定か
大谷山28号墳	築造は6世紀初頭(石棺は6世紀中頃か)	前方後円墳25	副	横穴式石室	2+不明	H	結晶片岩	不明	81×46	6	有	重	無	須恵器杯蓋1・杯身2 土師器壺1	小児	-
寺内35号墳	7世紀前半	円墳12	副	横穴式石室	1+1	口	結晶片岩	-	78×34	4	有・割石複数	-	無	刀子1	小児	粘土で密封
前山A7号墳	-	円墳10	主	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
前山A8号墳	-	円墳12.7	副	竪穴式石室	-	-	-	-	195×28	-	-	-	-	-	-	-
前山A50号墳	-	円墳	主	無	1+2	H	結晶片岩	有	75×26	5	無	重	無	刀子	小児	-
前山A75号墳	-	円墳5.4	主	-	2+2	H	結晶片岩	-	162×33	-	一部有	重	無	-	-	-
前山A76号墳	-	円墳7.2	主	-	2+2	H	結晶片岩	-	199×33	-	有	平	無	-	-	側板外側に不規則に板石を配置
前山A78号墳	-	-	主	-	2+2	H	結晶片岩	-	170×30	-	一部有	平	無	-	-	-
前山A81号墳	-	円墳9	主	-	2+2	H	結晶片岩	-	93×27	-	有	重	無	-	小児	-
前山A100号墳	-	円墳9	主	-	2+2	H	結晶片岩	-	207×39	1	有	重	無	-	-	板石を屏立し外郭を形成
前山A104号墳	-	円墳10	主	-	4+不明	口	結晶片岩	-	247×15	-	有	平	-	-	-	-
不明	-	-	-	-	-	II	結晶片岩	-	180×44	-	-	平	有	-	-	-

※1 岩橋千塚古墳群で箱式石棺をもつとされる古墳のうち、詳細(図面や写真等)が確認できていないものは表から除外している。

※2 「H」はH字形タイプ、「口」は口字形タイプ、「II」はII字形タイプを示す。

※3 加工は、小口組合せ部分の溝状加工の有無を示す。

※4 「重」は重継ぎタイプ、「平」は平継ぎタイプを示す。

※5 人骨の有無に関係なく、内法長が140cm以下の石棺については小児用と判断した。

【註】

- (1) 内部施設が判明している古墳のうち、横穴式石室は68%、竪穴式石室は24%、箱式石棺は5%、粘土槨や粘土床は3%である。(黒石 2010)
- (2) 大谷山6号墳は無底石タイプとしているが、土圧による変形のため判然としない。
- (3) 畿内周辺の箱式石棺を分析した清家章氏は、床面の構造は集団差を示すものと指摘している(清家 2001)
岩橋千塚古墳群ではほとんどが有底石タイプであるが、古墳群周辺の山崎山古墳群や有田市の地ノ島遺跡、和歌山県南部の箱式石棺は無底石タイプが多い。
- (4) 各墳墓でH字形とロ字形が共存する事例がみられることから、この違いから厳格な集団性は認めにくいと指摘されている。(清家 2001)
- (5) 岩橋千塚古墳群で箱式石棺を埋葬施設に持つ古墳のうち、築造時期が判明している事例に限る。副葬品や埴輪等の出土が確認できず築造時期が不明であるが、前山A地区では箱式石棺を単独の埋葬施設としてもつ古墳が多く見られる。
- (6) 大谷山6号墳と大谷山28号墳では、石棺の長側板の外側に割石を配置するなどの共通点が見られる。また、前山A地区でも、長側石、小口構造、底石に共通する特徴がみられることから、地区ごとの集団差を指摘できる可能性がある。
- (7) 変化の背景については、あらためて考察する必要がある。

【参考文献】

- 大野嶺夫 1986「岩橋千塚と周辺の横穴式石室(下)」『古代学研究』110号 古代学研究会
河内一浩 1988「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能道』巽三郎先生古稀記念編集刊行会
黒石哲夫 2007「地域別概説 紀伊の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
黒石哲夫 2010「岩橋千塚古墳群の築造労働力からみた被葬者の階層性と集団の人口について」『待兼山考古学論集Ⅱ－大阪大学考古学研究室20周年記念論集』大阪大学考古学研究室
清家章 2001「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』152 古代学研究会
瀬谷今日子 2016「岩橋千塚古墳群における副葬品の様相」『岩橋千塚とその時代－紀ノ川流域の古墳文化－』和歌山県立紀伊風土記の丘
丹野拓 2013「岩橋千塚の4つの築造集団」『古文化談叢』第70集九州古文化研究会
辻川哲朗 1998「石室」『齊頼塚古墳』マキノ町遺跡調査団・マキノ町教育委員会
中司照世 2003「岩橋型横穴式石室について－後期前半の首長墳の変遷を中心に－」『紀伊考古学研究』第6号 紀伊考古学研究会
西田弘 1990「草津市北谷古墳群の調査」『滋賀県埋蔵文化財調査年報』滋賀県教育委員会
萩野谷正宏 2016「紀ノ川下流域の群集墳について」『岩橋千塚とその時代－紀ノ川流域の古墳文化－』和歌山県立紀伊風土記の丘
土生田純之 1980「突起をもつ横穴式石室の系譜」『考古学雑誌』第66巻第3号 日本考古学会
広瀬和雄 2004「紀伊岩橋千塚古墳群の諸問題」『地域と古文化』地域と古文化刊行会
藤井幸司 2012「近畿周辺」『古墳時代の考古学2』同成社
藤薙勝則 2006「古墳時代後期における円筒埴輪の一樣相」『紀伊考古学研究』第9号 紀伊考古学研究会
関西大学文学部考古学研究室 1967『岩橋千塚』
秦荘町教育委員会 2003『金剛寺野古墳群(X X)』
和歌山県 1921『岩橋千塚第一期調査 和歌山県史蹟調査報告書1』(『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯所収)
和歌山県教育委員会 2000『岩橋千塚周辺古墳群 緊急確認調査報告書』
和歌山県教育委員会 2004『和歌山県埋蔵文化財調査年報 平成14年度』
和歌山県史編さん委員会 1983『和歌山県史』
和歌山県文化財研究会 1968『和歌山県文化財学術調査報告書 第3冊』

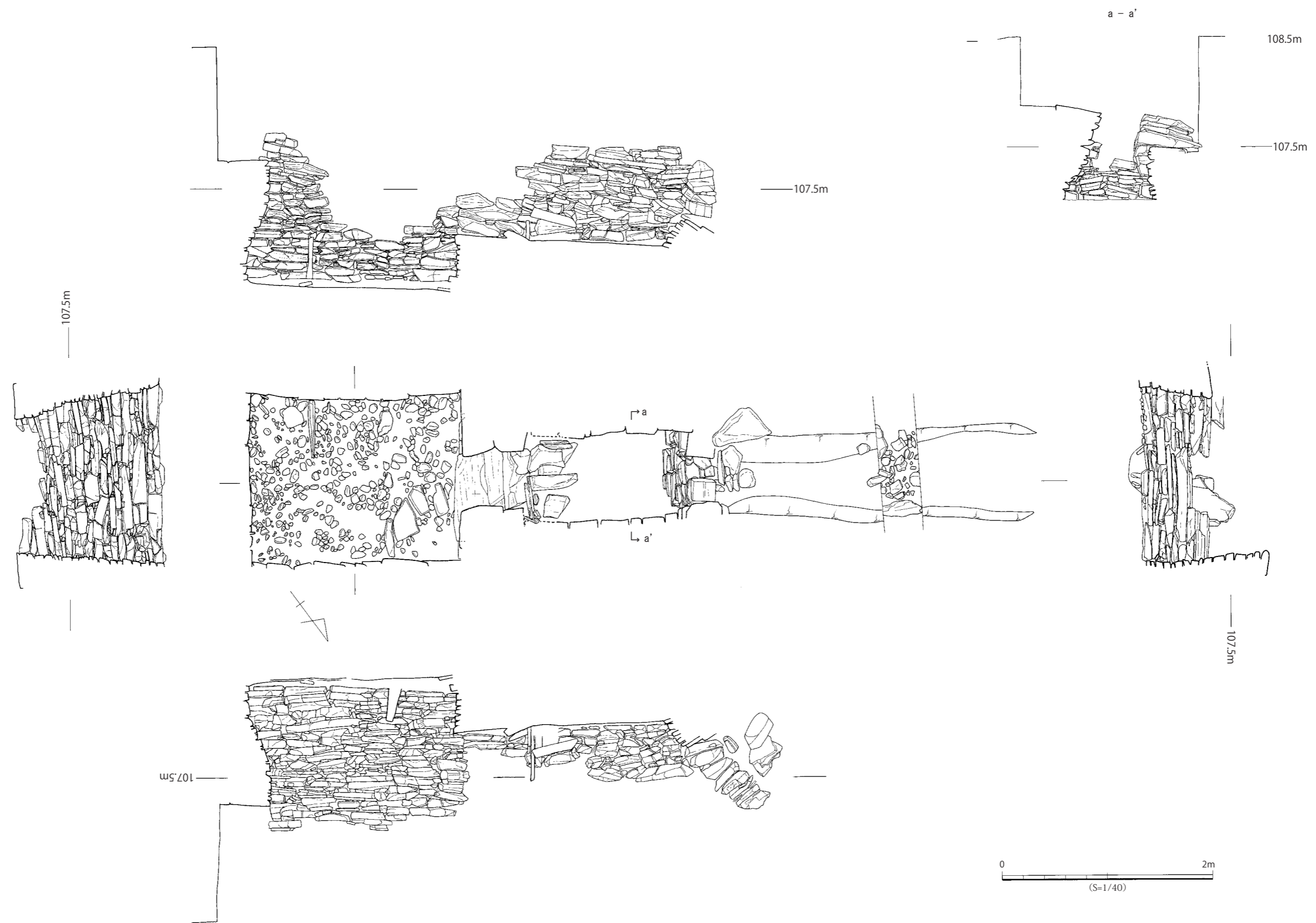


图4 大谷山4号墳 横穴式石室実測図 (S=1/40)

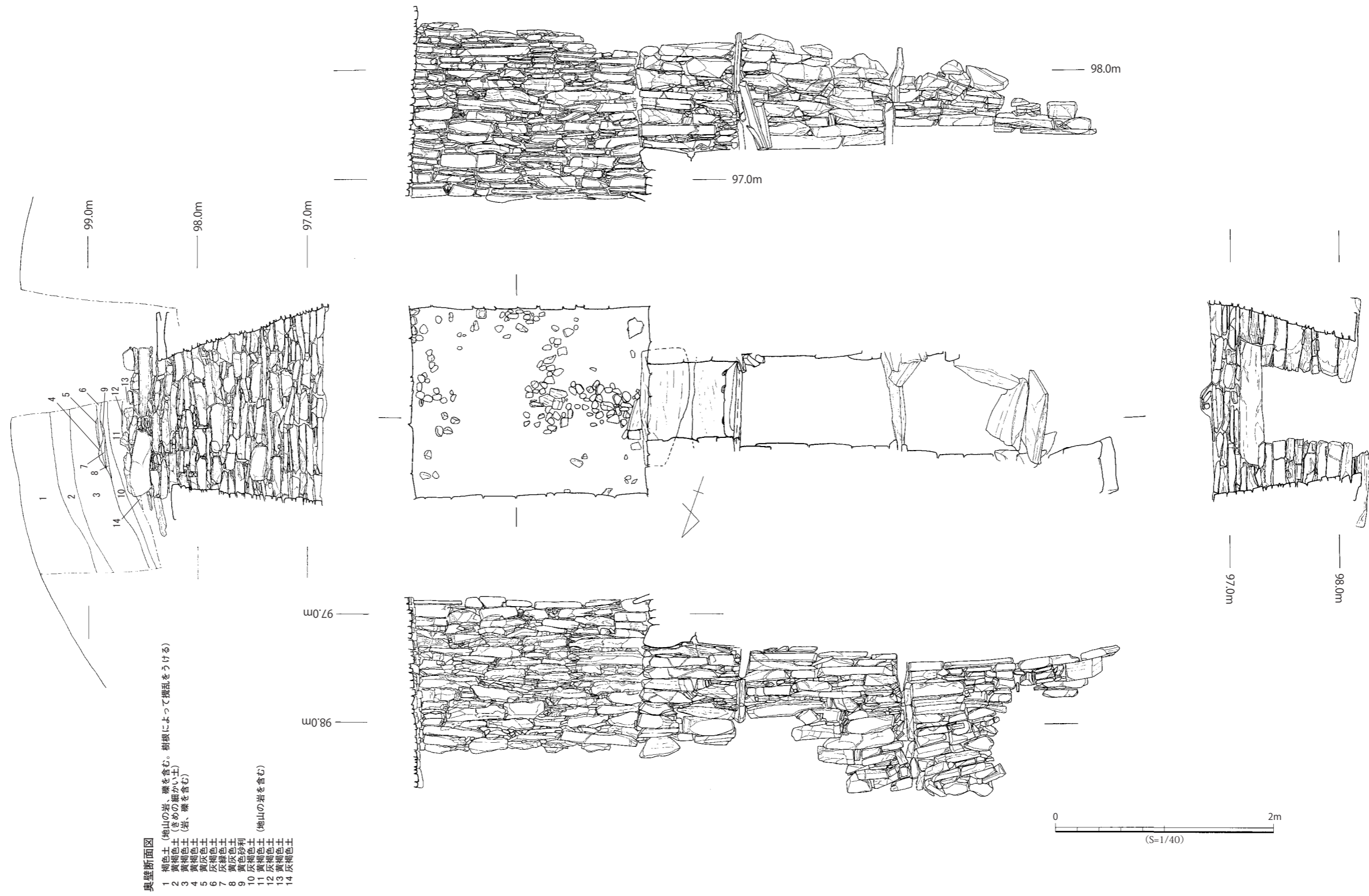
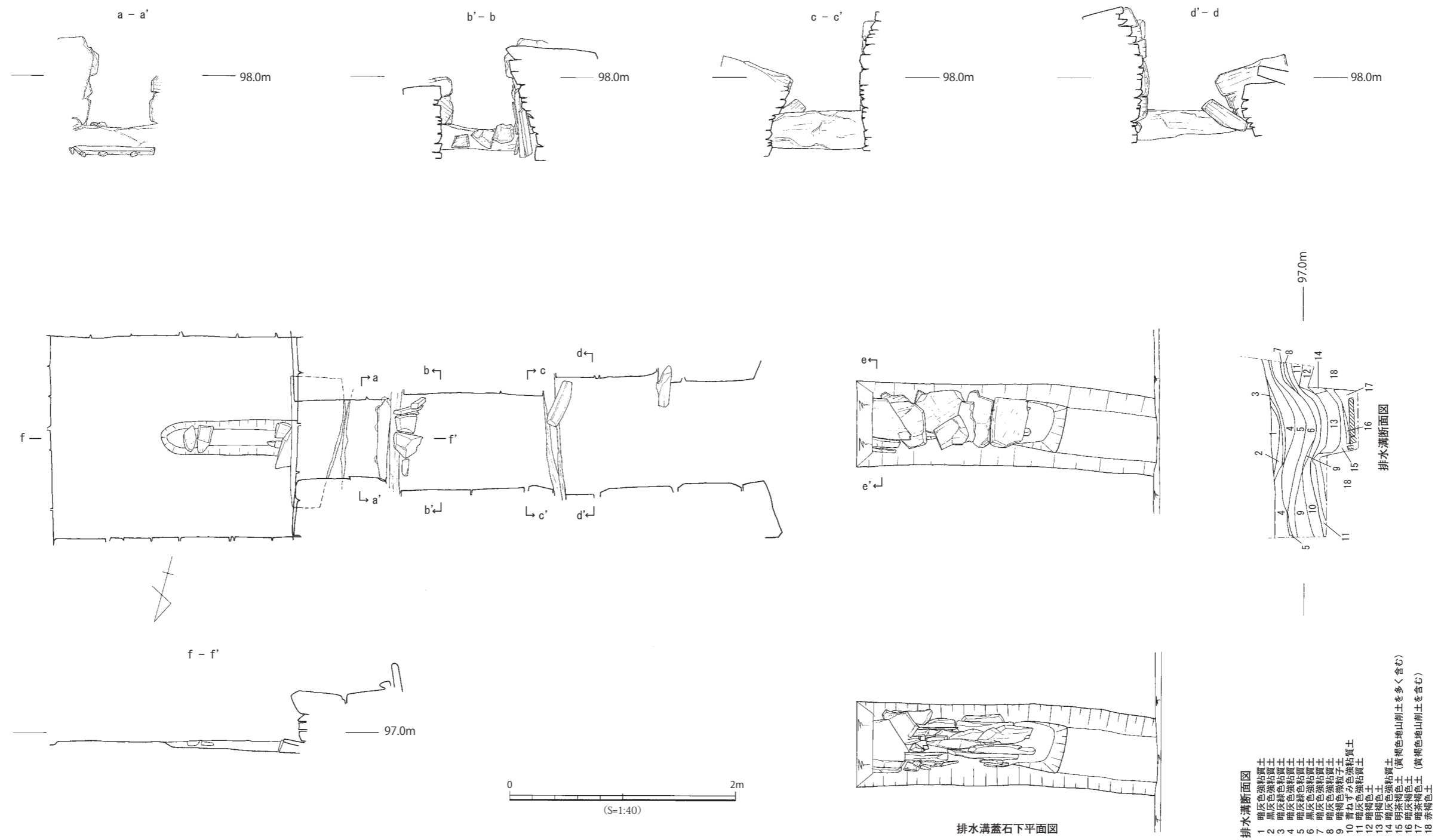


図10 大谷山5号墳 横穴式石室実測図 (S=1/40)



- 排水溝断面图
- 1 暗灰色強粘質土
 - 2 黑灰色強粘質土
 - 3 暗灰色強粘質土
 - 4 暗灰色強粘質土
 - 5 暗灰色強粘質土
 - 6 暗灰色強粘質土
 - 7 暗灰色強粘質土
 - 8 暗灰色強粘質土
 - 9 暗灰色強粘質土
 - 10 暗灰色強粘質土
 - 11 暗灰色強粘質土
 - 12 暗褐色土
 - 13 暗褐色土
 - 14 暗褐色土
 - 15 暗茶褐色土 (黃褐色地山崩土を多く含む)
 - 16 暗茶褐色土 (黃褐色地山崩土を多く含む)
 - 17 暗茶褐色土
 - 18 赤褐色土

图 11 大谷山 5 号墳 横穴式石室排水平面図・断面図 (S=1/40)

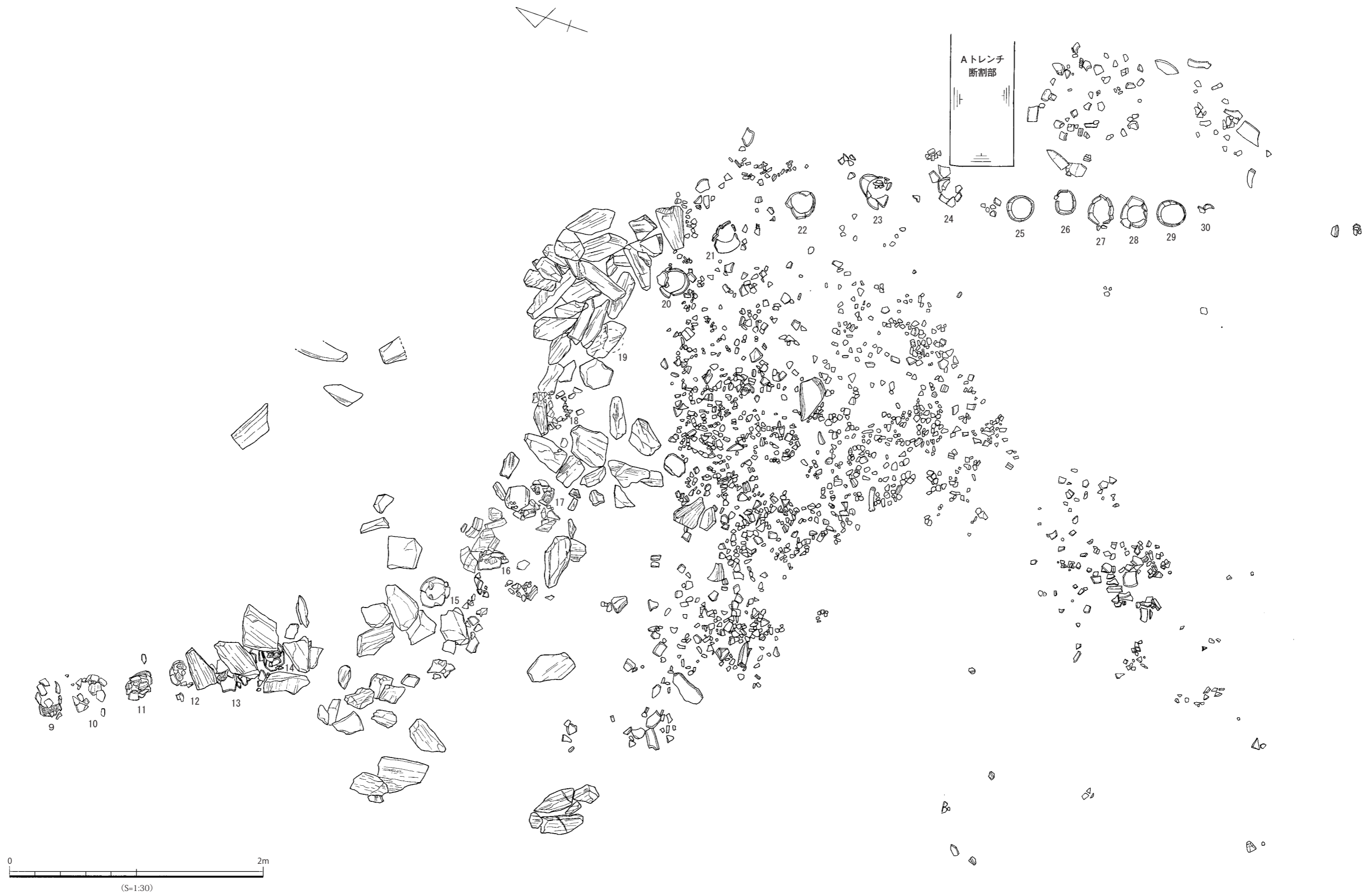


図16 大谷山6号墳 西側くびれ部平面図 (S=1/30)

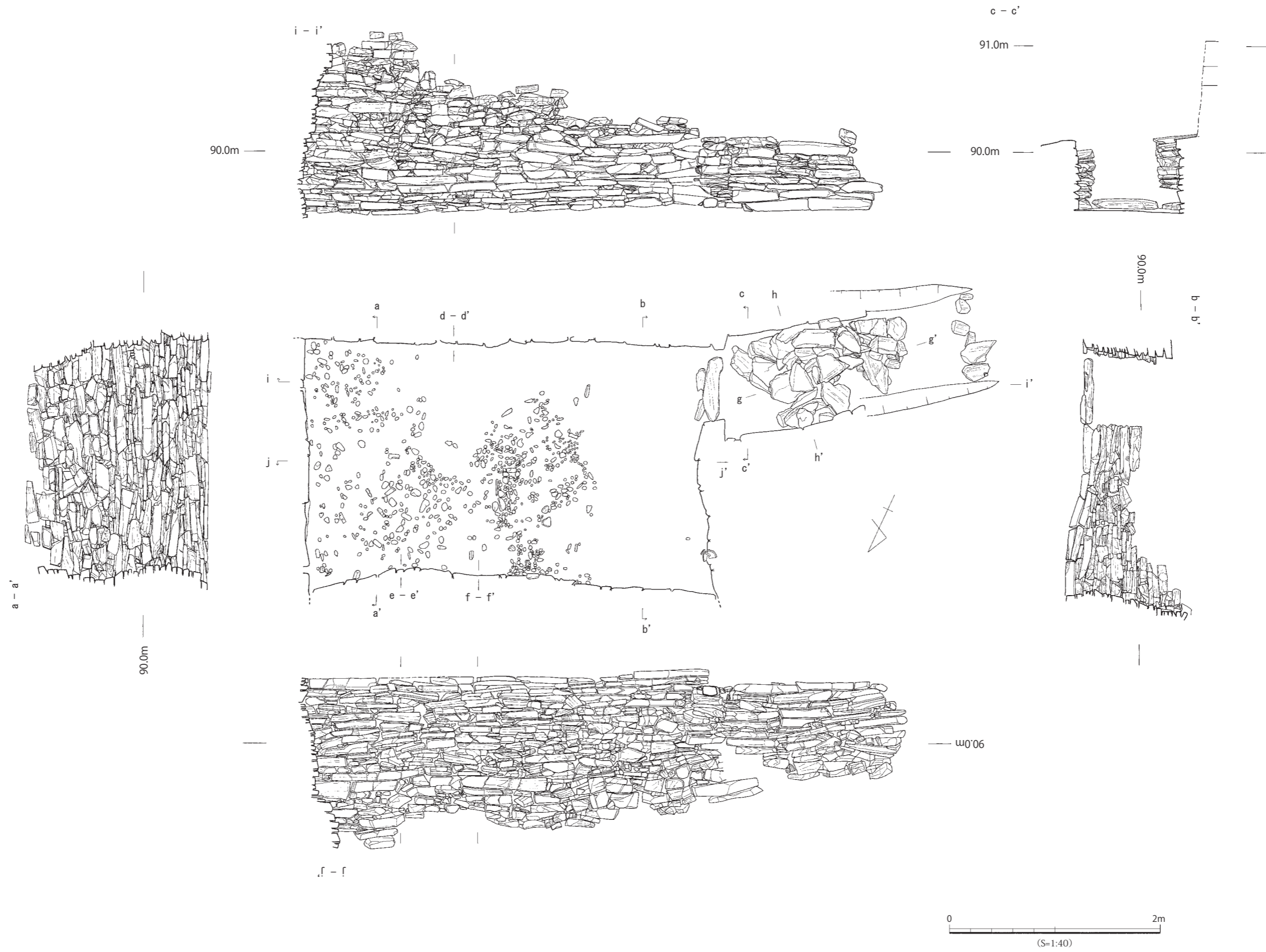


图 20 大谷山 6 号墳 横穴式石室実測図(1) (S=1/40)



1. 岩橋千塚古墳群 遠景



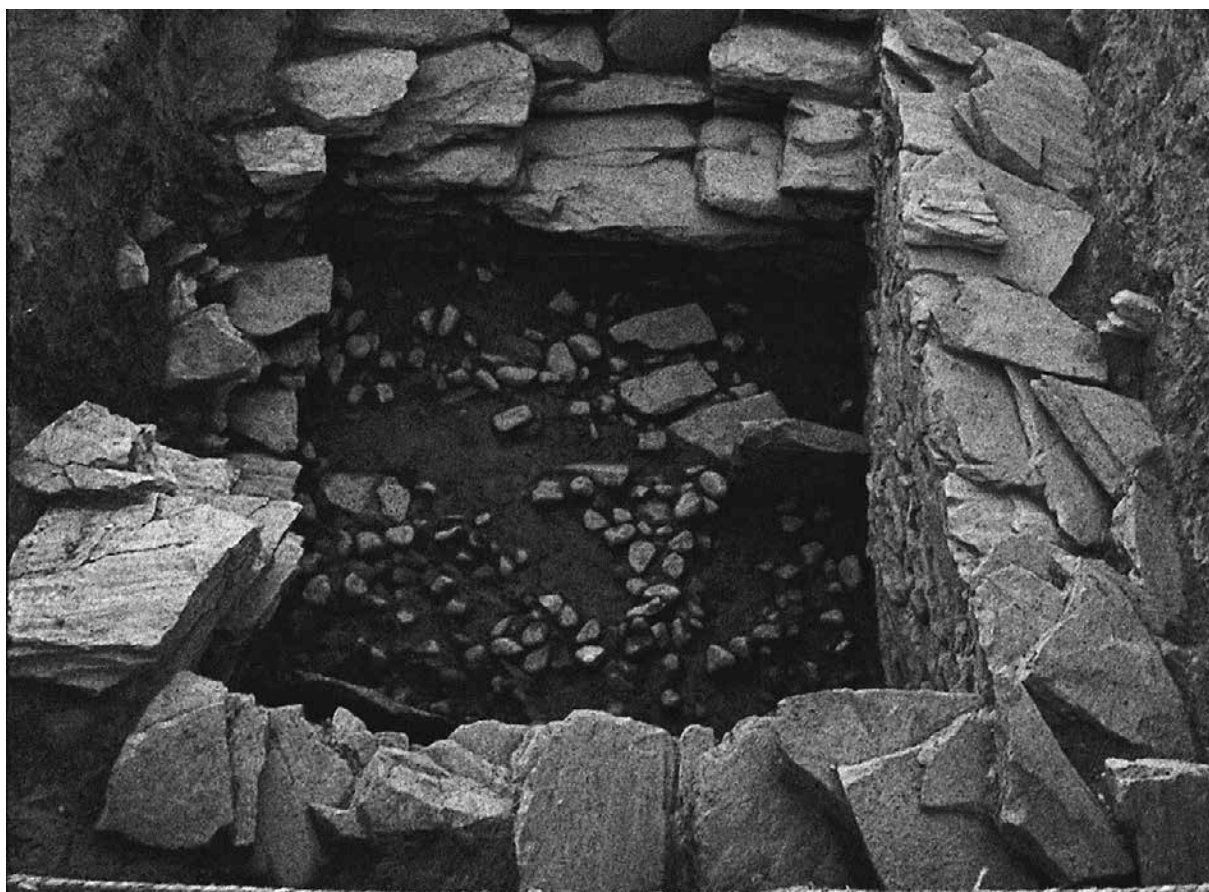
2. 大谷山4・5・6号墳 遠景



1. 大谷山4・5・6号墳 全景



2. 大谷山4号墳 墳丘



1. 大谷山4号墳 横穴式石室（東から）



2. 羨道部～玄室（西から）



1. 玄室及び羨道（北から）



2. 玄室奥壁（西から）



3. 玄室左側壁（北から）



4. 玄室右側壁（南から）



5. 玄室前壁（東から）



1. 玄室床面及び仕切石（西から）



2. 仕切石①（東から）



3. 仕切石①（西から）



4. 仕切石②（南から）



5. 仕切石②（東から）



1. 玄室前道及び扉石（玄室から）



2. 玄室前壁（東から）



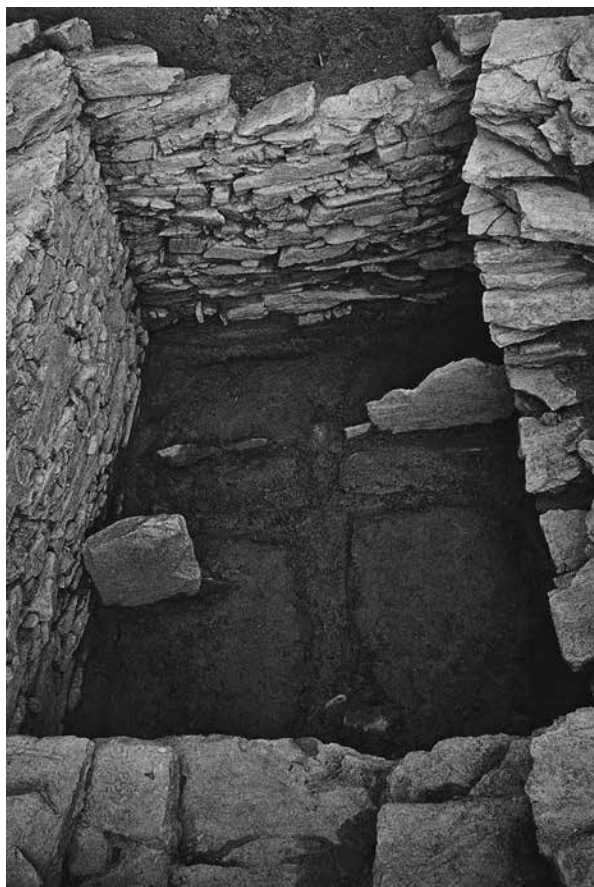
3. 扉石による玄門閉塞状況（西から）



4. 羨道部閉塞石（西から）



5. 羨道部閉塞石（上から）



1. 玄室排水溝検出状況（西から）



2. 玄室排水溝検出状況（北から）



3. 玄室前壁付近排水溝検出状況（奥壁から）



4. 玄室前壁付近排水溝検出状況（東から）



5. 玄室前壁付近排水溝検出状況（東から）



6. 羨道排水溝検出状況①（西から）



7. 羨道排水溝検出状況②（西から）

写真図版 8

大谷山4号墳



1. 大谷山4号墳 埴輪



1. 大谷山4号墳 埴輪・須恵器・土師器



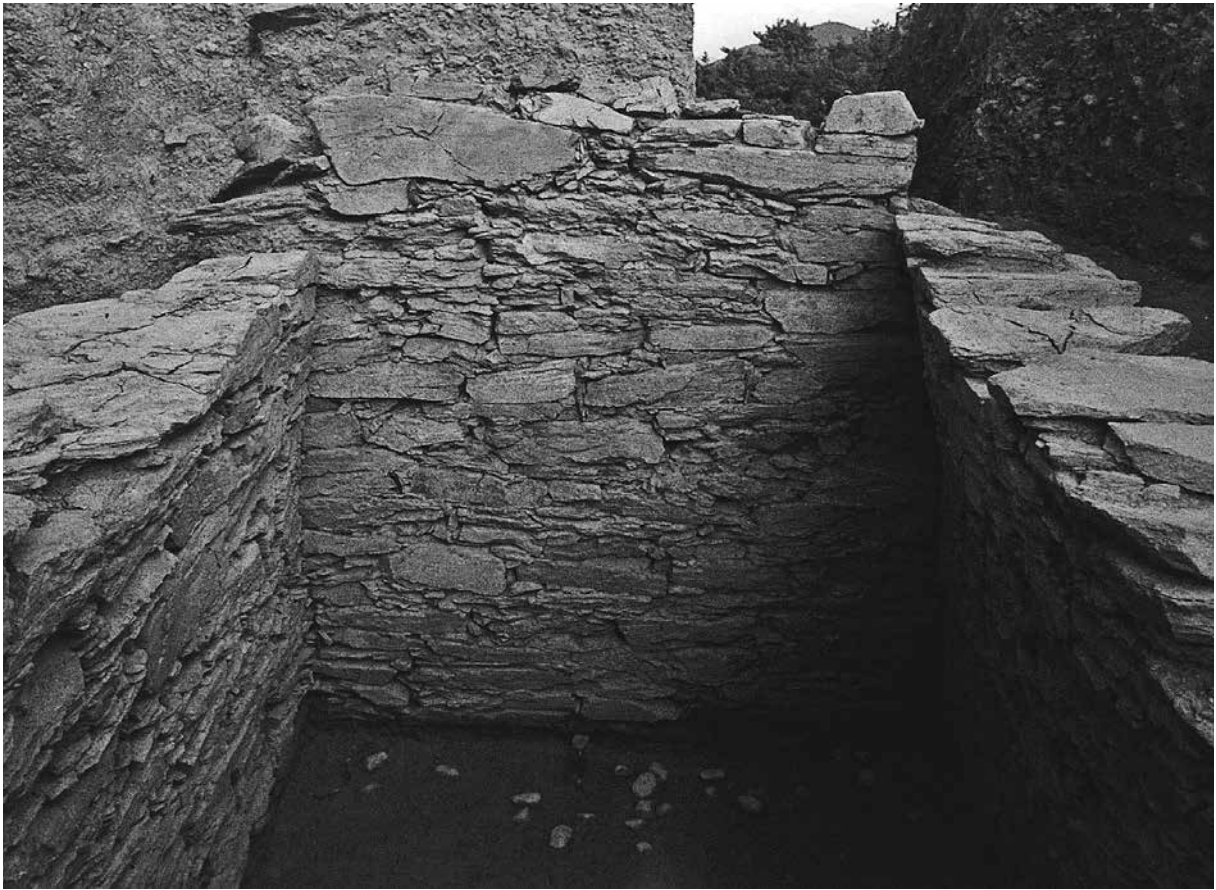
1. 大谷山5号墳 墳丘（調査前）



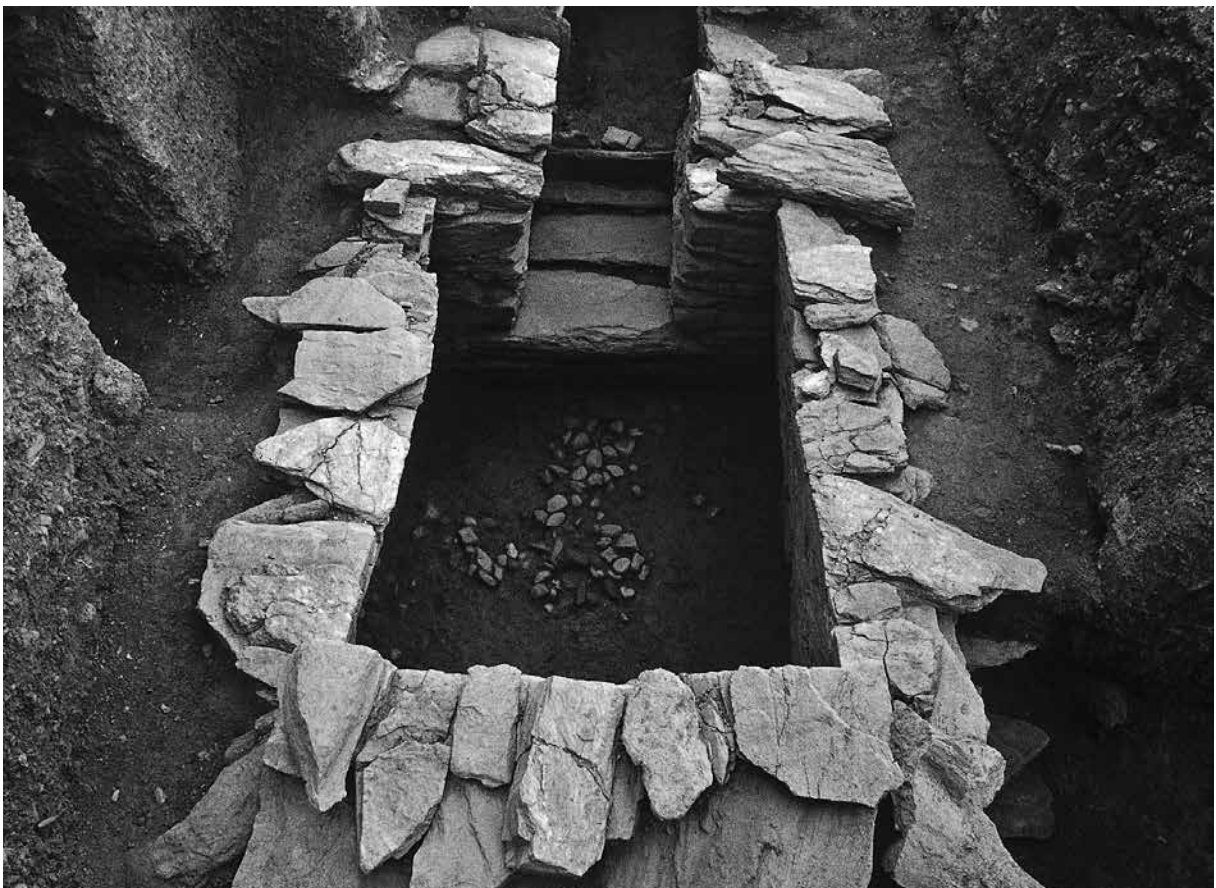
2. 大谷山5号墳 石室検出状況（調査前）



1. 大谷山5号墳 横穴式石室（東から）



1. 玄室奥壁（西から）



2. 玄室全景（東から）



1. 玄室前壁（東から）



2. 玄門閉塞石検出状況（西から）



1. 羨道中央付近閉塞石検出状況（西から）



2. 羨道及び羨門閉塞石（西から）



3. 羨門閉塞石（写真右が玄室側）



4. 羨門閉塞石検出状況（西から）



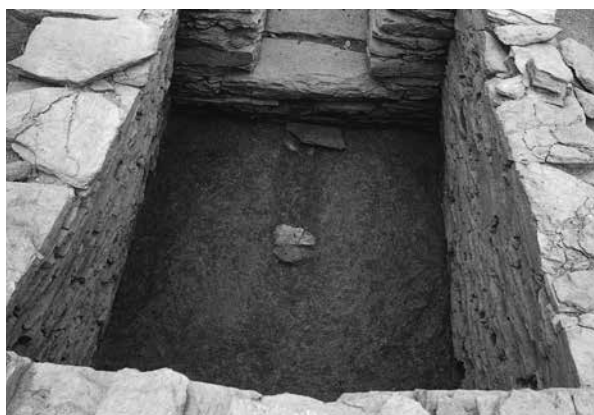
1. 羨道前庭 排水溝検出状況①（東から）



2. 羨道前庭 排水溝検出状況②（東から）



3. 羨道前庭 排水溝上面土層断面（東から）



4. 玄室 排水溝検出状況①（東から）



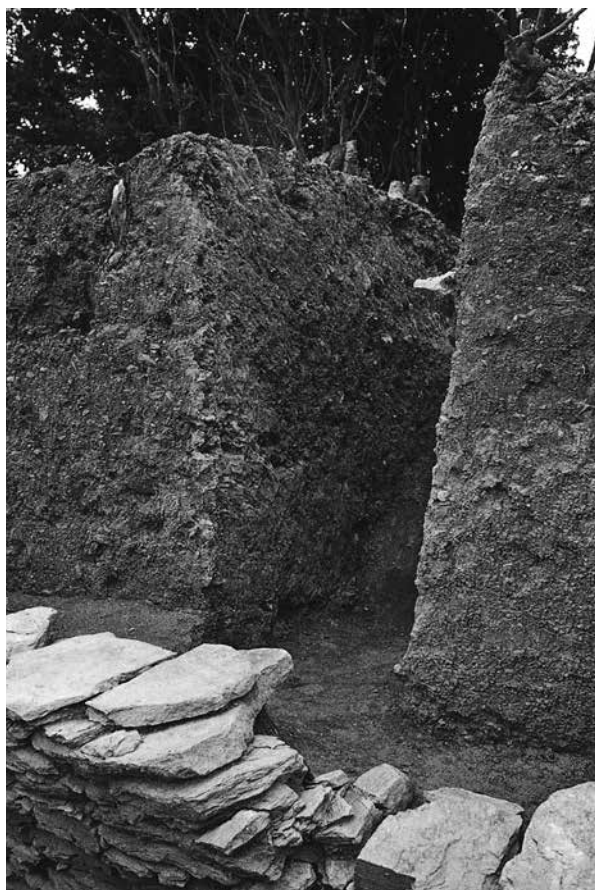
5. 玄室 排水溝検出状況②（北から）



1. 北トレンチ西壁土層断面①（東から）



2. 北トレンチ西壁土層断面②（東から）



3. 南トレンチ東壁土層断面（西から）



4. 東トレンチ北壁土層断面（西から）



5. 横穴式石室玄室裏込め検出状況



6. 西トレンチ西側（西端より羨道端をのぞむ）



2(表)



2(裏)



1



3



5



4



7



6



8

1. 大谷山5号墳 埴輪・須恵器・土師器・弥生土器



1. 大谷山6号墳 墳丘（調査前）



2. 大谷山6号墳 横穴式石室（調査前）



1. 大谷山6号墳 墳丘全景（南から）



2. 大谷山6号墳 墳丘全景 竪穴式石室検出後（南から）



1. 横穴式石室全景（西から）



2. 横穴式石室玄室前道及び玄室（西から）



1. 玄室全景（東から）



2. 玄室奥壁（西から）



3. 玄室南側壁



4. 玄室北側壁



5. 玄室床面鉄斧出土状況（北側壁付近）



1. 玄室南側壁突起石（1箇所）（西から）



2. 玄室南側壁突起石（1箇所）（北西から）



1. 玄室北側壁突起石（西から）



2. 玄室北側壁突起石（2箇所）（南から）



1. 羨道閉塞石検出状況 (写真左側が玄室)



2. 羨道閉塞石土層断面 (北西から)



1. 竪穴式石室全景（北から）



1. 竪穴式石室南側須恵器出土状況



2. 竪穴式石室検出状況及び土層断面（南から）



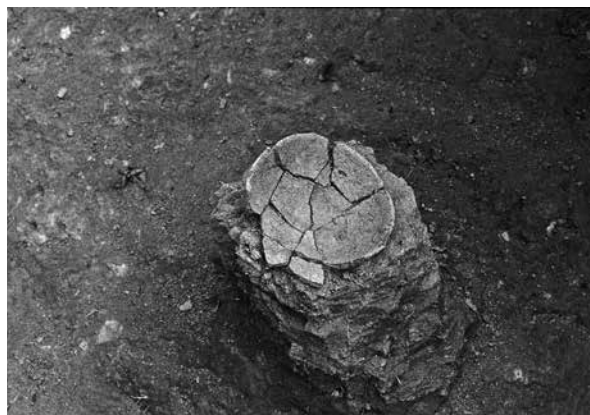
1. 箱式石棺全景（北東から）



2. 箱式石棺全景（南東から）



1. 箱式石棺（北西から）



2. 箱式石棺周辺土師器出土状況



3. 箱式石棺周辺須恵器・土師器出土状況



4. Fトレンチ南壁（北から）



1. 西側くびれ部全景（西から）



2. 西側くびれ部（南から）



1. 西側くびれ部（北東から）



2. 西側くびれ部20・21・22・23号円筒埴輪・須恵器検出状況



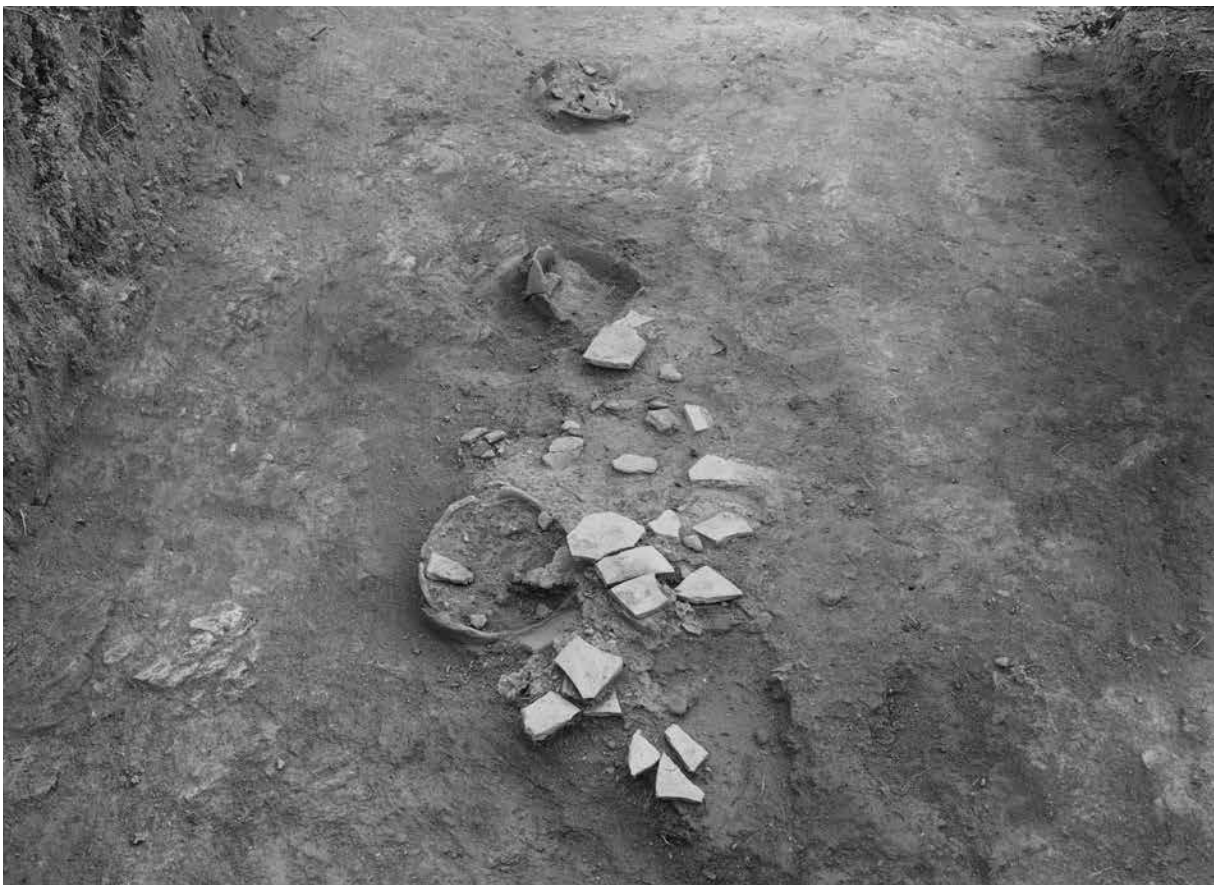
1. 西側くびれ部埴輪・須恵器検出状況（西から）



2. Dトレンチ15・16号円筒埴輪検出状況（西から）



1. 前方部前端円筒埴輪検出状況（東から）



2. 前方部前端（3トレンチ）33・34・35号円筒埴輪・須恵器検出状況（東から）



1. Dトレンチ北壁土層断面及び14号円筒埴輪検出状況（南から）



2. Dトレンチ南壁土層断面（北から）



1. 後円部西側9～14号円筒埴輪検出状況（南から）



2. 後円部西側12・13・14号円筒埴輪検出状況（西から）



1. 8トレンチ円筒埴輪検出状況（南から）



2. 8トレンチ 1・2・3・4・5・6号円筒埴輪検出状況（北から）



1. 横穴式石室奥壁裏込め及びFトレンチ土層断面（東から）



2. 箱式石棺断割土層断面（東から）



3. Aトレンチ北壁土層断面（南から）



4. Eトレンチ西壁土層断面（東から）



1. 大谷山6号墳 動物埴輪①



1. 大谷山6号墳 動物埴輪②



1. 大谷山6号墳 動物埴輪③



1. 大谷山6号墳 人物埴輪



大谷山6号墳

1. 大谷山6号墳 家形埴輪



1. 大谷山6号墳 器財埴輪



1. 大谷山6号墳 不明形象埴輪



1. 大谷山6号墳 円筒埴輪①



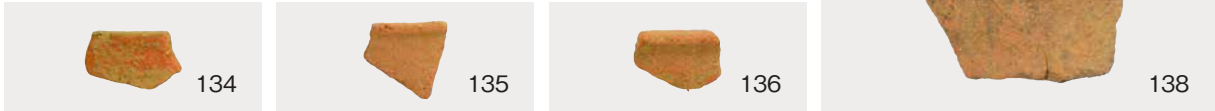
1. 大谷山6号墳 円筒埴輪②



1. 大谷山6号墳 円筒埴輪③



1. 大谷山6号墳 円筒埴輪④



1. 大谷山6号墳 円筒埴輪⑤



1. 大谷山6号墳 須恵器・土師器①



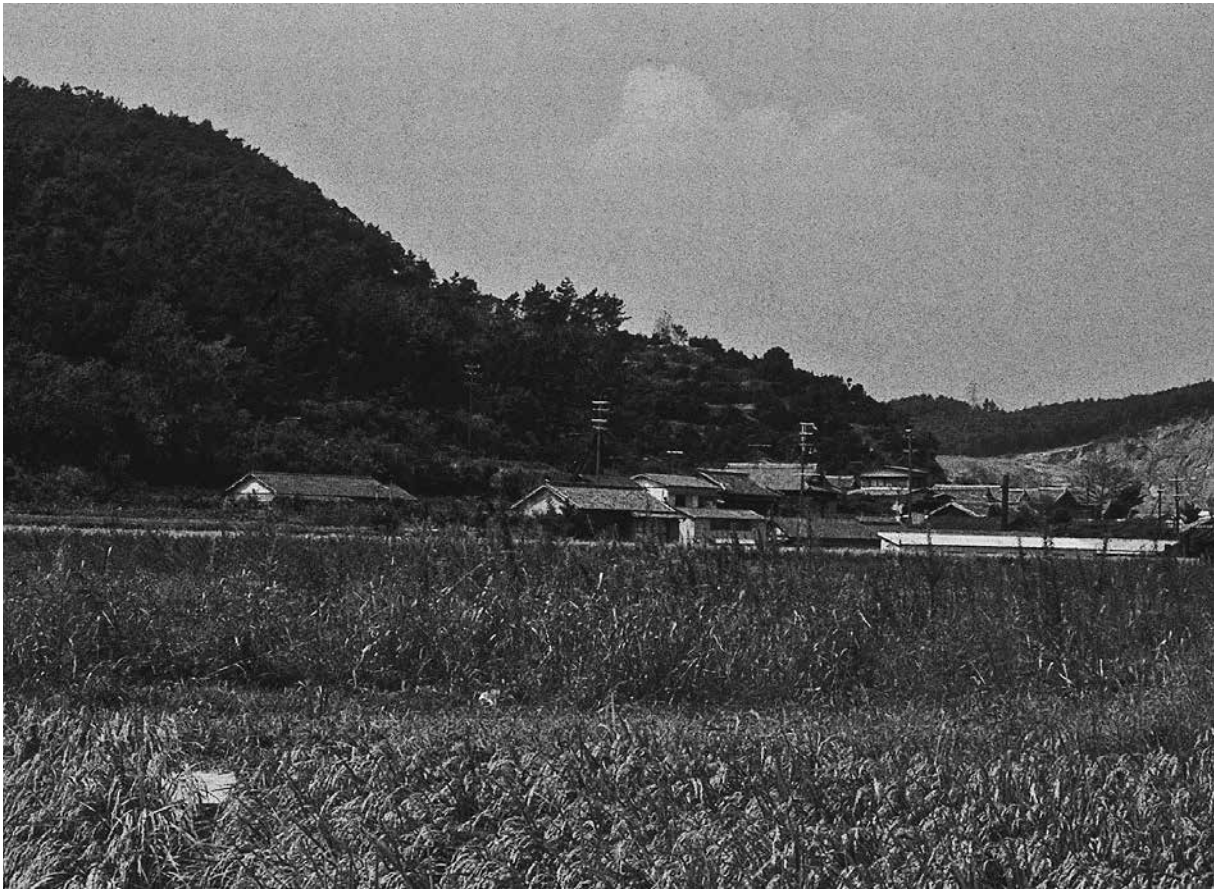
1. 大谷山6号墳 須恵器・土師器②



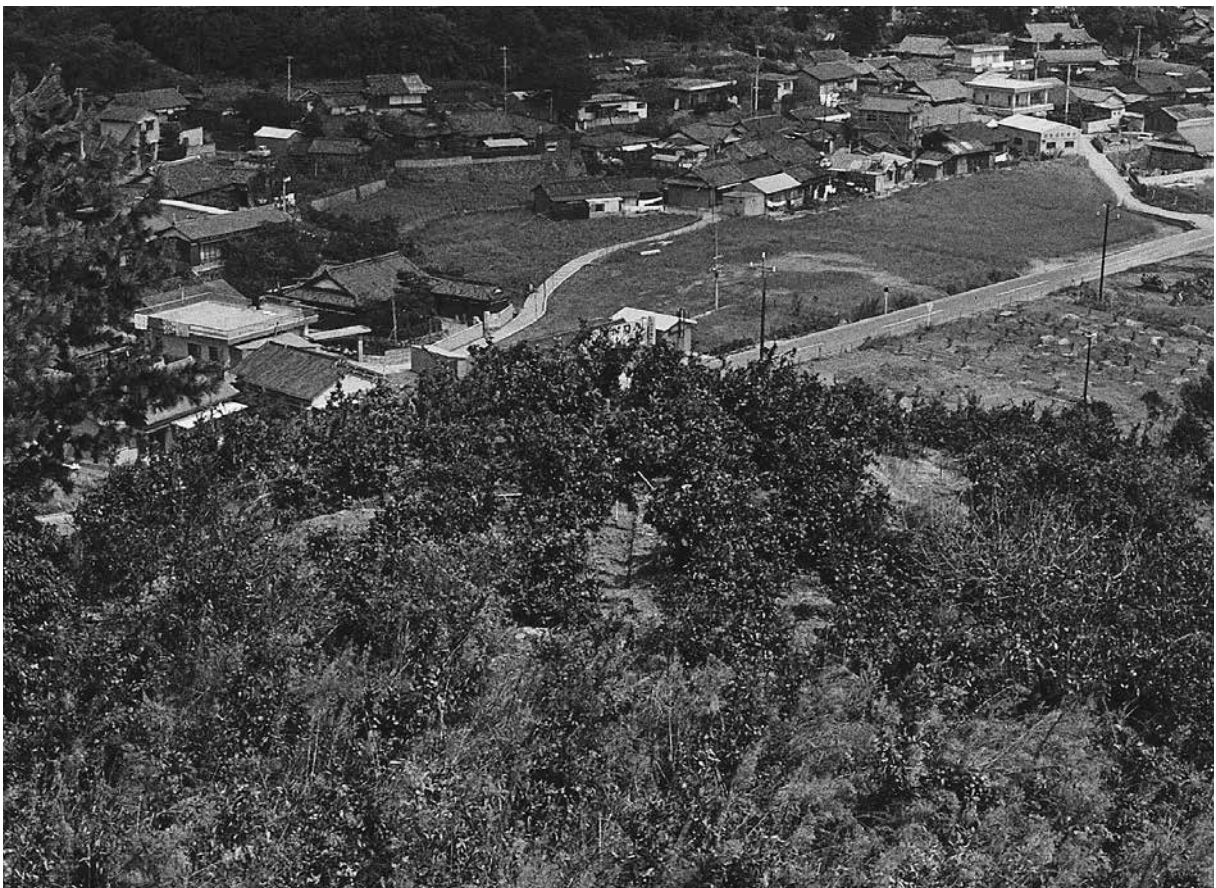
1. 大谷山6号墳 須恵器・土師器③



1. 大谷山6号墳 鉄製品・玉



1. 大谷山39号墳 遠景



2. 大谷山39号墳 墳丘全景（調査前）



1. 大谷山39号墳 埋葬施設全景（西から）



1. 埋葬施設墓壙全景（西から）



2. 粘土槨東端



3. 粘土槨西端



4. 粘土槨断割土層東壁断面



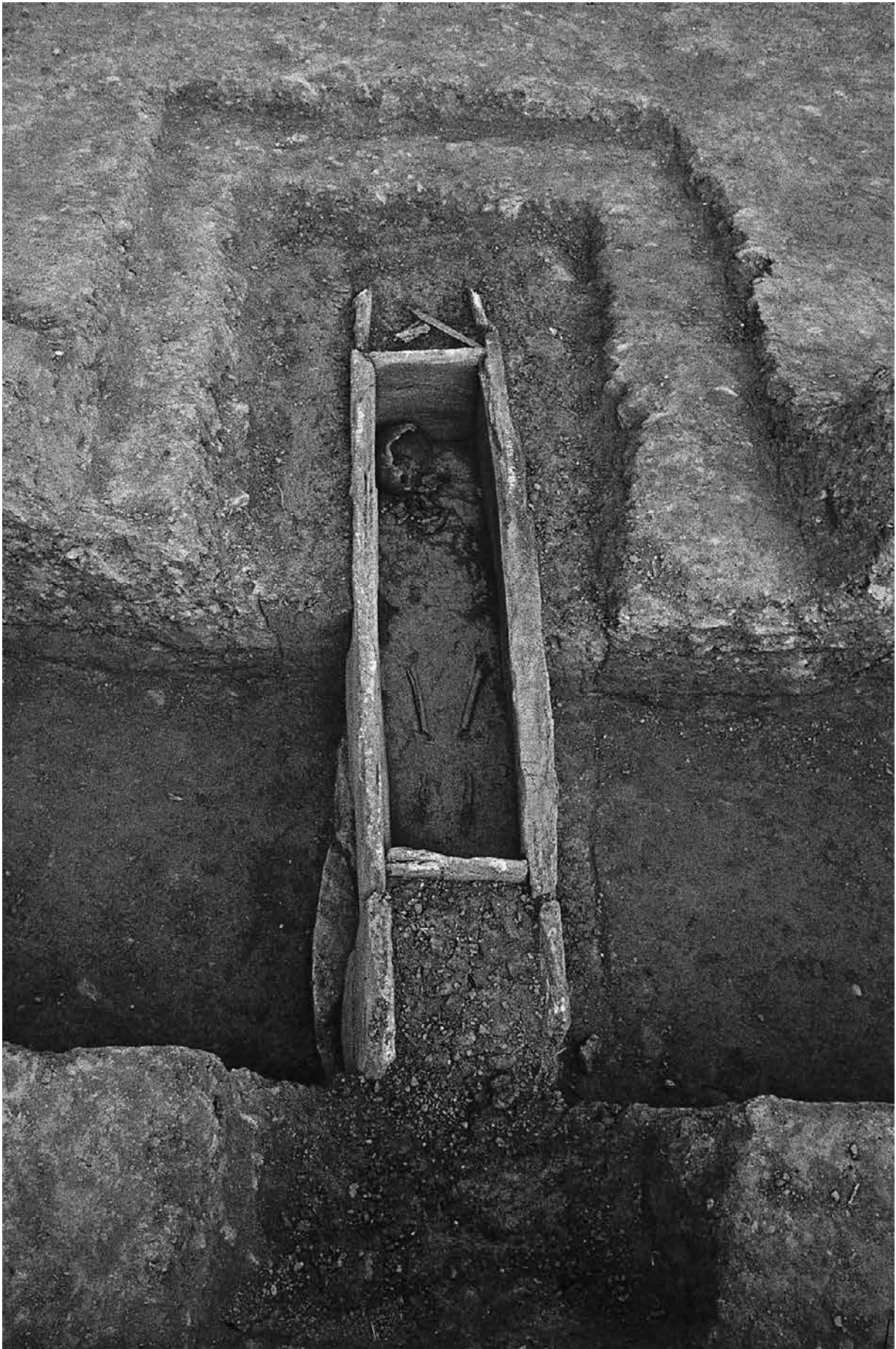
5. 粘土槨棺内鉄鉈出土状況（東から）



6. 粘土槨棺外鉄刀出土状況（西から）



7. 棺外出土鉄刀



1. 箱式石棺全景（西から）



1. 箱式石棺東側副室状施設鉄製品出土状況



2. 箱式石棺内人骨（頭骨）遺存状況



1. 箱式石棺蓋石（内側）



2. 箱式石棺長側石（内側）



3. 箱式石棺西側小口



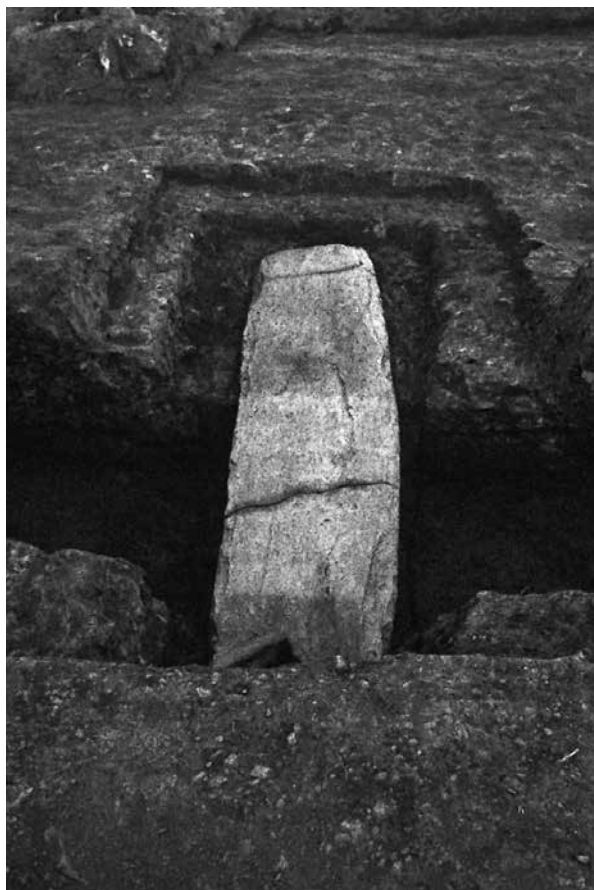
4. 箱式石棺東側小口



5. 箱式石棺西側小口（短側板除去後）



6. 箱式石棺底石



1. 箱式石棺蓋石検出状況（西から）



2. 箱式石棺検出状況（小口充填粘土除去後）



3. 南北トレンチ西壁土層断面



4. 東西トレンチ北壁土層断面



5. 東西トレンチ北壁東側土層断面



1. 大谷山39号墳 鉄製品・土師器

報告書抄録

ふりがな	いわせせんづかこふんぐんーおおたにやま4・5・6・39 号墳発掘調査報告書ー							
書名	岩橋千塚古墳群ー大谷山4・5・6・39 号墳発掘調査報告書ー							
副書名								
編著者名	萩野谷正宏・瀬谷今日子／佐々木宏治・富加見泰彦・山本光俊							
発行機関	和歌山県教育委員会							
所在地	〒640-8585 和歌山市小松原通一丁目1番地							
発行年月日	西暦2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 岩橋千塚古墳群	和歌山市岩橋	3020150	185-132	34° 13' 20"	135° 13' 50"	1972.5 ～ 1972.10	—	保存目的
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大谷山4号墳	古墳	古墳時代	円墳（横穴式石室）	埴輪、須恵器、土師器		岩橋型横穴式石室を持つ6世紀前半から中頃の円墳。排水溝検出。		
大谷山5号墳	古墳	古墳時代	円墳（横穴式石室）	埴輪、須恵器、土師器		岩橋型横穴式石室を持つ6世紀後半の円墳。排水溝検出。		
大谷山6号墳	古墳	古墳時代	前方後円墳（横穴式石室、竪穴式石室、箱式石棺）	埴輪、須恵器、土師器、鉄製品、装身具		初期の岩橋型横穴式石室と竪穴式石室、箱式石棺を持つ6世紀初頭の前方後円墳。円筒埴輪や形象埴輪が多数出土。		
大谷山39号墳	古墳	古墳時代	円墳（粘土槨、箱式石棺）	土師器、鉄製品、人骨		箱式石棺から12歳前後の人骨出土。5世紀前半頃の築造		
要約	地域開発の急激な進展に伴い昭和47年に実施した岩橋千塚古墳群大谷山地区の緊急発掘調査報告書。大谷山4・5・6号墳は特別史跡として保存されることとなったが、39号墳は開発に伴い失われた。調査後、40年以上が経過した平成27・28年に再整理事業を実施し本報告書を作成した。							

岩橋千塚古墳群

－大谷山4・5・6・39号墳 発掘調査報告書－

発行日 平成29年3月31日
発行 和歌山県教育委員会
和歌山市小松原通1丁目1
編集 和歌山県立紀伊風土記の丘
和歌山市岩橋1411
印刷 株式会社 協和
和歌山県海南市南坂5-3